

---

story of ALFREIA 1 『空蟬の一族』第二話「霧の円舞」

鈴木 かぐや

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

story of ALFREIA 1 『空蝉の一族』第二話  
「霧の円舞」

### 【Nコード】

N4291E

### 【作者名】

鈴木 かぐや

### 【あらすじ】

【完結しました】本作品は『約束された出会い』編の続編です。先にそちらをお読みなることをお願い申し上げます。 前作最後に転校した空気読めない男、カズヤが主人公。新しく出会った友人と共に、その地域で問題を起こす不良グループや教師を相手に戦い、成長していく一年を追います。 カズヤは一人で考えて行動できるようになるか？ オネエ言葉の信吾は壮絶な過去を乗り越えられるか？ 二つの顔を持つ教師の不正を暴けるか？

不良グループとツリーリングサークルとの三角抗争を制するのは誰か？ 前作の主人公は今、何処……？ そして前作の友人たちの出番はあるのか？ ブログでは先行連載終了済みです。

## 第1部：彼女の不可解な行動 - 1（前書き）

本作品は、前作『約束された出会い』編の続編となります。先にそちらをお読みになられた方が、スムーズに作品世界観をご理解戴けることと思います。

<http://ncode.syosetu.com/n9537d/>

## 第1部：彼女の不可解な行動 - 1

### 1：彼女の不可解な行動

明けて元旦。

『ごめんなさい。何とか引き留めようと思って、手を尽くしてみたけど……』

封書で来た葵からの年賀状は、ただの詫び状だった。

「なんじゃ、こりゃ」

水鏡と葵との約束のことなど知らないアキラは、謝られる理由がさっぱり解らずに面喰らったが、葵がカズヤの家に通っていた理由だけはこれで解った。

「どうでもいいけど」

アキラは手紙を片手に板の間にひっくり返った。

「つつーかさ、オレは何処にだって行けるんだから、何もこんなに近い所を修業場にしなくてもいいじゃないか、水鏡さまは……」

アキラはただでさえ色白な顔の上にお白粉しろいを塗りたくり、眦まなじりと唇に紅を差し、額に花鈿かでんを施し、白い小袖に緋袴ひばかまを身に纏まとうという格好を、いつものものに改めた。

「こういうのを嫌がらせて言うんだよ、まったくもう……」

罰当たりなことに、脱ぎ捨てた小袖に八つ当たりする。

「どうせ、身近な人にバレないようにすることが修業だって言うだろうさ。解っちゃいるんだ。でも、白塗りは嫌いなんだよ、オレは」

アキラは化粧を落とし、暖かいお茶を前にほっと一息付いた。

「目眩めくらましで済ますこともできるんだろうけどな、こっそり見に来た誰かにばれちゃ堪たまらねえ。ああ嫌だ嫌だ」

こうなると、完全にただのばやきだ。

アキラが一人ひっくり返っているのは、彼女の自宅ではない。

彼女は水鏡に言われた通り、転校するまでの間だけの巫女修業を始めていた。

場所は、よりによってあの『大樹の森』。

まさかこの神社まで瑞穂の谷に関わりがあるとは思ってもしなかったアキラだが、彼女に与えられているコンピュータ端末で調べていれば、本当は簡単に気付いていたはずだ。

しかし仕事以外には興味を持たないアキラは、大樹の森の神社のことなど調べようと思ったこともなかったのだ。ここに来た理由は能力者を捜すことで、神社のことなど何一つ話題には上っていないからだ。別にその地域の神社のことなど不審な点がないのだから調べもしない。それに神森への移動は一時的な避難の意味合いもあつたのだから仕方ない。

水鏡からの通達を受けて、慌てて大樹の森の神社のことを調べてみれば、驚くことばかり。過去代々の巫女たち、アキラの祖先たちは、必ずここで巫女をした経験を持っているではないか。だから霊能力者がこの土地では信じられていたのだ。

当の能力者のアキラが、所詮伝説だとの一言で、伝説の内容を信じていないから、気付くものも気付かない。

冷静に考えれば全て事前に気付いていたであろうことに気付いていなかったアキラは、そんな自分に腹を立てていた。それでも彼女らしいのは、またそれ以上は調べようとしなかったところだ。

今日は元旦。

大晦日の朝に、大樹の森の神社の初詣が初仕事と水鏡に言われ、鬼のように忙しい新年を迎え、ようやく奥の控え部屋に戻ってきたところなのだ。

「オレも誰かにお被いしてもらいてえ」

アキラはとうとう大の字になった。

去年はコメチとナミと初詣に出かけ、そういえばサキとカズヤと

鉢合わせをした。あの巫女に今年は自分になっている。何という嫌がらせだろう。

とにかく面倒臭いことになることだけは嫌だった。何とか三カ月間だけでも、知り合いにばれないように巫女として働かなくてはならない。とにかくばれることだけは嫌だった。

そう、アキラは水鏡と葵との会話の内容を知らないから、彼女の巫女姿がばれたら、全員が修羅に堕ちるということも知らないし、修羅とは何なのかも知るわけがない。ただ単純に嫌なだけだった。

冬休み最終日も、アキラは大樹の森の神社にいた。

大樹の森の巫女の名は、『日蔭糸<sup>ひかげいと</sup>』といつも呼ばれていた。

新年の初詣客ばかりではなく、神森の人たちは些細なことで神社に来る。失くしものをしたとか、病気になったとか、悩みがあるんだとか、アキラにしてみれば他力本願で腹立たしく感じるようなことで、巫女の所に話に来るのだ。

第一、病気は巫女の領域ではない。

「日蔭糸さま」

部屋の外から呼ばれ、アキラは顔を上げる。

この時期は、誰かしら手伝いの人間が表で取り次ぎ役を買ってくれている。大概が地元の人間だ。

「どうぞ。お通しして下さい」

アキラは奥の部屋から声を出した。客は一番手前の部屋で受けるのがしきたりで、奥の部屋へは誰も入れてはならなかった。

「どうかしましたか？」

手には櫛<sup>くし</sup>の枝を持ち上座から姿を現わしたアキラは、正座し頭を下げている来客を見て、思わず声を上げそうになった。

葵がそこにいる。

アキラは冷汗を隠し、平静を装って声をかけた。

「わたくしに話すことで気が済むのでしたら、何でもお伺い致します

す。大した助言はできませんが」

「すみません、すごく個人的なことなんです。でも、巫女のあなたなら何か策を授けて下さるのではないかと思って……」

「わたくしごときに、そのような大変なお役目が果たせるかどうか判りませんが、最善は尽くしましょう」

「有難うございます。私、この神社に来るのは初めてと言いますが、このような場所自体が初めてで、少し戸惑ってしまうのですが……」  
アキラは仕事となると、必要以上にプロ意識を持ってしまう自分の癖を理解していない。

次から次へと齒の浮くような台詞を並べ立てていることに気付かず続けている。



## 第1部：彼女の不可解な行動 - 2（前書き）

本作品は、前作『約束された出会い』編の続編となります。先にそちらをお読みになられた方が、スムーズに作品世界観をご理解戴けることと思います。

<http://ncode.syosetu.com/n9537d/>

## 第1部：彼女の不可解な行動 - 2

「どうか気楽になさって。いつも大樹の守人の息子たちがお世話になつております」

巫女日陰系ひかげいとは美しいお辞儀をしてみせた。

「？あ、サキとカズヤのことですね」

「そうです。まあ、わたくしはここに着任してから日が浅いですが、わたくしはわたくしたち共通の知人がいるということで、全くの他人ではないと思えませんか」

そう優しく微笑む巫女日陰系の姿に、葵はアキラの影を見ることができない。

「そうですね。実は私の悩みは、その二人を含んだ話なのです」

「悪さでもするのですか？」

アキラは尤とつともらしく笑つてみせた。

「だったら未だいいのです。日陰系さまは水鏡さまという名の巫女をご存じではないでしょうか？」

「ええ。我々の間ではとても高名な方ですが、直接お会いしたことは……」

水鏡の名を聞いてアキラは身構えた。図らずも、水鏡が葵に話した内容を聞くことになりそうだ。

「その方から、ある人物を守るよう頼まれたのです、私。生命を狙われているなどと物騒おっしやなことを仰つてらしたので、名前は出しません。私は私にできる方法でと約束したのですが、早速守れなかったのです。

それで、どうしたら取り返しがつくのか、それをお教え戴きたくて……」

「それはわたくしどもの長おさ、桂小路 晃が絡おさんでますね。大丈夫、わたくしは彼女の一族の者」

息を呑んだ葵の表情は、自分を心配していることの証。アキラは

心中で頭を下げ、自分絡みの問題の対処法を考え始めた。その為には『約束』を知らねばならない。

アキラは居住まいを正し、ごく自然体で切り出した。

「同じ一族の者だと信じて、水鏡さまとの約束をお教え戴けますか。そうしたら、解決がわたくしにも判るかもしれません」

葵は一瞬考えたが、話すことにした。目の前の女性が同じ一族の者と言うなら、水鏡に最善の策を問い合わせてくれるかもしれない。葵は重い口を開いた。

「約束とは、その桂小路 晃と仲間たち六人を、如何なる理由であれバラバラにしないでくれというものです。」

しかし私は約束したにも係わらず、早速一人欠けさせてしまいました……」

「表のカズヤくんですね。転勤で引越してしまいましたけど。それが表鈴木家の生業なりわいですから、仕方ないことです。気に病まれますな」

気休めのような巫女の言葉に、葵は悲痛な声を上げた。

「いいえ。私は彼を止められなかった。これでは七人が揃って苦しむことになってしまふのです」

アキラは言葉を失った。

水鏡は預言者でありながら、無駄と知りつつ葵を通じて悪足掻きわるあがをしようとしていたのだ。

あの水鏡が自然の摂理に背くような行動を取っていたことが、正直アキラには意外だった。

「中野先生、心配はいりませんよ。」

我が長なら、他の六人を守りきるでしょう。それだけの強さを持つていますよ。あなたから見て、彼女はでしょう」

「え、ええ、まあ……」

オレは強いじゃないかよ、もう……

煮え切らない返事の葵に、よっぽどそう言ってやりたかったところだが、アキラはそれは呑み込んだ。

「成り行きに任せられても大丈夫。長はたくさんものを守られています。心配には及びません」

「そうでしょうか」

「ええ、長ですから。わたくしどもの長は、必ずやり遂げる方です」  
微笑みながらも、よっぽど自分がそのアキラなんだと名乗ってやろうかと思うほど、葵の態度は煮え切っていなかった。

「今日は有難うございました」

「大してお役に立てなくて、こちらこそ申し訳ありませんでした」

「そんなことはありません」

「また、何かありましたらいらして下さい」

アキラは心にもないことを言いながらにつこり微笑んで、あまり来てほしくない客を帰した。

そして翌日は新学期。

「学級委員、今回は降りる。いろいろ家庭の事情があつてな」

とうとうアキラは学校の責任あるポストを、全て外れた。

「どうしたんだ、アキラ。お前、最近変じゃないか？どっか具合でも悪いのワ？」

「お前に言われたくないな、サキ」

アキラは口の端を上げるだけの笑みを見せ、手を振った。

アキラの行動そのものは、もともと理解が難しいものだったが、今回の行動は、アキラの『普通になりたい』願望とは違うような気がする。サキはそれがとても気になった。

「何か悩んでたら、神社の巫女さんに相談したらいいっちゃ。うちの母ちゃん、腰痛治してもらってたぜ」

「あのなあ、ポン、オレ、別に腰痛で悩んでないけどな……」

大体、腰痛なら神社じゃなくて整形外科とか接骨院とか鍼灸院とか行けよな。あの程度なら、簡単に治る……。お前が家のこと手伝えばな。

アキラはこの間治した腰痛の女性がポンの母親だったと聞いて、よつぽど一言言つてやるうかと思つたが、そこは堪えた。

「あ、それ、いいかも。オレ、今日行くし」

「え、サキ、神社に用なんかあるんだ」

一瞬血の気が引くような感じがし、アキラは少し焦つて訊ねた。

「別におかしかないだろう。これでも一応は大樹の森の神社の守人<sup>もりびと</sup>の家の長男なんだぜ。」

いやさあ、母親に用事頼まれててさ、巫女さん美人だっけ、断らなかつただけ。お礼しなくちゃならないことがあつたみたい。

結局のところ、単なる雑用係だけださ」

礼はいいから来ないでくれと、アキラは心の中で叫んだ。

## 第1部：彼女の不可解な行動 - 2（後書き）

先行記事＆物語の世界観解説を連載している作者のブログです。是非おいで下さい。

<http://blogs.yahoo.co.jp/alfraia>

また、日本ブログ村とアルファポリスに参加しております。お手数ですがバナーの1クリックをお願いします。

### 第1部：彼女の不可解な行動 - 3（前書き）

本作品は、前作『約束された出会い』編の続編となります。先にそちらをお読みになられた方が、スムーズに作品世界観をご理解戴けることと思います。

<http://ncode.syosetu.com/n9537d/>

## 第1部：彼女の不可解な行動 - 3

「でも、ほんとに今度の巫女さん綺麗だよ。ボク、あんなに綺麗な人見たの、生まれて初めてだよ」

「あら、シキでも綺麗な女の人は判るんだ」

「あのさ、コメチ、ボク、一応男んだけど……。身長だって急に伸びたしさ。」

「っつーか、コメチ、セクハラだよ」

「冗談、冗談よ」

その後五人は話に花を咲かせていたのだが、アキラはサキが来るということが気になって、それどころではなかった。

「いいか、サキ。オレは心配されたり庇<sup>かば</sup>われたりされるのが、死ぬほど苦手なんだ。別に身体が悪いわけじゃないんだから、放っておいてくれ」

アキラはそう捨て台詞を残して、終業と同時に帰っていった。

「今までさんざん世話されておいて、あんまりだよな、あの言い方。ま、あいつらしいけどやあ」

ポンがキシシと笑った。勿論アキラに対する嫌味ではなく、不快感なども微塵<sup>みじん</sup>もない。

「でも、やっぱ変だサ。ボクだって困るし」

「いい加減、普通を演じるのが嫌になっただんじやないの」

「ま、こちらはアキラの本性知ってるからいいけど、他のみんなは不思議に思うでしょうね」

「ほっというてやった方がいいっちゃね」

「んだなあ」

五人はそのアキラの後ろ姿を見送った。

アキラは、誰かに守られている自分の姿が認められないのだ。本



当に守られるのが嫌いだったし、もし自分が誰かを好きになったら、力の限り守るだろう。大事なものを守れなかった過去を繰り返すことは、もう嫌だった。

そう、この神森の友人たちは守り抜きたい者だった。それが、逆に心配されるのは心外なことだ。

そして巫女の話は聞きたくない。

夜十時少し前。サキは未だ現れない。

少し早いけれど、今日は閉めてしまおうかと、アキラは寒い部屋の中で迷っていた。

しかし迷ったところで、真面目なアキラが早仕舞い<sup>はやじまい</sup>などできるわけがないのだ。

「遅くに済みません。裏の鈴木です。母からこれをお持ちするようにと、言いつかって来ました」

立ち上がったて帰り支度を迷っていたアキラは、肩を落とした。来てしまったのだ。

望まない客とはいえ、この姿でいる以上は無視するわけにもいかず、「どうぞ」とにこやかな笑みを浮かべ、サキを中へと迎え入れた。

いつも思うのだが、サキはこういう現場での作法が綺麗でしなやかだ。

「お礼をしに行くのに、手ぶらで行かせるわけにはいかないって、母親からこれを預かりました。夜も遅いことですし、お腹も空いていらつしやるでしょうから、どうぞ召し上がって下さいと」

「お礼なんて気を遣わないで下さいと、お母上にお伝え下さいな。この神社は、裏の鈴木さんあつての神社なのですから、こちらがかえってお礼を申し上げなければいけない立場なのに、恐縮してしまいますわ」

いつもは自然体で演技できるのに、手の甲を口に当てて笑う仕草

が板につかないのは、きつと相手の所為<sup>せい</sup>だろう。  
アキラは浮き足立っている自分に腹立った。

そんなことを目の前の美人の巫女が思っていることなど、サキが知る由<sup>よし</sup>もない。

「とんでもありません。ところで、少しいいですか？」

「え、ええ」

アキラはいよいよ身構えた。サキはちゃっかり上がり込んで、正座までしている。

いっそ薙<sup>な</sup>ぎ払ってしまいたい気持ちを抑え、アキラは微笑んだ。

「では、お持たせで申し訳ないけれど、お茶を入れますね。二人で戴きましょう」

火鉢に乗せたヤカンからお茶を注ぎ、サキの持ってきた重箱を開いて二人の間に置いた。中身は餡餅だった。

「お家で収穫したお米は、美味しいですわ」

「有難うございます」

これは本音だ。サキの家の食べ物、つまみ食いする冷えたお弁当ですら美味しい。

「で、何でしょう、賢木<sup>さかき</sup>くん」

アキラは自分から話題を振った。こんな状況に耐えていられる神経は持ち合わせていない。

「ええ、オレの友達が、最近変なんです。何か隠してるような気がして……」

「そりゃ、友達だからって、全てを教え合つことなどないでしょう。隠していることを探るのはどうかしら」

どうせ自分のことを言っているのだ。それでもアキラは、今だけは日蔭系でなくてはならない。地元あつての神社であり巫女なのだから、訪れた者の話を聞くことは義務だ。作り笑いを大盤振る舞いし、精一杯優しい巫女を演じるしかない。

でも、柔らかな言葉に隠し、本音を言わずにはおれなかった。

「だって、彼女、ずっと普通になりたいって言ってたっけ、それに協力してきたんですよ、オレ。なのに、今更何の説明もなく普通を演じるの止めて、今までオレらが取り繕<sup>つくろ</sup>ってきたことは何だったんだろうつて思っちゃうわけですよ。」

疲れたなら疲れたって言うてくれれば、それで納得できて放っておくのに、こっちだってどう接していいのか困ってしまう。

少なくとも、オレは今までの中学校生活の大部分を、彼女に合わせて送ってきていたから、今更自分だけのものにするのだって、変になっちゃうわけですよ。

あ、別に恩に着せてるわけじゃないです。

でも、オレも変えなきゃ、彼女の思惑に反することになってしまから、結局彼女に合わせなくてはならないでしょ。

もし彼女に思惑があるならば、一人で生活してきているわけじゃなくて、今までオレらと一緒に生活してきたんだから、それ位は説明してくれないと困るんですよ。」

「確かに言う通り。彼女のことを第一に考えて、賢木くんは優しいですわね。でも、引越してしまわれた表の和哉くんの代わりに彼女の世話をやきたいんじゃないかって？」

「え？」

巫女の詭弁<sup>きへん</sup>とも思える話題のすり替えに、サキは思わず言葉に詰まった。

## 第1部：彼女の不可解な行動 - 3（後書き）

先行記事＆物語の世界観解説を連載している作者のブログです。是非おいで下さい。

<http://blogs.yahoo.co.jp/alfraia>

また、日本ブログ村とアルファポリスに参加しております。お手数ですがバナーの1クリックをお願いします。

## 第1部：彼女の不可解な行動 - 4（前書き）

本作品は、前作『約束された出会い』編の続編となります。先にそちらをお読みになられた方が、スムーズに作品世界観をご理解戴けることと思います。

<http://ncode.syosetu.com/n9537d/>

## 第1部：彼女の不可解な行動 - 4

「だって、あなたはずっと、和哉くんのお兄さんをしてきたでしょう。彼がいなくなつて、寂しいんじゃないかしら」

巫女の取つてつけたような言葉に、サキは小さな微笑を浮かべた。「そんなねえ。あいつは自分が世話されているのを解っているからいいけど、アキラは全然解つてないから困るんですよ。」

オレの世話好きは認めるけど、相手が素直じゃないと、こっちは頼まれてやつてたのに、全然構いなしじゃ、オレはただのお人好しで終わっちゃうでしょう。それに相手が相手だけに、うっかり頼んでないと言われちゃいそうだし。笑つてられるほど、そこまでお人好しじゃないんで、オレ」

「そうよね」

微笑む日蔭糸を演じながら、アキラは逃げ出したかった。

しかもサキは間違つたことを言つてはいないから、余計に腹も立つ。

「今度、友達と来てもいいですか？」

帰るつもりなのか、サキは居住まいを正して言つた。

「ええ、構いませんよ。ただし、わたくしは十時に帰りますから、遊びに来るなら、もう少し早めに来て下さいね。中学生を遅くまで引き止めるわけにはいきませんから」

「解りました。今日は遅くに済みません。有難うございました」

ようやくサキが帰り、アキラは肩を撫で下ろした。

「確かに、サキの言う通りなんだけどな、でも、普通を止めて冷たい人間に戻るのに、そう説明なんてしてたら、冷たい人間じゃないんだよ。オレは嫌われようとしてるのにさ」

来年度は東京に戻る。ここでの足跡を消して、また行方を眩ますつもりなのに、仲良しクラブを作ってしまったら、行き先がバレて

しまう。それは仕事上不都合な話なのだ。  
だから嫌われてしまうのが手っ取り早い方法だ。アキラはそう思っていたのだ。

しかしアキラは自分が変わってしまったのに、全然気付いていない。

以前の彼女であれば、さっさと記憶を消してしまうのに、そうしようと思わずに回りくどい方法を取ろうとしているのだ。

「ま、自分勝手は反省するとして、少しはサキの言う通りにしてやろうかな」

アキラは残った餡餅あんもちを頬張りながら、翌日の授業の予習を始めた。

「やっぱ、あの日蔭系ひかげいさまって美人だよ。歴代で一番だな、あれ」

翌日、サキは自慢気に話していた。

「えーっ、二人つきりで話したのワ？いいなあ」

「そうそう。母親の作った餡餅持ってたさ」

「オレはサキの母ちゃんの作った餅のが魅力的だな。」

「っっーかシキ、意外と面食いなんだな。ああいうのが好きなんだ」

「う……。いいじゃんか、綺麗なお姉さん好きでも」

「シキが赤くなってる。可愛いーっ」

「だからセクハラだってば！」

可哀相なシキは、耳まで赤くしていた。その光景を見て、アキラは思わず顔だけで笑った。

「知ってる？日蔭系うねめって、采女うねめの付けてる髪飾りのことなんだって  
コメチは少し自慢気に言った。

「でも、巫女と采女は違うっちゃ」

「夢のないツッコミ入れないでよね。」

いいのよ、名前だもの。大体あなたの名前の賢木さかきだって、巫女の

持つてる櫛くしから取ってるっちゃ。そんなもんよ」

「そんなもんって、何だかすつごく適当にあしらわれてるんですけど、おい」

「気にしない、気にしない」

コメチは平然と笑った。

サキは腕組みをし、視線を宙に泳がせてから、思い出したように口を開いた。

「ところで、巫女さんの声、聴いたことある？」

「え、お祓はらいの時にちよつとだけ」

「なあ、誰かに似てると思わないか？」

「誰？勿体もったいつけないでよね、サキ」

「せっかちなあ、コメチは。思い出してたら、訊いてないって。誰だったかヤ」

ここで始業のチャイムが鳴り、この話は終わりになったのだが、ただ聞いていたアキラの背中には冷汗が流れていた。

そっか、オレ、顔は目眩めくらましで変えてても、声は変えてなかった。やつべえ、一生の不覚だ……

アキラは今更声を変えて日蔭系になれず、自分の詰めめ甘さを悔やむしかなかった。

帰ろうとするアキラを、サキは放課後呼び止めた。

「何だ？」

「今日、暇？」

「いや、新年から、オレの義理の両親が帰って来てんねん。だっけ、オレは家に直行してんだよ。今日は食事しに街に行くんやて。今更家族ごつこやわ。まあ、オレの為に籍を移動してくれたんだ。それくらいの親孝行はしないとな」

昨日指摘されたことを反省材料にし、アキラは嘘の理由を言った。「ふーん、取り敢えず良かったっちゃ。でも、また海外に戻るんだ



る？」

「まあな。そういう予定だし」

「じゃ、明日は時間取れるかな？デートしない、オレと」

「はあ？」

デートの誘いなど、当然初めてだ。どう対応したらよいのか、アキラはあからさまに戸惑いを見せた。

その様子に、サキは大きな口を開けて笑った。予想外に可愛らしかったのだ。

「冗談だよ。そんな困った顔すんなって。

いやね、ただ、大樹の森の神社に付き合ってもらいたいだけさ。カズヤが何してるか、巫女さんだったら占ってくれるし。

あいつ、結構不精だし、気を遣ってオレの家には電話をかけてこないんだよ。

お前だって心配だろ、カズヤのこと」

「う、あ、まあ……」

「じゃ、決まり。明日五時に神社で待ち合わせ」

「お、おい！」

サキに強引に決められ、アキラは反論の隙もなかった。

## 第1部：彼女の不可解な行動 - 4（後書き）

先行記事＆物語の世界観解説を連載している作者のブログです。是非おいで下さい。

<http://blogs.yahoo.co.jp/alfraia>

また、日本ブログ村とアルファポリスに参加しております。お手数ですがバナーの1クリックをお願いします。

## 第1部：彼女の不可解な行動 - 5（前書き）

本作品は、前作『約束された出会い』編の続編となります。先にそちらをお読みになられた方が、スムーズに作品世界観をご理解戴けることと思います。

<http://ncode.syosetu.com/n9537d/>

## 第1部：彼女の不可解な行動 - 5

サキは初めから気付いていたのかもしれない。だから、昨日日蔭<sup>ひかげ</sup>糸<sup>いと</sup>に話すふりをして、アキラに言いたかったことを言ったのかもしれない。

アキラは頭が痛くなった。

このままでは、アキラとしてサキと出かけても、日蔭糸としてサキを待っていても、本性がバレるのは必至ではないか。

就任早々ピンチを迎えることになるとは、さすがに考えていなかったアキラは、自分の甘さを思い知らされてしまった。

アキラばかりではない、誰もがアキラが巫女であることをバレてはいけないという水鏡の預言を知らない。

もう、サキにだったら本当のことを話してもいいかなと、アキラは諦めモードに入っていた。アキラとして、サキと大樹の森に行くことは勝手にサキに決められてしまった。

如何にアキラといえども、その身体は一つしかない。あとは野となれ山となれ、という感じだ。もう、その後のことは考えられなかった。

約束の五時。アキラは大樹の森に続く石段の下でサキを待っていた。ところが彼は現れない。

「日蔭糸さま、お待ち致しておりました」

突然、石段の上からサキの声がし、そんなわけがないとアキラは振り向いた。

サキはアキラに向かって言ったのだ。社の中に向かって言うてはいなかった。

例えはったりをかけられたとしても、アキラは動じた素振り<sup>そぶ</sup>は見

せるわけにはいかない。

「何だ、サキ、来てたのかよ。オレ、さっきからここで待ってたんだぜ。ほら、行くか」

もう、後は成り行き任せだ。

「日蔭系さま、いないんだ」

「何だよ、それ」

アキラは惚<sup>とほ</sup>けた。

「迷っているのかもなあ」

こいつは気付いてるんだ。クソっ……

アキラは心の中で舌打ちをした。

「いないなら帰ろっぜ。親が夕飯作ってるんだ、オレんところ」

ありえない嘘についてまで、アキラはサキの腕を強引に引っ張った。

サキは彼らしくなく、素直にアキラに従って帰り道についた。

そんなサキの態度があまりに素直で、アキラはそれから暫<sup>ひまじ</sup>くの間、いつサキが神社に現われるかと、日々怯<sup>おび</sup>えながら日蔭系として神社で座っていた。

しかしサキは一向に現われない。

お陰で学校でもつい彼を避けてしまう癖がついてしまっていた。水鏡の与えた修業は、一月と持たずに苦しいものとなったのだ。た。

二月半ば。神森では珍しい大雪だった。三日三晩も雪は降り続き、学校は休校で全てが麻痺状態となっていた。

それでもアキラは日蔭系として、炭<sup>すす</sup>櫃<sup>びつ</sup>を置いた部屋で夕方から夜まで控えていた。

古い建物に電気もガスも水道もない。冗談じゃないくらい寒い部屋で、アキラは来てはほしくない誰かを何日も待っていた。

雪が止んで、明日は天気が回復する。となると、何か起こるとし

たら今夜以外にない。

時間が来て、アキラは立ち上がり、入り口の格子こしを閉める為に奥の間から出た。

外の雪は腿ももまで埋まるくらいに積もっていた。

全てのものを吸収してしまう雪の静けさ。

「寒さに耐えるのも修行かよ。うう、おお寒い」

アキラは誰もいないことをいいことに、普段の言葉遣いで独り言を言い、奥の間に戻った。

糸？！

ちやちい仕掛で頭上から何かが振ってくる気配を察し、アキラは思わず軽やかに宙を舞うように躲かわした。

「誰だ？弟御子おとみこ一族の者か？姿を見せろ」

アキラは瞳の色を変えたりはしなかった。変えたりしようものなら、たちまち自分が瑞穂の谷の長であることがバレてしまう。

石飛礫いしつぶてが三方から飛んできた。その仕掛の情けなさに、アキラは彼らが弟御子一族ではないことだけは察した。

「日蔭系さま、正体はバレてますよ。弟御子一族を知っているからね」

しまった。そういうことが……

アキラは自分にかけていた、別人に見える目眩めくらましの術を解いた。もう、その術は彼ら三人には無効になっているものだ。今更続けていても意味がない。

ついでに冷水で濡らした手拭いで顔を拭って化粧を落とすと、巫女日蔭系の格好のままで胡坐あぐらをかき、神聖な袖さかきを後に放り投げた。

「もう、今更何も隠さないぞ、オレは。覚悟はできてるんだろうな、お前ら」

放り投げられた櫛を手にしたサキは、アキラに歩み寄った。

「素顔の方が綺麗だって」

「黙れサキ。お前、いつから気付いてたんだ？」

「初詣の朝。仮にも裏鈴木の長男だぜ、オレ。代々の日蔭系さまを見てきてるし、お前のことも毎日観察してたんだぜ。バカにしてもらっちゃ困るよ」

サキの嬉しそうな顔といったらない。

さんざん仕かけた罠に、普通なら敵わない相手が絡まっていく様が見られたのだ。

「どうしてシキとポンを巻き込んだ？」

「簡単だっちゃ。なあ」

サキは後にいたシキとポンに同意を求めた。

「んだ。お前さんが怖いからだっちゃ」

「そうそう。アキラ、強いもん。何されるか心配だサね」

「お前ら、オレを何だと思ってんだよ」

全身の力が抜けていくことを止めることができない。

## 第1部：彼女の不可解な行動 - 5（後書き）

先行記事＆物語の世界観解説を連載している作者のブログです。是非おいで下さい。

<http://blogs.yahoo.co.jp/alfraia>

また、日本ブログ村とアルファポリスに参加しております。お手数ですがバナーの1クリックをお願いします。



## 第1部：彼女の不可解な行動 - 6（前書き）

本作品は、前作『約束された出会い』編の続編となります。先にそちらをお読みになられた方が、スムーズに作品世界観をご理解戴けることと思います。

<http://ncode.syosetu.com/n9537d/>

## 第1部：彼女の不可解な行動 - 6

もう、こうなったらやけくそだ。

「この巫女の言い伝えは知ってるな。霊能力があるだの何のつてことになっているな。今からそいつを見せてやる！」

念動で三人を宇宙遊泳のようにぐるぐると泳がせた拳句あけくに床に叩き落としてやった。

「うげええええ」

「つーか、マジ気持ち悪いんですけど……」

「ここは……ドコ……」

目を回して動けなくなつた三人を、アキラはまるでバカにするかのように見下し、冷たい声で言い放つた。

「お前ら、自分のしたこと、よく解っているだろうな」

そのアキラの表情は、三人を凍りつかせるのに充分な冷たさを持つていた。

「えへっ、へへへっ……」

「笑ってられる余裕があるとはなあ」

「スミマセン。本気で笑ってません」

「どうだかな」

アキラはサキの顎を摘つまみ上げて言った。

「いいか、このオレの正体を見たつてことは、開けちゃいけない箱ふたの蓋を開けたようなもんなんだ。ああいい度胸ひかけいだなあ、おい。」

いいか、一つだけ約束しろ。オレがこの日陰系ひかげいをやってる間は、オレが化けてるつてことをお前ら三人だけの秘密にしておけ。オレが巫女を辞めさせてもらったら、その時はコメチをナミくらいなら話してもいいけどな、べらべら自慢話みたいに吹聴して、オレの仕事絡みの人間にちよっかい出されても、オレは責任持てないし、そんなん知つたこっちゃない。勝手に消されても文句言っくんじゃねえぞ。それが箱の蓋を開けた自己責任つてもんだ。

それと、仕事の邪魔だけはするな。こっちもプロ意識持ってやってるんだから。いいな！」

つい短気を起こしてしまい、取り返しのつかないことになってしまったアキラは、サキの顎を乱暴に突き放し、呆ける三人をその場に残したままで、瞬間移動で姿を消した。

ある意味では、信用をしていたからこそ短気を起こしてしまったのだが、もう、これで本当に後戻りができない状態になってしまった。

アキラは頭を抱えた。

明日からどうするかな……

早速水鏡の与えた修業は失敗し、自分の超能力を自らの短気で明かしてしまい、アキラは頭を抱えながら学校に登校した。

「よっ、元気か？」

寒稽古戻りのポンに先ず会ってしまったアキラは、思わず逃げようとした。しかし、それは自分らしくないことに気付き、アキラは怖ろしいくらいの無表情でポンを迎えた。

「何もそんなにおっかねえ顔すんなって。大丈夫、普段通りにしろワ」

そんなことを言われたところで、アキラの警戒心が解けるわけがない。

ポンは頭を困ったように掻いた。

「オレら、そんなに信用ないかヤ……」

んだ、じゃ、こうしよう。口止め料として、オレに肉まんとおまんこピザまん奢って。その方が安心するべ」

「う……」

につこり笑って手を出すポンに、思わず財布ごとを渡してしまったアキラだが、うつかり乗せられたような気がしないでもない。それでも一番自分を安心させる方法を取られ、アキラ自身も苦笑して

しまっていた。

「寒稽古バンザイ。ラッキー、儲けた<sup>もう</sup>」

ポンは鼻歌を唄いながら、開きたての購買部に並んでいた。

そうだ、自分は一人ではない。神森にいる間は、この信頼すべき守りたい仲間がいるのだ。

普通と違ってでもいいのだ。仲間がいる。ふざけていても、目的さえはつきりしていればいいのだ。

何も一人でつぶらなくてもいいのだ。こんな自分を受け入れてくれる仲間がいるではないか。

アキラは長年の迷いから、少しだけ醒めた<sup>さ</sup>気がした。

自分らしくいよう。それを受け入れてくれる仲間がいる。彼らを大事にしよう。

少しだけ成長したアキラは、食べ物の前にわくわくしているポんに声をかけた。

「サキヤシキ、コメチやナミの分も買えよ。今日はオレにとっていい日だから、好きなだけ買っていいぜ。オレにもあんまん一つな」

ポンは少し驚いた顔を見せた。アキラがそんなことを言うのも意外だったし、そう言ったアキラの顔があまりにもすっきりしていたのにも、正直驚いたのだ。

「了解！」

しかしポンは両手でOKを作り、笑顔で応えた。その大らかさが、彼のいいところだ。

「何これ、アキラ？どういう心境の変化？」

「いいってことよ。食え！」

大量のあんまんと肉まんを持ってきたボンとアキラに、コメチは呆れ顔だった。

「寒稽古帰りに会ったんだけど、今日はいい日なんだって、なあ、

アキラ。んで、みんなも分も買えって、太っ腹でやあ」

「何だかよく解らないけど、奢おこってくれるならラッキー」

「何だ、こりゃ」

一番遅くやってきたサキは、湯気をもうもうと立てている大量の肉まんに、大声を上げた。そこでポンがまた同じことを説明した。

「ふーん」

含み笑いをしながら、サキはアキラを見やった。

アキラも少しだけ苦笑しながら、サキに深々と頭を下げた。彼女にできる、精一杯の礼の表現だった。

## 第1部：彼女の不可解な行動 - 6（後書き）

先行記事＆物語の世界観解説を連載している作者のブログです。是非おいで下さい。

<http://blogs.yahoo.co.jp/alfraia>

また、日本ブログ村とアルファポリスに参加しております。お手数ですがバナーの1クリックをお願いします。

## 第1部：彼女の不可解な行動：7（前書き）

本作品は、前作『約束された出会い』編の続編となります。先にそちらをお読みになられた方が、スムーズに作品世界観をご理解戴けることと思います。

<http://ncode.syosetu.com/n9537d/>

## 第1部：彼女の不可解な行動 - 7

少しだけ時間は戻る。

東京は下町と呼ばれる地域のマンションの一室に、カズヤたち親子は引越した。

何なのワ、この学校……

先ず最初にカズヤが心の中で呟いた感想が、この一言だった。

転校手続きの際、校則を読み上げるだけで一時間も費やし、それを普通だと思っているような教師に、思わず両親と顔を見合わせた。

「何か変な学校ねえ。大丈夫、カズヤ？」

「ちよつと自信ないよワ」

帰り道、家族揃ってため息をついた。先が思いやられるとはこのことだ。

三学期の始業式の朝。その不安を現実と思わせるに十分な光景をカズヤは目の辺りにした。

音読するのに一時間にも及ぶ校則を守っている生徒と守っていない生徒との差は歴然としていた。

前者は歩く生徒手帳、後者は歩く人間広告塔。更に驚くべきことに、教師たちは朝礼の際に、校則違反の者を頭を、容赦なく革スリッパで殴っている。しかも前髪の長さでスカート丈がミリ単位で違反してしまっている生徒とか、詰め襟のカラーを忘れてしまったような生徒とかをだ。ところが歩く人間広告塔のことは、教師は全く殴りもしない。

こういうものはテレビや小説の中だけかと思っていたカズヤは、生まれて初めて見る理不尽な世界に驚いた。

「手続きの時に説明したと思うが、今日は初日だから大目に見て



やる。今週中に校則を守るように。そのパーマはさつさと落とせ」

「はあ……」

新しい教室で紹介された時、全員の前でカズヤは真っ先に注意を受けた。

カズヤは色こそ変えていない黒髪のもの、全体的に長めの髪で、学生服は少し格好良くなっている。しかもボタンは神森中のままだ。

「あの……、これ、天パなんですけど……」

「みんなそう言うんだよ。いいから真っ直ぐにしろ。席は廊下側の一番後ろだ」

まるで聞く耳を持たない教師に対して、力説する口をカズヤは持ち合わせていない。

神森中の連中は、全員殴られるだろうな。

カズヤは心の中で笑った。アキラなどは最悪だ。注意を受けて、理詰めでもやり返した拳句に大暴れしかねない。

その日はホームルームだけで終わりだった。

「煩わづくて驚いたでしょう、鈴木和哉くん」

教室を出ようとしたカズヤは、突然親しげに声をかけられた。

「あなた、神森中って学校からきたんでしょ。アキラちゃんから名前は聞いてないかしら、霞 信吾って」

「え、あ、うん」

「それ、あたしのこと。よろしくね」

カズヤは目をぱちくりさせた。アキラの注意した人間が、星の数ほどある東京の学校の中で、まさかいきなり同じクラスになるとは思っていなかった。しかも、その声をかけてきた少年は、眼鏡をかけた少年なのだが、何故かオネエ言葉を使っている。

声は少し高めだが声変わりもしているようだし、身長が低ければ、ボーイッシュな女の子だと思えるのだが、背はしっかり高い。

それにしても、想像していたのとはかなり違う。

「ちょっと窓際で屯<sup>たむろ</sup>してる連中を見て」

信吾はいきなり親しかった。

「アキラちゃんから聞いてると思うけど、あれがあたしたちの敵、不良グループ《日向》の四人組。バカみたいに《日向四天王》なんて名乗っちゃってるわ」

あたしたちって、いきなり仲間ですかあ？っていうか、敵って……

声を潜<sup>ひそ</sup>め、信吾はカズヤの耳元で囁<sup>ささや</sup>いた。お陰でカズヤが眉<sup>しか</sup>を顰<sup>しか</sup>めたのは見られていない。

「ね、今日はお暇かしら。ちょっと詳しくお話したいのだけど」

何だかよく判らないけど、東京っっているんな人間がいるんだなヤ……

アキラの忠告は憶えていたが、こんな女らしい仕草の少年が不良と敵対するグループを引ッ張つてるとは信じられず、そして断る理由もさしてなかったから、カズヤは信吾を新しい自宅に誘った。

「ね、あたしのことは聞いてるんでしょ、アキラちゃんから」

転校初日から友達を連れて来たと、カズヤの母親は上機嫌で信吾を迎え、彼は遠慮もなくカズヤの部屋に上がり込むなり切り出した。

「ああ、まあ適当に」

まさか付き合うなと言われたとは、本人を前にしてはつきりは言えず、カズヤは曖<sup>あいまい</sup>昧<sup>まい</sup>な返事をした。

「アキラちゃんらしいわ。殆<sup>ほとん</sup>ど何も言わないんですもの。それだからあたしが困るのよね。ま、いいけど。」

早速本題を話させてね。さっきの四人組だけど、彼らにはリーダーがいるのよ。日向っていう男子生徒なんだけどね、今まで都合よく親の仕事の都合で転勤してたのに、この四月に戻ってきちゃうの。あの四人は日向が帰って来るまでに縄張りを拡げている実働部隊ってわけ。

彼らにとって、中学生も高校生も関係ないみたいで、年齢関係な

い不良グループが、ここを中心にできあがりつつあるわ。これで日向が帰ってきちゃったら、本当に困っちゃうたらありやしない。それであたしたちは参っているのよ」

見た目はたおやかなのだが、信吾は不思議な人間だった。少なくとも、神森にはいないタイプだ。

そして彼は、カズヤが初めからアキラを通じて味方だと思い込んでいるようだった。

「いい、《日向》に従って喧嘩道に明け暮れるか、教師に媚び諂<sup>へつゝ</sup>人間になるか、この中学には二つに一つしか道はないわ」

そんな、オーバーな……

カズヤはその大袈裟な物言いに、笑いを堪えた。

## 第1部：彼女の不可解な行動 - 7（後書き）

次回から第2部：痛み を始めます。

先行記事＆物語の世界観解説を連載している作者のブログです。是非おいで下さい。

<http://blogs.yahoo.co.jp/alfraia>

また、日本ブログ村とアルファポリスに参加しております。お手数ですがバナーの1クリックをお願いします。

## 第2部：痛み - 1（前書き）

本作品は、前作『約束された出会い』編の続編となります。先にそちらをお読みになられた方が、スムーズに作品世界観をご理解戴けることと思います。

<http://ncode.syosetu.com/n9537d/>

## 第2部：痛み - 1

### 2：痛み

「今、心の中では笑っているでしょう。でもね、本当よ」

初対面の人物の部屋で少女のような少年は、ころころと笑いながらすっかり寛いでいる。

「今朝の教師を見て判らないかしら。あんな《日向》みたいなヤクザ者にならない限り、教師の革スリッパに怯えなくちゃいけないんですもの。泣いて堪えている人間、少なくともいのよ。まして両方に逆らって生きるのは辛すぎるわ」

可愛らしい言葉遣いをするのだが、信吾の言葉の節々に、カズヤは毒を感じた。

「な、アキラは、どうしてたんだ？」

「聞かないでも判ってるくせに」

信吾は口を手を当ててコロコロと笑った。

「アキラちゃんが自分の信念を曲げると思う？媚びることなんかできないでしょ、彼女は。迷わず反教師・反日向を唱える人間を集めたわ。」

けど、結局彼女も都合で神森だっけ、そこに引越すことになっちゃって、空中分解。みんな彼女がいなければ臆病者になっちゃうの。それだけ貫くのが辛いつてこと。

まあ、暫くこの学校の実態を観察しててごらんなさいな。あたしの傍にいれば、《日向》も教師も、あたしの所為だと思って、暫くは咎めてこないはずだから」

信吾は可愛らしく笑った。

「まあ、アキラちゃんが何て言ったか知らないけど、あたしはカズヤくんがどうしようと、何も言えないし、言うつもりもない。自分を曲げるか貫くか、ゆっくり考えてみて。」

じゃ、新学期早々付き合ってもらってごめんなさいね。そろそろお暇いとまするわ」

「あ、ああ……」

一方的に喋しゃべって帰っていく信吾に、カズヤは生返事しかできなかった。

「あら、あの可愛らしい男の子、帰っちゃったのワ？」

お茶請けを持って現れたカズヤの母親は、その後ろ姿を残念そうに見送った。

「ああ。何か変わったやつだったけど」

「あら。神森のシキくんに似て可愛かったじゃない。ああいうのがカズヤの好みなの？」

「母さん、からかうなよな。それにシキはオネエ言葉は使わないし」

「冗談よ。サキくんがいないから、これからはあなたはあなた一人で頑張らないと。早速いい友達ができてよかったわ。やっぱり心配だから」

「あのなあ、母さん……」

カズヤは悪戯いたづつ子のように笑う母親に、反論する気が湧わかなかった。

偶然にもアキラを知る人がいる学校に転校し、彼女が抱えていた問題を知ることになり、少なからず考えさせられたのだ。しかも、母親も指摘した通り、これからはサキがいないのだ。

そう、誰もカズヤを庇かばってくれる人がいないということは、カズヤが何をしようと文句を言う人もいないということだ。

カズヤにだって、それが責任重大なことだということくらい、簡単に理解できていた。

転入してから一週間が経ったが、カズヤの格好は一向に改められていなかった。

簾すだれのような前髪や、詰め襟を覆うくらいの後ろ髪、タックの入ったズボン、そして神森中の校章のままのボタン。カバンも神森中で

愛用の赤いカバンをそのまま使っていた。

改める気がない。それがカズヤの意思表示だった。

サキやアキラに守られることなく、弱い自分がどこまで強く信念を貫き通せるか。

他人に流されやすい自分が、どこまで自分らしさを追求できるか。好きなアキラに対し、どこまで恥ずかしくない自分でいられるか。信吾が自分で言っていた通り、初めは彼にとばかりがいついたらしかったが、彼は教師にも、そしてカズヤにも何も言わなかった。

だが、それにも限界はある。

ある日、とうとうカズヤ自身が職員室に呼び出された。

「鈴木、校則を言ってみろ」

担任の体育教師は、尊大な態度で言った。

「はあ、制服は学生服を身に着けること」

カズヤはそれだけ言った。

何しろ竹刀を持って椅子にふんぞり返って、まるで威嚇<sup>いかく</sup>するような格好が気に入らない。こっちの礼も失せるといふものだ。

「前の中学はそれでも良かっただろうがな、お前は今はここの生徒だろう。言ってみろ」

「あんなの、憶えてられませんか。第一、オレにとってここは行かなきゃいけないから来ている塾みたいなもんで、オレの出身中学は神森中以外、考えられない」

ただ聞いていたら駄々っ子のような言い分だが、カズヤはそれしか言葉が見つけれなかった。

「生意気言っんじゃないやねえっ！」

体育教師の革スリッパを、カズヤは皮一枚の所で躲<sup>かわ</sup>した。

「次は手加減しねえぞ」

担任は、自分が手加減をしたからカズヤに当たらなかったのだと思っているようだった。カズヤが空手を嗜<sup>たしな</sup>んでいたことは、当然知



らない所為もある。次の革スリッパ攻撃は、大袈裟な動作で躲してみせた。

「そんな攻撃、オレにはちょっと……」。

それと、オレの名前は鈴木和哉で、たかだか会って一ヶ月そこいらの人に、担任だからってだけで『お前』と呼ばれる覚えはありません。例え先生だって失礼でしょうが。

生徒だって一人の人間、教師だって一人の人間だから、お互い尊重するべきだと、普通に教わってきたものですから、今まで。こちらはどうもその辺が遅れているようですが、気の所為でしょうか、オレの。

ついでだからお世話になった先生の口癖を一つ。

『規則が多ければ多いほど、人間は破りたくなるものだ。適度であれば、人間は自由と義務の意味を考える』ですって」

カズヤは今までの自分らしくない発言に、自分で驚いていたのだが、担任の体育教師の額の青筋を見て、妙に冷静になっていた。

冗談のように浮かび上がってきた青筋が、これまた冗談のようにひくついているのが、肉眼ではつきり見えるのだ。

笑いたくて仕方ない。

## 第2部：痛み - 1（後書き）

先行記事＆物語の世界観解説を連載している作者のブログです。是非おいで下さい。

<http://blogs.yahoo.co.jp/alfraia>

また、日本ブログ村とアルファポリスに参加しております。お手数ですがバナーの1クリックをお願いします。

## 第2部：痛み - 2（前書き）

本作品は、前作『約束された出会い』編の続編となります。先にそちらをお読みになられた方が、スムーズに作品世界観をご理解戴けることと思います。

<http://ncode.syosetu.com/n9537d/>

## 第2部：痛み - 2

「全くカズヤくんの言う通りね、先生」

と、突然職員室の外の窓から声が降ってきた。

「信吾！」

声のする方を振り向けば、信吾が棧に頬杖をついて面白そうに見物している。

「ホント、体育会系はノーミソがピーチグミで、チュルルンした筋肉でできてプルプル揺れちゃうもんだから、思考能力よりも先に手足が動いちゃうんですよ。大変ねえ。」

それで生徒に手を上げる教師を目の前に、職員室中が見て見ぬふりですよ。まったく立派な先生方ですこと。卑怯者ばかり」

「霞！やっぱりお前の差し金か！」

「さあ、どーでもいいじゃないの。行きましょ、カズヤくん。こんなノーキン相手にしてちゃ、こっちまでピーチグミになっちゃうわよ」

窓から侵入した信吾は、笑いを堪えるカズヤを、強引に職員室の外に連れ出した。

「駄目じゃない、冷静さを見せちゃ。ああいう連中は相手が冷静な素振りを見せれば見せるほど、妙に燃え上がって危険な状態になっちゃうわよ。気を付けて」

「はあ」

絶妙なタイミングで入ってきた信吾に、少し疑問を抱きながらもカズヤは敢えて疑問を口にはしなかった。

「でも……クククツ、面白かったわあ。ピーチグミの青筋、見たあ？いつ見ても傑作よね、あれは！オホホホッ！」

信吾は腹を抱えて笑いだした。

「カズヤくん、あなたならできるわよ、はんひなた《反日向・反教師同盟》のはんきょうしどうめい

盟主を！暫く待つててごらんなさい、きつとチャンスが転がり込んでくるに違いないわ。面白い、面白いわ！これからは誰に怯えることも、屈することもない学校生活が送れるようになるわ。それをあたしたちの手で作ってくのよ！」

そう笑う信吾に、カズヤはアキラに通じる何かを見たような気がした。

狂ったように笑う信吾は、妖しい微笑みを浮かべるアキラに、どこことなく似ていた。

信吾は狂ったように笑い続けていたが、カズヤはその何トカ同盟を復活させるつもりなど毛頭なかった。

自分は自分の意志の限界を貫いてみたいという、超個人的な感情だけで行動をしていただけだし、第一、そのような理念のある同盟の盟主だとかいうものは、アキラだからこそなれるものだと思い込んでいた。

信吾の方も、あの一件の後、《反日向・反教師同盟》はんひなたはんきょうしどうめいのことは何一つ言つて来ない。その場の雰囲気で言っただけなのか、カズヤがその気になるのを待っているのか、カズヤにはさっぱり検討がつかなかった。

教室での信吾はよく気がつく優しい人間で、しかも可愛いものだから、誰からも嫌われることがない。女子からも男子からも『かすみちゃん』と呼ばれて好かれていた。

若干長めのショートヘアに、柔らかい顔立ち。キュートなお喋りほくろ。

この顔で女の子だったら何の違和感もないのにと、カズヤは幾度となく感じた。

「かすみちゃんはねえ、小学校の間からずっと女の子っぱかったのよ。今よりも髪が長めでね」

「ふーん」

カズヤの周りに集まる新しいクラスメートを前に、カズヤはアキラのことを、決して口にはしなかった。

何だかかえってアキラの知り合いというだけで、彼女の後光が自分の周りに出てきそうで嫌だった。

信吾の傍に在る限り、どういふわけか女子ばかりに囲まれてしまふのは、仕方がないような氣もする。

自分でも多少の自覚はあるが、決して不細工な顔立ちではないし、背も高い。もてる要素はある程度持ち合わせている。

クラス的女子は、カズヤにはすっかり慣れ、周りで黄色い声を上げていた。勿論、教師や《日向》の影には怯えながらではあったが。

男子の間でも、カズヤの評判は結構いい。

転入早々校則は破るし、教師にははつきりものを言うし、自分たちにはできないことを平然とやってのけるヒーローみたいなものになつていた。

先日職員室での一件は、校内に広まっていたのだ。

「四人には氣を付けてね」

その噂を知っている信吾は、そう一言言っただけだった。

そして二月半ばのことだった。カズヤにとっては意外なことが起こつた。

例の《日向ひなた四天王》が、教師に逆らい続けるカズヤを、しつこいくらいに《日向》の仲間になるように声をかけてきだしたのだ。当然、カズヤは断つた。

それでも勧誘はしつこく続いた。初めは丁寧に断っていたカズヤだったが、最後はもう適当にあしらっていた。

確かに外見は真面目な生徒ではないかもしれないが、彼らに組するよつな性格ではないことは、他人から見ても明白だというのに、彼らはあからさまに誘いに来る。

《日向四天王》を自称する彼らは、金沢晃陽かなざわてるひという紅一点を中心  
に、岩城佑介いわきゆうすけ、川上 充かわかみ みつる、野口恭則のぐちやすのりで構成されていた。

きつと彼らにそれなりの何かがあるのだから、自分たちよりも年上の高校生が彼らに従っているのだろうが、じつと観察していてもカズヤにはさっぱり判らなかった。

四人はこの中学を中心に、東西南北、公立も私立も、中学も高校も関係なく荒らしまくり、彼らの勢力を拡大してきていた。

総長の日向がいなくなってもその力は衰えることなく、逆に過激になったと言われている。

所詮は子供の陣取り合戦みたいなもので、本来ならば関係ない生徒には何にも影響がないはずなのだが、四人は彼らに敵対するグループのみならず、一般生徒にまで危害を加えていた。

## 第2部：痛み - 2（後書き）

先行記事＆物語の世界観解説を連載している作者のブログです。是非おいで下さい。

<http://blogs.yahoo.co.jp/alfraia>

また、日本ブログ村とアルファポリスに参加しております。お手数ですがバナーの1クリックをお願いします。



## 第2部：痛み - 3（前書き）

本作品は、前作『約束された出会い』編の続編となります。先にそちらをお読みになられた方が、スムーズに作品世界観をご理解戴けることと思います。

<http://ncode.syosetu.com/n9537d/>

## 第2部：痛み - 3

テルヒは目付きを悪くし凄<sup>すこ</sup>んでみせているから気づきにくいが、標準的な体型で、やたらと日本人離れした肌の白さと鳶<sup>とび</sup>色の瞳が印象的な、金髪の似合う人形のような顔だった。

他の男子三人は、これがまた特徴のない少年たちなのだが、目つきが荒<sup>すこ</sup>んでいることだけは、他の誰とも違って気になる。

まるで子供版ヤクザか暴力団か何かのような彼らは、学校にもあまり来ないで、校外で小競り合いをしている。それが一体何の為なのか、当然カズヤには皆目見当がつかない。

カズヤに判ったことといえば、彼らとは決して相容れないということだけだ。

あのしつこかった四人が、ある日を境にぶつとりと勧誘に来なくなった。

それは願ったり叶ったりだったから、カズヤはたいして気にも止めずにいたが、それが実は、四人のような世界に生きる者に誘われるという洗礼を受けてしまった人間としては、命取りになる甘さだった。

カズヤはしつこい四人組に手を焼いて、信吾に助けを求めるようなことはしなかった。

暴力沙汰になるようなことではなく、ただの勧誘なのだから、助けを求めるようなことではない。だから信吾も特に警戒はしていなかった。

カズヤはそれよりも、静かになった担任の体育教師の方が、気になっていた。まるで四人組ら《日向》を注意しないように、明らかに校則違反をしているカズヤを注意せずに、素通りするのだ。

ただカズヤの『気になる』というのは、そういう時に、瞬間的に

なる程度だった。

カズヤは相容れない人種の、彼なりにじっくり観察はしていた。

教師と《日向》<sup>ひなた</sup>。

一見何も関わり合いを持たず、むしろお互いを避けるであろう人たちは、意外にもそうではなかった。

調子良く自分勝手に傍若無人に振る舞う《日向》と、生活指導担当の体育教師は仲が良かったのだ。それも気味が悪いほどに。特に教師の方などは、真面目な生徒と普通に話している時の顔は酷く屈そうに濁っているか、緊張しているかなのだ。

校則の外で生きる《日向》と楽し気に冗談を言い合っている体育教師の姿を見ていたら、この中学の一種独特の世界で、真面目に生きていることが酷くバカらしく、虚しく感じてきてもしかたがない。しかしクソが付くほど真面目な少年少女たちは、《日向》のように乱暴もしないが、調子良く狡く生きるという融通も利かない。真面目が美徳の時代の終焉<sup>しゅうえん</sup>を見ているようだ。

しかしその中でも、一人で立ち上がれずに真面目を演じている生徒や、ただ革スリッパや内申書を怖れて行動を起こせずにいるだけで、心の中に《日向》や教師に対する憤りを秘めている生徒は、数多くいるに違いない。

そういえば、カズヤのように校則違反を堂々としている生徒もない。校則の外に身を置きながら、教師とは相容れない真面目な生徒に、彼はなっていたのだ。

「ねえ、カズヤくん。どんな所だか見えてきたと思うけど、この間の話、どうかしら？」

とうとう信吾は声をかけてきた。

「何の話？」

判ってはいたが、カズヤは敢えて訊いた。

「惚けるの下手ね、カズヤくん」

信吾は口<sup>は</sup>に手を当てて笑った。

「《反日向・反教師同盟<sup>はんひなたはんきょうし</sup>》よ。名前が長いからね、忘れても仕方ないわ。」

でね、あなたなら盟主になれると思うの。だって、アキラちゃん  
があなたをここに寄越<sup>よこ</sup>したのだから」

水を差すのが悪いくらい明るい未来を想像している信吾の顔は、  
とても晴れやかだった。

その表情だからこそ、もう黙っているわけにもいかない。

「そのことなんだけど、オレがアキラと知り合いだって、オレ、こ  
こでは誰にも言っていないの、気付いてると思うけど」

「そうね。知ってるわ。彼女の知り合いってだけで、ここでは一目  
置かれてしまっただろうって、カズヤくんも判ってるんでしょ」

「それもある」

カズヤはアキラの伝言を言うことにした。

「あいつ、転校間際のオレにこう言ったんだ。《日向四天王》と霞  
信吾、両方とも付き合うなって」

「えっ？」

少し驚いた顔を、信吾は見せた。

「オレがここに来たのは、純粹に親の仕事の都合で、彼女の司令じ  
やない。大体、同級生の命令で普通の家庭の一家が動く？常識で考  
えてもあり得ないだろ。」

それにオレがこのスタイルを貫くのも、アキラに言われたからじ  
やなくて、単純にオレがそうしていたいからだ」

「本当？アキラちゃん、ほんとにそう言ったの？」

信吾の顔は、さつきとは違って変わって青く見えた。

「ああ」

「ふーん。……彼女、ずつとこっちからは連絡取れないから、あた

しは知らないのよ、アキラちゃんがどういう生活してたか。もしかして、平和ボケしてんじゃない？」

信吾の毒のある口調に、カズヤはむっとして言い返した。

「それは少し失礼な言い方じゃないか」

「ごめんなさいね。でも、アキラちゃんらしくないんですもの」

「どうしてあいつが普通に生きようとしているのが、彼女らしくないんだ。そうやって枷（はかせ）を一嵌めるから、あいつは逃げるんだよ」

「随分仲が良かったのね、カズヤくん。」

でもね、あたしはアキラちゃんとは小学校からの付き合いなの。

彼女の人となりは、子供の頃から知っててよ」

「変化に十分な時間は、長さじゃないだろ。信吾も神森に行ったら、すぐに変わるさ」

「願い下げだわ。そんな刺激のない生活は。」

いいわ、アキラちゃんがそう言ったなんて、あたしは未だ信じられないけど、その気がない人を盟主に抱くのは、明らかに勝つ戦に負けに行くようなものだもの。

あたしが《反日向・反教師同盟》の復活を狙っている話だけは、秘密にしててちょうだい。それだけでいいわ」

信吾はぶいとカズヤに背を向け、歩き出した。

## 第2部：痛み - 3（後書き）

先行記事＆物語の世界観解説を連載している作者のブログです。是非おいで下さい。

<http://blogs.yahoo.co.jp/alfraia>

また、日本ブログ村とアルファポリスに参加しております。お手数ですがバナーの1クリックをお願いします。

## 第2部：痛み - 4（前書き）

本作品は、前作『約束された出会い』編の続編となります。先にそちらをお読みになられた方が、スムーズに作品世界観をご理解戴けることと思います。

<http://ncode.syosetu.com/n9537d/>

## 第2部：痛み - 4

信吾には言わなかったが、カズヤには違う理由もあった。

それこそ勝つ戦だったら、カズヤでも盟主になってやっていける自信はあった。しかし、勝てる戦ではないように見えたのだ。

それは彼なりの打算かもしれない。

カズヤはじつと学校で観察していたが、『日向』や教師に反抗する心が、カズヤ自身も含めて煮え切っていないように見えたのだ。そんな状況で、必要だからと、そこに無能な盟主を据えたところで、空回りするのは火を見るよりも明らかだ。アキラが盟主だったら、濡れた木に火を点けるように可能だろうが、カズヤはそんなカリスマは持ち合わせていない。むしろ無能に近い。

誰もが現実を受け入れ、そこには諦観が満ちている。

第一、カズヤもそこまでする気はない。自分だけで精一杯だ。

信吾のこともいまいちよく解らない。

そんなに刺激が欲しいなら、自分が盟主になればいいではないか。盟主が嫌だったら、名ばかりの盟主を他に置いて、自分が陰から指導すればいいではないか。でもその気はないらしい。

アキラという存在をひけらかさないのなら、盟主は何も自分である理由などない。

ふう……

カズヤはため息をついた。まさか自分が、このような世界に関わりを持つようになるとは、生まれてこの方想像したこともなかったし、現実にもこのような世界が存在しているとも思ってもいなかったのだ。

この際、自分の超能力のことなどすっかり忘れている。

人生経験、やたら豊かになった気がするよ……

彼は、今度は苦笑をした。



カズヤの偉い点は、転校したからこうなったんだと、親の所為<sup>せい</sup>にしたりしないところだ。すぐにあるがままを受け入れる、それが長所であり短所でもあった。

三年進級を目前に控え、二月末には外部の実力テストがあった。それを受けると、否が応にも受験生の自覚が芽生えてくるはずなのだが、その気持ちまでもが煮え切らず、カズヤは今更<sup>たる</sup>弛んでいた。机に向かって参考書を開くと、さすがに神森にいられたらと思わずにはおれない。

あそこだったら、行きたい高校もあったし、勉強を教えてくれる、口煩<sup>くわづ</sup>いサキと暴力的なアキラもいた。しかしここでは目が回るくらい高校の数がありながら、勉強を教えてくれるような友達もいない。

ところがだ。

ウソだろ……

戻ってきた成績表を見て、カズヤは目を疑った。

いつもと変わらない総合得点の横の校内順位の欄には、初めて見る一桁の数字がある。

目を疑って、もう一度見比べるが、間違いではない。

神森だったらせいぜい三十五位が精一杯の点数だというのに、この中学はよっぽどレベルが低いらしい。

その時、何気なく自分よりも頭の良さそうな人間の顔が思い浮かんだ。

信吾だ。

「信吾、何点？」

カズヤは信吾に声をかけた。誘いを断つても、友達付き合いは変わらず続いていたのだ。

「あたし？そんなの受けてないわよ。何の参考にもならないですもの」

信吾は大きな欠伸あくびをした。

「だって、成績が良くなったって、今の状況が変わるわけじゃないし、教師が恩に着せるしで、もう、ウンザリよ。」

……ほら、ピーチがカズヤくんを呼んでるわよ。頑張って」

信吾は手をひらひらさせて、呼ばれるままに前に行くカズヤを応援した。

別に逆らう理由もないから、カズヤは素直に前に出て、教卓の横に立った。

担任の体育教師ピーチグミは、カズヤの成績のことをクラス中に話すことで、彼らあおを煽ったつもりでいる。それはかえって逆効果だということに気付いていないようだ。

本物のアホだ、この先生。

心の中で、カズヤは幾度となくため息をついた。これじゃ誰もが諦めるはずだ。

少なくとも、ずっとこの環境で育ってきたら、気持ちなんて萎なえまくっているだろうと、カズヤは妙に納得した。

「なあ、そうだろう。そうだな、鈴木。おい、聞いてんのか」

「はっ？」

いつの間にか矛先が自分に向けられていたことに、カズヤは気付いていなかった。

「お前のこの成績は、学校のお陰だな。お前は塾に通ってないんだし。そうだな、鈴木」

はあーっ

何の躊躇ためらいもなく、口から大きなため息が出てきた。

世の中、こんなでも教師になれるらしい。

既にカズヤの中に、担任の体育教師は敬すべき大人という枠から外れている。

「オレ、以前と点数も何も変わってないんですけど。変わったのは順位が上がったことだけですかねえ」

「……けどな、その成績を維持できたのは、一体誰のお陰だ」

一瞬間を紅潮させたピーチだったが、そこは堪え、もう一度カズヤを頷かせようと試みた。

「さあ。教科書と参考書のお陰じゃないですか。少なくとも塾でも学校でもないことは確かですけど」

まさか自分の実力ですと言い切るだけの自信はなかったが、ピーチを逆上させるには十分な言葉だった。

でも、箍たがの外れたカズヤの言葉は止まらない。

「もし学校のお陰だったら、みんな良い成績取ってんじゃないですか。みんな、オレよりも真面目に授業受けてますもんね」

つい言ってしまった駄目押しに、さすがにカズヤは革スリッパを覚悟した。見ればピーチに青筋が浮かんでいる。

限界だ……。もう笑いたい……

カズヤが思わず顔を背けた時だ。

## 第2部：痛み - 4（後書き）

先行記事＆物語の世界観解説を連載している作者のブログです。是非おいで下さい。

<http://blogs.yahoo.co.jp/alfraia>

また、日本ブログ村とアルファポリスに参加しております。お手数ですがバナーの1クリックをお願いします。

## 第2部：痛み - 5（前書き）

本作品は、前作『約束された出会い』編の続編となります。先にそちらをお読みになられた方が、スムーズに作品世界観をご理解戴けることと思います。

<http://ncode.syosetu.com/n9537d/>

## 第2部：痛み - 5

突然笑い声が起こった。信吾だった。

「ほらご覧なさい！誰がカズヤくんに命令したのかしら、あなたたち逆らえって。

ずっとカズヤくんが勝手にやってたのに、全く迷惑な話よ。あたしの所為せいだろうなんて、とんだとばかり喰らっちゃって。

先生、言つとくけどね、誰もカズヤくんには命令できないわよ。

彼は意志が強い男ですもの、とても従わせるなんてできないわ」

笑いを堪えながら革スリッパを待ち構えていたカズヤは、あまりにも絶妙なタイミングで口を挟んだ信吾の言葉の内容に対し、反論するタイミングを失った。

信吾があゝのタイミングを外したら、ピーチは手を挙げていたに違いない。

思い返せば、この間職員室に初めて呼び出された時も、信吾は絶妙なタイミングで入ってきた。よほど信吾はタイミングを計るのが巧うまいのだろう。

その場は信吾が口を挟んだ所為で、ピーチの矛先は宙を彷徨さまよって終わったが、しかし案の定、カズヤは放課後になって体育教官室に呼び出しをくらった。

「失礼しまーす」

カズヤは習慣から、無礼な態度は取り敢えず取らない。ドアを開けると、むせ返るくらいの煙草の煙。

「よお」

そこにいたのは《日向四天王》のテルヒと担任ピーチ。揃って嫌らしい笑みを、口の端に浮かべている。

「えっ？」

状況を把握するよりも前に、カズヤは《日向四天王》の他の三人に背後から取り押さえられた。

不自然に捻<sup>ひね</sup>られた足が、鈍い音を立てたのに気付く。呻<sup>うめ</sup>くその後ろで、テルヒがドアのチェーンを丁寧<sup>ていねい</sup>に下ろしている気配が感じられた。

「さつき、霞が言っただよな。てつきりオレはあのカマの差し金かと思っで、お前を大目に見てやってたんだぜ」

ピーチはチンピラに豹<sup>ひょう</sup>変<sup>へん</sup>していた。そしてそちらの方が似合っていた。

「それがどうしたって言うんですか。オレはオレの意志でやってるだけで、まして教師らしからぬあんたらの言うことなんて聞けるわけがない」

例え相手がどのような人間でも、教師という立場であることには変わりがない。ここで態度を貫かないと、自分の筋が通らない。どのような場合でも、自分は最後の礼儀を失したりはしない。無礼は相手だと言い切れなくなる。

「生意気言っんじゃないやねえっ！」

しかしカズヤの高尚な思い込みは、担任には意味のないことだ。彼は蹲<sup>つすくま</sup>るカズヤの腹を、運動靴の爪先で容赦なく蹴り上げた。空手で鍛えているから、腹そのものは問題ないのだが、折れた足には酷<sup>ひど</sup>く響く。

「《日向》は、《日向》は先生の下僕<sup>しもべ</sup>なのか？」

「なもののか。何でオレがムカツクあいつと手を繋がなきゃならねえんだ。」

でもな、お前も好き勝手やりたかったら、《日向》に籍を置くのが得だぜ。こいつら《日向四天王》の言う通りにすればいい」

「冗談じゃない！」

カズヤは叫んだ。

カズヤには、担任教師が宇宙語を喋っているように感じた。まる

で理解不能なことを言っている。

それからは担任は直接手を出したりはしなかった。煙草を吸いながら、机に足を組んで座り、三人にカズヤが袋叩きにされるのを笑いながら見ているだけだった。

いつものカズヤだったら、こんな三人くらいどうってことないのだが、不意打ちで足を折られてしまっってはどうしようもない。立っているだけで精一杯の状況だ。

クソッ、こいつら、気違いだ……

カズヤは何とか腕で攻撃を防御しながら、最近忘れていたのに無意識に暴走しそうな瞬間移動能力を抑制し、そして逃げ出す方法を考えていた。

しかし、カズヤが抑制していたのはその超能力だけではない。彼自身の激しい感情もだった。彼が初めて心に抱いた強い怒り。

普段強い感情を持たないだけに、自分でもそれに驚いていた。もしこのまま感情に振り回されていたら、つい力を使いかねないと直感で悟り、平静を保とうとしていたのだ。そして今も耐えている。

「もう、いいわよ。それ以上やると、こっちがヤバくなっちゃうでしょ。ねえ、センセ」

テルヒが口を開いた。彼女が《日向四天王》のリーダー格だった。

「鈴木、口外しない方がいいぜ。成績のいいお前だ、内申一つで進学がかかってるんだからな。お前はバカじゃなさそうだし、この学校が動くわけがないしな」

カズヤは声にならない怒りを、心の奥底に抑えるのにかなりの精神力を要した。

別に内申書など、カズヤは怖れてはいない。むしろ何かが弾けて暴走してしまう方が怖ろしい。



五人は嫌らしい笑い声を上げながら、倒れるカズヤの踏んだり蹴ったり好きにして、教官室を出ていった。

こんなに本気で怒ったのは生まれて初めてだった。

怒りや憎しみの対象になるものなどない環境に生まれ育ったカズヤは、負の感情など知らずに育ったと言っても過言ではない。それは無感情とは全く違うものだ。

カズヤは一人で、煙草の煙で色が変わった空気を見上げていた。

骨折の言い訳は何とでもできる。父さんも母さんも信じるだろう。けど、あの連中、《日向四天王》、ピーチ、絶対赦さない。赦すものか……

カズヤは激しい怒りを、心を落ち着かせて静かに燻<sup>くす</sup>らせることにした。

## 第2部：痛み - 5（後書き）

先行記事＆物語の世界観解説を連載している作者のブログです。是非おいで下さい。

<http://blogs.yahoo.co.jp/alfraia>

また、日本ブログ村とアルファポリスに参加しております。お手数ですがバナーの1クリックをお願いします。

## 第2部：痛み - 6（前書き）

本作品は、前作『約束された出会い』編の続編となります。先にそちらをお読みになられた方が、スムーズに作品世界観をご理解戴けることと思います。

<http://ncode.syosetu.com/n9537d/>

## 第2部：痛み - 6

パンツ！と勢いよく扉が開かれた。

「カズヤくん、カズヤくんっ！」

赤い夕日に照らされているのに、信吾の顔が青ざめているのがよく判った。

「ああ、信吾」

思わず笑顔が出てしまったのには、感情の抑制を解いたからで、決して怒りが消えたからではない。

「笑わないでちょうだい。あたしの所為よ、どうしたらいいの。ああ、ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい！」

信吾は涙声で言いながら、カズヤのことをおぶい上げた。

「知り合いに骨接ぎがあるの。そこに連れてくわ。病院だと融通利かないから」

「肩貸してくれるだけでいいって」

「ダメよ、折れてるんだから。まさかこんなに……。あたしが連中を甘く見てた所為だわ」

最後はまるで独り言だった。

信吾の身体つきは華奢で、百八十センチ近いがっしりした体躯の持ち主のカズヤとしては、背負われるのがあまりに申し訳ないくらい。その華奢な信吾は三十分もかけて、ようやくその接骨院に辿り着いた。普通に歩けば十分とかからない距離の所だ。

「モグリ先生、診てくれる。犠牲者よ、また」

「はいはい」

明るい診療室の奥から、まるでモグラを連想させる、イガグリ頭の男が出てきた。

「どうでもいいけど、かすみちゃん、モグリって呼ぶなよな」

「あら、だって、モグラとイガグリをかけただけよ。それとも身に

覚えがあるのかしら」

「ないに決まってるだろ。でも、ほら、他の患者さんも、それにこの男の子だって、知らなきゃモグリの医者だと思っじゃないか。オレは骨接ぎ。柔道整復師じゅうどうせいふくしなの」

モグリと呼ばれてしまった接骨院の先生は、部屋の隅で埃ほこりを被ったまま忘れられたように飾られている、資格の免状を指差してみせた。が、信吾がそうそう動じるわけがない。

「そんなの、知ってるわよ」

「はいはい、またいつもの漫才になっちまうよ。かすみちゃん、ついでだから手伝ってくれよ。男手が足りなくてさ」

「えー、あたしでいいの？ま、一応男だけどさあ」

「勝手知ったる仲じゃないか。機械の取り外しくらいやってくれよ。オレはこの……」

「鈴木です」

「そう、鈴木くんの治療入るから」

「いいわよ」

信吾は本当に勝手知ったる仲のようで、そこにいる患者さんの名前を親しげに呼びながら、低周波治療機の取り外しを始めた。

「ああ、ピーチにやられたって言ってたから、多発骨折じゃないかって心配だったんだけど、単純な骨折で良かった。あのね、この左側の脛くるぶしの、外側の骨が折られてるんだけど、きれいにポツキリやられてるから、きちんと固定すれば大丈夫だから」

モグリと呼ばれた骨接ぎ、茂木もぎは、患部を念入りに調べて言った。「君、何かスポーツやってた？普通痛がるよ、これだけきっちり折れてれば。妙に我慢強いみたいだけど」

「あ、空手とハンドボールを少々」

「少々だなんて、結構しつかりやってたでしょう。鍛えてあるのくらい、一応専門家だからね、すぐ判るよ」

「そうですか」

カズヤは簡単に話を終わらせ、自分が訊きたいことを訊いた。

「あのー、あの連中の犠牲者って、結構いたんですか？」

「んー、そうだねえ。かすみちゃんがここに連れて来ただけでも三十人はいるかな。あのピーチがここに来て十二年間で考えると、数えきれないなあ」

「えっ、そんなに？」

「カズヤくん、明日、何なら会ってみる？」

横から信吾が口を出した。

「ちよつと待てよ。それだけいたら、信吾の作ろつとしてる同盟は作れるじゃん」

「それはできてるのよ。けどね、誰もその盟主になれるだけの勇気も力量もないの。勿論、あたしも含めてね。あたしにそれだけの器量があつたら、とつくの昔に旗揚げしてるわ」

信吾が小声で話し出したので、カズヤも声のトーンを落とした。

「オレ、信吾ならあると思うけどなあ」

「カズヤくん、それは買い被りすぎよ。あたしは霞、霧霞よ。お膳立てもできるし後片付けもできるけど、実体のないあたしを盛り立てることはできないのよ。あたしはずっとアキラちゃんのことを陰で見て、陰になることでアキラちゃんを立ててきて、それしかできない人間なの」

信吾は自分を卑下しながら、アキラを熱心に崇拜する信者のようだった。

そんな信者にカズヤは騙<sup>だま</sup>されはしない。

例え自分も彼女の崇拜者であつたとしても。

「で、お前はオレをアキラの代わりにしようとしてるんだろ。だとしたら、どう考えたって、オレには無理だ。あいつとオレじゃあ格が違いすぎる」

「誰も代わりをしてくれなんて頼んでないでしょ。アキラちゃんは

正義感は強いし、あのカリスマでしょ。あれは誰にも真似できない、  
天賦てんぷのものだわ。

でもね、そんなアキラちゃんにも、決定的なものが欠けてたわ」  
カズヤは、そう言う信吾の中に、アキラと同じ何かを見た気がした。  
怖ろしさを抱かせる何かを。可愛らしい外見の信吾の中にも、  
計り知れない闇がある。

「痛みよ」

吐き捨てるように信吾は言った。

「アキラちゃんね、あの連中にやられる痛みを知らないのよ。

彼女は頭もいいし、腕もたつわ。要するに優れすぎているのよ」

信吾のその一言を聞いて、カズヤの気持ちは急に萎んでいった。

あの、須らく絶妙なタイミングの理由に気がついた気がしたのだ。

「まさかとは思っただけどさ、信吾、今日のことも前の時も、お前、  
計あおってピーチを煽あおったんじゃない……」

信吾ははっと口を抑えたが、その仕草が全てを物語っていた。

## 第2部：痛み - 6（後書き）

作者補足：

作中では病院だと融通が効かない、などと発言していますが、そんなことはありません。接骨院が融通効くというわけでもありません。誰かに負わされた怪我というのは『第三者行為』と見なされ、健康保険の適用外となります。その場合は100%自己負担となり、加害者との相談で示談金が被害者に支払われるような形となります。よって、融通が効くというのは、話が通りやすい程度のもとなるはずです！

管理人が今の仕事に就く前に書いたのでご容赦下さい

先行記事＆物語の世界観解説を連載している作者のブログです。是非おいで下さい。

<http://blogs.yahoo.co.jp/alfraia>

また、日本ブログ村とアルファポリスに参加しております。お手数ですがバナーの1クリックをお願いします。



## 第2部：痛み・7（前書き）

本作品は、前作『約束された出会い』編の続編となります。先にそちらをお読みになられた方が、スムーズに作品世界観をご理解戴けることと思います。

<http://ncode.syosetu.com/n9537d/>

## 第2部：痛み - 7

僅かな沈黙の後、信吾は口を開いた。

「……ええ、そうね。たしかにそうよ」

信吾は開き直った。

「これは賭けだったのよ。」

あなたは連中に殴られ、あのピーチと《日向》の関係に怒って、あたしたちの仲間に加わるって、シナリオを描いてたの。だって、殴られるってたって、カズヤくんならあしらえらえると思ってたもの。だから多少の過激なことも大丈夫だろうとね。

でも、結果はこれよ。世の中大丈夫なこととは何もないって教えられたわ。連中が行きすぎたことをしてくれた。もう、諦めてるわよ、あたし。

諦めついでに喋らせてもらうけど、どうせあたしもあの連中と似てるわよね。どんなことをしてでも、欲しいものを手に入れようとするところなんて」

「……」

「でも、連中の被害に遭った内容は、何も暴力や進路妨害だけじゃないわ。男も女もお構いなしに、一生を台無しにしてしまうようなことなんかもあるのよ。」

暴力にだったら声を大にして立ち上がれる人もいる。けど、被害者が大声で口に出すことのできない暴力つてのも、この世の中にはあるの。きつとカズヤくんの生まれ育った場所から想像もつかないでしょうけどね。

でもね、どんな罪だって、あのピーチのことだから、証拠がないとか言っちゃって、巧く逃げるに決まってるわ。あたしだって、世間に大声で、『あたしはあの男に犯されました』なんて、とても言えないわよ!」

腹の底に澱んでいた憎悪を吐き捨てるように、苦しげな表情で信

吾は叫んだ。

何と言ったらいいか判らず、ただ戸惑いの表情をしているカズヤを見て、信吾は哀しげ笑みを浮かべた。

「ごめんなさいね、また押しつけでものを言っちゃったわ。今度は同情路線なんて、あたしも汚いわね。懺悔ざんげでもすれば赦されるわけではないのにさ。笑っちゃう。

あたし、これ以上何か喋ったら、余計なこと言っちゃいそうだから、このまま黙って家まで送るわ」

信吾はカズヤに手を差し出した。

その冷たい手は一度噴き出してしまった怒りの所為で、小刻みに震えていた。そのあまりの冷たさに、カズヤは思わず手を引つ込めた。ただ漠然とだが、そうした手から感じる負の感情が怖かった。

「松葉杖あるから平気」

瞬間移動するつもりだったから、かえって信吾がいる方が都合が悪いのだが、そうはつきり言えるわけがない。結局カズヤの住むマンションの戸口の前まで、信吾は送ってきてくれた。

「信吾、寄ってかないのワ？」

カズヤは信吾に声をかけた。

「いいえ、今日は失礼するわ。《反日教》はんにちぎょうの集まりがあるの」

「はんにちきょう？あ、省略してんだな。何処でやってるの？」

「知ってどうするの？ま、モグリの所だけだ」

明らかに、信吾はカズヤとの間に一本線を引いた言い方をした。

それに苦笑しながら、カズヤは言った。

「盟主はちよつとだけど、考えとくよ。アキラの代わりじゃないみたいだっけ」

それを聞いた信吾の顔が、喜びで綻はなんだ。しかしカズヤは、その喜びの裏に隠された、策士信吾の顔には気付いていなかった。

信吾は足取りも軽やかに、茂木接骨院へ向かった。

「大丈夫だったか、かすみちゃん。話は聞いたけど……」

「ええ、ちよつと言い過ぎましたわね。でも大丈夫。半分は計算したことですもの」

「ならいいけど。ところで、例の彼、どうなった？」

「結果的には成功しましたわ、鈴木和哉でしょ。」

ええ、彼はアキラちゃんの右腕に間違いありませんわ。彼こそが《夏青葉》。アキラちゃんは彼を大事にしているようですので、アキラちゃんには内緒にしていって下さいね。

あたくしが何も知らない彼のことを、《夏青葉》に育て上げてみせますわ。面白くなりそうだと思いますこと……」

「大事？」

「そう。彼にはアキラちゃん、《夏青葉》の意味を何も教えてないようです。《日向四天王》ばかりかあたくしとも付き合うなって言ってみたんですもの」

「そりゃ、大事にしすぎだな。自分で言い残した補佐官の《夏青葉》ならば、しっかり教育しておいてもらわんと。聞けば結構な甘ちゃんならしいじゃないか」

「駄目よ、焦っちゃ。ゆっくりあたくしが育ててみせますわ。お二人とも、楽しみに見てて下さいな」

信吾は暗い診療室で、二人の男とひそひそと話していた。

「しかし、あと一月半だが」

「大丈夫ですとも。彼はとても素直な性格よ。年寄りらせつかちだからいけないわ」

「年寄りとは何だ」

「あら、あたくしと比べたらねえ」

「そりゃ中学生と比べたら、どうしようもないだろ。反則だって」

「あら、でも事実よ」

「社会人、または大人と呼べ」

「別にどうでもいいじゃないの」

信吾は楽しそうに笑った。

「あとは学生たちを纏<sup>まと</sup>めておかないと」

「解<sup>と</sup>ってますわ。明日、こちらで集まるつもりです」

「かすみちゃん、任せたからな」

「ええ。そちらは大事な所を抑えて下さいね」

暗い診療室の秘密の会話は、そこで終わった。

## 第2部：痛み・7（後書き）

次回から第3部：反日向・反教師同盟〱を始めます。

先行記事＆物語の世界観解説を連載している作者のブログです。是非おいで下さい。

<http://blogs.yahoo.co.jp/alfraia>

また、日本ブログ村とアルファポリスに参加しております。お手数ですがバナーの1クリックをお願いします。

### 第3部：反日向・反教師同盟・1（前書き）

本作品は、前作『約束された出会い』編の続編となります。先にそちらをお読みになられた方が、スムーズに作品世界観をご理解戴けることと思います。

<http://ncode.syosetu.com/n9537d/>

### 第3部：反日向・反教師同盟 - 1

#### 3：反日向・反教師同盟

怪我させられた翌日、それでもカズヤはしっかりと学校へ向かった。お見事と褒めてやりたいくらいにポツキリと、脛すねの外側の骨が折れられて、骨がくつつくまでに一ヶ月ものギプス固定を要する程の怪我なののだ。

登校するというその決意を聞かされた時、当然のように両親も信吾も止めた。

しかし他人には理解できない意地を張り、足首から膝の上までしっかりとギプスで固められた足で、慣れない松葉杖をひよこひよこついで、カズヤはいつもの三倍の時間をかけて登校してやった。到着する頃には腋わきの下が痛くて堪たまらない。

両親や学校には、乗った側溝の蓋ふたが外れて落ちて骨折したと言いついては、訳しているが、真実は違う。

まさか担任たちによる暴行による怪我だなどとは、口が裂けても言えない。それは進学の為に彼らを怖れて言えないのではなく、言っても意味がないからだ。どうせ学校が何かをしてくれるわけがない。

大体、側溝の蓋が突然外れたとしても、カズヤは自分が骨折するようなことはないだろうと思っている。ただ彼としては適当な理由がそれしか思いつかなかつただけの話なのだ。

カズヤ自身に、別に褒められた根性があるわけではない。

実のところ、カズヤは登校した時のピーチの顔が見ただけだ。その為には、たとえ昨日の今日だから休みなさいと言われても、何が何でも今日に行かなくてはならない。



今日じゃなくては意味がない。

転校して僅かな時間しか付き合いがなが、天然のカズヤでも、あのピーチが申し訳なさそうな顔をするわけがないだろうと確信できる。

だとしたら、その代わりに彼はどんな嫌らしい笑みを浮かべるのだろう。自分はそれを見て、彼らに対する怒りを持続しなくては行けないのだ。

そして直接手を出した日向四天王の連中はどういう反応を見せるのだろう。

どうせいやらしい笑みをニヤニヤと浮かべて、教室の定位置からこちらを見ているだけだろう。それも腹が立つ。

大して怒りが持続しない自分の性格を知っているカズヤは、そう思っていた。

でも、まさか両親にそういう思惑だとは言えるわけがない。だから他人には理解できない意地なのだ。

そもそも、何の為に怒りを持続させなくてはならないかも解っていないし、自分の為に怒りを持続させるなど愚かなことだとも解っていない。

ただ、何となくそう思うだけで意地を見せようっていうのだから、おかしい話だ。

《反日教》の件に関しては、信吾にきちんと返事をしなかった。

ピーチの顔を見てから決めようと思っていたのだが、実際は、本当にその気があつたらすぐに返事をしていのではないかとも思っていた。

要するに、未だ決心しかねている自分がそこにいる。そして自分をそこに留めているのは『打算』という弱さ。

そしてカズヤは自分の打算がそこに働いているということまでは気付いていない。

誰だって、負けると知って喧嘩を売るのは嫌なものだ。信念があるならいざ知らず。その信念をカズヤはまだ決意できていない。だから決意の理由をピーチに委ねているのだ。

しかし必死になって登校したというのに、ピーチの顔を見ても、カズヤは結局決心をつけることができなかった。

理由は簡単だ。

登校すると、クラス中が集まって、理由を訊いたり案じたり、それはもう一大イベントのような騒ぎになった。

当然、カズヤは嘘の理由を言う。

そしてそこに現れたピーチは「ドジなんじゃないか。気をつけるよ」と、あまりにも予想通りの薄っぺらい笑いを浮かべ、カズヤに一瞥くれただけだったのだ。

ここまで予想通りだと、正直なところ、怒りも何もあつたものではない。いや、あまりにいけしゃあしゃあとした態度に、開いた口が塞がらなかつたという方が正しい。

そして例によってあの四人は、学校に現れもしない。

結局どのような条件があつたとしても、カズヤ自身が未だその気になっていないのだ。

ようやく午後になって、そのことにカズヤは自分で気が付いた。

午前中は怒りの湧かない自分に対して首を捻っていたカズヤだが、その気になっていない自分に気づいた今、今度は何を迷っているのか首を捻って考える。

今までのように考えてくれる人がいない今、彼は自分の迷いの元の『何』が何であるのか、自分で考えなくてはならなかつた。

大して役に立たない授業中、カズヤは彼なりに一生懸命考えていたのだが、そもそも一生懸命物事を考える習慣がない彼だ、途中で考えが霧散してしまつてまとまらない。

数学の証明をまとめる方が楽だ……

授業中に遠慮なく天井を見上げ、幾度となくため息をつくばかり。彼なりの真面目な思い込みで、時間を無駄に過ごしていることに気付いていない。

湧き上がらない感情の理由など考えることくらい、意味のないことではないというのに。

ただ、返事を待っている人間が一人はいた。

カズヤがその気になるのをひたすら待っている信吾は、彼がすぐにでもその気になってくれるとばかり思っていただけに、カズヤ以上に無駄な一日を過ごすはめになっていた。

### 第3部：反日向・反教師同盟・1（後書き）

先行記事＆物語の世界観解説を連載している作者のブログです。是非おいで下さい。

<http://blogs.yahoo.co.jp/alfraia>

また、日本ブログ村とアルファポリスに参加しております。お手数ですがバナーの1クリックをお願いします。

### 第3部：反日向・反教師同盟・2（前書き）

本作品は、前作『約束された出会い』編の続編となります。先にそちらをお読みになられた方が、スムーズに作品世界観をご理解戴けることと思います。

<http://ncode.syosetu.com/n9537d/>

### 第3部：反日向・反教師同盟・2

茂木接骨院もきせつこつゐんの二階の一室で、信吾は数人の中学生と集まっていた。

「なあ、かすみちゃん。彼、マジで加わるって言ったのか？」

「ええ。でもね、迷ってるみたいね。あと一押ししてとこね」

「適当なお茶とお茶請けちやうけを前に、数人の生徒と何やら相談だ。

「どうして迷うかねえ。あれだけの目に遭あわされて」

「よっぽど意気地なしなんじゃねえか。今度ばかりはあの人の人選も当てにならなかつたってわけだ」

「大体さあ、この状態で迷うようなやつを迎えてメリットあるわけ？」

「まあ、そう決めつけないで、もう少し見ていてごらんなさいな」  
信吾は余裕の笑みを浮かべていた。

そこにいたのはカズヤと同じクラスの梅津慶一うめつけいいちと日渡絵美ひわたれみ、元《日向》の加賀見 崇かがみ たかし、そして一年生の楠木 聡くすのき さとし。

それぞれがそれぞれに《日向》に対して何かしらの思いや痛みを持っている者だ。

無論、《反日教》はんにちていけうにいる者で痛みを知らない者はいない。勿論、それぞれの痛みを探るようなこともしない。

「以前、アキラさんは言ったよな。あの人の左腕を《春霧霞》はるきりがすみ、右腕を《夏青葉》なつあおばって言うって。で、かすみちゃんが《春霧霞》で、《夏青葉》はこれから捜しに行くんだって。そんで夏が現われたら春は去るって言ってたよな」

クラスでは委員長をやっていて、一番真面目そうな梅津が、やはりアキラの不可解な世界の単語を平然と言っていた。

「でも、本当に彼が《夏青葉》なのかよ」

「彼はこの二年間を、アキラちゃんと共に過ごしてきているわ。こ

んな偶然ってそんなにないわ。あたしは信じてるの」

「わたしもそう思う。四月には日向本人が帰ってきて、私立に戻れないからこの中学に入らって話じゃない。」

だとしたら、『夏青葉』が現われるとしたら今しかないわ。アキラさんが彼を送ってくれたと思うの、戻れないアキラさんの代わりに」

絵美が信吾に同調した。

「オレとしては、そんな腹の決まっていけないヤツが『夏青葉』で、アキラさんの言った通りにかすみちゃんが去るはめになる方が、痛みがあると思うぜ。だったら本物なんかいらねえってな」

「まあまあ、ちょっと嬉しいわ、そう言ってもらえるなんて」

信吾は手の甲を口元にあててオホホと笑いながら、その口で厳しいことを言った。

「実際のところ、あたしも真実がどうかなんてどうでもいいのよ。あたしが彼を『夏青葉』に育てればいいんだから。あたしも含め、本物かどうかは判るわけじゃないじゃない。それはアキラちゃんにしか判らないことよ。」

でも、他のみんなは『夏青葉』って名前に見合った実力の持ち主が名乗り出れば、そうだって信じてしまうもんじゃないかしら」

四人が四人共、信吾の顔に似合わない考え方には戸惑うことがしばしばある。今もそうだった。

少なくとも、今はこの五人が、現在の『反日教』の全てを把握し、動かしている。それでも、アキラの残したという不可解な風流な言葉、『春霧霞・夏青葉』の意味を理解しているのは、信吾一人だけだろう。

はるきりがすみ なつあおば  
『春霧霞・夏青葉』。

それはアキラが卒業の際に、梅津、絵美、そして信吾に告げた言葉。

「オレのことを支えてくれる二人のことだ。」

左に立つのが春で、右が夏。来たるべき時に夏が現われると、それまでいた春は季節が過ぎて消えてゆく。春はかすみちゃん、お前だ。そしてオレは、これから夏を捜しに行かなくちゃならない」

たった今の今まで小学生だった三人に、一体この言葉が理解できたかどうかは解らない。アキラはそのことを考慮に入れずに不可解な言葉を残し、そうして神森へと向かったのだ。

「けど、かすみちゃん。彼にはオレらや《日向》や何かを理解できる頭はあんのかよ？」

加賀見は言った。煮え切らないカズヤの今日一日を見ていたら、こうも言いたくなるのは当然だ。

「そう、そこねえ。今日、ここに治療しに来るはずだから、その時に話してみようって思ってるのよ、あたし」

「それしかないよね」

「でもね、きつと彼はその気になるわよ」

信吾は確信し、強い笑みを見せた。

何れにせよ、当のカズヤが現れなくては話は進まない。五人はお茶を前に、カズヤが治療に来るのを待つことにした。

梅津はぱつと見たところ、真面目そのものの中学生だ。これといった特徴は何もない。身長も体型も平均的。結構度のきつい眼鏡をかけている所為で、余計に真面目そうな雰囲気（せい）がまとわりついている。

加賀見はお調子者で、ちょっと《日向》にいた頃の名残で制服が格好良くなっていて、正直梅津と一緒にいること自体も不思議な感じだ。齒（きぬ）に衣着せぬ言動で、仲間内では笑わせる役目だ。

聡はまだまだ小学生つばさのあるあどけない坊やで、声も未だ高く、怖いもの知らずの無鉄砲さも持っている。

絵美はどこにでもいる女子中学生そのものだ。校則に忠実に従っ



た身形みなりをしている。

信吾も含め、そこにいる者全員が、《日向》という不良グループに挑むようには見えない外見をしている。

そして彼らもそれを熟知して、その外見を隠れ蓑みのにしている部分がある。

### 第3部：反日向・反教師同盟・2（後書き）

先行記事＆物語の世界観解説を連載している作者のブログです。是非おいで下さい。

<http://blogs.yahoo.co.jp/alfraia>

また、日本ブログ村とアルファポリスに参加しております。お手数ですがバナーの1クリックをお願いします。

### 第3部：反日向・反教師同盟・3（前書き）

本作品は、前作『約束された出会い』編の続編となります。先にそちらをお読みになられた方が、スムーズに作品世界観をご理解戴けることと思います。

<http://ncode.syosetu.com/n9537d/>

### 第3部：反日向・反教師同盟 - 3

待たれているなど知るわけもないカズヤは、ゆつくりのんびり考えながら、慣れない松葉杖に苦戦しながら歩いていた。

勿論、向かう先は茂木接骨院。

一日杖を使つて、いい加減その扱いにもなれたから、腋わきの下が痛いということはない。杖に全体重を預けることなく、上手に階段昇降もできるようになった。

それでも出歩くのは面倒臭い。とはいえ昨日は保険証もなく直接行ってしまったから、どんなことがあつても行かなくてはならないと思つていた。何しろ茂木は、本来は全額自費で支払うべき料金を、保険証を後で持つてくればいいからと、保険証の窓口負担だけで治療してくれたのだ。

それに、折られて痛くないわけがない。

昨日よりも腫れはが表面に出てきたぶんだけ、固定が若干きついようないな気もする。

「こんにちは。お願いします」

学校から直行したものだから、午後の診療が始まるか否かの時間に着いてしまったカズヤは後悔した。

未だ他の患者さんの姿が見えないし、先生の姿も見えない。

仕方ない、二度足運ぶのは辛いから、待たせてもらおう。

カズヤは診察券を受付に置いた。

「やつほー カズヤくん」

「あれ、日渡さん。どうして？どっか怪我してたの？」

カズヤは驚いた。

受付から見える診察室の奥から、セーラー服の絵美が、診察室の奥から手を振っているではないか。

「ん、まあね。それより、どう、調子？」

「調子って言われても、昨日の今日だし」

カズヤは苦笑いだ。

たとえ鍛えてある身体といえども、骨が折れているのだから、腫れと熱でズキズキするし、歩く度に振動が響くし、使い慣れていない筋肉を使えば、疲れもするし、筋肉痛にもなる。

カズヤは体力に物を言わせて、何とか松葉杖に慣れて生活をしたが、実は結構音を上げたい心境だった。強がりには意味がない。

何しろ教室が四階なのだ。公立の中学校にエレベーターなんて文明の利器は存在しない。

まあ、真夏じゃなくて良かったと思う。ギプスの下で汗をかく季節だと、匂うし痒いし拷問だ。

「それもそうよね。どぶ板踏み外したんだっけ。意外」

含みのある絵美の微笑みに、カズヤにしては珍しく、何かを感じた。

「あの……まさか！」

「そう、気付いた？実はね、わたしも《反日教》よ。意外？」

「ちよつと」

カズヤは正直に頷いた。

「あれ、委員長まで！」

「よっ」と顔を覗かせた梅津の方が、カズヤにとってはもっと意外だったかもしれない。

そして導かれるままに奥の部屋に入ってみて、カズヤは更に驚いた。

先ず委員長の梅津とつるみそでもない加賀美はいるし、まるで小学生のような少年もいる。

「そんなに意外だったかしら」

信吾は、カズヤの驚きの表情を見て、微笑んでいた。

「まあ、ね」

カズヤはその気持ちを隠しはしなかった。

「それだけいろんな人間を痛めつけてんのさ、連中はよ」

知ったように、加賀見が長めの前髪をかき上げて言った。

「例えば、小学生の時から不良連中に目を付けられてて、中学行ってもそれに負けないようにって思っていると、そう思ったヤツほど早速叩かれるもんだったりさ」

度の強い眼鏡を弄りながら、梅津が話した。

「でも、確か《日向》って、オレらが小学六年の時に結成されたって聞いたけど」

カズヤは疑問を正直にぶつける。

「結成されたのはね。」

でも、《日向》は小学生だけが作ったグループだぜ。そのくらいの年齢にもなれば、誰が自分たちを嫌ってるかなんて、それこそ結成しようがしまいが判ってるだろ。

怖ろしいよ、あいつら。小学生の頃から先輩に命令してるんだから」

梅津がひとしきり喋り終えると、加賀見が続ける。

「オレは初期の《日向》にいたから、連中がどういう考えで行動始めたか、少しは解るんだ。」

オレは日向ってヤツ個人は、潔くて好きだったんだ。悪いのは《日向四天王》なんだ。日向がいなくなったら、連中は好き放題出してさ。

だから、日向がいなくなって気に入らないから抜けたら、オレのこと集団リンチだぜ。こっちだって腹立つから、勢い余って《反日教》さ、今じゃ」

梅津と加賀見は、  
<ruby><rb>一頻り</rb><rp><( </rp><rt>日向四天王</rt><rp></rp></ruby>の悪口を、競争するように言い続けた。

「何でもいいけど、頼むっけ、順序追って話してくれよ」

とうとうカズヤは音を上げた。

「ああ、悪い悪い」

梅津は頭を掻いた。

「ちょうど二年くらい前かな、それまで中学生の不良グループを引き連れた高校生の不良グループ同士が、そこらでよく喧嘩をしているのは見ていたから、不良の喧嘩そのものを気にすることはなかったし、オレは絶対あんなにならないって心に決めてたし、第一オレ自身が関わり合いを持つことない別世界のことだと思ってたんだ。

ま、取り敢えずオレのことは置いといて、オレの目から見た『日向』の概略を話すと……」

梅津は話し始めた。

### 第3部：反日向・反教師同盟・3（後書き）

先行記事＆物語の世界観解説を連載している作者のブログです。是非おいで下さい。

<http://blogs.yahoo.co.jp/alfraia>

また、日本ブログ村とアルファポリスに参加しております。お手数ですがバナーの1クリックをお願いします。



### 第3部：反日向・反教師同盟・4（前書き）

本作品は、前作『約束された出会い』編の続編となります。先にそちらをお読みになられた方が、スムーズに作品世界観をご理解戴けることと思います。

<http://ncode.syosetu.com/n9537d/>

### 第3部：反日向・反教師同盟 - 4

梅津は、アキラや聡と同じ小学校だった。

そして《日向四天王》の岩城、そしてテルヒもいた。

岩城とテルヒは、かなり早い時期から不良の真似事はしていた。少なくとも梅津の目から見たら、不良ではなく不良の真似事をしてるように見えていた。まあ、ありがちなことだ。

小さくボロボロになったランドセルを片方の肩に掛けて学校から帰る途中、例によってバイクやら何やらごちゃごちゃに入り乱れ、中学生や高校生が公園で喧嘩しているのを、梅津は見た。

この辺りじゃ、その光景は別にそれは珍しいことではない。

卒業式を間近に控えた三月の上旬だった。

これから、あの、不良の溜り場と悪評高い地元の中学に通うのかと思うと、ウンザリしてしまう。

あの私立中学に合格していれば、こんな憂鬱になどならずに済んだのだ。

しかし、今更自分の勉強不足を悔やんでも、どうしようもない。

勿論、同じ区内の違う公立中学へ願書も出していたが、抽選にも漏れてしまったのだ。

嫌悪の表情を露骨に見せて、足早に梅津は公園の横の道を通り抜けた。それこそ珍しいものではないから、慌てて逃げたり警察に通報したりはしない。

ただ梅津は、つい怖いもの見たさも手伝って、その時横目で喧嘩を見た。

！

驚いたのは明らかに小学生が四人、うち二人は知っている顔、岩

城とテルヒがいたということだ。思わず梅津は、穴が開くほど二人を見てしまった。

「おい、テルヒ。あの男、知り合いか？」

そんな梅津を見て、髪は短くて声も低め、けれども顔が少女のように綺麗な、身長が百六十センチを超える男子が、テルヒに訊いた。「え、ああ、あれ。同じ学校のガリ勉野郎。ま、あっちもこっちも嫌われてるけど」

テルヒはそう言うと、ニヤツと梅津に微笑みを投げ掛けた。「見せしめにやっちゃいます？日向さん」

「全然意味ないし。今はとにかくこの近辺に集中だろ。無駄な労力は使うなんて、もったいない。」

いいか、オレは暫くはここを離れるんだから、戻るまでに粗方制圧あらかたしといってもらわないと困るんだよ」

中性的な少年に、中学生や高校生までが伺うかがいを立てている。

日向と呼ばれたその少年は、背こそ高いが小学生であることは、一目瞭然だった。

梅津は見てはいけないものを見てしまった気がして、慌てて目を反らし、その場を離れようとした。

「梅津」

と、突然後ろからテルヒが彼を呼ぶではないか。

「……」

今まで口をきいたことすらない関係だっただけに、テルヒのその声に、梅津は背筋が凍る気がした。返事こそしなかったが、彼は足を止めた。

「下手にあたしらに逆らわない方がいいよ。あたしらは『日向四天王』。そのうちこの辺の学生はあたしらに従うことになるよ。」

ま、あんたが逆らうなんてことはないか。ガリ勉君だし、先公になんか、何言ったって、どうせ無駄だしね」

梅津はテルヒたちの笑い声を背に、半ば小走りに、まるで逃げる

ようにその場を後にした。

自分はあるのに囲まれて、三年間の青春を送るのかと思うと、絶望の淵に突き落とされたような気分だった。

しかし、別に何かをされるわけではない。関わりを持とうと思われるわけではない。自分のような人間に、あの連中がちょっかいを出すわけがないのだ。

っつーか、従うってどういう意味だよ……？

今更気付いた疑問を口にすることはないだろう。

梅津は無事に小学校を卒業した。

事件が起きたのは、彼らが早い春休みに入ってからだった。

卒業し、暇に任せて小学校に毎日のように遊びに行っていた梅津は、職員室で教師たちと喋っていた。

ちょうど学校が終わり、掃除当番以外がそろそろと帰って行く。それを見ていると、ほんの数日前までその中に自分がいたことが、とても不思議で、そして懐かしく恋しく思った。

「先生、金沢と岩城のこと、知ってる？」

茶飲み話のようなつもりで、梅津は二人をことを話題にした。

「降って湧いたように現れた小学生日向と、『日向四天王』を名乗ってる四人だろ。今じゃその五人がここの中学生や高校生の不良を仕切ってるらしいね」

「そうそう。オレ、この間さあ、公園で喧嘩しているとこに出くわしちゃって、従えよ、みたいなこと言われちゃって」

「全く、信じられない話だよ。小学六年生がこの三カ月で、一気に仕切りだしたって噂じゃないか。まさか、金沢と岩城が中心人物とはねえ」

教師は少しがっかりしたような口調で、でも他人事のような口調だった。

「あの二人って、そんなに強かったんだ」

梅津は無邪気に訊いた。

「ああ。二人とも、何だっけかな、空手だか剣道だか、ま、その類<sup>たぐい</sup>を習ってたな。一体、どこでどう狂っちゃったんだかな……」

その教師のため息の後の沈黙を破るように、事件は起こったのだ。

### 第3部：反日向・反教師同盟・4（後書き）

先行記事＆物語の世界観解説を連載している作者のブログです。是非おいで下さい。

<http://blogs.yahoo.co.jp/alfraia>

また、日本ブログ村とアルファポリスに参加しております。お手数ですがバナーの1クリックをお願いします。

### 第3部：反日向・反教師同盟・5（前書き）

本作品は、前作『約束された出会い』編の続編となります。先にそちらをお読みになられた方が、スムーズに作品世界観をご理解戴けることと思います。

<http://ncode.syosetu.com/n9537d/>

### 第3部：反日向・反教師同盟・5

急に外が騒がしくなつて飛び出してみれば、校庭に黒い人ばかりができていた。

顔は知っているから五年生の男の子だとは判るのだが、知らない人が見たら小学三年生くらいに見える楠木 聡が、目の覚めるような金髪に変わったテルヒや、変な形の学生服を着た岩城、その他二人、いわゆる《日向四天王》に囲まれているではないか。

《日向四天王》を怖がって、誰もが傍観者になつて、聡を庇おうとできずにいる。

当然、梅津の足も竦んでいた。

その時、梅津とテルヒは目が合った。他の三人をを顎で使いながら、彼女はまるで、梅津のことを意気地なしと鼻で笑っているようだった。

それは気の所為かもしれない。

自慢じゃないが、梅津は喧嘩などしたことがない。そんな梅津が聡を庇おうとしたところで、同じように袋叩きにされるのは目に見えていた。

テルヒの視線が蔑むように突き刺さる。そしてそれに負けて目を逸らせた自分。

彼女たちを『あんなの』呼ばわりしている自分は、その視線に負けている。

そう思つた時に、梅津の打算は掻き消えた。

駆け出しその輪の中に突撃した梅津は、当然のようにぼろ雑巾のような状態にされたが、それでも闇雲に振り回していた腕は、何か



に当たった感触だけは憶えている。見れば川上の口の端は少し切れていたようだ。

ぼろ雑巾は動けないので、よく判らない。

飛び込んだ梅津に勢い付けられて、教師たちも仕事を思い出したようだ、暴力慣れしていない教師が役に立つわけがない。

そもそも、生徒に勇気付けられて止めに入るようでは、話にならない。教師も所詮人間だ。

その時、「くそッ、遅かったか！」と、鮮やかな回し蹴りを野口に叩き込んだ者が現われた。

「遅かったじゃない。可愛い坊やを見捨てるつもりかと思ったわ。それとも助けっ人でも頼みに行ったのかしら？」

聡と梅津に向けていた手を止め、テルヒは同級生だった背の高い少女、桂小路かつこうじ 晃にらを睨みながら高らかに笑った。

「もしかして、その可愛い子が助けっ人？もうちょっと強そうなの選えらびなさいよ」

アキラが連れていた『可愛い子』とは信吾だった。

「大体、あんたらがつまらないこと始めるから、こうやって何も知らない子に、こちらが手を出すはめになるのよ」

必要なことまで何も言わない癖くせは、昔からだったようで、テルヒに対してアキラは何も言わなかった。

その代わりに信吾に目で指示を出し、いきなりアキラは川上を、信吾は野口を一撃で地面に叩き付けた。彼女が口を開いたのはその後だった。

「そうやって、わけの解らない自分勝手な理屈を付けて、誰彼なしに手を挙げたい自分を正当化するお前らが嫌たむろなんだよ。屯たむろって、強がって、一人じゃ何もできないくせに意気がって」

アキラと信吾は『日向四天王』に反撃させずに聡と梅津をまさに救け出し、保健室に連れていったのだ。

梅津は、隣のクラスだった背の高い桂小路 晃のことは、名前くらいは知っていたが、それだけだった。

成績のことなど小学生では噂になるわけがなく、足が速くて背が高いくらい以外は、意外にも目立つ存在ではなかったのだ。かえってテルヒの方が学校中で有名だった。

「かすみちゃん、聡を頼むわ」

アキラはそう言つと、自分は梅津の手当てを始めた。

「桂小路さん」

「アキラだ」

なんてそっけない女子だろうと、梅津は思った。

「さつき金沢が言つてた、《反日向同盟》って？」

「聞いてそのままさ。ま、早い話が不良撲滅運動をすることを目的にした集団だな。今は《日向》がこの辺りを仕切ってるし、この先拡がると思うから、反日向を掲<sup>か</sup>げてるのさ。

今日は悪かったよ、とぼつちりかけちまって。それと聡を庇<sup>か</sup>つてくれて、ありがとうな」

アキラの男言葉も、昔からのものだった。

「連中はオレを呼び出す為に、聡をやったのさ。聡、間に合わなくてごめんな。うっかりオレが近所で、たまたま可愛<sup>か</sup>がってたから巻き込んでしまった」

アキラは自分と同じ年だと思えない、硬質な雰囲気があった。

「それと梅津、お前、中学に行ったら氣イ付けろよ。《日向》の連中は教師も動かせるくらいの力を持つてるのに、オレは転校しなくちゃならない。だから困<sup>こ</sup>つたらこのかすみちゃんに相談しろ。こいつ、見かけによらず強いし、優しく相談乗ってくれるはずだから。あ、誤解してると思うけど、こいつ男だから。見た目は可愛<sup>か</sup>いけど」

信吾は男だと紹介され、口に手を当てて笑った。だが、その時の

梅津には、そのようなことはどうでもよかった。

「オ、オレも入る、同盟に。いいだろ！」

自分でも不思議だったが、自然とこの言葉が口から出てきた。目立たず、不良とは無関係に事なかれ主義を貫いてきた梅津は、我ながらこれには驚いた。

アキラは当然だが、梅津に対して答えなかった。敢えて苦しい道に引きずり込むようなことは、彼女はしない。しかし信吾がこつそりと、《反日向同盟》が集まる場所と日時を耳打ちした。

そしてその集まりで、彼女は《春霧霞・夏青葉》はるきりかすみ なつあおばという謎めいた言葉を残し、神森へと去ったのだった。

### 第3部：反日向・反教師同盟・5（後書き）

先行記事＆物語の世界観解説を連載している作者のブログです。是非おいで下さい。

<http://blogs.yahoo.co.jp/alfraia>

また、日本ブログ村とアルファポリスに参加しております。お手数ですがバナーの1クリックをお願いします。

### 第3部：反日向・反教師同盟・6（前書き）

本作品は、前作『約束された出会い』編の続編となります。先にそちらをお読みになられた方が、スムーズに作品世界観をご理解戴けることと思います。

<http://ncode.syosetu.com/n9537d/>

### 第3部：反日向・反教師同盟 - 6

その後、《反日向同盟》<sup>はんひなた</sup>は集まることはあったが、何かするわけではなく、中学二年の今になるまで直接対決もない。逆にアキラがないことで、さつさと同盟もなくなっただと思っている者もいた。

梅津は、入学早々体育教官室に呼び出され、今の担任に脅しに似たようなことを言われた。

尤も、その時はそれが脅しだとは思っていなかった。

「お前、春休みに妙な連中と関わってたな？」

生徒指導の体育教師が《反日向同盟》のことを言っているのだと、梅津はすぐに気が付いた。

しかし、どうして悪いことをしたわけではないのに、随分きつい口調で言われるのか不思議だった。

「あの、それだったら《日向》の方が妙じゃ……」

「口答えするんじゃないやねえっ！」

梅津はいきなり頬<sup>ほほ</sup>を打たれた。

「いいか、今後一切連中に関わるな。行け！」

何も知らない梅津は、暴力的ではあったが、ピーチが心配をしてくれているのだと解釈をした。反日向を掲<sup>かか</sup>げること、《日向》に狙われるということで、ピーチは忠告をしてくれたのだと、その時は善意に解釈していた。

しかし、それは違かったのだ。

信吾の呼び掛けに集まった《反日向同盟》は、その場で信じられない事実を知らされたのだ。

彼らは全員呼び出されていたことは言うに及ばず、ピーチは心配をしていたのではなく、逆に《日向》に活動しやすいように図<sup>はか</sup>ってやっているというのだ。

冗談じゃない！

この時から、彼らの名前は《反日向・反教師同盟》になったのだ。全員はそこで話し合った。

いわゆる武闘派は誰もいないから、同じ土俵で闘えるわけがない。しかももう一方では教師が相手だから、進路妨害もされる可能性がある。そして彼らの被害に遭い、反感を持つようになる者は後を絶たないだろう。

このような時に、頼みのアキラはいない。

そこで決めたのだ。全員、取り敢えず目立たないようにしよう。表面上だけでも教師には従おう。しかし、後を絶たない反感を持つ者が泣き寝入りしないよう、彼らを受け入れる残された窓口になる為に、一人信吾は逆らい続けよう。

それは信吾が言い出したことだが、辛い選択だ。

「かすみちゃん、大丈夫？」

「大丈夫よ。あたしってこの通りでしょ。みんな油断するじゃない、一応は。あたしだからこそ、みんな安心して声をかけてくるでしょ。まさか過激な活動はしないと思ってるね。」

活動内容云々はいいとして、あたしが一番適任よ。腕だってそこあるしね」

信吾は口に手を当てて笑った。さすがに中学に進んで、彼は髪の毛を少年らしく切っていたが、仕草は相変わらず女らしかった。

「だから、窓口はかすみちゃんに任せて、オレは真面目に学級委員長なんかやってるわけよ。これでピーチの目は騙だませていると思うぜ」「けど、《日向四天王》はどうかしら？判はんないわよ」

「ってことは、ピーチだって嗅かぎ付けてるってことだぜ」

絵美と加賀見が言った。

加賀見は、まだ無邪気な頃の野口と友達だった。他人と違って大

人っぽく見える《日向》に入ったのも、野口がいたからだった。

誰よりも早く大人になったと見せ付けたい、子供の好奇心しか動機はなかった。

当時、《日向》に日向がいた頃は、彼らは日向の下できっちりと統制が取れていた。それは独特の集団で、それがまた格好良く見えたりもした。しかも、「一般人には決して手を出すな」と大声を上げる日向が、これがまた格好良く見えた。

そんな日向がいる間は、《日向四天王》の傍若無人ぶりは気にならないくらいのものだった。

初期の《日向》には、日向ファンクラブの趣が<sup>おもむき</sup>あった。ファンクラブ会員は、外見を不良っぽくする特権を得るだけで、いわゆる本業の縄張り争いに、ただの一度だって参加したりはしなかった。彼らはそうすることを望んではいなかった。そして加賀見もその中の一人だった。

中学に進学し、何もしないでも《日向》の一人として特権階級に属し、勝手気儘<sup>きまま</sup>に過ごしながら、加賀見は《日向四天王》の繰り広げる縄張り争いが、だんだん一般生徒にまで及んでいることに気が付いた。

それは以前からあったことなのだが、日向しか見ていなかった加賀見は、日向の見ていない所でこっそりやっていた《日向四天王》の行動に気付くわけがない。日向がいなくなり、《日向四天王》を止める者が誰もいなくなつて、初めて気になり出したのだ。

加賀見が《日向》を抜けたのは、そんな勝手な《日向四天王》が赦せなかったからではない。《日向四天王》と自分が同じだと思われたくないし、日向のいない《日向》など、いても何にもならないという、ただそれだけの考えだった。当然、深い考えなどはさっぱりなかった。



加賀見の失敗は、その考えを《日向》の下っ端にいる友達に、すっかり漏らしてしまったことだろう。それが原因で、今こうして対極に位置する《反日教》に加わっている。

すっかり漏らしてしまった本音に尾鰭<sup>おひれ</sup>が付いて、どのような噂になったのかは判らないが、それが《日向四天王》の耳に入り、突然呼び出されて袋叩きにされたのだ。

被害者になって初めて、加賀見は《日向》のしていることの意味を真剣に考えた。そして、信吾の所に來たのだ。

### 第3部：反日向・反教師同盟・6（後書き）

先行記事＆物語の世界観解説を連載している作者のブログです。是非おいで下さい。

<http://blogs.yahoo.co.jp/alfraia>

また、日本ブログ村とアルファポリスに参加しております。お手数ですがバナーの1クリックをお願いします。

### 第3部：反日向・反教師同盟：7（前書き）

本作品は、前作『約束された出会い』編の続編となります。先にそちらをお読みになられた方が、スムーズに作品世界観をご理解戴けることと思います。

<http://ncode.syosetu.com/n9537d/>

### 第3部：反日向・反教師同盟・7

「でも、日向って人間は面白くていい奴だったぜ。ただ、隠れてやってた《日向四天王》の悪いことを見抜けてなかったみたいだけど」  
「じゃ、それだけの人間だってことじゃない。あたしは嫌よ、そんな無責任。それで総長名乗ってんだから、とんだお笑い種よ。周りは大迷惑」

「またまたまたあ。いつつも加賀見くんとかすみちゃんと同じやり合いするんだから、もう」

絵美はからかうだけで、加賀見が日向という人間が好きだということなど、全然気にしていないようだった。カズヤにはそれが不思議に思えた。

「で、みんなはオレが、その《夏青葉》だって言うわけ？」

彼らの話が終わったところで、カズヤは訊いた。

「うちら中学生だけじゃなくって、高校生もいるんだけど、こうして茂木先生みたいな大人の理解者もいるわ」

「じゃ、全然問題ないじゃないか。大人がいるなら、今更わけの判らない《夏青葉》ってのを待たなくてもいいじゃんか。それこそ法的措置とか相談だってできるんじゃない？ 子供じゃ無理なことだってできるわけだし」

「それができていたら、こんな煮え切らない状態で待たないわ。アキラさんの言っていた《夏青葉》じゃないと駄目なのよ」

「だったら尚更、オレらみたいな中学生が相手にしたって無駄なことじゃないか」

「そう言わずに聞いて。《日向》は日向のことを好きな人間が集まっていたように、うちらもアキラさんが好きで集まっている面もあるの。でも、彼女は戻ってこない。それなのに、日向は三年の始業式から戻ってくるのよ。何とかしなきゃならないのよ」

絵美の言葉に、カズヤはアキラの言葉を思い出した。

『オレは、お前らを捜しに来たんだ。超能力を持った人間を捜しに……』

それが《夏青葉》のことなのだろうか。

そもそも予言者などという未来を予見する人間の存在など信じてはいないのだが、アキラは水鏡という女性に言われて来たと言っていたが、その水鏡がカズヤの転校をも予言し、アキラに捜させたのだろうか。だとしたら、自分ではなくアキラ自身を東京に呼び戻した方が、この問題を解決できそうではないだろうか。カズヤは考えた。

今、もし自分がアキラと同じ超能力を持っていると明かしたら、無条件に《夏青葉》と信じられ、一瞬のうちに《反日教》の盟主に奉りあげられてしまうだろう。しかしそうなる為には、アキラがこの五人に対して、自分が超能力を持っていると明かしている場合に限られる。だが、その確信はない。

つまり、そのことは黙っている方がいいということだ。

「信吾さんもさっき言ってたけど、オレも、アキラさんしか《夏青葉》が誰だって、判らないと思う」

聡が呟いた。

「だからカズヤさん、《夏青葉》になつて下さい。何だかんだ言つて、アキラさんか《春霧霞・夏青葉》がいないと、《反日教》は立ち上がれないんです。みんな、不安なんです」

聡は、要するに誰が《夏青葉》でも、真実になり得ると言っているのだ。それはさっき違和感を覚えた信吾の言っていたことを、そのまま受け入れることだ。

「そりゃあ不安だろうな。だって、相手は鍛えて場慣れした連中だろ。こっちは揃って素人らしいじゃないか。部外者のオレが見てもすぐ判る」

「ま、そういうこと。例外もいるけどな」

「でも、相手はアレだろ」

その例外とは、加賀見や信吾だろう。

しかし、たった一人や二人の例外で、場慣れした連中に真つ向勝<sup>こう</sup>負を挑むのは馬鹿だ。そういう意味ならカズヤだって場慣れしていない。これはルールなしの喧嘩だ。空手の試合とはまるで違う。

カズヤは考えた。

アキラだったらどうするだろう。

アキラなら立ち上がるだろう。どんな理由であれ、彼女は間違っ  
たことを嫌う性分だ。それに引き換え、自分は何を躊躇<sup>ためら</sup>っているの  
だろう。

盟主として責任を負うこと。それを避けて楽ばかりしていて、身  
体の弱いサキの陰に隠れていた、サキよりも弱い自分がここにいる。  
克服するチャンス。

しかし、躊躇いが邪魔をする。開きかけた口から声が出ない。

カズヤは心の中で、サキやアキラ、神森の仲間たちの顔を思い浮  
かべた。

自分のことを、鈍感だと言いながらも、それがカズヤの大らかで  
いいところだと言ってくれた、大切な仲間たち。

いつか神森に帰った時に、彼らに『成長したね』と笑ってもらい  
たい。

不良になるわけではない。正しいということを貫くだけだ。自分  
で考えて信念らしいものを貫くのは、全く初めての経験だ。

カズヤは口を開いた。

「解った。やってやろうじゃないか《反日教》の盟主。できるかど  
うかは判らないけど、オレでいいなら

胸の支えが下りたような気がし、カズヤは肩で大きく息をした。

五人は喜びの声を上げた。

奥で騒がしい六人に、茂木が差し入れを持ってきた時、信吾と彼が目くばせをしていたことは、誰も気付いていなかった。

### 第3部：反日向・反教師同盟・7（後書き）

次回から第4部：日向・《日向》を始めます。

先行記事＆物語の世界観解説を連載している作者のブログです。是非おいで下さい。

<http://blogs.yahoo.co.jp/alfraia>

また、日本ブログ村とアルファポリスに参加しております。お手数ですがバナーの1クリックをお願いします。



#### 第4部：日向・《日向》 - 1（前書き）

本作品は、前作『約束された出会い』編の続編となります。先にそちらをお読みになられた方が、スムーズに作品世界観をご理解戴けることと思います。

<http://ncode.syosetu.com/n9537d/>

## 第4部：日向・《日向》 - 1

### 4：日向・《日向》

《反日教》<sup>はんにちきょう</sup>幹部の五人は、かなり前から打ち合せをしていたのか、《夏青葉》<sup>なつあおば</sup>が誰だか判られない為に名前と顔は伏せておくよう、てきぱきとカズヤに指示を出した。これにはカズヤは異を唱えた。

「それじゃ、オレがわざわざ《夏青葉》になることないじゃんか」  
東京にいる以上、カズヤは方言を出さないように気を付けていた。年頃の見栄だし、いちいち聞き返されるのも億劫だ。<sup>おくく</sup>

「いいえ、そんなことないのよ。あなたじゃなきゃダメ」

『あなたしかいないの』的な言葉に舞い上がるほど、カズヤはおめでたくない。騙され<sup>たま</sup>ないぞとばかりに、カズヤは信吾をじつと見やったが、信吾は冷静に、そしてあの微笑みを浮かべて答えた。

「《反日教》は、いわば秘密結社よ。誰が入っているのか、お互いが判らないくらいの秘密主義で、全員の名前はあたしたち五人くらいしか完全には把握していないわ。」

だって、内申書が怖いでしょ、誰だって。いつ、誰の口から事実が漏れる<sup>も</sup>か判らないわけだし。だから隠しているの。それを利用しない手はないわ。

どうしても姿を見せなきゃならない時は、そうね、バイクのヘルメットでも被<sup>かぶ</sup>つて顔を隠してね。

考えてもみて。もし《夏青葉》がカズヤくんだってバレてごらんなさい。カズヤくんがやってけないわよ」

「オレは内申書なんて、引き受ける時から怖くないけど」

「そうじゃないわよ」

信吾は口を隠して笑った。

「じゃ、何かバレて困ることもあるのか？」

多分、《夏青葉》がカズヤだと知ったら、《反日教》の人間や《

日向》、ピーチたちの全てが入り乱れて、状況を把握しきつていないカズヤの所に集まってくるだろう。それくらいはカズヤにだって想像できる。でもそれで困るのはカズヤくらいだ。

「隠している方が、相手を攪乱かくらんできるでしょ。情報操作は重要な作戦よ。必要になるまで明かすつもりはないの」

信吾は顔に似合わないことを口にした。

「そ、そういうことは、かすみちゃんに任せなつて。始めのうちはオレらでお膳立てするし、気にすんなつて。

よし、今度こそ本気で行くぞ。《日向》を潰して、ピーチを辞めさせてやろうぜ！」

信吾の不気味な微笑みに気付かないのか、いかにも血気盛んな加賀見と梅津が、立ち上がった。

「駄目よ、もう少し待たなくちゃ。カズヤくんの足が治らないと」

「そうですよ。落ち着いて下さい」

「あ、そっか」

絵美と聡の落ち着いた一言に、二人の熱は取り敢えずは下がったようだった。

でも、誰も信吾の微笑みに含まれているものには、全然気付いていないようだった。カズヤはそれが、少し気になった。

結局カズヤの足から杖が取れ、取り敢えずは不自由なく動けるまでに治ったのは春休み明けで、再起を図る《反日教》の活動再開始は日向が帰って来る頃と重なることになってしまった。

受験生らしからぬ新学期のスタートを、包帯を巻いた足で迎えることになったカズヤだったが、もうこの頃には意志もすっかりしていて、地下活動に際して以前のような迷いはなく、どうしようかなどと作戦を自分なりに考えたりする毎日だった。

テルヒ、信吾、梅津、カズヤ……、ピーチに何らかの縁のある生

徒が揃ったクラスに、ピーチはしっかり担任に納まった。二年から三年に上がる時には、クラス替えをしないしきたりのある学校だったのだ。

ピーチの力が学校内でも強いことは、生徒たちの間では有名な話だった。

始業式が終わり、面白くもないホームルームをぼーっと聞きながら、カズヤは考えていた。

どのクラスにも転入生はいなかった。

「ほんとに戻って来んのか？」

「一応、そういう情報だけど」

「ま、このクラス編成からして、ピーチが何かしないわけがないかな。どうせこのクラスじゃないのか、日向が転入してくるの。便利ない括管理ってやつ」

「そういえばさ、日向って本名なの？」

「まあね。フルネームは須藤日向。多分出席番号後ろに来ると思うな」

カズヤは自分の後ろの空席を見た。

これが相手となる男の席になるのかと思うと、あまりに近すぎて緊張する。

暇に任せて梅津と手紙のやりとりをしていた時だ。

後の扉が音を立てて開いた。その音は、できる限り抑えようとしているようで、それでも騒々しく鳴ってしまったような、控えめな大きな音だった。

クラス中が一斉に振り向き、その顔色を変えた。

身長が百七十センチ位で平均的なのに、頭が小さく華奢な体型の所為で、かなり高く見える少年が、そこには申し訳なさそうに立っていた。

申し訳なさそうな仕草に「ごまかされているが、斑まだらに脱色した短めの髪の毛の下、瞳は、思わず反らせたくらい鋭い眼差し。髪の色以外、大して派手な服装ではなく、カズヤよりも細目のズボンを履いている少年。

これが日向に違いない。この鋭い眼差しは、『日向』を率いるだけのものだ、カズヤは一目見て直感した。

#### 第4部：日向・《日向》 - 1（後書き）

先行記事＆物語の世界観解説を連載している作者のブログです。是非おいで下さい。

<http://blogs.yahoo.co.jp/alfraia>

また、日本ブログ村とアルファポリスに参加しております。お手数ですがバナーの1クリックをお願いします。

#### 第4部：日向・《日向》 - 2（前書き）

本作品は、前作『約束された出会い』編の続編となります。先にそちらをお読みになられた方が、スムーズに作品世界観をご理解戴けることと思います。

<http://ncode.syosetu.com/n9537d/>

## 第4部：日向・《日向》 - 2

「遅れてすみません。寝坊しました！須藤日向ですどう ひなたす」

『こいつが敵の日向か』と思うよりも先に、カズヤは思わずプツと吹き出した。

よりによってピーチに向かって『寝坊した』とは、素直すぎるというよりはピーチを馬鹿にしているとしか思えない。現にピーチは苦虫を噛み潰したような顔で、日向に席に着くように示している。

すると今度は吹き出したカズヤに、クラス全員の視線が集まった。全員が日向を怖れている。

例外は信吾やテルくらいだろう。信吾に至っては、日向に対し馬鹿にしたような視線を遠慮なくぶつけている。

しかしカズヤには、加賀見が日向を憎めない気持ち解ったような気がした。彼の眼差しは鋭いけれど、『日向四天王』のような悪意はないように見えたのだ。

神森にいたままのお人好しのカズヤだったら見抜けなかっただろう。しかしピーチという根っからの悪人に初めて出会ったことで、寂しいことかもしれないが、カズヤは他人の目の色で、相手のことを量はかりつてしまう。その無意識の癖を、彼自身は自分がすれてしまった所せい為だと思っている。

「ったく、ふざけてるったらありやしない。あれが噂の日向、須藤日向よ。あいつの顔見るとジンマシンが出てくるわ」

「そりゃ、オーバーな」

「ちよつとね。でも、それくらいムカツクのよ。だって日向よ。」

ふん、あいつ、あんまり背が伸びてないんじゃない。彼、あたしよりも随分高かったのにさ、今日見たら、あたしよりも低いもの。裏で悪いクスリでもやってんじゃないの。ざまあみろよ。将来お先真まっ暗」



「まったく、かすみちゃんは日向が絡むと、もの凄くぶつとんだ想像するんだから、こつちがビビっちゃうよ」

「ほんと、ほんと」

茂木接骨院に集まった五人は、そんな信吾に慣れているのか笑って受け流しているが、カズヤは何となく笑えなかった。

信吾がたまに見せる不気味な微笑みが、この問題の奥に黒い真実が潜<sup>ひそ</sup>んでいると言っているような気がしてならなかった。

こういう不安を感じ取ることは、サキとだけの付き合いだったらなかっただろうが、アキラとサキがセットになって初めて、カズヤは感じ取るようになってしまっていた。

少しは鈍感ではなくなった証だろうが、あまり嬉しくはない。だからといってアキラに恨み節を言うこともないし、それにそこから深く考えるほどは成長していなかった。

茂木接骨院二階の《反日教》の溜り場には、受付から入る以外に、スタッフと言っても茂木本人が使う裏口から直接行く方法があった。それは《反日教》だったら誰でも知っている入口だった。

「カズヤさん、治療に行ってもらえますか？」

聡がこつそりと耳打ちをした。

「え、何で？」

何となく日向をつまみに盛り上がっている中で、カズヤは仲間外れにされたような気分で、少し不快な表情を見せた。

「この間も話したじゃないですか。《夏青葉》イコールカズヤさんだって、誰にも知られちゃ駄目だって。今日、日向本人が戻ってきたことで、《反日教》の人間がここに自然と集まるでしょう。だから治療室の方に行ってももらいたいんですよ。カズヤさんは、《日向》とも《反日教》とも無関係でいてもらわなくてはならないんですから」

「あ、そういうことか」

カズヤは治療室に一人で向かった。

カズヤは中立の立場を貫かなくてはならない。群れることよりも一匹狼を好む、クールな人間を演じなくてはならないのだ。

クールなど、カズヤとは縁遠いキャラクターだ。それでも『日向』や教師を欺く<sup>あざむ</sup>為には、『反日教』から欺かなくてはならない必要性は解っているから受け入れる。バカが付くほどお人好しなカズヤには、これ程の苦痛はないと言っても過言ではない。

欺く。

それは何もこっちの人間にだけではない。

アキラはどんな形にしろ、『日向四天王』や信吾に関わるなど伝言をくれたというのに、早速それを裏切っている。彼女が自分の為を思っただけのことくらい、カズヤはよく解っていた。だから自分がしていることを、アキラには言わない。勿論、サキたちにも言えない。アキラに伝わるのは必至だからだ。

転校してから三ヶ月、そんなこんなで誰とも連絡を取っていない状態だ。電話が来ても、すっかり出たりしたら、ついボロが出てきてしまっただろうから、居留守を使う。

サキ 身体さえ丈夫だったら、思慮深い彼こそが、アキラを支えると言われている『夏青葉』だったに違いない。同じ超能力を持つ者が該当するのだったら、文句なしに彼が適任だ。

そのサキは今、どうしているだろう。落ち着いているとはいえず、いつ死んでもおかしくない病を抱え、その恐怖に怯えながら生きているサキ。

「生き長らえるのと死んでしまふのと、どちらが幸せなのかな」と言ったサキ。部活や空手も、現状維持には役立つているものの、根本的な解決にはなっていないような気がする。それより、あの過去へ飛ばされた事件から、サキは部活すら苦痛になっていた様子だ

った。

神様は、オレとサキを間違えたんだ。

サキの、あの哀しいまでの冷静さを、カズヤは足に低周波治療を受けながら、暇に任せて思い浮べた。

#### 第4部：日向・《日向》 - 2（後書き）

先行記事＆物語の世界観解説を連載している作者のブログです。是非おいで下さい。

<http://blogs.yahoo.co.jp/alfraia>

また、日本ブログ村とアルファポリスに参加しております。お手数ですがバナーの1クリックをお願いします。

#### 第4部：日向・《日向》 - 3（前書き）

本作品は、前作『約束された出会い』編の続編となります。先にそちらをお読みになられた方が、スムーズに作品世界観をご理解戴けることと思います。

<http://ncode.syosetu.com/n9537d/>

それは遠い思い出だ。

「オレはきつと前世で悪いことをしたから、人間界の煩惱ぼんのうの中で、病気持ちのまま、親にまで疎うとまれて生き長らえてるんだよ、今」

「え？悪いことすると動物で、いいことすると人間に生まれ変わるのよ。何言ってるの」

未だアキラたちに出会う前の小学生の頃、道德の授業の後に、サキとコメチはこんな会話をしていた。

あの時のカズヤは、サキの気持ちがいまいち理解できず、コメチの気持ちの方が理解できていた。しかし、今ならサキのその気持ちが理解できるような気がする。

カズヤだけは知っていた。細い目に隠されたサキの黒い瞳は、実はいつも哀しみや苦しみで潤んでいたということを。その瞳の美しさを隠す為に、彼の瞼まぶたは糸のように細いのだ。

そうだ、サキが《夏青葉》だ！

カズヤは今、はつきりと確信した。

サキの超能力は念動と念話だけではない。あの細い目が一杯に開かれて広い世界を見据えた時、別の力が発揮される。あの事件はサキの力だ！

カズヤは思い出した。

あれは小学二年生くらい。カズヤが未だ自分の能力に気付いていかなかった頃の話だ。

今でこそ暖かくなってしまったが、あの頃の冬はとても冷え、川の水が硬く凍り付いて、スケートなどと言いながらよく遊んだものだ。真冬の間は誰も止めなかったが、親が止めるよりも早い時期か

ら、サキは危ないと言って止めていたものだ。そしてカズヤはそれを無視して、よく氷の上を歩いていった。

真冬も終わりに近付いていた頃、カズヤは例によって氷の上を歩いていた。

「カズヤ、止めるワ。そろそろ薄くなる頃だつちや。危ねえよワ」  
「大丈夫だつて」

あの日もサキに止められたのに歩いて、カズヤは滑って転んだ。暖かくなり始めた緩（ゆる）い一陽射しに氷は薄くなっていて、転んだ衝撃で氷は割れ、カズヤは川に落ちてしまったのだ。

カズヤは別に泳げなくはない。しかし冬の凍った川の水はとても冷たく、這い上がるうとして氷の縁を掴めば割れてしまい、陸に戻ることもできなかった。

それでも「救けて」と、カズヤは言うことができなかった。

もし、うつかりその一言を口にしてしまったら、サキは自分の病気のことも忘れて救けに来てしまう。それではサキが死んでしまう。あまりの寒さに藻掻きながらも、カズヤは這い上がろうと頑張りを続けた。

氷水で濡れた衣服はずつしりと重く纏わりつき、カズヤを水底に引きずり込もうとする。冷たさで身体は固くなり、藻掻く手足の動きも鈍くなる。子供心に死の恐怖を感じたものだ。

その間、サキは呆然と立ち尽くしていた。救けを大声で呼ぼうにも、辺りに民家はない。

氷の縁を割り進むように岸边を指すカズヤの限界が近付いているのが、サキの目にも明らかだった。

その時、サキは細い目を大きく見開いた。

それは見たことがないサキの顔だった。

瞬間、川の流れはカズヤを優しく包み込み、まるで温水プールのように変わった。氷は冷たなくなり、ただのプールサイドのタイルのようになり、割れた氷の縁は鏡のように硬くなり、その上をサキが

駆け寄ってきた。

「カズヤ！カズヤ！」

水の中のカズヤに差し伸べられたサキの手を握ると、不思議なことに疲れはたちまち癒され、陸に上がると服は何事もなかったかのように乾いていた。

振り返れば川は元通りになって、サキの目も細くなっていた。

あれは何故だ？今更疑問に思う。

そういえば、三才の時に見た十三才のサキも、目を大きく見開いて仮面の男を吹き飛ばしていたではないか。

別にサキは、自分が何をしたということには気付いていなかったし、カズヤはその後に自分の超能力に気付き、その時の出来事を自分の力の所為だと思つて心の整理をつけていて、今の今まで忘れていたのだ。何故、今思い出したのだろう。何故今まで忘れていたのだろう。

大事に大事に甘やかされて育つたカズヤは、ここに来て初めて怒りや憎しみという感情を知つた。そうして、ようやくサキの本当の姿を知つたような気がしていた。

今まで些細な感情に振り回されていたのはカズヤの方で、サキはあまり感情を見せていなかった。それは外見だけで判断すると、感情が豊かなのはカズヤで、サキは感情が乏しく見られる。

しかしサキの家庭環境を身近に知るカズヤから見ていると、サキは感情を表に出していないだけで、実際は彼の方がカズヤよりも感情が激しいはずだ。彼はそれをいつも理性で抑えているだけなのだ。あの優しさ、真面目さ故に抱くであろう怒りの数々を、愛する者に向けない為に必死に抑えている。だからいつも瞳を伏せているのだ。

サキこそ《夏青葉》だ。



カズヤはその事実を信吾には言えない。誰にも言えない。つまり今、カズヤは周りの人全員を欺あざむいている。そうすることが良いことだと信じ、《反日教》の集まりを無視して、彼は家路に着いた。

どうせ明日に報告はされるのだし、信吾がある程度シナリオを考えているだろうから、それに従うしか今はない。それより何よりも人を欺くことの辛さを処理するほうが、今の自分には重要なことだと、カズヤは考えていた。

#### 第4部：日向・《日向》 - 3（後書き）

先行記事＆物語の世界観解説を連載している作者のブログです。是非おいで下さい。

<http://blogs.yahoo.co.jp/alfraia>

また、日本ブログ村とアルファポリスに参加しております。お手数ですがバナーの1クリックをお願いします。

#### 第4部：日向・《日向》 - 4（前書き）

本作品は、前作『約束された出会い』編の続編となります。先にそちらをお読みになられた方が、スムーズに作品世界観をご理解戴けることと思います。

<http://ncode.syosetu.com/n9537d/>

「で、一体今の状態はどうなってるんだ？」

日向は学校の空き教室に《日向》本部を置いて、《日向四天王》や他のメンバーを集め、その中心に座っていた。

「先ずはこの地図をご覧下さい。既にこの印の付いている中学、高校が、我々の傘下さんかにあります。数にすれば百校を軽く超えています」

テルヒは広げた地図を前に、得意気に報告をした。

しかし日向はそのようなテルヒを無視し、欠伸あくびをしながらこう言った。

「なんだ。未だそんなもんか。オレがいない間に、お前らだったら、東京二十三区と隣の県のはじっこくらいは広げひろてると思ってただけどなあ。テルヒの力ならできるだろって思ってたんだけどさ」

一瞬紅潮させたテルヒの顔が、日向の最後の一言でさっと引いた。「すぐにでも、川の向こうは手に入れて見せましょう」

「ん」

日向はニヤツと笑った。

この場では日向の方が役者が一枚上手のようだ。テルヒのことを、単純で、適当に煽おだてておけば使える人間と思つて、チェスの駒くらいにしか考えていないかのようだった。

「うーん、そうだな、ちよつと待て。先ず手始めに、オレが戻ってきたと騒ぎ立ててみるよ。できるだけ大袈裟に。無駄な労力を使わないでも、ちよつと脅すだけで手に入るかもしれないぞ」

「そ、そんな……」

既に行動を起こそうと、扉の方に向かって歩き始めていた《日向四天王》は、拍子抜けしたような顔をした。

「お前たちも、余計な運動をしないでいいだろう。喧嘩に勝つこと

が傘下に治めることじゃない。本当の意味で従ってもらって、初めて我々の仲間となるんだ。

それに《日向》の名が悪い意味で使われるのは、あまり嬉しくないんだよ。だってオレの名前じゃん。結構この親が付けた名前気に入ってるし」

日向はいけしゃあしゃあと言った。それは暗に彼らのやり方での弊害を知っているぞと言っているようなものだ。

「あんたはその場にいないから、そんなことに拘<sup>こたわ</sup>るんだ。オレらの苦勞の少しくらい、考えて見てほしいよ」

川上が思わずばやいた。すると、日向は乱暴な音を立てて椅子から立ち上がった。

「川上、総長は誰だ？」

「……あんただよ」

「そのオレの命令だ」

「解ったよ……」

腕組みをしている日向の鋭い視線は、ふてぶてしい川上に反論を許さなかった。それだけ鬼気迫るものがあつた。

「まったく、なんだってんだ！ちつとくらいデキがいいからってイキがつてよ、あの軟弱者がつ！」

日向の前を辞し、目的地に向かう途中で、とうとう川上は八つ当たりを始めた。

「まあ、落ち着けよ、川上」

「お前は腹が立たないのかよ、野口は」

川上は、仲間の野口にまで喰<sup>く</sup>つてかかりそうな勢いだ。

「黙れ、川上。ちよつと煩<sup>わづ</sup>いわよ、あんた」

「テルヒまで」

川上は電柱を殴った。やり場のないこの苛<sup>いら</sup>立ちは、ここにぶつける以外なかった。

「今は大人しくすればいいんだよ。《日向》の名前を借りて、と

にかくうちらはシマを拡げるんだよ、うちの手でね」

テルヒは含み笑いをした。それだけで、他の三人は彼女が何を考えているのかを理解したようだ。

「そうね、湾岸の方にやって。隣の県に行くわよ」

テルヒは高校生の一人の、電飾ド派手な羽付きビッグスクーターの後ろに跨<sup>また</sup>がった。

「はい」

彼はテルヒに素直に従い、爆音を立てて走り出した。自分たちを打ち負かした《日向四天王》は、年下であろうと絶対だった。それがここの実力社会だ。

その実力社会の頂点にいる日向本人は、更に頂点を目指して《日向四天王》を使う。

「あああ、疲れんの」

誰もいなくなった教室で、頭脳でしか認めてもらえないのを嘆いているのか、日向は窓の外を見て、大きなため息をついた。

眼差し以外は、これといって他人を圧倒させるようなものを何も持っていないのに、何故か日向を誰もが怖れている。

この華奢<sup>かしゃ</sup>な少年を誰もが怖れるのは、彼こそが《日向》の中心で、《日向四天王》を使う人間だからだ。

もし《日向》が日向一人だったり《日向四天王》だけだったら、何処<sup>どこ</sup>の中学生も高校生も、《日向》などという新興の小学生グループに負かされることはなかっただろう。

この二年間、《日向四天王》は日向の部下であるという肩書きがあつて、初めてやってこられたのだ。

しかし、日向自身は縄張り争いの暴力沙汰には直接参加せず、《日向四天王》の参謀的な役割をしているだけで、軟弱者の烙印を捺されている。それなのに、日向は怖れられているのだ。

「オレってそんなにおっかないのかなあ。こんなカワイイ顔なのにさ。喧嘩だつてしないのに。ちゃんとケガさせない作戦考えてるの

にな

「まったく、どっかの誰かさんたちが暴れちゃうから、怖いイメージ  
ついちゃったじゃないか。」

「ま、全部自分が好きでやってんだけどさ」

日向は誰もいないのをいいことに、一人ごちた。

#### 第4部：日向・《日向》 - 4（後書き）

先行記事＆物語の世界観解説を連載している作者のブログです。是非おいで下さい。

<http://blogs.yahoo.co.jp/alfraia>

また、日本ブログ村とアルファポリスに参加しております。お手数ですがバナーの1クリックをお願いします。



#### 第4部：日向・《日向》 - 5（前書き）

本作品は、前作『約束された出会い』編の続編となります。先にそちらをお読みになられた方が、スムーズに作品世界観をご理解戴けることと思います。

<http://ncode.syosetu.com/n9537d/>

考えれば考えるほど、日向は謎の多い人間だった。人間性はある程度理解できても、彼の過去は謎のままだ。

近所の私立小学校の出身らしいが、素行が悪くて復学できないと専ら<sup>もっぱ</sup>の噂だ。その彼の自宅を知っている者はいないらしい。彼と連絡を取る手段は携帯電話だけで、それもあまり繋がらないと評判だ。この二年間も、親の転勤について行ったことは知られているが、何処<sup>どこ</sup>に行っていたのかは知られていない。

「よう、お前が最新の転入生か」

二日目、カズヤに日向はニコニコしながら話しかけてきた。

どう接したらよいのだろうか、カズヤは咄嗟<sup>とっさ</sup>に考えた。本当の、物事をはっきり言えない性格の自分だったら、愛想笑いをしてお茶を濁すのだが、そうもいかない。

「……その、ニューモデルの車みたいな言い方、何とかなんないかな」

わざと調子抜けをするようなことを言おうと思ったのだが、本気で調子が抜けるようなことを言ってしまった自分に、カズヤは少しその場で後悔をした。

ひやつ、ひやつ、ひやつ

確かに日向はこう笑ったのだ。

「ニューモデルの車か。確かにそんな感じだよな、いや、悪い悪い」  
ひやつひやつひやつ、は、当分止みそうもない。カズヤだけではなく、教室にいた全員が、口をポカンと開け、日向を見ていた。  
「で、何？」

カズヤは止みそうもない笑いにいい加減うんざりし、笑いを無視

して用件を訊いた。

「お、おう」

意外にも、日向の笑いはすぐに止まった。

「そう、そう、鈴木和哉くん、きみのことを、我が《日向》に、オレの側近として迎えたいと思ってさ」

「はあ？何故？」

さすがにカズヤは驚いて、すぐに断ることを忘れてしまった。それから次に、相手の考えていることを覗<sup>のぞ</sup>いてみようと思いが付いた。

あまりに突拍子もない話だ、何か彼にも思惑があるに違いないと、最近冴えてきたカズヤは思えるようになっていた。

「いや、単純にきみが気に入ったからだけなんだけどね」

日向の返事は、実にあっさりとしていた。

「きみの、例え気に入らないことでも、はっきりと言わずに遠回しにきつい言葉を使わずに意思表示をする、その長所が気に入ったんだよね」

カズヤは返事ができなかった。たった二日、それもただ同じ教室にいただけの関係の人間が、どうして親や長い付き合いの親友が指摘してきたカズヤの長所を、的確に言い抜いたのだろう。

それを短期間で見抜くだけの眼力を持った人間だからこそ、《日向》の総長としてやってこられたのだろうと考えたとしても、もし、本当にそれだけの人間だったら、どうして《日向四天王》などを侍<sup>はべ</sup>らせているのだろうかという、解決しそうな疑問が生じてくる。

カズヤは結局、その疑問が解決しないことには、日向を信用しないことにして、彼と接することに決めた。

かと言って、知りもしない人間を毛嫌いする態度を取るわけにはいかない。カズヤは《日向》とも《反日教》とも一線を画す立場でなくてはならないのだ。

そこでカズヤはニツコリと微笑みを作り、「褒めてくれてありが

とう。でも、オレはあんたの侍らせているクス四つと一緒に嫌だね」と言った。

「そりゃ、当然あいつらとは違う扱いをするって」

「でも、それって屁理屈じゃ……。口では何とでも言えるだろ」

カズヤは半分呆れていた。

「そりゃ、そうだなあ。でも、オレは益々きみが気に入っちゃったんだよね」。

オレさあ、オレに反対する者でも、ここまで穏やかに拒絶されたのは初めてだねえ」

日向は意に介することなく、依然ニコニコとしている。

自分のことを鈍感と呼んできた連中の気持ち、カズヤは少しだけ解るような気がして来た。

「あ、そう。気に入ってくれて、ありがと」

そう答えたものの、カズヤの頭の中は、ハテナマークで埋め尽くされていた。

正直、凡そ総長とは思えない間延びした口調に、どう対応したらいいのか戸惑う。

「ま、いつか。仕方ないよね」。本人にその気がまるでなさそうだし」

日向はカズヤの机に頬杖をつき、その目をしっかりと見据えて言った。

「後は、きみが《反日教》なぞに入らないことを願うだけだな、オレとしては」

日向はそう言って、カズヤの前から、その教室から去ろうとした。

その日向の背中に冷たい声が投げつけられた。

「ご心配なく！あんたに気に入られた人間を、自分たちの仲間にするほど、こっちは落ちぶれちゃいないわ。ただのクラスメイトで充分よ」

ずっと渋い顔をしていた信吾が、日向の背中に息巻いた。その姿

は、まるで怒った猫のようだ。

「それを聞いて安心したよ、かすみちゃん。オレらの間に、初めて中立の立場の人間ができたわけだ」

「ええ、そのようね」

日向の口調は軽い。それはきつと隠れ衰<sup>かくみの</sup>だ。騙<sup>だま</sup>されちゃいけない。

日向は振り返りもせず言い、信吾も日向に背を向けて言った。

#### 第4部：日向・《日向》 - 5（後書き）

先行記事＆物語の世界観解説を連載している作者のブログです。是非おいで下さい。

<http://blogs.yahoo.co.jp/alfraia>

また、日本ブログ村とアルファポリスに参加しております。お手数ですがバナーの1クリックをお願いします。

#### 第4部：日向・《日向》 - 6（前書き）

本作品は、前作『約束された出会い』編の続編となります。先にそちらをお読みになられた方が、スムーズに作品世界観をご理解戴けることと思います。

<http://ncode.syosetu.com/n9537d/>

しかし、いつもながらの信吾のタイミングの良さに、カズヤは感心してしまう。

さっすが信吾。ナイスタイミング。

チャンスを見逃すことなく、信吾はカズヤの位置付けを、公に示したのだ。これでカズヤが《反日教》の盟主だとは、誰も考えないだろう。

「ほら、フラれたんだから、さっさと指定席に帰んなさいよ。空き教室で一人でいじけてるのがお似合いよ、あんたは」

「言われなくても行きますよっと。ほんと、かすみちゃんはオレに冷たいんだから」

「あんたに優しくする余裕があったら、もっと他の先生に優しくするわよ。バカじゃないの」

長い間敵として関わって、常に相手のことを真剣に考えてきただけあって、二人の会話は絶妙な漫才だった。

きつと、お互いを知り尽くしているからできる言葉の投げかけ合いなのだろうが、敵同士じゃなかったら親友になれただろうにと、カズヤは心の中で苦笑した。

「あつ、そうそう。かすみちゃんも気付いてるだろ、《SIN》」  
「動き出したってんでしょ。そんなの知ってるわよ、バカにしないで」

「ってことでさ、手組もうよ」

「ご冗談。あんたらあつてのあたしよ。それが何であんたの為に手を組まなきゃなんないのよ。冗談も休み休み言いなさいよね、バカ。第一、あたしたちは《SIN》にとつて不都合な存在じゃないわ。彼らに不都合なものはあんたらでしょ、バカ」



「さつきからバカバカってヒドイなあ。

なあ、考えてみるよ。《SIN》は狡猾な連中だぞ。自分たちには関係ないって顔しながら、そうやって《反日教》を利用するつもりだって噂が聞こえてきたし」

「あんたバカの自覚ないの？ほんとにバカねえ。バカが他人の心配なんかしても始まらないわよ。大きなお世話。

それに、あたしらを利用してでも、あんたら《日向》を潰してくれるんだったら、それこそ願ったり叶ったりだわ」

「冷たいなあ」

「バカじゃないの、あんた。それでも総長なんですよ。利用されたり利用し返せばいいじゃない。弱気ねえ。

そんなんだから《日向四天王》なんかに利用されるのよ、バカ」

「きつついなあ、かすみちゃん。もう勘弁してくれよお」

これ以上言われたら、総長の面子が丸潰れになりかねないと思っ  
たか、日向は今度こそ教室を出ていった。次の国語の授業をさぼる  
つもりらしい。

その国語の授業は、できることならカズヤもさぼりたかった。

教科担任の中年女教師は、ことあるごとに「今までのことは水に流しますからね、成績悪い人はね、心改めて頑張りなさい」とか、

「煩い人は、内申下げますよ」「自分の成績と相談して、授業を聞きなさい」などの迷台詞を言い過ぎて、過去に生徒に殴られるという悲劇に見舞われ、今では担任には決してならせてもらえない、校内でも嫌われ者の教師だった。しかも問題の口癖は一つも直っていないのだからどうしようもない。

教室から出ては行かないものの、カズヤは授業に聞く耳を持たずに考え込んでいた。面従腹背というやつだ。

日向という男は、まったく不可解な人間だ。  
敵の存在を喜んでいるようなふしがある。

今の信吾との会話など、どう考えてもおかしい。

あの軽口<sup>まろぎ</sup>に紛れて信吾に重要と思える情報を流し、その反応を楽しんでいるようだ。

そして信吾もおかしい。

彼もあの会話を楽しんでいる風情<sup>ふうせい</sup>だった。

一体どうということなんだ？

考えても解るわけない。これは自分で考えずに信吾に直接訊く方がいい。

「な、さっき日向が言ってたこと、あれって信じられるの？」

信吾はカズヤの思いに気付いていない。

「あ、ああ、あれね。あいつって意外と正直なのよ、と言えればいいんだけど、あいつはバカだから、あの情報を流してあたしの反応を見て楽しんでるのよ。」

あれくらいの話はあたしでも知ってる。それをあいつは知ってるから、茶飲み話にしたのよ。あんな話、全然役に立ちやしないわ。

確かにあたしは知っている情報を抱えてるけど、あいつは知っている情報をやたらにばらまくの。そうやって、自分には余裕があるんだって誇示<sup>こし</sup>してんのよ。ったく、子供みたくで付き合ってるんじゃないわ」

国語の時間は、誰もが休み時間と同じに振る舞う。少し小声で話す分には、どんな会話をしているのか聞こえやしない。

「んで、《S I N》って何？」

カズヤはさっきの会話で初めて聞いた単語を口にした。

「ああ、《S I N<sup>シン</sup>》ね」

信吾はカズヤに言われて、初めてその存在のことを言い忘れていたことに気付いたようだ。

「この近所で集まってるバイク乗りのサークルよ。ただね、ちょっと厄介な相手に、何て言ったらいいのかしら……、暴走族ではない

んだけど、ただの走り屋さんでもない集団」

「何じゃ、そりゃ？」

「うう、そこは聞かないでおいで。ただね、リーダーのシンってのがリーダーなんだけど、リーダーのくせにサブリーダーのバイクに2ケツして走り回ってるのよ。じゃあ、乗るなよ、みたいな。わけ判らないでしょ。

しかも、シンは基本顔出しNGで、縄張り争いに巻き込まれて本気になってしまった時くらいしか、フルフェイスを取らないのよ。そんなセレブなら、走るなって感じてしょ。

で、どうも男らしいんだけど、顔隠してるから謎だし。いっつも黒尽くめのライジャケなんか着ちゃってさ、ほんと胡散臭うさんくさいったらありゃしない」

それをそのまま認めて相手してるあんたもおかしいよ……

その言葉は飲み込んで、「ほんとに変だなあ」と、カズヤは大袈裟に驚いてみせた。

#### 第4部：日向・《日向》 - 6（後書き）

先行記事＆物語の世界観解説を連載している作者のブログです。是非おいで下さい。

<http://blogs.yahoo.co.jp/alfraia>

また、日本ブログ村とアルファポリスに参加しております。お手数ですがバナーの1クリックをお願いします。

#### 第4部：日向・《日向》 - 7（前書き）

本作品は、前作『約束された出会い』編の続編となります。先にそちらをお読みになられた方が、スムーズに作品世界観をご理解戴けることと思います。

<http://ncode.syosetu.com/n9537d/>

信吾はカズヤの本心などお構いなしに、《S I N》の説明を続ける。

「でしょでしょ。しかもよ、サブリーダーの神宮司じんぐうしとか結成メンバーの殆どほとんどが、都内でも五本の指に入るくらいの進学校の生徒なのよ」「へーっ、よくやるなあ」「変でしょ」

信吾は教師に注意されたのを無視した。彼もかなりの不良生徒だ。

「おかしいのはそれだけじゃないわ。ほんとに何を考えてるのか判らないのよね。だってただのツーリング仲間よ。それがどうして地元不良の抗争に首を突っ込むのってね。」

しかも日向は頭で勝負で武闘派ではないからマシだけど、シンツてのは両刀なのよ。結成メンバーは頭いいし、シンもそれだけの人間を纏まとめてるくらいだから、相当できるはずよ。だから厄介なのよ」

この会話のノリは井戸端会議だ。

「得体が知れないと、信吾の手にも負えないよな、確かに」

「そうなのよ。目的がはっきりしてればいいんだけどね。」

だって彼ら、あたしたちみたいに教師受け悪くなかったから、エリートコースに乗ってるんでしょ。どうして今更わざわざ損するよなことをするのかしらね」

「日向、知ってたりして。だからさっき小出しにしたんじゃないか？」

いい加減信吾の井戸端会議調に疲れたカズヤは、話を逸そらせることにした。

「あら、そうかもね。カズヤくん、冴えてるじゃない。そうね、聞き出してみる価値はあるかも」

「あ、じゃ、オレが行くよ」

カズヤは今にも席を立ちそうな信吾を遮った。

「？」

「いやね、ちょっと彼と話をしてみたくなってさ。一応どんなヤツだかも知りたいし。」

あ、大丈夫。少しくらい日向寄りに演じてみるさ」

そう言って、カズヤは放課後に日向の使っている空き教室に行った。勿論、《日向四天王》がいないことを確認してから行動だ

「なあ、《SIN》ってエリート集団なんだって？」

「は、どうして？」

机に足を投げ出して寛いでいた日向は、突然やって来たカズヤの突拍子もない質問に、思わず滑った。

「いやあ、さつき日向が信吾と喋ってたサ。」

オレは何も知らないっけ、信吾に何だか訊いたんだ。でも、彼、教えてくれないんだよ。酷いと思わん？二人でオレを挟んで勝手に喋ってるんだ。気になるじゃん」

カズヤはきちんと台詞を考<sup>せりふ</sup>えてから来たのだ。取り巻きが必ずいるだろうから、そいつらにも中立をアピールしておかなくてはならないと思っただのだ。

「なあんだ。気分変えて仲間になってくれるとばっかり思っただのになあ。残念」

「いや、悪いんだけど、それはない」

カズヤは思わず本音を言った。

「解ってるよ。そんなところ言葉を変えるような人間だとは、きみのことは思っ<sup>て</sup>ないし。ただ、興味持っただけなんだろ。気にすんな」

日向は例の笑い声を立てた。

「ここだけの話、かすみちゃんは教えたくても教えられないんだよな」

あいつは知らないだけなんだもん。結構見栄っぱりだからなあ、

かすみちゃんは。彼は絶対に知らないとは言わないよ」

日向はブツと吹き出してから言った。

「じゃ、日向は知ってるのか？」

カズヤは心の中で「よっしゃ」と言った。

なんて思惑通りに会話が進むのだろう。こんな快感は味わったことがない。

が、すぐにその快感は折られてしまう。

「悪いなあ。実はオレも知らないんだな、これが」

日向は悪<sup>わる</sup>怖<sup>こわ</sup>れた様子もなく、あっけらかんと笑い飛ばした。

「だってさ、オレ総長だぜ。大体知ってたら、あんな得体の知れない《SIN》なんてのをのさばらせないってば。

ま、オレは正直だから、お互いの利益になるようなことは、中立のきみを通して流してあげよっかな。オレが気に入ったきみの顔を立ててっことでさ。

それにはできるだけ同じ条件で、正堂堂と決着付けたいんだよ、かすみちゃんとは。うん、多分今年で卒業だから、決着つけるはめになるだろうよ」

自分も正体を隠していることなど棚に置き、日向は笑って付け足した。「あ、勿論、四人がいない時だけな」

「だって、日向が総長なんだろ。ってことは、この中では誰にも遠慮しないでいいってことじゃん」

「まあね。でも、目的の為なら多少の妥協も必要だぜ、人間として生きてくんだったらな、この先。それが世渡りのコツ」

そうウインクをする日向を、カズヤは複雑な面持ちで見やった。

日向は本当に、カズヤのことを信じているのだろうか。

確かに信吾にとっては役に立たない情報を喋っているかもしれないが、それが真実ならば立派なお人好しだ。よくまあ、これで《日向》の総長をやってられるものだ。カズヤはそう思わないでもない。



自分の何らかの目的の為に作り上げた自分の組織の中でありながら、全くの個人と、団体の中の個人とで、その性格全て曲げなくてはならないのなら、それは一体何の為の組織なのだろうか。

そんなに自分を曲げてまで、日向は《日向》の総長でいたいのだろうか。

何が一体目的なのだろうか。

何れにせよ、寂しい人間だ。自分の為だけに生きているのだから。それが日向に対する、カズヤの評価だった。

#### 第4部：日向・《日向》・7（後書き）

次回から第5部：《SINN》を始めます。

先行記事＆物語の世界観解説を連載している作者のブログです。是非おいで下さい。

<http://blogs.yahoo.co.jp/alfraia>

また、日本ブログ村とアルファポリスに参加しております。お手数ですがバナーの1クリックをお願いします。

## 第5部：《SIN》- 1（前書き）

本作品は、前作『約束された出会い』編の続編となります。先にそちらをお読みになられた方が、スムーズに作品世界観をご理解戴けることと思います。

<http://ncode.syosetu.com/n9537d/>

## 第5部：《SIN》 - 1

5：《SIN》

夕方、都内某所の小さな公園に、大きなバイクが二十台程停められていた。

会社帰りのサラリーマンや、買物帰りの主婦たちはその公園にさしかかると、まるで逃げるように足を速める。

暴走族には関わりたくない

どの背中もそう言っていた。

そこに停められているバイクが殆どほとんど弄られていないノーマルタイプであるかなど、バイクを知らない人間にはどうでもいいのだ。そういうものが群れているだけで怖ろしい。

「つたく、《日向》も《反日教》も一体何してやがるんだか」

集団の何人かはヘルメットを被ったままだったが、殆どは脱いでいた。その中の一人が、バイクの鍵を抜きながら、忌々いまいまし気に言い吐いた。

「まあ、落ち着けよ、神宮。連中は動けないのさ。それともこっちからつつくか」

「いや、いいんだ。オレの悪い癖さ、せつかちは」

神宮 神宮司唯じんぐうしただかす一は、自分のバイクの後部座席に座ったままの人間に答えた。この黒尽くめの男は、ヘルメットを被ったままだった。

彼の名はシン。この集団《SIN》のリーダーだ。

《SIN》の中心人物は、今この場にいる約二十名。そして《SIN》に加わる人物は、この三倍近くいるのだが、その分布が《日向》と重なっている。《日向》的にはそれが面白くなく、勝手に《SIN》を敵対視しているわけだ。

重要なことだが、決して《SIN》は暴走族ではない。しかし当然売られた喧嘩はきっちり買う。そういうわけで、現在《日向》と対立しているのだ。

かといって、《反日教》とも手を組んではない。あくまで自分たちに売り付けられた喧嘩を買っているだけで、《日向》と《反日教》の争いに関わるつもりはないし、《反日教》の存在を邪魔と見るふしもある。

「日向が戻って来たらしいぜ。《日向四天王》のやつ、大きく触れ回って縄張り拡げてやがる」

「馬鹿な連中だよな。日向本人の後光に縋<sup>すが</sup>っちゃってさ」

「オレらは先公の言いなりになんかならねえって、格好つけてるだけで様になんねえし」

「ま、オレたちには関係ないことさ。縄張り拡げる必要ないし、こっちは」

「そうかあ？連中がでかくなれば、こっちに喧嘩売る規模がでかくなるじゃないか」

「そりゃ、困るわな」

そこにいる者たちは、各々勝手なことを言っている。<sup>おの</sup>

「連中にも事情があるんだろうよ」

言い出しつぺの神宮司が口を開いた。「自由になりたいだの、組織に逆らう反骨精神の塊になるだの、ああいった不良連中の青い台詞<sup>せりふ</sup>には笑っちゃうよな。組織を笠に着る教師連中の縮尺みたいなもんじゃねえか。」

ああいった族みたいのなんか、校則や法律なんかよりも、もっと厳しいルールがあるだろ。いや、ルールなんて生易しいもんじゃない。ありゃ、掟<sup>おきて</sup>ってやつだな」

「ま、その通り。経験者は語るだな」

そこにいる者たちは、勝手に喋<sup>しゃべ</sup>っていたが、シンその人は神宮司

に声をかけて以来一切口を開かずに、仲間が話す内容をただ聞いているだけだった。

「つーか、ここでこんなこと喋るなら、部屋に帰ってからにした方がいいんじゃないか」

「そうだな」

「つて、神宮から始めたんじゃないか」

「あつ、そうか」

《SIN》のメンバーは、ふざけながら自分のバイクにエンジンをかけた。

どれも普通のバイクだ。派手な改造車は一台もない。

そこが彼ら警察に取り締まられない理由の一つだ。ツーリングクラブ《SIN》は人数が多いただけで、決して暴走行為はしない。ただ走ることが好きなだけなのに、《日向》に勝手に喧嘩を売られた所<sup>せい</sup>為で、不良の縄張り争いに巻き込まれてしまっているだけなのだ。《SIN》にとってはいい迷惑だ。

「取り敢えず、部屋に戻ろうぜ。話はそれからだ」

シンもそう言つて、神宮司の後に跨<sup>また</sup>がった。

《SIN》の規則。それは交通法規を守ること。自分たちの正しさを主張する為には、決して綻びを追求されるようなことはしない。その一環で、交通法規の遵守<sup>しゅんしゆ</sup>があるのだ。千鳥走行でゆつくり走るこのクラブを、警察も簡単に取り締まれるわけがない。喧嘩を売られている現場に行つても、クラブを取り締まる理由にはならない。

「あ、シン、オレ、抜き打ちの物理のテストが明日あるんだけど、教えてくれないか。オレ、さぼつて解らないんだ」

「学生の本領は勉強、つっのが一般論だろ。好きで高校行つてんだし。ま、落ちないくらいにはしてやるけど」

「へへへっ、悪いねえ」

シンに言われて、一人の男子生徒は照れ笑いをした。

シンの口調に説教臭さは微塵<sup>みじん</sup>もなく、至極<sup>なご</sup>和やかな口調だった。

「んじゃ、あたしは神宮に訊く。明日、数学があたるんだよね」

「おう、オレが解る範囲な」

この調子だから、日向も信吾も《SIN》の目的が解らないと言うのだ。これでは家庭教師派遣センターではないか。《日向》に売られた喧嘩など、無視してしまえばそれきりなのに、どうして《日向》に売られた喧嘩は倍返したなどと、躍起<sup>やっつき</sup>になったりするのだろう。《日向四天王》もそこが理解できずにいた。

## 第5部：《SIN》- 1（後書き）

先行記事＆物語の世界観解説を連載している作者のブログです。是非おいで下さい。

<http://blogs.yahoo.co.jp/alfraia>

また、日本ブログ村とアルファポリスに参加しております。お手数ですがバナーの1クリックをお願いします。



## 第5部：《SIN》- 2（前書き）

本作品は、前作『約束された出会い』編の続編となります。先にそちらをお読みになられた方が、スムーズに作品世界観をご理解戴けることと思います。

<http://ncode.syosetu.com/n9537d/>

## 第5部：《SIN》 - 2

《SIN》の中心メンバーは、都内で十指に入る進学校の生徒、しかも成績優秀者ばかりが揃っていた。そういう学校のわりには、見た目は少々派手かもしれない。

しかしそういうことを許す緩い校風は、どちらかといえば進学校に多い。学校と言う立場上、進学率を上げることは重要かもしれないが、人として立派であることの条件に、容姿の如何は大して重要なことではないからだ。

これも《SIN》のメンバーにとって重要ではないが、中心メンバー以外は、世間一般から見たレベルで言うならば、然程レベルの高くない学校の生徒や専門学校生、働いている者が多い。《SIN》にとつて重要なことは、楽しく走れるかどうかしかない。

《日向》の人間は、大概成績のいい人間を毛嫌いするふしがある。彼らは勉強ができず、教師に相手にされないからグレた、というケースが多いのだ。

彼らは何か理想や思想に従って主張しようとしてそのスタイルをしているのではなく、見捨てられた自分自身の存在を主張する為に目立った格好をしている。

大人の意味を勘違いして、酒やタバコをやってみて、鬱屈された感情を吐き出しているだけにすぎない。

ただ、自分が見捨てられていないという確証が欲しくて。

そんな《日向》と外見がよく似ている《SIN》ではあるが、中身は違っている。決定的なところが違っている。

それは、彼らには向上心がある点、そして常に理性的である点だ。そこは重要なことだ。

彼らの学校の同級生たちは、妙な上流意識から、自分たち以外を

対等に扱おうとはしない傾向がある。しかし《SIN》のメンバーは、決してそういうことはない。それだからこそ、メンバーから慕われているのだ。

当然、彼らは学校においては異端児扱いされている。高校生がバイクに乗っていること自体が不良と見られる世の中、好きだからというだけで乗っていることは難しい。だから《SIN》のメンバーは、不良ではなくてもバイクに乗ることを認識させたいが為に、『やるべきことはやる。自分で責任取れないことはしない。校則を守る必要があるか否かは、自分で判断する』とモットーに、行動をしていた。

それはある日のことだった。いつものように集まったメンバーがツーリングに行った帰り、たまたま暴走族と警察との追いかけっこに出くわしてしまい、彼らと混同されて追われることになった。

「オレらは違うって言おうぜ、シン！」

メンバーの一人はそう叫んだ。

「オレに構わずお前らは戻れ。オレはこいつらを誘導する！」

「そんなバカな！捕まったらどうする？」

捕まったら、それこそ学校にいいように言われてしまう。

「オレは捕まらないよ。それに、オレは連中と話がしてみたいんだ！」

シンはそう叫ぶと、神宮司を促し、暴走族のバイクに並んだ。

「神宮、他に回ってくれ。オレ一人でこいつは何とかする」

シンは後部座席から、軽々と隣のビッグスクーターの後部に移り移った。

「き、貴様は？」

リーダー格の男は驚きはしたものの、それでハンドル操作を誤るようなことはなかった。

「シンだ」

シンは何やら言っているパトカーを振り返った。

「イライラするったらありやしない。点数挙げてねえんじゃねえの、中年ジジイは。」

ちよつと頭下げる。ハンドル貸せ！振り切ってやる！」

どうやって、と、問い返す間もなく、シンは下げた彼の頭の上からハンドルを握り、一跳びで運転手の前に降り、そしてそのバイクのステップに足を下ろした。

「しっかり掴<sup>つか</sup>まってろよ。このバイク、目立つからな、もう少し地味なのにしるよ」

と、シンはセンタースタンドをアスファルトに擦<sup>こす</sup>り付けて火花を散らしながらも急ハンドルを切り、今までとは逆に、今度はパトカーの群れの中に突っ込んで行っただ。

「おい！捕まりに行く気かよ！」

さすがに男は慌てたが、シンは見てるとばかりに何も言わずに突き進んだ。

車の集団は小回りが効かない。寸胴とはいえ、ビッグスクーターは車よりは小回りが効く。シンは見事なハンドルテクニックで、混乱するパトカーの間を縫い、更には狭い脇道に滑り込んだのだ。

男はそのテクニックに黙るしかなかった。しかも、このシンと名乗る男は、警察を振り切った後は、きつちり交通法規を守っているではないか。

黙る男のことなど気にせず、シンは爆音を轟<sup>とどろ</sup>かせる華美なバイクを操って、いつもの公園に辿<sup>たど</sup>り着いた。

既に何人ががいた。

「お節介<sup>おせいかい</sup>したな」

華奢な身体つきだが、実際よりもすつきり背が高く見えるシンは、ヘルメットを脱<sup>だ</sup>ごうとせずと言った。

「いや、礼を言う。救けられたんだからな」

男は言った。

「それにしても、すつげー、賑やかなバイクだなあ。耳、悪くなんねえの、あんたら。しかもふんぞり返って運転しにくいし、ロードウンスすぎでコーナリング悪いし」

シンは男のバイクを顎あごで示した。

「あれじゃ、捕まえて下さいって看板背負ってるようなもんじゃなか」

今の運転を見たところ、かなりバイクには乗り込んでいるようだが、その割に子供っぽい口調を覗のぞかせる不思議な男だと、暴走族のリーダーはシンについて感じた。

「で、あんたらは何処どこのグループの誰なんだい？」

問い掛けたリーダーに、シンを含む彼らの仲間たちは笑い声を上げた。

## 第5部：《SIN》- 2（後書き）

先行記事＆物語の世界観解説を連載している作者のブログです。是非おいで下さい。

<http://blogs.yahoo.co.jp/alfraia>

また、日本ブログ村とアルファポリスに参加しております。お手数ですがバナーの1クリックをお願いします。

## 第5部：《SIN》- 3（前書き）

本作品は、前作『約束された出会い』編の続編となります。先にそちらをお読みになられた方が、スムーズに作品世界観をご理解戴けることと思います。

<http://ncode.syosetu.com/n9537d/>

第5部：《SIN》 - 3

「リーダー、こいつら、ただのツーリング帰りだったって」

きょとんとしている自分たちのリーダーに、一人が耳打ちをしてきた。

「にしちゃ、妙に堅気かたき離れしてたっすけど」

「ま、こんなとこで立ち話もなんだしな、来いよ」

神宮司が一同を促した。

「そ、お茶と茶菓子くらいなら出せるぜ」

シンとその仲間たちが、住宅地の迷惑にならないようにバイクを手で押しながら移動するのに、暴走族は倣ならって続いた。

それにしても、変にこそばゆい招待だ。知り合いでもないのに救けたてくれたばかりか、まるで旧知の間柄のように接してくるシンとその仲間たちは、一体何なのだろう。

今まで誰からも、このような親密な扱いを受けたことがない彼らは、戸惑うばかりだ。

「ここに停めてくれ」

シンがバイクを置くよう指示したのは、小さな雑居ビルの駐車場だった。

「この三階が溜まり場。ま、小さな貸し事務所といえば聞こえがいいけどさ。まあ、ただの逃げ場だな」

笑いながら、シンたちは自分たちが救けた連中を案内した。

「どうぞ。まあ、寛いでくれや」

シンはそう言うと、初めてヘルメットを脱いだ。

「いやあ、職業柄、人前でメットが取れないんだよ。仕事がパアになリかねないって、バイクも取り上げられちゃったしよ」

「そうそう。これでバレたら、今度は何取られるんだ、シン」

仲間にからかわれて、シンは肩を竦すくめてみせた。肩凝りが持病の



ようだ。

「その制服、あの工業高のдар。あそこ、やたら煩<sup>わづ</sup>いって有名じゃん。平気なのか？」

暴走族のリーダー格の男の、革ジャンの下の学ランのボタンを見て、神宮司は言った。

「ああ、いいんだよ。どうせオレら、学校じゃ人間扱いされてねえもん。退学しようかと思って」

どうして初対面の人間に、ここまでべらべらと喋<sup>しゃべ</sup>ってしまうのか、男は少し首を傾<sup>かし</sup>げた。

「えーっ、もつたいねえじゃん。今は良かったって、後で後悔するぜ。不況で高卒くらいないと、仕事もないだろうしさ。」

どうしてもバイク乗りたいなら、やること最低限やってよ、それで誰にも学校の連中には文句言わせないようにしたらいいじゃん。

自分で責任取れる範囲内なら、所詮学校の中だけの規則なんだし、破<sup>やぶ</sup>ったって問題ないし。

大体、そんなんでいちやもん付けてくる教師なんて、理想あつて教職就いたヤツなんかじゃないって、どうせ」

シンが言った。

「それにしても、よくボタンでオレの高校判<sup>は</sup>つたなあ」

「え、だって、オレの高校、隣だぜ、一応」

神宮司がそう言いながら、ジューズの缶を開けた。

シンの仲間ではない者たちは、その耳を疑<sup>う</sup>った。

神宮司の言ったことが本当なら、彼の学校は都内でも三指に入る共学の進学校だ。そんな学校の人間が、バイクに跨<sup>また</sup>がって、髪を脱色してピアスを開けているなど、到底信じられない。

「ま、オレも人のこと言えないか。バイク禁止破<sup>やぶ</sup>ってるもんな」

ヘラヘラと神宮司が笑うと、「バイク禁止じゃねえ学校のやつ、誰かいたっけ」と、誰かが野次を入れた。

「いるわけねえって。あ、そうそう、大事なことを忘れてた。シン、オレ、明日小テストなんだ。あのクソジジイめ、満点取って見返してやらなきゃ、こっちの気が済まねえ。ちょっと教えてほしいんだけど」

「おいおい、オレは工業系は苦手だって言ってるんだろ。それに、ほら、彼らが啞然としちゃってるじゃないか。

ま、オレらはいつも、こんな感じで集まってるグループです。ツーリングに参加したければ、いつでもどうぞってな。ほら連絡先」

シンは笑いながら、《SIGN》と書かれた名刺を手渡した。

「あ、どうも……」

男はそれを受け取りながら、目の前に広がる光景に言葉をなくしていた。

学習塾か、ここは……

このようなグループは見たことない。外見的には世に言う不良が、彼らを馬鹿にする教師たちを見返す為に、必死になって勉強をしている。

自分たちの総元締めของกลุ่มはとても威圧的なグループで、ことは大違いだ。

さっきのシンの言葉にもいたく感動してしまったリーダーは、突然大声を上げた。

「ど、どうしたんです、リーダー？」

子分が過剰なまでに驚いて、リーダーの顔色を覗き込んだ。

「これだ、これだよ！そう思わねえか、お前！」

「と、言われても……」

そう言われた子分は、困惑を顔にした。

「何言ってるんだ。これがまっとうな反抗の仕方ってもんじゃねえか！」

すわ御乱心か、の騒ぎになりかねないほど、子分たちはリーダー

の変化に驚いていた。

「お前、さっきこの、ええと……シンってのが言ってたこと、尤<sup>もっと</sup>もだと思わなかったか、ええ？」

「え、まあ……」

「よし、決めたぞ。オレは《日向》を抜ける。お前らは勝手にしろ。別に強制はしないからな」

「そ、そんな！」

まさに「すわ御乱心かッ」と、仲間たちは立ち上がった。

## 第5部：《SIN》- 3（後書き）

先行記事＆物語の世界観解説を連載している作者のブログです。是非おいで下さい。

<http://blogs.yahoo.co.jp/alfraia>

また、日本ブログ村とアルファポリスに参加しております。お手数ですがバナーの1クリックをお願いします。

## 第5部：《SIN》 - 4（前書き）

本作品は、前作『約束された出会い』編の続編となります。先にそちらをお読みになられた方が、スムーズに作品世界観をご理解戴けることと思います。

<http://ncode.syosetu.com/n9537d/>

第5部：《SIN》 - 4

「リーダー、落ち着いて下さい」

「オレは落ち着いてるぞ」

部下は半べそでも、男は確かに落ち着いていた。でも現実問題はあるらしい。

「でも、リーダー、上納金は……」

「知るか、そんなの。第一、どうしてオレが自分の稼いだ金や、力ツアゲした金を、中学生連中に納めなきゃならねえんだ」

「でも、《日向四天王》は……」

「受けて立ってやるさ。オレも地元じゃ名前を鳴らした男だ」

「そういう問題じゃなくって……」

「どんな問題だって構わねえ！オレのバイクもノーマルに戻すぞ！いいか、お前ら、オレについて来いなんて言わねえからな、自由にしろよ」

「そんなあ」

既に信じられる道を見つけてしまった男に、救いを求めるような部下の声は届かない。

男はその日の翌日にはすぐに行動したらしい。再び《SIN》の前に現れた彼のバイクは、宣言通りにノーマルに戻っていた。

ただし、その時の彼の顔は痣あざだらけだった。

「どうしたんだよ、そのケガ？」

シンやその仲間たちは訊ねたが、男はそれについて詳しく語ろうとはしなかった。だが、それは今までのグループを抜ける時に加えられた制裁の傷だということは、誰の目にも明らかだ。

「それで、ケリはついたのか？」

「一応。迷惑かけないつもりで来たんだ」

シンの短い問いかけに、男はそう言い切ったのだが、現実にはそ

う上手くはいかない。

その男を巡って望みもしないのに、《日向》と直接対決は始まった。

男を慕って追いかけてきた部下もいる。

男が抜けたことで制裁を受け、恨んでいる部下もいる。

そうしてただのツーリングクラブだった《SIN》が、《日向》と対決する今の構図に至っている。

初めての直接対決は《SIN》の圧倒的勝利に終わった。未知数ではあるが、いわば素人集団の《SIN》を相手に、《日向四天王》が出てこなかったことが勝利の原因の一因であったことは確かだった。しかしそれくらいでシン本人が気を良くしたとは考えがたいだが、《SIN》の中の何人かは調子付き、「このまま、あの《日向》のムカツク野郎どもを吸収しまおうぜ」と言い出した。

そういった意味では、やはり《SIN》は素人集団だったのだろう。理想でものを語ってしまうところが、その理由だ。もし《SIN》に《日向》を吸収したくらいで彼らが不良を止めるのであれば、とくに彼らは健全になっている。それに気付かないところが、理想主義者の集団なのだ。しかしシンその人は、そういう甘い考えを持つ人間に批判的なことを言わない。と同時に、彼自身の本心も言わない。

決して表向きは《日向》を刺激しないでくせに、仲間が勝手に《日向》に喧嘩を売ってしまった尻拭い<sup>ぬぐ</sup>だったり、《日向》が勝手に売ってきた喧嘩の場合は、それでも文句を言わずに完膚<sup>かんぷ</sup>なきまでに叩きのめす強さは持っていた。それだから、不可解な集団に彼らは思われているのだ。

更に不思議なのは、確実に《SIN》は拡がりを見せていたことだ。

《日向》から《SIN》に移る者は後を絶たず、《SIN》に加

わらないまでも《日向》と対立関係にあるグループが、《SIN》の加勢をすることもしばしばだ。こうなると《日向》的には、邪魔な存在に見えてくる。徹底的に潰<sup>つぶ</sup>すべき相手に、《SIN》は育つてしまったのだ。

未だ小さいうちに、自分たちが出向いて潰しておけばよかったと、《日向四天王》は思っただろう。気が付けば自分たち《日向》と違い、同じ考えを持った人間が固い結束の下に集結している団体に、《SIN》はなっている。その信念に共感できない人間は参加していないから、サソリを送って内部から争わせることもできない。厄介なことに、頭ばかりか腕も立つ人間も揃<sup>そろ</sup>っている。これ程厄介なグループは、他の何処にも存在していなかった。

しかし、《SIN》を維持するのも楽なことではない。

特に始めからいるメンバーは、学校ではかなり圧力がかけられていた。ある意味学力のレベルの低い高校であれば、これくらいは当然のこととして教師も無視してくれるから、行動に足枷<sup>あしかけ</sup>がはめられることはないのだが、そうもいかない。

第一そういう教師に逆らう気持ちも込めて集まった仲間だ。これくらいの圧力に屈するわけにもいかないと、彼らは自分を鼓舞して乗り切っていた。

その中でシンただ一人、どういうわけか素性がはっきりしていない。職業上の都合とかで事務所の中でしか顔を出さないとところも不審だし、名前もシン以外は誰も知らない。しかしまあ、これだけ不審な人物に、これだけの人間がついていくもんだと不思議に思う。

年令不詳、職業不詳、学歴不詳、判っていることといえば、顔の造りが綺麗で、やたら学力のレベルが高いこと。身のこなしも軽く、一連の《日向》との抗争での確かな指示を出し、そして相手を確実に倒せるだけの腕もあるということだ。そしてヘルメットを殆<sup>ほとん</sup>ど人前で脱がない為か、酷い肩凝りに悩んでいることくらいだ。



「悪いなあ。本名明かさないで」

口癖のように謝るくせに、やっぱり本当のことを何一つ言おうとはしない。仲間内では、シンはきつと芸能人なのだろうということ、何となく片付けられていた。

そのシンは、この年末から四カ月もの間、仕事で長期出張ということで集まり出ていなかった。その所为が、その間の活動や抗争は下火になっていた。

実際、《日向》はシンがいない間に彼らを潰そうとはしたのだが、売られた喧嘩をかう以上《SIN》は深追いしてきてくれないので、《日向》は相手を潰しきれず、指を咥くわえてシンが帰ってくるのを心待ちにしていた。

シンさえいなければ、と当初は考えていたのだが、理想ある者たちはシンがいなかつと結束を乱すことはなかったのだ。始めは躍や起つきになって喉けしかけもしたが、無駄なことだとすぐに《日向四天王》は気が付いたのだ。

## 第5部：《SIN》 - 4（後書き）

先行記事＆物語の世界観解説を連載している作者のブログです。是非おいで下さい。

<http://blogs.yahoo.co.jp/alfraia>

また、日本ブログ村とアルファポリスに参加しております。お手数ですがバナーの1クリックをお願いします。

## 第5部：《SIN》- 5（前書き）

本作品は、前作『約束された出会い』編の続編となります。先にそちらをお読みになられた方が、スムーズに作品世界観をご理解戴けることと思います。

<http://ncode.syosetu.com/n9537d/>

カズヤは《SIN》を観察していた。

取り敢えず彼らの集結場所の公園から、溜り場になっている貸し事務所の一室まで、昼間のうちに瞬間移動能力を駆使し、隈無くまなぐ下見をしたのだが、面白そうなものは何もなかった。ただ手ぶらで帰るのも癪だからと、今後の為にも隠れられそうな場所くらいは見付けておいた。

そして夜を待つて、公園の木の梢に瞬間移動で行って耳を澄ませば、「抜き打ちの物理のテストが明日あるから、教えてくれないかさばってて解らないんだ」だ。

まるでギャクマンガのオチのような台詞に、思わずこっちも木から落ちるという、ギャグのリアクションをしてしまいそうになる。

こりや、信吾がわけ解らないって言うわけだ。

カズヤは一人で納得した。それにしても、不可解な連中だという予備知識は入っていたものの、やはり見た目とのギャップには驚きを禁じ得ない。

「シン、確かにオレらはお前のいない間は《日向》を無視してきたぜ。けどな、連中も元締めが帰ってきて、今はのりに乗ってる。日向本人は《日向四天王》と違ってキレ者だって評判だぜ。そんなんが本気でやってきたら、オレらはどうするつもりなんだ？」

「んー、あ、そこでF m Rを使うと……、悪いな、どうするかってことだろ」

中心メンバーの問いに、シンは答えた。

「今までと変わらないさ。売られた喧嘩は倍返し。それだけさ」  
「そうも言ってられないから訊いてんだよ。」

オレらだって大人になって、連中と関わってられないからって、

連中の組織をそのままにしておいていいのかってこと」

「オレらも大人になれば、連中だって大人だろ」

「良識のある連中か？ 対症療法じゃなくて、いつそ根治治療させたらどうかってこと」

至極和やかな雰<sup>なご</sup>囲気は、その一人の発言で緊張したものに変わった。

「具体的に、何かいい考えでもあるのか？」

シンはその一人に訊<sup>たず</sup>ねた。

「まあ、具体的にはあんたの方が機転がきくから、それを考えてもらおうと思って」

「それはいただけないな」

シンは冷たく言い放った。

「今まで防戦一方だったのは、オレらがあいつらを潰す理由がないからだ。気に入らないから潰すなんて、我儘な子供じゃあるまいし、そんなこと言ってられないだろ。それを潰そうっていうんだ。ああいう乱闘騒ぎは、殆ど犯罪ぎりぎりだからな、敢えて自分から責任が取りきれないような大きなことをしようってんだから、それなりの考えがないと、オレは賛成しかねるぜ。」

大体、ここにいる何人くらいが《日向》潰しに賛成だかも解らないし」

男はがっかりしたような顔をした。

「まあ、そうがっかりするなよ。オレだって感情のある人間なんだから、連中のことを不愉快に思ってるさ。」

だけど仮にもオレの名前で括<sup>く</sup>られてるグループだぜ。オレだってうっかり行動もできないわけよ。

だって、軽率な行動でみんなに迷惑がかかって、オレ一人の責任じゃなくなるんだぜ。逆に、オレ抜きでやってもいいけれど、例えばオレが反対だったとしたら、どうする？ 無関係なオレに不都合が生じないか？ そういうこともきちんと考えてほしいだけなんだよ、

オレは」

盗み聞きをしているカズヤは、そのシンの意見は尤もだと、妙に感心してしまっていた。

言い出しつぺの男は黙ってしまったが、他のメンバーの燻くすぶっていた思いは燃え出した。口々に『打倒《日向》』を叫びながら、シンがその気になるように説得していた。

シンは腕組みをして黙って聞いていた。隠れて見ていたカズヤには、彼がこっそり微笑んでいるように見えていた。

この男、こうなるのを待っていただけだ。みんな乗せられるだけだ。

これだけ頭が良さそうな人間の集団なのに、どうして策士シンの思惑に気付く人間が一人もないのか、カズヤは不思議に思わずにはいらなかった。

この手法は、さんざん去年目の当たりにしてきているカズヤには解るというものだ。

「そろそろ出揃ったな、みんなの意見」

シンは頃合を見計らって立ち上がった。

「みんながその気のようにだから、打倒《日向》ということで、これからは行動を明確にする。いいな！」

狭い事務所が、時の声で満ち満ちた。

これは厄介な集団だと、カズヤは確信した。《反日教》でもここまで固い結束で結ばれているか、それはこの先重要な課題だ。

「でも、こっちから表立って喉けしかけるような真似はしない。調度いい具合に、《反日教》ってのがいる。そこも日向本人が戻ってきたことで、あのオカマの霞 信吾ってのが勢い付いているという話だ。そこを喉けてやろうと思う。一番理想的なのは、連中が勝手に共倒れすることだ」

「《反日教》だったら、思うところが一緒だから、手を結んでもいいんじゃないのか？」

「ま、そうだけどな、オレは好きじゃないんだ、あいつらが。間違ってることをはっきりと言わずに、こそこそと言いなりになってるような連中だぜ。何時<sup>く</sup>挫けるか判りゃしないじゃねえか。

その点オレらは徹底しているだろ。主義主張をちゃんとしているし、足元<sup>すく</sup>掬われないように、それなりのこともしている。

もし手を結んでみる。おんぶに抱っこの世話係にさせられちまう。あっちにとっちゃそんな虫のいい話ないだろ」

「あ、そつか。さっすがシン」

諫言<sup>かんげん</sup>耳に痛いカズヤは、その言葉を深く胸に刻んだ。まさにその通りだ。

## 第5部：《SIN》- 5（後書き）

先行記事＆物語の世界観解説を連載している作者のブログです。是非おいで下さい。

<http://blogs.yahoo.co.jp/alfraia>

また、日本ブログ村とアルファポリスに参加しております。お手数ですがバナーの1クリックをお願いします。



## 第5部：《SIN》 - 6（前書き）

本作品は、前作『約束された出会い』編の続編となります。先にそちらをお読みになられた方が、スムーズに作品世界観をご理解戴けることと思います。

<http://ncode.syosetu.com/n9537d/>

まさかカズヤが盗み聞きしているなど思ってもいないシンは、話を続けている。

「そこでだ、まずは両方の力関係を見極める。そして分の悪い方に手を貸す。そこで互角になったら、連中が疲れてきた頃合見計らって、優勢な方に寝返る。

ここで忘れちゃいけないのが、オレらの目的は《日向》を潰すことだから、先に《反日教》に潰れちゃ困るわけだ。お互いが潰れないようにしながら、両方が疲れるのを待つ。そして最後の美味しいところだけを攫うというわけだ。どうだろう？」

「あんたの言うことは間違ってたことないんだ。今更とやかく言う気はないよ」

「面白そうじゃないか。表舞台は《日向》と《反日教》に任せて、実際に動かすのはオレらってことだろ。なんか影の支配者って感じでカッコイイじゃん」

「そうだよな。表に立ちすぎたら、《日向》が潰れた後、オレらただのツーリングクラブに戻れなくなっちゃうもんな」

「そうそう！」

これは特ネタだぜ。知らなきゃ騙されるところだったよ。

カズヤは芸能レポーターのような気分で、それ以上は《日向》絡みの話が出てこないのを見て取ると、すぐに信吾に知らせねばと、妙な使命感に駆られてその場を離れた。

カズヤは家に戻るとすぐ電話をかけた。かけた先は茂木接骨院の中の、《反日教》の回線だ。

「さすが神森出身は違うわ。木登りなんて、そう簡単にできないもの、東京じゃ」

電話越しに相当数のざわめきが聞こえるのは、《反日教》も集結している証拠だ。

「それ、ほんとに特ネタね。丁度いいわ」

「え？」

「こつちの話」

信吾が策を巡らしながら微笑んでいる姿が目には浮かぶ。

「んで、思ったんだけどやあ……」

「ちよつと待つて。その訛り、<sup>なま</sup>気を付けてくれるかしら。カズヤくんだってバレちゃう」

「あ、ああ」

何を言いだすかと思ったら、言葉遣いの指導だ。これには少々うんざりしながらも、必要なことではあるから反論はしない。

「ま、それは学校で少し残して、《反日教》では完全に使わない。それでいいだろ。で、さっきの続きだけど……」

カズヤは急いで続けた。うつかりばうつとしようものなら、信吾に話を取られてしまいかねない。東京人はせっかちとは聞いてはいたが、これには疲れる。

「《SIN》はきつと《日向》と《反日教》を睨けて対決させようとすると思うんだ。せっかくだから乗って、直接対決を一度したらどうかな。」

夏休みまでに勢力図を定着させとかなないと、中心メンバーの三年は受験だろ。聡に不安定な《反日教》を任せちゃ、可哀相だしさ」

「あああ、確かにその通りだわ。向こうもこつちが頑張ってるの気付いてるんだったら、尚更だわ。」

でもねえ、きつかけつてもんは必要でしょ。転がり込んでくるものでもないしねえ……」

信吾は、また誰かを犠牲にしないと駄目だと言っている。しかし、カズヤは絶対嫌だった。きつとすぐ隣に誰かいるのだろう。信吾は直接的表現を避けている。

「ちよつと《日向四天王》と目を合わせるだけでいいんだけど……」  
「何が『だけ』だ。殴る蹴るのオマケ付きだろが」

「カズヤくんが直接対決の案を出したのよ。」

「じゃあ訊<sup>き</sup>けど、どうしたらきつかけつくれるのよ」

この意見に反論できるだけのものを、カズヤは持ち合わせていない。

「じゃ、こうしよう。始まったらオレがすぐに止めに入る。オレの立場は『中立』ってことではつきりしてんだからいいだろ。それにまさか連中だつて、《反日教》がきつかけを作る為にわざと目を合わせてきたなんて、思っわけがないし、油断してるだろうしさ。」

でも《反日教》の人間がやられかけたんだから、信吾は仕返しを考えて当然だ。ということで、オレとは全く関係ないところで始まるわけだ、直接対決は」

要は因縁をつけている場に居合わせさえすれば、暴力沙汰は避けられる可能性があるというわけだ。

ただ、相手がいきなり暴力行為に走った場合は致し方ない。

しかしカズヤの思惑など、信吾にとってはどうでもいいことなのだ。

「前座はそれでいいわね。問題はその後。《夏青葉》のお披露目と初采配。どうする？ シンはヘルメットだし、包帯でも巻く？」

「おいおい」

「冗談よ。そうねえ、髪の毛は脱色してくれる。で、髪は結んでね、それからストッキングを被る」

「……お兄さん、酔っ払ってます？」

「いやあだ、冗談に決まってるじゃない。ストッキング被ったら、ただの銀行強盗になっちゃうわよ。」

とにかく、カズヤくんはその目が印象的すぎるのよ、アキラちゃんみたいだね。それさえ隠してくればいいわよ」

信吾は何となくその名を口にした。

その名を聞いたカズヤの胸は少し痛む。アキラは、自分をこの争いに巻き込ませたくなくて、サキに忠告を託した<sup>たく</sup>というのに、今、《夏青葉》を勝手に騙<sup>かた</sup>って、渦の中心にいるのだ。

「今ね、隣の部屋にメンバーが揃ってんだけどね、ついだから声でお披露目しようと思うんだけど。今の作戦をそのまま伝えてくれればいいわ。電話のスピーカ機能を使えば簡単なことだし」

「ちよつと待てよ」と言う暇もなく、信吾は電話口を塞ぐことなく「みんな、聞いて！アキラちゃんの右腕、《夏青葉》から作戦があるわ！」と大声を上げていた。すると、その場は急に静まり返った。

## 第5部：《SIN》 - 6（後書き）

先行記事＆物語の世界観解説を連載している作者のブログです。是非おいで下さい。

<http://blogs.yahoo.co.jp/alfraia>

また、日本ブログ村とアルファポリスに参加しております。お手数ですがバナーの1クリックをお願いします。

## 第5部：《SIN》- 7（前書き）

本作品は、前作『約束された出会い』編の続編となります。先にそちらをお読みになられた方が、スムーズに作品世界観をご理解戴けることと思います。

<http://ncode.syosetu.com/n9537d/>

全く心の準備ができていないカズヤは、何から言いだせばいいのか皆目見当がつかずに戸惑う。大体《夏青葉》からの作戦指示だと突然言われ、彼らは信じるのだろうか。

それはカズヤの取り越し苦労だ。アキラの左腕《春霧霞》の信吾がそう言うのだから、誰も《夏青葉》の言葉であるということに疑いを持つ者はいないのだ。

「あ……、今、かすみちゃんから紹介があつた、《夏青葉》だ」  
カズヤが戸惑った分だけ沈黙が生まれ、彼はそれを自分で破って話し始めなければならなかった。

自分の力でその沈黙を破ってみる。

「アキラの右腕ということで、彼女の指示でここへ来た。《春霧霞》から話は聞いている。そこで作戦を、とのことなので、考えた」  
とにかく話し始めてしまえば、どうにでもなるものだ。そうカズヤは気が付いた。

「先ず断っておくが、こちらの本名は伏せさせてもらう。  
本名を知られると、《日向》と戦う上で不利になることが必至だからだ。顔の露出も最低限に控えさせてもらいたい。

今現在こちらの仕事は、この《反日向・反教師同盟》が動きやすくする為の情報収集。ここで顔や名前がバレたら情報が得られなくなる可能性がある。決着が着いたら名乗るから、どうか、それまではこちらのことを信じてもらいたい」

電話越しに、少しざわめきが聞こえたが、すぐに収まった。

こうなることは、カズヤですら予測済みだ。むしろこの程度のざわめきで済んだ方が驚きだ。でもそこで動じているわけにもいかな



い。

カズヤは、今後の抗争のきっかけを作る為にも、いわゆる犠牲者が必要なことを伝えた。

本当のカズヤは、これは自分の本心ではないのだが、ここは《夏青葉》として堪えて信吾の意見だとは言わなかった。

「多少、痛い目を見るかもしれないが、《春霧霞》が必ず救けてくれる。そうだな、かすみちゃん」

「ええ、それは勿論。」

やってくれるのは、そうねえ、できれば、あたしたちとの関わりが思いつかないくらい意外性のある男子がいいんだけど……」

信吾はカズヤの意図にすぐに気付いたようだ。

《反日教》内部においても、カズヤが彼らと無関係であることを位置付けようと、カズヤは敢えて信吾が救けると言っただのだ。もし《反日教》の人間ならば、信吾以外の人間が救けるとは思わず、カズヤが間に入ったら、そういう予定を知らない《反日教》ではない人間だと思い込む、そういう計算だ。

当然なかなか立候補は上がらない。

これも予想の範疇だ。

カズヤは先の作戦を言うことにした。いわばエサ代わりだ

「実はその一件をきっかけに、我々は《日向》を夕刻に待ち伏せする。しかし正面から挑むのは腕に少しは自信のある者五人くらいだけだ」

それ以外はいらないとばかりの《夏青葉》の言葉に、憤慨ふんがいの声が届いてくる。

それこそカズヤの聞きたかった声だ。自分たちのことだと思えないような連中ばかりなら、何をやっても意味がない。

「勿論、その腕に覚えのある人間だけで終わるわけがない。後の三十人くらいは、予め公園の陰にでも潜ひそんでいて、機を見て対決に参加してもらうつもりだ。」

……」

実はその場には、必ず《SIN》が来ることになっているのだが

カズヤは自分の舌が滑らかに動くことに、我ながら驚いていた。

「今日、《SIN》の溜り場を覗いてみたところ、大変有力な情報を聞くことができた。

実は彼らも打倒《日向》を掲げ、行動を始める準備に入っている。ただし、知っての通り彼らは大義名分がないと行動を始めない。

そこで我々と《日向》を争わせて、自分たちだけ美味しいところをさらうつもりらしい。彼らは……」

カズヤはさつき《SIN》の事務所で聞いてきた話を、電話越しに伝えた。

「そこでだ、こっちは少人数で無謀にも挑んで、《日向》に負けているふりをする。そうすれば《SIN》は加勢してくれるだろう。

でも、《SIN》のやつらはこちらと《日向》が共倒れしてくれることを望んでいることを忘れてはいけない。

だから《SIN》が途中で寝返るまで、《日向》との対決は《SIN》に任せるつもりで余力を残しておくんだ。ここまでは腕に覚えのある五人に、大変だけど頑張ってもらいたい。

そしてやつらが寝返ったら、その時に本気を出して《日向》をやる。

寝返った《SIN》など相手にする必要はない。所詮はツーリングクラブ、オレらの争いに首を突っ込んでいるだけの連中なんだから、放っておけばいい。連中も馬鹿じゃないから、こっちの思惑くらい気付くだろう。

控えグループは、《SIN》の寝返りと同時に対決に参加してもらう。そのタイミングの指揮はオレが取るから、安心してもらって構わない」

電話の向こうの声は、喜んでいる。

この策が正しいかどうかなどはどうでもよくて、ほし綻びがあるうと

なかつと具体的にあればあるだけ信じてくる。

カズヤは誰に教えられたわけでもなく、その群集心理を知っている。

「こちらの格好は、黒っぽい服にサングラスとい、とにかく胡散臭うさんくさい外見だから、きつと判ると思う。

まあ一度で《日向》とかたがつくとは思わないが、自分たちのレベルを知る上で、重要な直接対決になるだろう。

かすみちゃん、人選はそっちでやってくれ。じゃ、こっちはこれで」

「はいはい、じゃ、そっちもよろしくね」

信吾は電話を切った。正確には切ったふりをした。

切ろうとしたら、保留の音楽が聞こえてきて、カズヤはそれが気になって待つことにしたのだ。

## 第5部：《SIN》 - 7（後書き）

次回から第6部：第一ラウンド）を始めます。

先行記事＆物語の世界観解説を連載している作者のブログです。是非おいで下さい。

<http://blogs.yahoo.co.jp/alfraia>

また、日本ブログ村とアルファポリスに参加しております。お手数ですがバナーの1クリックをお願いします。

## 第6部：第二ラウンド・1（前書き）

本作品は、前作『約束された出会い』編の続編となります。先にそちらをお読みになられた方が、スムーズに作品世界観をご理解戴けることと思います。

<http://ncode.syosetu.com/n9537d/>

## 第6部：第一ラウンド - 1

### 6・第一ラウンド

「カズヤくん、今からそちらにお伺いしてもいいかしら？」

電話越しの保留音楽は一分程で解除され、小声で信吾が訊ねてきた。  
「え、いいけど……」

カズヤはちらりとドアの向こうを見た。両親がダイニングキッチンで寛いでいる。

「じゃあ、カズヤくんの部屋の窓を開けてもらえ。あたし、すぐにこつちを片付けて、そこからお邪魔させてもらうから」

「はあっ？」

その言葉の意味することは、また不可解な能力の存在だ。

「どうしたの、カズヤ？」

大声に驚いた両親が、カズヤの顔を覗き込んだが、説明できるわけがない。

「あ、ごめん。何でもない」

カズヤは慌てて謝ったが、電話の向こうの信吾は、こちらの状況などまるで意に介した様子はない。

「あら、ご両親がいるのね。ごめんなさいねえ。とにかく、すぐ行くわ。待っててね」

彼はカズヤがそのことを訊く前に、さっさと受話器を置いてしまっていた。

カズヤの家は、マンションの四階だ。普通なら玄関からしか入ることはできない。

しかし超常の力があるのなら、窓を開けておく必要は全くないはずなのだが……。

とはいえ、まさか壁をよじ登って来るとは思えない。

それでも開けた窓の外をぼんやり見ながら、カズヤは首を傾げた。<sup>かし</sup>茂木接骨院はここから二キロくらいの所にある。超常の力があるのなら、距離に関係なく、一瞬にしてここにあらわれるはずなのだが、彼はなかなか現われない。例の嫌なやられ役の人選をしているのだったら、すぐ行くなどとは言わないはずだ。

と、黒い何かが屋根伝いにやって来るではないか。その速さは尋常ではなく、真直ぐこちらを目掛けて突っ込んできた。

「はあい、遅くなっちゃった」

信吾は窓の棧<sup>さん</sup>の上に立っていた。涼しげな顔をしながら、髪の毛を掻き上げている。

「腰を抜かさないところを見ると、こういうのに慣れている証拠ね」  
現れた信吾はころころと笑った。

「これがあたしの能力。普通の人間にはできないことよね、一応。でね、カズヤくんが《夏青葉》だったら、アキラちゃん的能力に準ずる何かを持つてると思うの。それを教えてくれるかしら。あたしも教えたことだしね」

どういう交換条件だと思わなくもなかったが、信吾のそういう言い回しなのだと思って、カズヤはその辺は無視をした。

「ってことは、アキラの超常の力ことは知ってたんだな」

「あら、アキラちゃん、自分から自分の能力のことを話したの？意外だね。それだけで《夏青葉》確定みたいなものよ。それに、アキラちゃんから話を聞いていなければ、超常の力なんて言い回しはないものね」

信吾はいちいち細かいところに気が付く人間だ。カズヤはそれには感心もするし、疲れもする。

それはそうと、カズヤから見たところ、信吾の運動神経は明らか

に人間のそれを超えている。ということは、自分の超常の力も隠す必要はないということだ。少なくとも、気味悪がられることはないはずだ。

「じゃ、好きな所に連れてってやるよ」

取り敢えずは本当の《夏青葉》であろ<sup>う</sup>サキのことだけ言わなければいいのだ。

自分のことを《夏青葉》であることを信じている信吾にとっては、何かしらの能力があることが前提とな<sup>っ</sup>ているよう<sup>だ</sup>。

今大事なことは、サキだけこのごたごたから守ればいい。

うっかりサキという能力者の存在を知られ<sup>て</sup>もしたら、彼の触手が伸びることは明白だ。

「そうねえ、《SIN》の溜り場の公園の木の梢<sup>しずえ</sup>なんてどう？」

「いいね。じゃ、行くか」

と、カズヤは信吾の腕をいきなり掴<sup>つか</sup>み、そして瞬間移動をした。

「こ、これは……！」

「しっ、人に聞こえる。とにかく戻るぞ」

少し取り乱した信吾を押し止め、カズヤはすぐに自分の部屋に戻<sup>も</sup>った。

見せればいいだけ<sup>だ</sup>つたら、長居は無用だ。

「カズヤくん、あれは！」

「アキラもできる<sup>っ</sup>てんだろ。アキラは何でもできるらしいけど、オレはあれくらいしかできないんだ。それに、捜せばあれくらいで<sup>き</sup>る人は他にもいる<sup>っ</sup>て、アキラは言<sup>つ</sup>てたぜ」

「ふーん、だから《夏青葉》が右腕<sup>うで</sup>なのね……」

信吾は独り言のように呟<sup>つぶや</sup>いた。

「だからって、能力なんて人それぞれ<sup>だ</sup>ろ。ど<sup>れ</sup>が優れてる<sup>ん</sup>てない<sup>っ</sup>て、アキラは言<sup>つ</sup>てた<sup>け</sup>ど。

それに、オレはそんなにすくなくないから、気を付けてないと、失



敗しちゃいそうな気がするし」

「いいわよ、そんな失敗なんて。ほんととはもっと別のこと相談したくて来たの」

信吾はすぐに、気持ちの切り替えをしたようだった。

「え、何？」

「もう一つの敵、ピーチのことよ」

「ああ、すっかり忘れてたよワ」

カズヤは思わず大きな声を出し、信吾はその唇を抑えた。

一応この部屋に客はいないことになっているのだ。

## 第6部：第二ラウンド・1（後書き）

先行記事＆物語の世界観解説を連載している作者のブログです。是非おいで下さい。

<http://blogs.yahoo.co.jp/alfraia>

また、日本ブログ村とアルファポリスに参加しております。お手数ですがバナーの1クリックをお願いします。

## 第6部：第一ラウンド・2（前書き）

本作品は、前作『約束された出会い』編の続編となります。先にそちらをお読みになられた方が、スムーズに作品世界観をご理解戴けることと思います。

<http://ncode.syosetu.com/n9537d/>

## 第6部：第一ラウンド・2

素人集団の《反日教》は大変だ。好き放題の《日向》と手を汚そうとしない《SIN》と敵が二つもいて、余裕など微塵みじんもない。

「実はね、折り入って頼みがあるのよ。みんなには内緒でね。本当は一人でやりたいんだけど、ちょっとあたしの力が及ばない部分があつてね」

「？」

カズヤは首を傾げた。

「今更かもしれないけど、ピーチと《日向四天王》、暴力団関係とつるんでるんだけどね、その尻尾を掴みたいの」

あつさり言うけど、これは衝撃の告白だ。カズヤは目を丸くしたが、信吾のことだ、何か思惑があるはずだ。

「ピーチ一人辞めさせて済む話じゃないってことだな。

でもさ、だったら《反日教》なんていらないじゃん。そのスジだけ攻めればいいだろ」

「いやあね、カズヤくん。そこツッコミどころじゃないわよ。それをやったらあたしたちの鬱憤うつげんはどうするのよ」

「ま、そりゃ一理あるわな」

「あれは学校の体質を告発する為にやってるの。でも、今回のあたしの話は私怨よ」

笑っているが、『私怨』とは穏やかではない。

「あたしは生徒も救いたいの。

だって、校長までもが黙認してんのよ、ピーチのこと。きっと生徒が告発したつてだけの話だったら、学校的にはピーチ一人を捨て駒にして、はいお終い。で、その後も同じことの繰り返し。ピーチの代わりになる教師が現れて、生徒が教師を辞めさせるなんて生意気な真似をしないよう締め付けるだけよ」

信吾の口調は本心が見えにくい。でも疑ってかかるカズヤには見えてしまう部分がある。

「信吾、お前、《反日教》も捨て駒にするのか？ピーチを辞めさせても無駄なら、今やってることも無駄になりかねないじゃんか」

「ほんとカズヤくんって、真面目で嫌になるわ。アキラちゃんなら何も言わないのに」

「アキラはそういう意味だったら、どちらかと言えば信吾と似てるからな。人間嫌いを公言してたし」

「あら、そっちでも言ったの」

信吾はくつくつと笑った。

「心配無用よ。あたし、そこまで悪人じゃない。《反日教》を捨て駒にするつもりはないわ。あたしが一人でピーチを検挙してご覧なさい。《反日教》は欲求不満になるわよ、間違いなく。だって罪状は暴行ではないもの。」

あたしは《反日教》も大事。けど《反日教》だけでは片手落ちになっちゃうの」

「で、ピーチたちは何をしてるのさ？」

カズヤは声<sup>こゑ</sup>を顰めた。本当に悪いことだったら、誰かに聞かれでもしたら困る。

「一回ねえ、現場を押さえかけたんだけど、男だってバレちゃって……」

「はあ、それとこれとどういう関係が……？」

信吾はれっきとした男だ。ばれるとは今更だろう。それに質問の答になっていない。

「いやあね、あたし、高級料亭の芸者に化けて張ってたのよ」

信吾はさらつと言つてのけた。

あまりの告白にカズヤは耳を疑う。

世の中、こうも簡単に変装して潜入などできるものなのか？

「でもね、これが失敗しちゃってねえ。」

ああいう男がこっそり使うような店だから、裏の看板があるわけよ。その店、高級ついでに風俗営業もしててね、それで男だつてバシちゃったのよ。ピーチったらえげつないったらないでしょ。

幸い、その時手籠めにした芸者があたしだとは気付かれてないけどね」

カズヤだつて、中学三年にもなれば、信吾の言っていることを想像できる年齢にはなっている。しかし想像したこともないし、したくもない。

信吾は笑つて言つてはいるが、口調には憎しみが充ち充ちていた。その見慣れない怖ろしい空気に、思わずカズヤは後ろに下がりたくなつたが、そこは踏み止まつて言つた。

「信吾、そつちこそオレのが向いてるんじゃないか。オレだったら瞬間で逃げられるし」

「甘い甘い。ぶん殴つて済む話じゃないんだから。」

ああいう連中は面の皮が厚いから、録音テープがあつても『オレは言わされたんだ』つて言うのよ。だから手を貸して。あたしが行きたいの。」

二人で証拠押さえて、そしてトズラよ。変装してるからバレるわけないし、たった一度の逢瀬おっせですもの、超常の力も目の前で使つて大丈夫」

信吾が顔に似合わず直情的で、尚且なほつ大胆であることを、カズヤはたまに忘れて驚かされる。アキラと信吾の二人の現象は似ているのだが、正反対の性格だ。よくこの二人が行動を共にしていたものだと思いたくもなる。

「解つたよ。ところでいつ？」

「そうね、《反日教》が安定するまではダメね。それに店の予約もチェックしないといけないし」

「判るのワ？」

「得意分野よ、ハイテクは」

信吾は髪を掻き上げた。

「さっきも言ったけど、どんな理由があろうとこれは私怨なの。だからカズヤくんには頼めないの」

カズヤは止めなかった。どうせ何言っても無駄だし、それで彼の怖ろしい空気が晴れるのだったら、それもいいと思っただ。

「限度も考えろよ。口で言うわりに、あまり身内は利用しないんだから、信吾は。オレなら構わないんだから」

「大丈夫、そのつもりだから。あたし、そろそろお暇<sup>いとま</sup>するわ」  
信吾は窓の棧に立った。

「カズヤくんこそ、お人好しにも程があるわ。傷付けられすぎると修復できないくらいに憎しみに取り憑かれるから、気を付けなさいな」

信吾はにつこり微笑むと、そのまま四階から身を踊らせた。

あんな傷背負って、よく立ち向かえるよな、信吾は。オレは駄目だ。

……で、取り憑かれるってか。

カズヤは窓を閉めた。未だまだ夜は寒かった。

## 第6部：第二ラウンド・2（後書き）

先行記事＆物語の世界観解説を連載している作者のブログです。是非おいで下さい。

<http://blogs.yahoo.co.jp/alfraia>

また、日本ブログ村とアルファポリスに参加しております。お手数ですがバナーの1クリックをお願いします。



## 第6部：第二ラウンド・3（前書き）

本作品は、前作『約束された出会い』編の続編となります。先にそちらをお読みになられた方が、スムーズに作品世界観をご理解戴けることと思います。

<http://ncode.syosetu.com/n9537d/>

## 第6部：第一ラウンド - 3

『カズヤくん、昼休みに聡の友達がやるわ。頑丈な男の子だけど、抵抗は一切しないって』

打ち合わせから何日経った朝、信吾がカズヤのノートに落書をしてきた。口で伝えられなくもないのだが、その日に限って日向も《日向四天王》も教室にいた。

カズヤは頷いてみせた。それだけで充分のはずだ。

『カズヤくん、強そう』

『字で書くと、確かに女っぽいぞ』

『そうかしら？』

そこまで書いて、カズヤはページを替えた。数学教師が近付いてきたからだ。

外見だけでも、真面目に授業は受けていないと、後で面倒臭いことになってしまう。

問題の昼休みになった。午後の授業は体育で、体育館に移動がある。不幸なことに体育は当然担任のピーチが担当だ。

しかしそれも今日は必要なことだった。

《日向四天王》はピーチだからこそ、体育の授業は必ず出席するのだ。そうでもなければ、《日向四天王》に因縁を吹き掛けることは難しかった。だからこそ、信吾はこの日を狙って指示を出したのだろう。

カズヤにとっても、用もないのに外を一人で歩いていて、タイミングよく他人を救けるなど、不自然極まりないから、信吾は移動の最中に騒ぎが起こるように仕組んだのだろう。

外はサッカーやバレーボールを楽しんでいる生徒で、結構賑わっている。いつもと変わらない、取り敢えず平和な昼休みだった。

信吾が救けにくると信じ、一年の男子は行動を起こした。

けたたましい物音が渡り廊下で鳴り響いた。

「何、ガン付けてんだよ！」

次いで川上の大きな声が響く。計画がスタートしたのだ。

「え、オレは何も……」

がつちりとした体格のその少年は、とぼけてみせたが、すぐに謝った。

「ごめんで済んだら、警察いらねえって、よく言うだろうがっ！」

川上はくだらないことを言って、少年の腹を蹴り上げた。

当然のように野次馬は集まってくるが、誰も止めようとはしない。止めに入ることができずにいる。

そして少年も謝るばかりで抵抗をしないから、川上はそれに調子付いていた。

少年は信吾を待っていた。しかし現われたのは、見ず知らずの三年生、カズヤだった。

「何、くだらないこと言っただよ、バーカ！」

カズヤは間に入ってしまった。

「うるせえんだよ！やられたいのか？」

「やだね。不意打ちで骨折させられたりしてないからなあ、どっちがやられるかな」

カズヤは笑ってみせた。先日の恨みもある。

少年は戸惑いの表情を見せていたが、カズヤはそれを無視した。

「余裕かましてんじゃねえよっ！」

川上の攻撃を、カズヤは軽々と躲かわした。

百八十センチを超す長身が、宙を舞う。

カズヤが空手をやっていて、多少は身のこなしが軽いことは、ピイチの革スリッパを躲したことで知ってはいたが、この長身でここまで動けるとは、正直川上は驚いていた。

しかし、カズヤは攻撃をしてきていない。

「逃げるだけかよ、独活の大木！」

「じゃ、三人でこいよ。川上がやられたの見て逃げ出されたら、こっちもつまらないっけ」

「この野郎！調子こいてんじゃねえよ！」

この挑発に、野口や、冷静な岩城でさえもが頭に血を昇らせ、カズヤにかかってきた。まさに計画通りだった。

そういえば、昔、空手の師匠に言われたことがある。

教えたわけでもないのに、昔からカズヤの動きは『動』で、サキの動きは『静』だったと。二人はそれぞれにかなりの上達を見せていたのだが、どうしても二人は役割を逆にはできなかった。それができるようになったら、二人とも完璧に強くなれるのだと。

しかし、今は素人相手に完璧を追求してはいけない。派手な動きで相手の頭上を飛び越してみせたりしながら、『日向四天王』が疲れるまで攻撃を躲し続けていた。

「ひ、卑怯だぞ……」

カズヤへの歓声に包まれながら、『日向四天王』の三人は息を切らせて言った。

「じゃ、攻めちゃっていいのワ？」

再び挑発するようなことを言い、カズヤは向かってくる『日向四天王』の腕を掻い潜り、三人の首筋を打った。それは一瞬の出来事だった。

「暫くは息苦しいと思うよ。そういう場所を打ったからワ」  
地面に跪き、苦しげに喉元を押さえている三人を、カズヤは見下した。

「それと、そのあんた」

カズヤの視線はやられ役の少年に向かう。

「悪くないの解つてたら、こんな連中に頭下げるんじゃねえよ。こいつらがイキがるだけだっけよ。」

大体、少しくらいは逆らってみるよな。待つてりゃ誰かが救ってくれるってわけないんだから」

カズヤは水面下の《反日教》や、それ以外の耐えている生徒たちには、きついと思える一言を言い放った。

「大丈夫？」

わざとらしく遅れてやって来た信吾は、やられ役の少年に駆け寄って、「遅くなってゴメンナサイ」と言ってみせていた。少なくともそうすることで、彼の対面は取り繕<sup>つくろ</sup>えていた。

## 第6部：第二ラウンド・3（後書き）

先行記事＆物語の世界観解説を連載している作者のブログです。是非おいで下さい。

<http://blogs.yahoo.co.jp/alfradia>

また、日本ブログ村とアルファポリスに参加しております。お手数ですがバナーの1クリックをお願いします。

## 第6部：第二ラウンド・4（前書き）

本作品は、前作『約束された出会い』編の続編となります。先にそちらをお読みになられた方が、スムーズに作品世界観をご理解戴けることと思います。

<http://ncode.syosetu.com/n9537d/>

## 第6部：第一ラウンド - 4

《日向四天王》は授業どころではなく、信吾は頗る<sup>すこぶ</sup>ご満悦の様子だった。

「カズヤくん、すごく強いんじゃない。あたし、惚れ直しちゃったわ」

「あ、ああ。オレ、飛び跳ねる方が得意なんだよね。っつーか、その誤解されるような表現はちよつと……」

「気にしない、気にしない。これで、ファンクラブできたわね、きつと。格好良かったもの」

「いや、それはないから。ほら、ピーチが睨<sup>にら</sup>んでつとワ。面倒臭くなつと」

カズヤは整列をした。

日向もいない。彼の名字は須藤だから、準備体操で二人一組になると、カズヤと組むはずだった。

カズヤは肩を撫<sup>な</sup>で下ろした。日向の目だけは、何となく誤魔化せないような気がしていたのだ。

「じゃ、作戦第二段階いくわよ。今夜、あたしと数人で因縁吹っかけるわ。連中の溜<sup>たま</sup>り場の公園に、そうね、六時くらいに行きましょう。あいつらが公園に戻るのは、ここ数日調べてたら、大体七時くらいだったからね」

茂木接骨院に集まって、信吾は計画の最終確認をしていた。

そこには、ホワイトブリーチした短めの髪をハリネズミのように逆立てて、少し大きめで濃い色のサングラスをした男、《夏青葉》がいた。

「それと、こちらが《夏青葉》。この間も言ってたけど、サングラスは外さないし、名前も明かせないわ。理解してちょうだいね」

《夏青葉》は信吾の紹介を受け、一同の前に立って挨拶をした。



「今、かすみちゃんから紹介があつた《夏青葉》だ。《夏青葉》なんて呼びにくいだろうから、適当に呼んでくれればいい。」

で、今日はケガをしないことだけ気を付けてくれ。勝てたらラッキー、負けなきゃそれでいいから、この間電話で話した作戦通りに頼む」

その場にいた《半日教》の面々の表情が固くなった。

「じゃ、出発するわよ。目立たないようにバラバラに行くから」

隠れて出番を待つグループは、それぞれが隠れる場所を確認し、茂木接骨院の裏口から出発をした。

「信吾、信吾」

出発直前、カズヤは信吾を呼び止めた。

「何？」

「あのさ、せっかくだから、ここでもオレと《反日教》が無関係だって強調しようと思うんだ。多分、一人くらい現場から離れていくやつがいると思うから、《夏青葉》はそれを追って現場からいったん離れる。で、カズヤになって現場を通りかかるから、何か気の利いたこと言ってくれよ」

「了解。それにしても、大胆に切ったわよねえ。格好いいわよ。やつぱり惚れ直しちゃう」

「やめてくれよ。オレ、こんなに髪切ったの初めてなんだっけ。くせつ毛誤魔化そうとすると、ここまでやらなきゃならなかったんだ。考えてみるよ。自毛より短い鬘かつらを被かぶるのと、自毛より長い鬘を被るの、どっちのが楽だと思う？そうすると、こうなるんだよ。何しろオレは不器用だからな」

カズヤは恨めしそうな顔で、切って立てている、ブリーチで傷んだ髪を見上げた。

「日向って、本当によく解らないやつだよな」  
川上は呟つぶやいた。

昼休みの一件で、三人は揃って保健室のベッドに横にならざるを得なかった。

彼らがいると、そこに一般の生徒は入ってこなくなる。現れるとしたら、それは仲間のテルヒか日向だけだ。

「お昼のこと？」

授業が終わって騒ぎを知ったテルヒは忌々し気に言い捨てた。

騒ぎを聞きつけた日向は保健室に現われるなり、横になっている三人を怒鳴り付けたのだ。

「お前らはバカか？あの鈴木和哉は《反日教》じゃないにしろ、お前らが因縁吹つけたやつは、《反日教》のメンバーだ！

だから手当たり次第に因縁吹っかけるのは止めるって言っただ。つまらないことでつけこむ隙を与えることになっちまったじゃないか。

かすみちゃんのやつ、オレらに手を出させて、それを理由にオレらに挑むつもりなんだよ！

ああ、オレがいない間に随分敵を作ってくれたもんだよ。余計な面倒増やしてくれて、まったくできた部下だよ」

日向の嫌味に、さすがの三人も小さくなった。川上の軽率には、他の三人も手を焼いていた部分がある。でも、そこまで嫌味を言われる理由も解らない。

何しろ相手はただの素人ではないか。

「乗らなきゃいいじゃないスか。それに連中なんか、オレらの相手になりやしないし」

日向が何で素人を相手にしなくちゃならないことで怒っているのか、三人は解らなかった。

「そつかあ……。そうだな、乗ろつか」

暫く考えていた日向は、そう言った。

「岩城の言う通りだ。所詮俄か作りの寄せ集めだもんなあ」

「はっ？」

予想外の展開に、ベッドに横たわった三人は耳を疑った。が、そのようなことお構いなしとばかりに、日向は続ける。

「確かに、お前ら《日向四天王》の相手じゃないからな。いつそ今のうちに叩きのめして、馬鹿な気持ちを萎<sup>な</sup>えさせてやるのもいいかもな」

まったく、かすみちゃんもバカだよな……」

という日向の指示で、《日向四天王》は動き出したのだ。

## 第6部：第二ラウンド・4（後書き）

先行記事＆物語の世界観解説を連載している作者のブログです。是非おいで下さい。

<http://blogs.yahoo.co.jp/alfraia>

また、日本ブログ村とアルファポリスに参加しております。お手数ですがバナーの1クリックをお願いします。

## 第6部：第二ラウンド・5（前書き）

本作品は、前作『約束された出会い』編の続編となります。先にそちらをお読みになられた方が、スムーズに作品世界観をご理解戴けることと思います。

<http://ncode.syosetu.com/n9537d/>

## 第6部：第一ラウンド・5

いつものように集合をかけ、そしていつものように《日向四天王》を中心に歩く。

しかしいつもと心構えが違っている。  
油断するなという、総長日向の命令だ。

「そんでもって、あいつの言うことって、その通りだから余計にむかつくんだよ」

「いい加減に放つときなさいよ、川上。」

どうせ《日向》の中に、日向本人の味方なんていないんだから、気を病むだけ無駄よ。大体ね、あたしたちは覚悟決めたじゃない、四人で組んであいつの下に就いた時に。あたしたちの行動に、あいつの頭があればいいだけなんだから、使うだけ使って捨てちゃえばいいんだって。ほら、あいつ、実戦はできないんだし、怖いことなんかないでしょ」

「それもそうだ」

四人は辺りに気を配りながら、自分たちにだけ聞こえるくらいの声で喋しゃべっていた。

《日向四天王》の取り巻きは、《反日教》の人数を予想してか、三十人近くいる。素人集団の《反日教》には厳しい人数だ。

「あらあら、奇遇ねえ、こんな所で」

隠れて待機する部隊は先に出発していたから良かったものの、信吾たち五人は、予定外に路上で待ち伏せをされていた。

信吾は動揺を見せずに声をかけたが、実際は困っていた。

「日向の目は誤魔化せなかったのね、四匹の子ブタさん」

「そういうことね、かすみちゃん」

テルヒも信吾に負けずに睨にらみ返した。

「にしても、愚かな……」  
そう言った岩城の言葉には、信吾に限ってという想いが込められていた。

本当に信吾は困っていた。予想以上に相手は大人数だし、しかも逆に待ち伏せをされていながら、この人数を公園まで引つ張って行かなければならないなど、到底できない。

一人だったらかえって可能なことも、うっかり人数に頼っていることが仇になってしまっている。

この様子を遠見能力で見ていたカズヤは、《夏青葉》になる前にカズヤとして助け船を出すことにした。

《日向四天王》は、少し離れた所に警察対策の見張りを置いていた。カズヤはその目の前を自転車を通り、現場を目指した。

「鈴木だ！鈴木和哉が来たぞ！」

「何？」

《日向四天王》は身構えた。

「加勢か？」

殺気を立っている現場に偶然を装って現われたカズヤは、その《日向四天王》の問いかけを笑い飛ばした。

「冗談。《反日教》対《日向》だろ。信吾、悪いけど勘弁させてもらうよワ。オレ、どちらとも関わりたくないっけ」

「お昼はあたしの仲間を救ってくれてありがとう。一応お礼はしておくわ」

「ああ、さっきの坊やは仲間だったんだ」

「そうなのよ。でもね、ここまで救ってほしいなんて、あたしも虫のいいことは考えてないから、安心して」

「助かるよ。じゃ、頑張つて、ケガしないように。それと余計なことかもしれないけど、ここじゃ邪魔だから、公園かどっかでやれよ。もう、マジでご近所迷惑つてやつだし。」

ってことで、じゃあな。オレ、図書館行くから」

表向きは進学一筋のカズヤはその場を後にすると、誰にも見られない所で《夏青葉》に戻った。

しかし現場は、そのカズヤの一言をきっかけにはできなかった。まあ、そんなものだ。

二つの勢力は、未だ睨み合ったままで、攻撃のタイミングを計っている。

《夏青葉》は現場に向かった。

彼らは一般人には目もくれない。《夏青葉》に化けたカズヤになど、眼中にないようだった。

でも信吾なら、《日向四天王》が全く別なものに目を向ければ、すぐに走り出すはずだ。

カズヤはわざとらしく、血の気の多い川上を、ぶつからんばかりの勢いで睨み付けた。

「んだあ？てめえ、どこ目を付けて歩いてんだよ！」

単純な川上は、昼休みの教訓を生かさずに、変装したカズヤに喰ってかかってきた。

少し大きめの濃い色のサングラス。白髪かと思うくらい脱色した短めの髪。しかも身長は高く、胸板も厚い如何にも胡散臭い外見の男は、「邪魔なんだよ、くそガキが！」と言うなり、力一杯川上を殴り飛ばした。

そのチャンスを、信吾は逃したりしなかった。

「逃げてっ！」

「待てっ！」

《日向四天王》は、得体の知れない男一人など、たった一度の逢瀬と思つてその場に捨て置き、逃げる信吾たち五人を追い掛けた。

公園で、信吾たちは《日向》の三十人に囲まれた。



「逃げたつもりかよ、これで」

路上よりも溜り場になっているこの公園の方が、《日向》にとっても有利だった。

普通に考えれば、そうなる。

これは檻に飛び込んだきた鼠ねずみのような状況だ。

それなのに信吾は「ええ」不敵な笑みを浮かべた。

しかしその笑みの意味を推し量おはかれるような人材は、目の前の《日

向》の中にはいない。日向本人がいないのが幸いだ。

「やっちゃんっ！」

《日向》はテルヒの声を合図に、五人に襲いかかった。

## 第6部：第二ラウンド・5（後書き）

先行記事＆物語の世界観解説を連載している作者のブログです。是非おいで下さい。

<http://blogs.yahoo.co.jp/alfraia>

また、日本ブログ村とアルファポリスに参加しております。お手数ですがバナーの1クリックをお願いします。

## 第6部：第二ラウンド・6（前書き）

本作品は、前作『約束された出会い』編の続編となります。先にそちらをお読みになられた方が、スムーズに作品世界観をご理解戴けることと思います。

<http://ncode.syosetu.com/n9537d/>

## 第6部：第一ラウンド - 6

その様子を遠くから見ていた者がいた。

《SIN》だ。これから《反日教》に加勢する予定の彼らは、当初の予定通り、形勢を見極めようとしていた。

「《反日教》は、味方を隠してるな。あの五人が疲れた頃に、残りを投入してくるつもりだろう」

「え？」

神宮司はシンの<sup>しんや</sup>呟きに驚いた。

遠くからでは何も見えないというのにだ。

「ちよつと考えれば判ることだよ。あんな素人集団が、たった五人で挑むなんてこと、できるわけないだろ。今まで一人じゃ何もできないような連中だったんだぜ」

「あ、そっか」

神宮司はすぐに思考を切り替えた。

「じゃ、取り敢えずは《反日教》に味方して、味方が参戦してきたら《日向》に寝返るか」

「どうしようかな。今日は《日向》を手伝わなくてもいいかもしれないぞ」

シンと神宮司を中心に十人くらいが、今日の《SIN》の精鋭として集まっていた。

「ま、行くか。五人で三十人は可哀相だ」

シンは司令を出し、エンジンを噴かして公園に乱入した。

「《SIN》！」

その場にいた全員は、その想いは様々だったが同じ言葉を口にした。

「ケガはさせんなよ！《SIN》の恥だ！」

「了解！」

状況は一転し、《日向》は窮地きゆうちに追いやられた。かといって、《反日教》が何かしたわけではなく、それは《SIN》のお陰で、《反日教》の五人は手抜きをしたくらいだ。《日向》が窮地きゆうちに陥れば、陥るほど、《SIN》が寝返るのが早くなる。

シンその人は、神宮司の後部座席から降りて、ただ一人高みの見物をしている。誰もが怖れて手を出さないのを知った上での、大胆不敵な行動だ。

信吾もカズヤも、《SIN》の出方を待っていた。

これだけ《日向》が不利になれば、そろそろ彼らは動くはずだ。それなのに、《SIN》は動く気配がない。

シンは争いの中心を見つめていた。そこでは信吾と岩城、川上が争っていた。

カズヤも陰から同じ所を見ていた。変わりりそうもない状況の中で、いつ隠し部隊を参戦させるか、信吾を見て決めようと思っていた。

《日向四天王》は必死だった。《反日教》は<ruby><rb>>潰せても、</rb>><rp>( </rp>><rt>SIN</rt>><rp><rp></rp>></ruby>を潰せるだけの準備はしてきていない。

カズヤはずっと信吾を見つめていた。彼のどんな些<sup>ささい</sup>細な合図でも、それを見逃してはいけない。信吾は必ず合図をしてくるはずだ。

苦しい状況の中、一瞬『SIN』と目を合わせた信吾は、何を思ったのか、突然目で合図をしてきた。

理由を考えている間はない。カズヤはホイッスルを鳴らし、争いの中に加わって行った。これ以上遅れては、それこそ入るタイミングを失ってしまいかねない。

「誰だ！今度は？」

「さっきのブリーチした男です！」

「しまった！仲間だったか！」

テルヒも争いに加わっている。金属棒で《SIN》の男一人を殴り倒すと、他の《日向四天王》の周りに集結した。

「彼が《夏青葉》よ。アキラちゃんの右腕」

「じゃあ、相当腕のたつ男ってわけだ。面白い」

《SIN》ばかりでなく《反日教》の不意打ちに、いささか動揺を見せた《日向》だったが、すぐに統制を取り戻し、反撃を続けた。

《SIN》は寝返らない。

《日向》は不敗神話を守るために必死。

《反日教》は《SIN》を信じずに、寝返りを待っている。

「やけに《反日教》がまとまってると思わないか？」

神宮司は、見物しているシンに声をかけた。

「《夏青葉》の所<sup>せい</sup>為さ」

「え？ナツアオバ？」

「そう。噂には聞いてたが、《反日教》の首長の桂小路 晃の右腕となるべき者の呼び名だ。あの脱色野郎がそうらしいけど、ありゃ、偽者だな」

「え、何で判るのさ？」

またシンは断言した。外から見ていると、それだけ言い切れる材料など、見当たらないのにだ。

「簡単なことさ。あいつは桂小路の強さを越えていない。右腕だったら、せいぜい同じくらい強くないと」

「ああ、そっか」

神宮司はシンの解説に納得をした。

「ってことは、あのオカマのかすみちゃんは、心理戦を張ってるわ

けだ。偽者を立てて、そうして仲間の士気を高めようってんだから、大した者だよ」

「そう、あいつも桂小路の左腕の《春霧霞》を名乗るだけある。自分の仲間がどうしたら動くかを、しっかり知ってるんだから」

「それにしても、この状況で、どうして今まで伏兵を使わずにいたんだろな」

「神宮、かすみちゃんと《夏青葉》は知ってたよ。オレらがどっちつかずだったこと。」

いつオレらが《日向》に寝返るかを、二人はじっと待ってたのさ。で、待ちきれなくなっただんだけ。それは正解さ。ほら、もう少して《日向四天王》が動く。オレらは《日向》に加勢をしないぞ」

「え？作戦じゃ……」

「予定は未定さ。《日向四天王》が動いたら、オレらは退く。後始末はガキどもに任せりゃいいのさ。そう、みんなに伝えてこい」

シンはそう神宮司に命令すると、また黙って状況を観察し続けた。

## 第6部：第二ラウンド・6（後書き）

先行記事＆物語の世界観解説を連載している作者のブログです。是非おいで下さい。

<http://blogs.yahoo.co.jp/alfraia>

また、日本ブログ村とアルファポリスに参加しております。お手数ですがバナーの1クリックをお願いします。



## 第6部：第二ラウンド・7（前書き）

本作品は、前作『約束された出会い』編の続編となります。先にそちらをお読みになられた方が、スムーズに作品世界観をご理解戴けることと思います。

<http://ncode.syosetu.com/n9537d/>

## 第6部：第一ラウンド・7

「どうしたのさ？」

カズヤは争いに紛れて信吾に訊ねた。

「これ以上待つてたら、『日向』が動くわ。『日向』が動いてから『SIN』が寝返ったりしたら、それこそ大変よ。だったら今のうちでしょ」

「ああ、そっか」

この争いの中、二人は争いに慣れていない仲間を救けるために、本気の勝負を避けて走っていた。結局これでは敵の戦力の低下には、全く繋がっていない。

テルヒはその『反日教』の動きを見逃しはしなかった。騒ぎに紛れて仲間の一人を逃がし、新たな戦力を呼びに行かせようとしていた。

「撤収するか。合図を」

シンは神宮司に言った。

「あいつ、追わないのか？」

神宮司は、逃がした『日向』の一人を顎で示した。

「そういうことは、『反日教』に任せろ」

シンの言う通りだった。

「なっちゃん、追ってちょうだい！」

信吾はカズヤに向かって怒鳴っていた。カズヤはそこに意図するものを、瞬時に読み取らなくてはならない。

「おう！」

呼びにくいとはいえ、『夏青葉』だから『なっちゃん』とは、いくらなんでも芸がなさすぎるとは思ったが、今はそれどころではない。カズヤは出て行った『日向』の一人を追って、自分も外に出て

行った。

「神宮、先が見えただろ。春と夏だけなら勝てたかもしれないけど、これじゃ無理だ」

「？」

神宮司は、シンの言葉に耳を疑った。

「二人の統制ミスさ。あの二人は仲間を信じていないから、仲間がやられる前に助けようとした。もし信じてたら、仲間を捨てても目的を達成するために動くはずさ。」

「ってことで、今日の喧嘩は終わり。素人集団がぼこぼこにされる前に、警察呼んでやろうぜ。で、《反日教》だけ警察から救ってやるのかな。オレらの敵は、一応《日向》だからな」

神宮司は納得し、退却の合図を出した。

一方のカズヤは、シンと神宮司の間でそのような会話がされていることなど知るわけもなく、抜け出した者を追いかけた。しかし、彼の思惑は捕まえることではなく、わざと見失ったふりをして物陰に隠れると、瞬間移動をしてカズヤの姿に戻り、再び公園に戻って無関係を演じることだった。

シナリオとしては、一度帰ったカズヤが信吾を心配して戻ってきた、というものはずだった。勿論すぐに《夏青葉》に戻ることも忘れてはいない。

ところが、戻ってみると雰囲気（きふく）ががらりと変わっている。パトカーのサイレンが近付き、現場は蜘蛛（くも）の子を散らした騒ぎになっていた。

まさか、さっきのやつが、警察にたれ込んだんじゃない。《日向》に限ってなあ。《SIN》か！

よく見ると、逃げているのは日向の連中ばかりで、《反日教》や《SIN》の連中は一人もいない。

そうこうするうちに、警察が傾<sup>なだ</sup>れ込んできた。

ヤベツ、逃げなきゃ……

カズヤは隠れていた木陰から、不自然に思われないようにゆつくりと離れ、そして走り出した。すると運が悪いことに、一台のパトカーに正面から行き合ってしまった。

最悪。野次馬のふりでもしてりや良かったよ。今更オレは無関係なんですつつつても信じてくれないだろうし……

頭を掻きながらそんなことを考えていると、地面を走っていたはずの足が宙に浮いた。

「？」

「バカじゃねえの。何、このこのこ部外者が覗<sup>のぞ</sup>きに來てんだよ。代わりに捕まりに來たのかよ」

すれ違いざまカズヤを抱き上げたのは、神宮司の運転するバイクの後に乗っているシンだった。

「ったく、全員逃がし切れたか確認に來たら、この兄ちゃんだ。噂には聞いているよ、あんたのことは。ガキどもの間の中立の人間、鈴木和哉ってんだろ」

カズヤは頷いた。

「喧嘩が珍しいのも、かすみちゃんが氣になるのも解るけどよ、止めとけよ、覗きは」

シンはそう言うのと、カズヤを大通りに出る少し前で降ろした。

「せっかくお近付きになれたから、一つ頼まれてくれないか」

シンはヘルメットを取るうとせず、シールドを持ち挙げることもせずに、降ろしたカズヤに声をかけた。

その声は少年のようだった。

「何を？」

「日向本人と、かすみちゃんに伝えてほしい。」

《SIN》はどっちの味方でもないが、話はいつでも聞かつてな」

カズヤは首を傾<sup>かし</sup>げたが、それ以上考えはしなかった。そういうこ

とは信吾の仕事だ。

「解った。それだけでいいんだな」

「充分だ。勝手知ったる仲みたいなものだ。どう受け取るかは連中次第でことで」

「それでいいなら」

カズヤは応じた。

今のカズヤにとって大事なことは、自分がどういう存在であるかを察知されてはいけない、ということだけだ。

バレてはいない。《夏青葉》がカズヤだということは、少なくともシンにはバレていない。

それはカズヤに、少しだけ自信を与えた。

## 第6部：第二ラウンド・7（後書き）

次回から第7部：インターバルを始めます。

先行記事＆物語の世界観解説を連載している作者のブログです。是非おいで下さい。

<http://blogs.yahoo.co.jp/alfraia>

また、日本ブログ村とアルファポリスに参加しております。お手数ですがバナーの1クリックをお願いします。

## 第7部：インターバル - 1（前書き）

本作品は、前作『約束された出会い』編の続編となります。先にそちらをお読みになられた方が、スムーズに作品世界観をご理解戴けることと思います。

<http://ncode.syosetu.com/n9537d/>

## 第7部：インターバル - 1

### 7：インターバル

先日の、《夏青葉》<sup>なつあおば</sup>とカズヤが無関係であることを強調する為の行動は、彼が同一人物であることを知っている者、つまりはいつも集まる中心メンバーの五人には知らされていた。そしてそれが最善であったと、五人は納得していた。

しかし全てが思い通りになっていたわけではない。水面下で問題が燻<sup>くすぶ</sup>っていた。

他の《反日教》<sup>はんにちきょう</sup>のメンバーは、《夏青葉》が誰だか知らないのだから、カズヤたちのその意図<sup>いど</sup>を理解できるわけないのだ。

「ねえ、大変よ」

「なあに、絵美ちゃん？宿題やってないの？見せてあげてもいいわ」  
教室に駆け込んできた絵美に、信吾はのんびりと訊<sup>たず</sup>ねた。学校での普段の彼は、策士の彼とあまりに違う。

「違うわよ、もう」と軽く信吾の頭を小突き、絵美は眉間<sup>しわ</sup>に皺<sup>しわ</sup>を寄せ、信吾の耳元で囁<sup>ささ</sup>いた。

「この間のアレ、失敗よ。詳しくは後で話すけど」

アレで通じることといえば、《夏青葉》とカズヤの関係のことだ。その絵美の表情に、梅津が気付かないわけがない。

「バレたのかよ？」

「判らないわ。覚悟しときましょ」

もう自分が《反日教》に属していることを隠す必要がなくなった梅津は、不安気な表情を顔<sup>おもて</sup>に信吾に問いかけ、信吾は表情を崩さずに答えた。

信吾は怒りや不快の表情は露骨に表すくせに、不安を隠すような笑顔や、不安を増長させるような暗い顔をすることはしない。本当



に困ったり焦<sup>あせ</sup>ったりしている時は、顔の筋肉を動かすことを忘れたかのように、表情が動かなくなる。

それを知っている梅津や、遠巻きに見ていたカズヤは、ただならぬ事態を察した。

先日の《日向》との直接対決に、当然絵美をはじめとする女子は、参加していなかった。だから詳しい事情は知らずにいた。

放課後、例によって茂木接骨院の二階に、信吾たち中心メンバーは集まっていた。

「一体何なのさ？」

待ちきれないように、加賀見は絵美に問い正した。

「落ち着いて聞いてね」

前置きをされると、かえって不安が<sup>つの</sup>募る。

「</rb><rp>(</rp><rt>反日教</rt><rp>)</rp></ruby>の三年の十三人、全員抜けるって言うの。かすみちゃんには言いにくいからって、あたしのところに来たのよ、今日」

「えっ？」と梅津は声を上げ、「何でだよ！」と加賀見は激しく息巻いた。「どうして……？」と、聡は呆然としている。信吾は身じろぎ一つせずにいた。

「そのうちの一人に訊<sup>き</sup>いたのよ。引き止めはしないからって」

「それは賢明ね。あたし、意志のない人間をその気にさせるなんて、無理強<sup>じ</sup>いできないもの」

ようやく信吾が、いつもの皮肉を言った。

「もう、かすみちゃんってば。今、そんな嫌味は聞きたくないわ。とにかく最後まで聞いてよね。まったく、らしくないんだから」

絵美はいたって真面目で、そんな皮肉たっぷりの信吾に、露骨に不愉快な顔を向けた。

「どついう経緯いきざつがあつたかは知らないけど、彼らはね、警察に通報したのが《夏青葉》だと思ってるの。」

それだけなら未だいいわ。自分だけ警察に通報して、捕まりそうになる前に逃げたと思ってるのよ。それで、裏切られた気分なんでしょう、すっかりやる気なくしたみたい。

一応事情は知らされていても、あたしは現場にいなかったから、どついう状況か知らないし、だから説明も何もできなかったわ。あたしが知ってるのは、カズヤくんが《夏青葉》じゃないって印象付ける為に、そうすることが最善だったってことだけで、それはみんなに言えないじゃない」

絵美の判断は正しい。

しかし一同は黙るしかなかった。

よく考えれば、真実を何も知らされていない人間には、確かに《夏青葉》の行動は、その場から逃げたように映ってしまうだろう。バレないようにするということに固執しすぎた結果が、この事態を生んでしまったのだ。

「未だあるのよ。《夏青葉》が信頼を失う原因は。」

《SIN》のことなんだけど、あたしはよく判らないんだけどね、《SIN》は《日向》に寝返らなかつたんでしょ」

確かにその通りだ。

《夏青葉》が事前に話した内容は、悉く覆ことごとくつがえされている。

「つまり、《夏青葉》は最初つまつつから躰こまいちゃったわけね。仕方ないわねえ……」

「待てよ、かすみちゃん！《SIN》はあの状況を見て、それで臨機応変に態度を変えたんだろ。連中の思惑なんか、予定通りにいくわけないじゃないか。」

いや、《SIN》だけじゃない、誰だっと思いつきに他人を動かすことはできないだろ！」

加賀美が立ち上がって大声を上げた。

それも正しい。だけど、そんな悠長なことを言っていられる状況にない。

「信吾に言っただって、しょうがないじゃないか、加賀見。そんなこと、素人に判るわけないだろ」

自分でも意外なほど、カズヤは落ち着いて加賀見を諭した。さと

## 第7部：インターバル-1（後書き）

先行記事＆物語の世界観解説を連載している作者のブログです。是非おいで下さい。

<http://blogs.yahoo.co.jp/alfraia>

また、日本ブログ村とアルファポリスに参加しております。お手数ですがバナーの1クリックをお願いします。

## 第7部：インターバル - 2（前書き）

本作品は、前作『約束された出会い』編の続編となります。先にそちらをお読みになられた方が、スムーズに作品世界観をご理解戴けることと思います。

<http://ncode.syosetu.com/n9537d/>

## 第7部：インターバル - 2

今更、自分の付け焼刃<sup>やきは</sup>の浅はかな作戦を後悔したところでどうにもならない。

「信吾じゃないけど、去るものは追わないってことでさ、先を考えなきゃ。」

聡、一、二年はどうなってるのワ？」

カズヤは話を進めた。

「こっちは何も聞いてないですけど……」

聡は答えた。

「じゃ、何か変わった様子はないかヤ？」

「それも、別に。こっちには理想を追うだけの余裕が、年令的にありますから。」

我々は素直に《夏青葉》の行動を理解してますよ。今は勢い付いているくらいです。

ただ、三年が辞めるって話の影響はどう出るか……」

「ま、それはどうしようもないっけ、おいおいってことでいいよワ」カズヤは取り敢えずはほっとした。この時点であからさまな離反があつたら、もう救いようがないというものだ。

「そっか、やっぱ受験が響いてるかもな。高校受検をフイにされるくらいなら、自分を曲げて生きた方がいいって思うのは当然だろ。」

高校の失敗は一生引きずりかねないもんだろっから」

優等生を装う梅津が分析した。

「そうね、きつとそれよ。あたしだって、同じこと考えたことくらい、何度もあるもん」

絵美も同調した。

やはり信吾は黙っている。

「でもさ、初めっからないものと、あつたものがなくなるってのは、気持ちの上でも何か違うなあ」

加賀見がぼやいた。

「それは言いつこなしよ。今日のところは解散しましよ、一応。考えるのは明日。ね、かすみちゃん」

絵美は信吾の肩を軽く叩いて、その場を仕切った。

「そうそう、今考えたって、大していい考え浮かばないだろうしさ。ゆっくりみんなの出方を待とうぜ」

加賀見も努めて明るい口調で言った。

勿論、皆、信吾を氣遣つてのことだ。未だかつて、ここまで混乱しているような無表情な信吾を、誰も見たことがない。アキラがいなくなるという話を聞かされた時だって、ここまで動揺したりはしなかった信吾なのだ。

「やつちやったことはどうしようもないんだっけ、これからどうするかが重要だろ。」

オレもじつくり考えるから、今日は帰ろう。要はオレの考えが甘かったから、こういう結果になっちゃったんだし」

「それもそうだ。少し様子を見ないことには判断出せないし」

「よし」とけじめをつけるように加賀美が立ち上がり、それに倣つて一堂は立ち上がった。カズヤも立ち上がり、信吾にも立ち上がるように手を出したが、彼はそれを拒絶した。

一同は顔を見合わせた。ここまで落ち込んでいとなると、もう誰もどうにもできない。後は彼自身がどうにかすることだし、彼は一人になりたがっているということだ。

「じゃ、先に帰るよワ」

その信吾の気持ちを察し、カズヤたちは部屋を後にした。信吾の希望通りに、彼を一人にしておいた方が、彼にとってはいいだろうと映ったのだ。

それにかかる言葉も見つからない。

「たしかにあたし、数に甘えてたわ。たった数日前に顔を揃えただ

けの仲間だけど、目的を同じくして水面下で堪えてきた仲間だと、信じて甘えてた。

けど、結局は解り合う為の時間がもつと必要だったのね。何も理解し合えていない人間を仲間と思い込んで、あたしはそいつらに甘えていただけなのよ。バカだったらありやしない……」

誰もいなくなったのを待っていたかのように、信吾は一人で喋りだした。力なく障子に寄り掛かったままで。

「ねえ、どうしたらいい？今日のカズヤくんは、あたしよりも冷静だった。まったく、嫌になっちゃうわ。」

他人ごとだからじゃなくて、ちゃんと受け止めてて、尚且つ冷静だったわ。どんどん成長してくのが、あたしにはよく見える。そして成長して、みんなあたしを置いていくのよ。

カズヤくんが本当の《夏青葉》になった時が、あたしが消えなくちゃならない時……。

そんなに嫌なら、《夏青葉》なんか育てなきゃいいのにね、あたしったら。ほんと、バカよ」

信吾は自嘲した。

彼は一人、障子に映る自分の影に愚痴を言い続ける。

「アキラちゃんも、決してアキラちゃんの言い付けに逆らったりしなさそうなカズヤくんが、まさか逆らってるなんて、夢にも思っていないでしょうね、きつと。」

だって、カズヤくんは絶対アキラちゃんのことを好きだし、絶対正しいと信じているわ。アキラちゃんの名前が出た時の表情っていいつたらないもの。完全に手懐けられてるわね。それを知らないアキラちゃんじゃないわ。

でも、そのカズヤくんが言い付けを守るどころか、盟主になんかになってるなんて知ったら、アキラちゃん、どんな顔をするのかしらね。想像するだけで面白くって、わくわくしちゃうわない。

……ふふふっ」



と、信吾は顔を上げた。

「面白いわ、この作戦」

上げた信吾の顔は、あの策士の笑みを浮かべていた。瞳はうつて変わって、生き生きとしている。

「未だ負けないわ。第一ラウンドは負けたけど、今度は頭で勝負するわ。精神力が強い方が勝ちよ。まあ、見ててらっしゃい、オジさま方は」

自分の影に決然と言い放つと、その表情に闘志を漲<sup>みなぎ</sup>らせ、信吾は立ち上がった。

が、障子に映っていた信吾の影は、彼が立っても座ったままだった。

## 第7部：インターバル - 2（後書き）

先行記事＆物語の世界観解説を連載している作者のブログです。是非おいで下さい。

<http://blogs.yahoo.co.jp/alfraia>

また、日本ブログ村とアルファポリスに参加しております。お手数ですがバナーの1クリックをお願いします。

## 第7部：インターバル - 3（前書き）

本作品は、前作『約束された出会い』編の続編となります。先にそちらをお読みになられた方が、スムーズに作品世界観をご理解戴けることと思います。

<http://ncode.syosetu.com/n9537d/>

## 第7部：インターバル - 3

翌日、何事もなかったかのように時間は流れる。

「売ってる現場を押さえたと思ったら、売ってる本人たちがラリッててさあ、それで捕まっただって」

「バツカじゃねえの」

昼休み、梅津とカズヤは、空っぽの《日向四天王》の席を見て笑った。

本当にシンナーでラリってたのか、カズヤは腹の底で推測した。テレビや小説だと、シンナーに始まって、更には暴力団とつるんで麻薬とか拳銃まで扱ったりしちゃう。

くっだらねえの。影響受けすぎだよ、オレ。

カズヤは自分の頭の中を笑った。

その朝、日向がカズヤに声をかけてきていた。

「《反日教》、負けたんだってな」

「だって、お前が指揮したんだろが。負かすつもりだったんだろ」

「そりゃま、そうだけど。」

ところで、きみさあ、現場に顔は見せたんだってな」

「たまたまね。図書館に行く途中に鉢はちあ合わせってやつ。日向は行かなかったんだろ」

「オレは頭だけだから。」

だってさ、オレが現場に行くと、《日向四天王》の足手纏まといになっちゃうからさ」

日向は一体何のつもりでカズヤに声をかけてきたのか、さっぱり判らない。

「カズヤさあ、何で《日向四天王》が来ないか、知ってるか？」

彼から身内の情報をしてくるとは、本当に理解に苦しむ相手だ。

「ガキどもと一緒にシンナーやってて、そしたら見つかったやつて、捕まったんだよ、あいつら。そういうことは止めるって言い聞かせてんのにさ。身から出た錆<sup>さび</sup>ってやつ」

「あのさあ、お前、放つといていいわけ？ 仮にも自分の側近だろ」  
あっけらかんとしている日向に呆<sup>あき</sup>れ、どうして相手方の心配までしなくちゃなんねんだ、と内思いながらも、カズヤは中立の者として言った。

「いいんだ、いいんだ。どうせオレが何かしなくても、あいつらは無傷で出てくるだろうし。」

……あ、いい、言わないで。きみの言いたいことはすぐ解るんだよな。」

お人好しのきみのことだ、《日向》の品位が下がるって言いたいんだろ。遠回しすぎるよ。ハッキリ、最低だって言ってもいいんだぜ。

でもな、そんなこと気にしてちゃ、こんなことやってらんねえってカンジ」

日向はカズヤの言いたかったことを、正確に言った。

「それよりも、かすみちゃんに言ってやってくれないか。オレが言うと角<sup>かど</sup>が立つから」

日向は耳を貸すようにと、カズヤを手招きした。

「オレだけのことじゃなく、《日向》内部の情報は、誰にでもすぐに伝わるようになってる。《反日教》はそれがないのが、この間の敗因だ。秘密主義もいい加減にした方がいいってな。」

日向は例の妙な笑い声を立てた。

カズヤにはその笑い声があまりに耳障<sup>さわ</sup>りで、耳元に寄せられた顔を思わず跳ね除ける仕草をした。

「あのさあ、日向。お前、どうして敵に塩を送るようなことを……」  
「わざわざご親切にどーも。それは充分痛感致しておりますわ。こう言えばいいんでしょ。バカ総長」

言いかけたカズヤの言葉を無視して、信吾が背後から現われた。せつかくの内緒話も、これでは無駄だ。

「朝っぱらから、もう……」

犬猿の仲のはずなのに、妙に会話の間が絶妙な二人の間に入るのは、それこそお人好しのカズヤには疲れてしかたがない。

「そうそう、たまには素直が一番だぜ、かすみちゃん。オレには《反日教》の動きだつて、《SIN》の動きだつて見えてるんだぜ」  
「それはようございますわね。でも、あたしにだつて、あんたらや《SIN》の動きは見えてるわ。差なんて、如何に内部が通じ合ってるか、所詮それだけでしょ。」

お生憎様。<sup>あいにく</sup>あたしはあんたの忠告通りには動かないわ。差がなくなつたら、戦つても面白くないでしょ」

「そうかなあ。オレとかすみちゃんつてだけで、充分差があると思うけど。それに、自分と同じ考えをするやつが相手だと、かえつて大変でやりがいがないじゃん」

「うっかり乗せられて堪<sup>たま</sup>るもんですか。ほんと、お節介もいいとこね。女の子にモテないわよ、お節介バカは」

「可愛くないのもモテないぜ。かすみちゃんのことだから、内部が通じないってことを利用するって言ふんだろ。顔に似合わず意地っ張りだからな」

「どうとでも仰い、<sup>おつこ</sup>バカ。あんたも《日向四天王》に寝首をかかれないうようになさいな。そういう意味なら、あたしの背中<sup>せなか</sup>は安泰よ」  
「三年全員が抜けても？」

一瞬その場に居た者の身体が固まる。

「そう。かえつて純粋なメンバーだけ残ったから、良かったくらいよ。」

いいこと、今度はあんたを倒すわよ、バカ総長」

「そりゃ楽しみだなあ。それなら次は現場に出向こうかな。でも、オレはかすみちゃんと違って、武闘派じゃないから、オレを殴りに

はくんなよ」

「失礼ね。人のこと、まるで野蠻人みたいに言って」

火花を散らし合う二人の間で、カズヤはおろおろしながらも、笑いを堪えるのに必死だった。

## 第7部：インターバル - 3（後書き）

先行記事＆物語の世界観解説を連載している作者のブログです。是非おいで下さい。

<http://blogs.yahoo.co.jp/alfradia>

また、日本ブログ村とアルファポリスに参加しております。お手数ですがバナーの1クリックをお願いします。



## 第7部：インターバル - 4（前書き）

本作品は、前作『約束された出会い』編の続編となります。先にそちらをお読みになられた方が、スムーズに作品世界観をご理解戴けることと思います。

<http://ncode.syosetu.com/n9537d/>

## 第7部：インターバル - 4

カズヤを間に挟<sup>はさ</sup>んで、信吾と日向はチクチクと嫌味を言い合っている。

結局は仲がいいんじゃないか。

その二人を見ながら、カズヤは口では「まあまあ」と宥<sup>なだ</sup>めながら、心の中では腹を抱えて笑っていた。

どうせ二人のことだから、自分たちの情報をぎりぎりまで流し、そして知恵比べをして楽しんでいるのだ。

ただ聞いているだけならおもしろい掛け合いだし、二人の根性は解<sup>と</sup>ってはいるのだが、事情を知って聞かされている方はハラハラして、落ち着いていられない。時にこの二人は、実は内通しているのではと、疑いたくなることもある。

シンナー騒動で捕<sup>つか</sup>まったと噂の空席を横目に、カズヤと梅津は休み時間を潰<sup>つぶ</sup>していた。

「そうそう、そういえばさあ、かすみちゃん、朝、日向に勝利宣言したんだって。オレ、もうちょっと早く登校すればよかったよ」

その信吾も、朝一番で日向とさんざんやり合っておきながら、さつさと早退などしている。

梅津は、取り敢えず世間話程度の《反日教》の話しか、教室ではしないようにしている。

この間の一件で、梅津も《反日教》の一員だと面が割れているのだから、今更という気がしなくもないが、学校まで来て物騒な話をするのも気が進まない。

「ああ、してた、してた。

まあ見ものって言えば見ものだけどさ、聞いているこっちは参ったよ。オレは関係ないのに、あいつら、オレを仲介にするっけ、結構氣イ遣<sup>や</sup>うんだよワ。

ところでさ、あいつらつて、結局仲が良く見えないか？」

「見えるよ。だって、二人とも頭いいから、同じレベルの人間同志で解り合っちゃってんだよな。ほら、同じ高<sup>たか</sup>処を飛ぶ者にしか、飛ぶ鳥の心は解らないってな。あのギリギリの駆け引きを楽しむ気には、オレはなれないんだよな……」

「ああ、解るわ、それ」

同じ高処を飛ぶ者。

アキラとサキの関係を、カズヤは何故か思い出す。男女の枠を越えた関係の二人の間には、絶対的な信頼があった。

しかしカズヤは、あのアキラの震える肩を知らないのだ。

「……おい、聞いてんのかよ、カズヤ」

「あ、ああ、悪い」

カズヤは我に帰った。

全くしょうがねえなあ、といった顔つきで、梅津は続けた。

「かすみちゃんのことだから、きつと何か思い付いたんだよ」

「そうかもな。ま、でも、オレには関係ないっけな、どっちがどうなるうとやア」

梅津が顔でカズヤに謝った。ついつい無関係を演じることを忘れてしまうのだ。

特に機転が利く、という頭の良さはまるでないのだが、言われたことを理解すれば、確実に行動に表せる誠実さと真面目さは、安心感を抱かせてくれる一つの要因にはなっていると、梅津はカズヤを、そう評価していた。

カズヤはさり気なく壁の時計を見て、「五時間目が始まるっけ」と言っつて、その場を離れた。

気分が悪いと言っつて、午前中で早退していた信吾だったが、実際

の彼はまるで上機嫌で、茂木接骨院で寛いでいた。

「かすみちゃん、せめて学校は行こうよ」

「いいのよ、モグリ。どうせクソの役にも立ちやしないんだから」

「いや、その口調でその『クソ』発言はどうかと……」

「ほつとしてちょうだい、オジさまは」

お茶とお菓子を片手に心配する茂木のことなどお構いなしに、信吾は紙と鉛筆を前に、これからの計画を練り始めた。放課後にここに集まるであろう、他の幹部メンバーに説明できるだけのものを準備しておかなくてはならない。その為にも学校を退ける必要があったのだ。

放課後、茂木接骨院に集まった梅津、加賀見、絵美、聡、そしてカズヤの面々は、当然誰も信吾のあからさまな嘘を見破っていた。

「どうせ具合悪くなんかないだろ」

「あら、酷い。どっからどう見ても病人じゃないの」

加賀美の第一声に、信吾は頭を抑えるふりをしてみせた

「いや、具合が悪い人間は普通自宅に帰るし」

冷めた梅津のツツコミに、信吾は普段の姿に戻った。

「なあんだ、誰も心配してくれてないの？寂しいわあ」

「当たり前だろ。どうせ何か思い付いたんだろうと思ってさ、な、

カズヤ」

「そうそう、昼休みに話してたんだよ、そう」

「あら、つまらない。しかもバレてるし」

信吾はふざけた。

「ま、いいわ。バレてるならこのまま続けさせてもらうけど、これからは長期戦になることを覚悟しててちょうだい。」

暫くはあたしと日向の知恵比べになるわ。待って、粘って、我慢させて、その勢いを一気に爆発させてぶつける。って言っても、日向は解ってるでしょうけどね。でも、どんな風に粘るかなんて、あ

いつでも解りやしないはずよ。だって、あたし一人の考えじゃないもの」

何気なく言っただであろつ信吾のその言葉に、一同は思わず顔を見合わせた。

「え、だって、今、日向とかすみちゃんとの知恵比べだって……？」

本当はそこに驚いたのではない。『あたし一人の考えじゃない』という件だ。それは今までの信吾からは考えられない台詞だつたのだ。

「いやあね。そんなに驚いた顔しないでよ。あたし、傷つくわよ」  
信吾は皆の表情を読んだのか、軽口を叩いた。

## 第7部：インターバル - 4（後書き）

先行記事＆物語の世界観解説を連載している作者のブログです。是非おいで下さい。

<http://blogs.yahoo.co.jp/alfradia>

また、日本ブログ村とアルファポリスに参加しております。お手数ですがバナーの1クリックをお願いします。

## 第7部：インターバル - 5（前書き）

本作品は、前作『約束された出会い』編の続編となります。先にそちらをお読みになられた方が、スムーズに作品世界観をご理解戴けることと思います。

<http://ncode.syosetu.com/n9537d/>

## 第7部：インターバル - 5

「この間ので思い知らされたのよ。」

あたしの思考回路は、とつくに日向に分析されてるわ。多分シンにもね。だからやり方変えてやるのよ。

だからね、あたしはあいつから聞き出せることを聞き出すだけ。あたしはそれをここにいるみんなにちゃんと報告するわ。そしてここにいる六人が集まって、《反日教》の脳みそになるの。あたしはその中の一部分を担当しているだけよ。

いい、粘る方法はここにいる全員、そして《反日教》全員で考えるのよ。その思考回路は連中には未だ分析されてないわ。そういう意味」

「けど、先輩……」

聡が躊躇<sup>ためら</sup>いがちな声を出した。

「聡の言いたいことは解ってるわ。ごめん《夏青葉》のことだけは言えないわ。それは隠し玉として取っておきたいの。解って。」

でも大丈夫、そのこと以外、今度はちゃんと思惑を全員に伝えるわ。今、《反日教》に残ってくれているみんなはすぐにでも反撃したそうだしね、長期戦になるって言わないと、大変なことになりそうなもの」

「その方がいいわね。一、二年とか、他の三年の窓口はわたしに任せて」

絵美が言った。

「なあ、せっかくの長期戦だったら、気休め程度にしかならないと思うけど、オレとその《夏青葉》で、みんなを鍛<sup>きた</sup>えるってのはどうかな」

加賀見が言った。「別に問題はないだろ。正体をばらすわけじゃない。ちゃんと顔は隠してもらっさ。でもコミュニケーションが取れているのといないでは、だいぶ違うと思うぜ。」



それに素人を鍛えるなんて、涙ぐましい努力をしてるんだ。正直、どうにかなるなんて思っちゃいないさ、オレだって。でも、《日向四天王》は目くじら立てるよりも鼻で笑ってってくれるさ。

それに《夏青葉》の実力を目のあたりにすれば、それこそ《夏青葉》の信頼回復にもなると思うんだよね。だって、うちの《夏青葉》は腕が立つし」

「……それもそうね。いい考えだわ。あたしの名前で区民体育館を借りましょ。公園なんかでやるより安全だし」

信吾は加賀見の提案を受け入れた。

「じゃ、絵美ちゃん、聡、今のことは大々的に伝えてね。別に《日向四天王》の耳に入っても構わないわ。いつそやる気を見せた方が、抜けた穴を気にしてないんだって、今を好機と狙われないですむから」

「了解」

黙っている《夏青葉》の周りで、話はほとんど拍子に進められていく。カズヤはそれで、一向に構わなかった。むしろその方が良かった。

何しろ、カズヤは本当の《夏青葉》ではなく、ただ《夏青葉》の格好をさせられているだけの者にすぎないのだ。

カズヤが《夏青葉》を演じるうえでのこだわりは一つ。「サキならどうするだろう」と考えないこと。自分は自分なのだということは、自分に責任を持つということだ。それは今までカズヤが他人に全て委ねていたこと<sup>ゆだ</sup>。

一同が解散した後、そこにはカズヤと信吾が残された。

「カズヤくん。あなた、全然聞いてなかったでしょ」

「え、あ、ああ」

信吾は、カズヤの前にコーヒーを置いた。

「その様子だと、さっぱりね。ま、いいんだけど。あなた、素人に

喧嘩の仕方を教えなきゃならなかったのよ」

「うん」

別に全く聞いていなかったわけではない。自分のすべきことはちゃんと聞いている。

苦笑しながら、彼はコーヒークップを両手に、膝を抱えて座った。

「ね、何、考えてんの？」

「いや、別に……」

「アキラちゃんのことでしょ」

「ん、いや、まあ……」

カズヤの返事は、何か釈然としないものが喉のどに支えているようで、いつまでもはつきりしなかった。

「な、未だ五月なんだよな」

「ええ、そうだけど、何故？」

「いや、ただ、何となく……」

信吾はそのカズヤの返事に「くすつ」と笑った。

「何となくって、嘘よ。本当は解ってるくせに」

信吾の言う通りだった。カズヤはちゃんと解っていた。

「転校して半年も経ってないのに、こんなことをしている自分が意外うなづなんですよ」

カズヤは頷うなづいた。

「カズヤくん、アキラちゃんに何も言っていないでしょ。もしかすると、前の学校の友達の誰とも連絡取っていないんじゃないの」

またまたカズヤは頷うなづいた。

自分が今やっていること、今置かれている立場を考えれば、連絡など取れるわけもない。

説明だつてできないし、信吾の魔の手が伸びたら困る。

「やつぱりねえ……。アキラちゃんと連絡取っていないのは、ある意味では正解かもしれないわね。だって、約束破ってるわけだし」

信吾は容赦なく言った。

「ま、そうさせたのはあたしだけだね。

それに、ほら、彼女と連絡取るのは難しいじゃない。アキラちゃん、電話出てくれないし」

信吾はカズヤの気持ちなど知って知らずか、ころころと手の甲を口元に当てて笑っている。

カズヤは無視してカップのコーヒーを見つめている。

と、信吾の笑い声が止まった。

「夏休み前には、決着が着くんじゃないかしらね」

黙るカズヤを前に、信吾はコーヒーを啜<sup>すす</sup>りながら、独り言のように言った。

カズヤは顔を上げた。

## 第7部：インターバル - 5（後書き）

先行記事＆物語の世界観解説を連載している作者のブログです。是非おいで下さい。

<http://blogs.yahoo.co.jp/alfraia>

また、日本ブログ村とアルファポリスに参加しております。お手数ですがバナーの1クリックをお願いします。

## 第7部：インターバル - 6（前書き）

本作品は、前作『約束された出会い』編の続編となります。先にそちらをお読みになられた方が、スムーズに作品世界観をご理解戴けることと思います。

<http://ncode.syosetu.com/n9537d/>

## 第7部：インターバル - 6

狙い通りに言葉に反応したカズヤを見て、信吾は妖しい微笑みを浮かべた。お人好しのカズヤは、面白いくらいに、思惑通りに動いてくれる。

「直接訊いても教えてくれないだろうからね、ピーチの出入りしてる店の予約データに侵入したの。そしたら六月の十七日に名前があったわ。人数は三人だったのに、角部屋の座敷とその隣の二部屋借り切って、周りに話が聞かれないようにする念の入れようよ。怪しいったらありやしない。ま、別の思惑もあるでしょうけどね」

信吾の最後の皮肉など、お坊ちやまのカズヤが気付くわけがない。「その日に行くのワ？」

下を向いたまま、呟くようなカズヤの問いかけに、信吾はまるで幼子のように頷いた。

「同時進行は難しいから、あたしは《日向》とのケリも、それまでに着けるつもりよ」

仕草も口調も女の子らしいのに、意志の強さや闘争心の強さは人一倍だ。巧く雰囲気<sup>うづま</sup>で隠しているのだが、もうカズヤは知っている。

「なあ、信吾」

カズヤは、前々から聞こうと思っていたことを、今聞くことにした。

「あのさあ、お前が《反日教》としてケリを着けたい相手って、《日向四天王》なんだろ。」

だってピーチとつるんでは《日向四天王》で、日向じゃない。ピーチが自分で日向のことなど嫌いだって言ってたくらいだから、そういう意味では無関係ってことになると思うんだ。

信吾、お前、日向のことは、本当はどうでもいいんじゃないのワ

？見てるとそんな気がしてくるんだ」

カズヤは信吾の顔を見ず、やっぱりカップを見つめたまま言った。

暫しの沈黙。

「あはつ、バレてたあ？」

信吾は黄色い声で、わざとらしく笑ってみせた。

厄介な相手だ。カズヤは大事にされすぎて育っているから、他人の事情の機微に疎いだけで、バカではないのだと、今更ながら気付かされる。

ここで下手にごまかそうとしたら、それは返って逆効果になる。

「バレてたら、本当のこと言わなくっちゃねえ。」

実際あたしもね、加賀見と似た口なのよ。

《日向四天王》を御し切れてないあいつは、総長として失格だし、そこはとも赦せないところよ。けどね、あいつの人柄は憎めないのよねえ。だって、アレでしょ。見たまんまのバカだし」

カズヤは顔を上げて信吾の顔を見た。その目は、「とうとう白状したな」と言っている。

「あ、でもね、あたしは決して内通はしてないわよ。あくまで、あたしはあいつらを倒す為にやってるんだから、この《反日教》を。そこは誤解しないでもらいたいわ」

「それは解ってるさ。『そこまで悪人じゃない』んだろ。そこは信じるさ。一応秘密をばらした仲なんだし。」

カズヤは苦笑した。彼は嘘はついていないかもしれないけど、裏切ることはしないんだと、直感がそう言っている。

「でも、これだけは教えてくれ。《日向四天王》とピーチと、ヤバい人たちとの関係。信吾がそれに拘る理由。別にお前一人が背負う問題じゃないだろ。」

「カズヤくん、あなたって、結構勘が鋭いわよね。無意識なんでし

ようけど」

信吾は少しだけ、困った顔を見せた。

「ピーチは暴力団関係の男と関わってる。《日向四天王》を使って、ヤツは学生相手にヤバイ薬を売って、その中間マージンを取ってるのよ。あたしはそれを偶然知ってしまったの。この問題は、誰も知らないわ」

カズヤは開いた口が塞がら<sup>ふさ</sup>なかった。手にしていたコップを落としそうになっただくらいだ。

「そんなの、警察に言えればいいじゃんか！」

それが正論だ。中学生の太刀打ち<sup>たちうち</sup>できる話ではない。まさに「信吾が一人で背負う問題」ではないではないか。

信吾は涼しい顔でコーヒ<sup>すず</sup>ーを啜<sup>すす</sup>っている。

「駄目よ。だって、ピーチのお兄さん、警察のエリートだもの。今の警察はいくら不祥事続きで身内にも厳しいとはいえ、ピーチだってバカじゃない。

あいつは巧く捕まらないような、ぎりぎりのラインで動いているから、お兄さんも弟の無実を信じちゃうのよ。そんなもんでしょ。

警察だって所詮は人間ですもの。悪意ない人間が身内を疑うわけないわ」

「そんな……」

カズヤは絶句した。そこまで判っているのなら、どうして頑張るというのだ。

「そんなもんよ。ピーチを簡単に捕まえさせることなんかできないのよ。

それにあたしたちが警察に通報したら、かえってあたしたちが目を付けられちゃうでしょ、教師たちに。それは面倒臭いからね、だから、未だ子供の《日向四天王》が、失敗してくれるのを待ってるの。尻尾を出さないなら、こっちが引き出すまでよ」

信吾はため息をついた。



「でも、警察があてにならなくても、どうして信吾がそこまで拘る理由があるんだ？」

カズヤは、信吾の燃えるような憎しみに充ちた眼差しを見逃さなかった。それは暴走したアキラ以上に、激しいものだった。

「自覚がないから、その勘の鋭さも厄介物なのよね。いいわ、あたしの生い立ちを話すわ。理由を知らされないままに手を貸す程、いくらなんでも、カズヤくんだってそこまでお人好しなわけないしね」  
信吾はコーヒーを飲み干した。

## 第7部：インターバル - 6（後書き）

先行記事＆物語の世界観解説を連載している作者のブログです。是非おいで下さい。

<http://blogs.yahoo.co.jp/alfraia>

また、日本ブログ村とアルファポリスに参加しております。お手数ですがバナーの1クリックをお願いします。

## 第7部：インターバル・7（前書き）

本作品は、前作『約束された出会い』編の続編となります。先にそちらをお読みになられた方が、スムーズに作品世界観をご理解戴けることと思います。

<http://ncode.syosetu.com/n9537d/>

## 第7部：インターバル - 7

信吾はゆっくり話し始めた。

「あたしはね、気が付いたら孤児院にいて、気が付いたら里親に引き取られていたわ。そしてそこで、女らしくと言うよりは女の子として育てられたの」

いきなり出だしからショッキングな話に、カズヤは後悔をした。これではアキラを怒らせた時の二の舞になってしまうではないか。「気にしないで最後まで聞いて。これはあたしなりの責任の取り方だから」

信吾はカズヤの気持ちを察したのか、そう言って話を続けた。

「でね、その里親つてのが碌ろくでなし夫婦でねえ、あたしのことを一人の男に売ったのよ。たしか幼稚園になった頃だったわ。簡単に言っちゃえば幼児モデル。でも対象は変態御用達しやうたしね。それ以上は勝手に想像してちょうだい。悪い方が正しいから」

カズヤだって、その言葉の意味が解らない年齢ではない。

「あたしを買った男は、純粹に子供が好きだからということ、趣味の一環としてその仕事をしていたわけじゃない。自分の支配欲を充たすことと儲けもうが同じ方向を向いていたから、あたしのことを買っただけ。」

あたしだって右も左も解らないような子供だったけど、あたしはそれがとつてもいけないことだと解っていたわ。

でもどうしようもないでしょ。力もないし、親だと名乗る人が、育ててやってるんだから食い扶持ふちくらい自分で稼げって言うんだし」カズヤは心の底から後悔していた。

こんな話を聞き出す為に、信吾と向き合ったわけじゃない。こんな話、聞きたくない。

「どついう経緯いきさつが判らないけど、あたしは警察に保護されて、里親夫婦は逮捕された。でもあたしを買った男は巧うまく摘発てきはつを逃れたの。どうしてかしらね、あたしはあの男の笑い顔を忘れられなかった。成人男性の笑顔が恐怖の形として刷り込まれてしまったのよ、トラウマとしてね」

だんだんと深い憎悪の色に満ちていく信吾の顔を、カズヤは正視できずに視線を落とす。

「また施設に戻ったあたしは、今度こそ本気で荒すさんだわ。みんながあたしのことを、不潔だつて言ってるような気がして、先生たちも陰で何言ってるのか解らなくて、もう誰も信じられなかった。

そこへ小学三年生のアキラちゃんが来たの。

カズヤくんは、アキラちゃんの一族の話は知ってるんでしょ。あたしはアキラちゃんに引き取られ、アキラちゃんの一族の一人として修業をすることになったの。

でもね、未だあたしは誰も信じられなかった。アキラちゃんのこととも信じていなかった。だってアキラちゃんたら、自分の名前も身分も明かさないうで、突然あたしを谷に送ったんですもの。彼女は身分を隠さなくてはならなかったなんて、あたしは知るわけないし。だから胡散臭うさんくさい女の子の子しか思ってたなかった。

でもね、チャンスは逃さないのがあたしの主義。素晴らしい能力を身に付けさせてくれるんだから、これを使わない手はないと思っただの。

彼女の一族の力を手に入れたあたしは、復讐を始めることにしたわ。修業を終え、あたしを手元に引き取ってくれたアキラちゃんの思惑なんか無視して、あたしは記憶を辿たどって男を探したわ。そうしたら、偶然出逢っちゃったけどね。

そいつつたら、こともあるうちに中学教師なんかしてるのよ」

カズヤの中で、何かが弾けた。

「ちょっと！ま……まさか、ピーチが……！」

「そういうこと。あいつは子供の一人なんて憶えていないけれど、あたしの身体は憶えてるわ。」

五年の時に、自分の復讐しか考えないで、アキラちゃんを無視して料亭に忍び込み、失敗した時に、またあの恐怖が甦よみがえったわ。身体が忘れられずにいるのよ。」

ま、その現場はアキラちゃんに救けられてね、怒られたわ。一人でやろうとするから、周りに迷惑をかけるんだってね。それで今度はアキラちゃんと《反日教》を起こして、多方面から攻めることにしたのよ。以上」

信吾はこの間の話を、詳しく話したただけだ。でもその顔は一つも笑っていない。この話は一つも笑える話ではない。

もう純粋な子供ではないカズヤには、信吾の受けた仕打ちがどういうことかは察しがついてしまう。幼稚園になるかならないかの子供が、順を踏まずに大人の世界に放り込まれたら、それは成長過程において歪ゆがませられてしまうことなど、容易に想像がつく。

これ程残酷な話があるだろうか。男でも女でも、大人だって愛情の入らない行為は相手を壊す。それが子供になど！

カズヤはテレビや本の世界以外では、こんな残酷な話、見たことも聞いたこともない。

「カズヤくん、前にも言ったけど、お人好しすぎるのも問題よ。こんな話しておいてなんだけど、他人の感情にのめり込み過ぎると、いつしか自分を取り憑つかれるわよ。アキラちゃんと付き合っていくつもりなら、心しておかないと。」

彼女も取り憑かれてるから、《夏青葉》ならそれに巻き込まれないで、自分自身を守らないとダメね。

《春霧霞・夏青葉》の本当の意味はね、彼女が壊れない為の守人なのよ。

《春》は彼女に共感し、自制して身動き取れない彼女の代わりに欲を具現する者。

《夏》は彼女を理解し、暴走して暴れる彼女を沈静化させる者なのよ」

黙るカズヤを見兼ねたか、信吾はコロコロと笑って言った。

そう、彼女の排他的な部分を共感し、彼女の代わりに憎しみをぶちまける者、それが信吾なのだ。彼が暴走するからこそ、アキラは暴走せずにいられるのだ。そしてアキラが暴走しない為には、信吾の方がアキラよりも激しくなくてはいけないのだ。

カズヤは《春霧霞・夏青葉》の意味を知らされて、サキにこの場に来てほしいと、本心から思ってしまった。

やはり自分には、アキラを好きになるだけの器がない。そんな後悔の念が、カズヤを苛<sup>さいな</sup>んでいた。

## 第7部：インターバル - 7（後書き）

次回から第8部：解けた方程式へを始めます。

先行記事＆物語の世界観解説を連載している作者のブログです。是非おいで下さい。

<http://blogs.yahoo.co.jp/alfraia>

また、日本ブログ村とアルファポリスに参加しております。お手数ですがバナーの1クリックをお願いします。



## 第8部：解けた方程式 - 1（前書き）

本作品は、前作『約束された出会い』編の続編となります。先にそちらをお読みになられた方が、スムーズに作品世界観をご理解戴けることと思います。

<http://ncode.syosetu.com/n9537d/>

## 第8部：解けた方程式 - 1

### 8：解けた方程式

五時間目の国語の授業中に、耳栓を詰めて数学の問題集を解いていたのがバレて、カズヤは立たされた。

「内申に書きますからね！」

「ああ、未だ下げる余裕があるんですか」

すぐに逆上する女教師に、思わず逆撫さかなでするようなことを、カズヤは口にした。

「取り敢えず内申下げる前に、先生、昨日の授業内容の確認をしてから、今日の授業を始められたら如何いかがなものかと思えますけど」

太った中年女教師の顔が、茹ゆでダコのように紅潮した。

「だって先生、昨日の授業の繰り返しに半分以上費やすだけならいいけれど、昨日と言っていることが違うじゃないですか。真面目に授業受けようと思っても、時間の無駄なんですよね。ほら、これ、昨日のノート。黒板丸写しですから間違いないですよ」

昨日取ったノートを女教師の目の前に示しながらも、自分が言い過ぎていることは、重々承知している。神森にいた頃に教えられた自由というものの意味を、まるで履き違えていることも解っている。しかし、ここでは人間と接しているような気がなくて、つい言うてしまうのだ。

怒りと恥ずかしさであわあわしている女教師などそのままに、白けた表情を露骨に見せて、カズヤは勝手に着席し、もう一度数学の問題集に向かい始めた。

そう、ここにいる鈴木和哉は、高校受験に全てを賭けている少年でなくてはならない。カズヤは鈴木和哉を演じなくてはならないのだ。

その数学も、実はやっているふりでしかない。頭の中は、本当の

《夏青葉》を演じ、その為にはどうすべきなのかを考えていた。

一つだけ、答は導き出されていた。

何とかして、《SIN》と手を結びたい。

これは、《反日教》を利用した、一大作戦だ。何としても、《日向四天王》の尻尾を引き出させなくてはならない。その為には、《SIN》を使って、彼らを追い詰めるしかないのだ。

策士には不向きな頭を使って、ようやくここまで考えたのだが、どうやって《SIN》と接触するか、そこでカズヤの頭は行き詰まってしまうていた。

昼休みに、「オレ、《SIN》と手エ結んだんだ」と、日向が《日向四天王》に自慢気に報告しているのが聞こえてきた。それが本当なら、何とかこれを阻止しなければ、《反日教》は目的を達成するどころか、行動を起こしたらすぐに潰<sup>つぶ</sup>されてしまう。

「まったく、あたしたちを動揺させようとしてるのが見え見えで、それがめっちゃムカつくのよねーっ！」

茂木接骨院に集まると、信吾はそのことで一気に捲<sup>ま</sup>くし立てた。

「ま、あたしが手を結ばうって言ったら、《SIN》はすぐにあたしらとも組むわよ。所詮そういう連中よ。でもね、あの日向の態度がムカつくーっ！」

加賀見は区立体育館の予約に行っていて、その場にはいない。かえってその方が良かっただろう。彼も結構激しやすい性格だ。

「別にオレたちはいいいんだけどさ、一、二年はどう思っかね」

梅津はチラリと聡を見た。

「ダメージは受けるでしょうね。ま、気力で乗り切るしかないでしょう。明日っから、加賀見先輩と練習もあることだし、考える暇ないですから」

それでも情報を隠しておきたいという、聡の気持ちが口調に現われている。

カズヤは立ち上がり、外に出ようとした。

「何処行くの？」

絵美がそんな《夏青葉》を見咎めた。

「加賀見の所。体育館の下見してこようと思って」

引き留めようとする視線を無視し、《夏青葉》はその場を後にした。

今日、何だかんだ話し合ったところで、何ら解決策は出てこないだろう。カズヤにはそんな気がしていた。

六人で一つの脳を形成すると言ったところで、結局は信吾の掌の上で遊ばされているにすぎない。カズヤですらそのことに気付いているのに、他のメンバーが誰も気が付いていないのが、カズヤには不思議でなかった。

第一、自分は飾り物の《夏青葉》でしかない。いてもいなくても、信吾の考えにさして変わりはないのだ。

抜け出しはしたものの、カズヤ自身に方針がないから、さっき一人で考えた作戦を実行する為に、彼は《SIN》の溜り場を歩き、シン本人を捜し歩いた。

よく考えてみれば、どのようにして《SIN》と手を結ぶ為の話し合いをしたらいいか、それすら思い付いていない。しかしそれは考えないことにして、歩くしかないのだ。ここで立ち止まったら、事なかれ主義の昔の自分に戻ってしまう。昔の自分は、もう止めると決めたのだ。案ずるより生むが易し。とにかく行動あるのみだ。

それにしても、どうして《日向》と手を結んだという《SIN》と、敢えて手を結ぼうなどと考えてしまったのだろう。カズヤは自分の考えたことなのに、その理由が自分自身で理解していなかった。それでもカズヤは歩くしかない。

結局方策など見つからなくて、カズヤは《SIN》の事務所の陰で、彼らが戻ってくるのを待っていた。取り敢えず、シン本人と、誰も交えずに話してみたかった。

最近瞬間移動をすることが増えて、その前段階の『遠見』が、確実にできるようになっている。それは移動先の場所を、移動する前に見ることができるといふもののだが、カズヤはその能力で、《SIN》の事務所内を観察してみた。

カズヤの間抜けなところは、その能力で、アキラや神森の友人のことを、少しは覗いてみようと思ったたりしないことだ。それがまた、善良なところでもある。

## 第8部：解けた方程式 - 1（後書き）

日本ブログ村とアルファポリスのランキングに参加しております。

お手数ですがバナーの1クリックをお願いします。

## 第8部：解けた方程式 - 2（前書き）

本作品は、前作『約束された出会い』編の続編となります。先にそちらをお読みになられた方が、スムーズに作品世界観をご理解戴けることと思います。

<http://ncode.syosetu.com/n9537d/>

## 第8部：解けた方程式 - 2

覗き見た事務所の中は至ってシンプルで、パソコンとファックス、あとは飲食の為の物以外の電化製品はない。屯している連中のバイク雑誌や勉強道具は雑多に散らばっている。

さて、どうしたものか？

室内をもう一度確認してみると、なんと親切なことに、ファックスに番号が貼られている。こんな有り難いことはない。

メールアドレスは見当たらないからパソコンは使えない。

カズヤはそのファックスを使うことを思い付き、ファックスサーバーをしている近所のコンビニに急いだ。

でもそのファックスは、シンその人が手にしなければ全く意味がない。ファックスを送信しながら、カズヤはシンがファックスの横に座ってくれることを祈った。

カズヤは当然知るわけがないのだが、シン以外は、送られてきたファックスを手にしたのだ。彼の仕事のものが含まれているという理由なのだが、ただ彼の正体がバレない為の工作かもしれない。大体、彼の部屋に勝手に屯しているメンバーが、彼宛のものを勝手に見るわけがない。

『九時五十三分発下り線の、一番空いている車両で会いたい。シン一人で来てほしい』

カズヤはファックスを送ってから、名前を書き忘れたことに気が付いた。

《夏青葉》くらい書いときゃよかったか。ま、いつか。この格好だし、すぐ向こうも気付くだろう。

カズヤは楽天的に考えると、シンが何と言うかを聞く為に、事務所のベランダに瞬間移動した。彼の遠見では、声を聞くことまではできない。隠れて声を聞く為には、ベランダまで行くしかない。



その場所からは、シンの後ろ姿しか見えなかったが、その姿は間違いなくシンだ。相変わらず室内でも、サングラスをかけて顔は隠しているようだ。

シンは送られてきたファックスを無造作に掴み取ると、一瞥しただけで無造作に丸めてごみ箱に捨てた。

おい　っ！

カズヤは思わず脱力した。あまりに酷すぎる扱いだ。

「何、どうしたのさ？」

「よく判らん営業ファックスさ。最近多いんだよ」

一人の問いに答えると、シンは神宮司の方を向いて、何やら合図を送ったようだった。

「おい、ごみ箱一杯じゃねえか。ったく、自分の事務所のゴミくらい、自分でまとめるよな。いつもオレがまとめてやってんじゃないか」

神宮司はそう言っただけで立ち上がり、今送ったファックスを捨てたごみ箱のゴミを、まとめ始めた。

「悪いねえ、いつも。ははは。A型人間は神経質だから」

シンはそうおちよくっていたが、カズヤはすぐに気が付いた。カズヤの呼び出しに応じたのは、シンだけではなく、神宮こと神宮司唯一もだ。

ま、いっか。

カズヤはもう少し様子を窺おうとしたのだが、神宮司がまとめたゴミを、ベランダに出そうとこちらに向かって来るではないか。カズヤは慌てて、上の階のベランダに逃げた。冗談ではない事態だ。

「誰だと思う、シン」

「かすみちゃんだろな。ヤツならやりかねない。オレらが『日向』と手を結んだと知った上で、わざとこういう行動を取ったんだろ。他のメンバーに見せ付ける為にな。で、場所を特定されない為につて言つか、溜まり場に迷惑かけないように、コンビニから送ってき

たんだろうな」

「オレもそう思う。行くか？」

「勿論。面白くなりそうじゃないか、両方で遊ぶのも」

神宮司と一緒にシンもベランダに出て、他のメンバーに聞かれな  
いような小声で話をしていた。

ラッキー。

カズヤは心の中で、ガッツポーズを取った。自分の思惑通りにシ  
ンが動いてくれたばかりか、こうして声が聞けたのだから。

それにしても、シンと神宮司は日向や信吾以上の策士かもしれな  
いと、カズヤは思った。咄嗟のシンの行動もそうなのだが、それを  
合図だけで理解する神宮司に、カズヤは感嘆した。《反日教》の中  
ではあり得ない。

今は九時を少し回ったところだ。もう少しで二人は出発するだろ  
う。

カズヤはその場を後にした。いくら何でも、動く電車の車内に瞬  
間移動をするわけにはいかない。ちゃんと切符を買って、改札を通  
って乗らなくてはならないのだ。

「それにしてもさ、差出人くらい書けってんだよ。なあ、シン」

事務所を抜け出した二人は、ヘルメットを脇に抱えて歩きだした。

「ほつとけよ。あいつは結構自分勝手だからな、もし判らなかつた  
ら、理解できない相手が悪いと思い込んでんのさ。ほら、行くぞ」

シンは歩きだそうとしない神宮司を促した。

「シン一人で来いってあったじゃないか」

「いいんだよ。リーダーのオレを呼び出すつてのに、あつちが盟主  
の《夏青葉》<sup>わあひ</sup>が来るんじゃないんだぜ。お相子さ」

シンは悪<sup>わる</sup>怖<sup>び</sup>れもせずに言った。

「それにしてもさ、空いてる車両なんて、漠然としたこと言うよな、  
かすみちゃんも」

「あいつはあれで、回りくどいことが好きなんだよ。困るんだよね、こっちはよ。大体、空いてる車両ってことは、その電車に乗るってことだし、適当に探すか」

「お前も結構いい加減だよな、シン」

「お相子さ、これも」

偉そうに笑うシンは、マスクまでかけた。顔はあくまで隠したいのだ。

## 第8部：解けた方程式 - 2（後書き）

日本ブログ村とアルファポリスのランキングに参加しております。

お手数ですがバナーの1クリックをお願いします。

## 第8部：解けた方程式 - 3（前書き）

本作品は、前作『約束された出会い』編の続編となります。先にそちらをお読みになられた方が、スムーズに作品世界観をご理解戴けることと思います。

<http://ncode.syosetu.com/n9537d/>

## 第8部：解けた方程式 - 3

一方カズヤは、これもまたサングラスをかけ、物凄く近寄りがたい雰囲気を作って、電車に乗り込んだ。

鈴木和哉である為のくせっ毛の強い髪を脱ぐと、不意ながらその髪は殆ど銀色に近い白髪に脱色してしまっている。その髪を逆立てて、全身レザーで固めていれば、一般人は怖がって、その車両から離れていく。つまり、《夏青葉》のいる所が一番空いている車両になるのだ。

カズヤがこの電車を指定した理由はちゃんとある。この電車は最寄り駅で特急の超越しの為に、五分間も停車していてくれる。

広い車内に《夏青葉》一人。身長が百八十センチを超す大男が、大股広げて車内に陣取っていれば、一度その車両に足を踏み込んだサラリーマンも、思わず違う車両に移動してしまうほどの迫力がある。

外までシャカシャカと音漏れさせて聴かないジャンルのハードな音楽を聴き、ふてぶてしくガムをくちやくちやと噛みながら、濃いサングラスの内側で、カズヤは神宮司一人が車内を歩いて、いるはずもない信吾を捜しているのを見ていた。

早く気付いてくれ〜〜

あくまで演出の為とはいえ、聴きなれない音楽で頭が痛くなってきたカズヤには、神宮司が救世主に見えてきた。

でもあの神宮司の様子では、《夏青葉》に化けた自分の前を素通りしかねない。

カズヤは腕組みをし、俯いたまま神宮司が自分の前を通るのを待った。

しかし一番空いている車両と条件を出したのだ。現状に気付かないわけではない。

その足が自分の前で止まったのと同時に、に、《夏青葉》もその歩みを遮るさへぎように長い足を出した。

「オレは、シン一人で、と書いたはずだったが」

神宮司は想定外の人物に驚きの表情を少し見せたけれど、それはすぐに不敵な笑みに変わった。

「差出人不明のファックスは、お前だったのか、《夏青葉》。わざと名前を出さなかったか、ただのおっちょこちょいなのか」

声色をちよつとだけ変えただけで、神宮司はカズヤには気付いていないようだ。

取り敢えず第一関門は突破だ。

スミマセン……おっちょこちょいだったんです。

その言葉は当然言えるわけがない。

「話は何だ？」

《夏青葉》は、神宮司の問いには無言で答えた。

「解ったよ。シンにしか話さないってんだろ。リーダーなんてそんなもんさ。うちのなんか顔隠しっぱなしだし、まあ、用件は粗方見当ついてるしな。待ってる」

別に気分を害した様子もなく、神宮司はシンを呼びに戻った。

「はあ」とカズヤは小さくため息をついた。ばれるんじゃないかと緊張して、心臓の音が外まで聞こえてしまいそうだ。できることならもつと大きく「ぼへっ」つとため息つきたいところだが、見られては失敗なので我慢する。

暫くして、シンが神宮司と共に現われた。

「これは意外だったな、《夏青葉》。取り敢えず、初めましてかな」シンは口の端を僅かに上げて、皮肉めいた笑みを作ったのだが、それはマスクの下に隠れていて、《夏青葉》から見えるわけがない。「お話を伺う前に、お顔を拝見させては戴けませんかね。以前も隠

していらつしゃってたし」

カズヤだったら『見せてあげるから仲良くしてね』と喜んで顔くらい見せてあげたいところなのだが、今は《夏青葉》だ。顔すら駆け引きの道具にされている。

「自分のことを考えてから言ってもらいたいね。ヘルメットを脱いでりゃいいってもんじゃないだろう。」

それとも、お風邪でもお召しになられましたかね」

《夏青葉》は、努めて無愛想に言った。

「たしかに。たしかにそうだ。乗ってくれるわけないよな」

シンはハハハッと大声で笑ったものの、少し考え込んだ。

「オレはあんたが顔を隠すなら、オレも見せるつもりないね」

お前に考える余地なんかあるのかよ、とばかりに、《夏青葉》はシンに言った。

「お前さん、かすみちゃんに言われて来たのか？」

《夏青葉》は首を横に振って否定した。

「じゃ、あいつは何も知らないんだな。」

……よし、他言しないと誓えるな」

「何だか解らないけど、お互い交換条件みたいなものかよ。まあいいだろう」

《夏青葉》は安請け<sup>やすけ</sup>合いした。

そんなにあっさりシンが顔を見せるとは思ってもいなかった。だから自分も素顔を見せることもないだろう。

しかし、神宮司だけは顔色を変えた。

「シン、お前、まさか……！」

神宮司が大きな声を上げた。

「いいんだ、神宮。オレはかすみちゃん抜きで、こいつと話がしてみたかったんだから、今後の為に」

咎<sup>とが</sup>めるような眼差しの神宮司を制すると、シンは次の駅で降りるよう、顎<sup>あご</sup>で示した。



特急通過待ちをしていた電車はとつくに動き始めていたし、何れにしる次の駅なら隣の県に移っているから、双方の勢力から多少は離れる。つまりは顔を出しても危険度は低くなるというわけだ。

無言のまま次の駅まで約十五分。

電車の扉が開き、三人は下車した。

「ま、これで、三つの勢力の方程式が解けるわな」

ホーム外れの暗い所で、シンはマスクを外し、次いでサングラスを取った。

その目をじつと見て、カズヤは息を飲み、それからシンを指差して大声を上げた。

## 第8部：解けた方程式 - 3（後書き）

日本ブログ村とアルファポリスのランキングに参加しております。

お手数ですがバナーの1クリックをお願いします。

## 第8部：解けた方程式 - 4（前書き）

本作品は、前作『約束された出会い』編の続編となります。先にそちらをお読みになられた方が、スムーズに作品世界観をご理解戴けることと思います。

<http://ncode.syosetu.com/n9537d/>

## 第8部：解けた方程式 - 4

「なななななつ、なんだよつ、お前はっ！」

「そつ、その声！どうしてお前があっ！」

駅の外れで、二人はお互いを指差し合って絶叫した。

「お前、それ、鬘かつらか？」

《夏青葉》は、シンの髪を引っ張った。

「違つよ。あつちが鬘。これは地毛。痛えなあ、もう。ちつたあ、加減しろよな。きみこそ、ナニ派手に脱色してんだかなあ」

「煩うるさつせえ、ほつとけよ。」

「つつか、無免許だから、バイクに乗れないだけじゃねえか、お前。何、格好いいこと言つて、神宮司の後に乗つてんだよ」

「んなこと、どうでもいい。オレは、きみだけは……、きみだけは本当に信じてたのに。アキラとの約束守つて……」

サングラスをお互い取つて、二人が大声を上げたのにはわけがあった。

そこにいたのは黒髪の日向。

そして銀髪のカズヤ。

日向は明らかに動揺していた。目の前にカズヤがいるとは思っていなかったのだ。

「アキラか……。つて、どうしてアキラとオレの約束を、お前が知つてんだ？」

「……お前、やつぱは信吾とつるんでるな！」

アキラとの約束のことは、信吾以外は話していないことに、カズヤは気が付いた。

黒髪の日向は、頭を抱え込んだ。

「……この、日向〃シンの方程式を知つてんのは、神宮、かすみち

やん、そしてきみだけだよ、カズヤ。

この方程式を解いたきみには、もれなくオレらの計画に協力する義務というご褒美があるんだな」

「どんなご褒美だよ」

シンの格好のまま、日向は例の軽い口調で話し続ける。

「まあまあ。ってことで、きみの話は解決したんじゃないか。だって、きみ、シンと手を結びに来たんだろ、どうせ」

どうにも釈然としないカズヤは、懔然とした表情を隠そうとしない。

「要するに、オレはお前と信吾の芝居に乗せられただけなんだな」

「そうでもないかもよ」。まさかかすみちゃんは、きみが動くとは予測してなかったろうし」

日向はため息をついた。

「本当のところ、まさか《夏青葉》が乗り込んでくるとは、オレも思ってたな。だからここで顔を見せるつもりもなかったし、最後までオレとかすみちゃんは、カズヤも《夏青葉》も騙し抜くつもりだったんだよ。

オレは面倒臭かったから、ま、いつかと思って今、顔を出したんだけど、まさかきみがなあ……」

「つつーか、日向さあ、信吾とつるんでながら、オレが《夏青葉》やってるって、知らされてなかったのかよ」

日向は頷いた。

「だって、相手かすみちゃんだし。あいつは結局自分勝手だから、自分の作戦を最優先してるんだよ。オレのことも、きみのことも、所詮は自分の手駒くらいにしか思っていないんじゃないの」

日向は神宮司の方を向いて、肩を竦めてみせた。

「というわけだ、神宮。かすみちゃんにやられたよ、二人揃って。オレ、こいつと少し話してから帰るからさ……」

「はいはい。取り敢えず、二人とも目立つから、ここも離れた方がいいと思うぜ。《日向四天王》はこの辺も荒らしているんだしさ。

いつそ終点まで行っちまえよ。じゃな」

神宮司はそう言つと、隣のホームに走って行つた。

神宮司の勧めに従つて、二人は下り電車に乗つて、終点まで行つた。そこまで行くと、県も二つ目だ。

そこから少し歩いて、二人は国道沿いのファミリーレストランに入つた。そこまで、二人は無言だつた。

「ピーチの本当の姿のことは、神宮は知らないんだ。神宮が知つてんのは、日向は《日向》を潰す為にいるということだけ。《反日教》のことは、ただ単に、内申を盾に取つて生徒を締め付ける教師に対する反抗くらいにしか思つてないんだ。だから神宮には《反日教》の連中が甘つたれてるように見えて仕方がないのさ」

「そりゃあ仕方ない」とカズヤは笑つた。

「だろ。ま、そう思う神宮の気持ちも解らないでもないけど、オレとかすみちゃんにとってはどうでもいいことかな。オレらはピーチを潰すことが目的なんだから」

日向の前には、甘い白玉ぜんざいがある。

「お前も冷たいよな。信吾のこと言えないじゃないか」

「それを言ってくれるな。これでも悪いとは思つてるんだ、オレは」  
「しかもぜんざい二杯目だ。どんだけ甘党なんだとっつこみたくもなる。」

「ふーん。でも、そのピーチのことだけど、信吾は一人でやるつもりらしいぜ」

「そうじゃないんだ。オレがやれないだけなのさ。オレは日向として、《日向四天王》をボロが出るように操つて、かすみちゃんが動きやすいようにしなくちゃならないんだ。オレがそれをしないでピーチにかまけてたら、四人がオレの秘密を暴いちゃうだろうし。」

大体、あの連中はことあるごとに自分たちは自由だと言つけど、

あいつらの言う自由なんて、あれは自由なんじゃない。自分は縛られたくないってのは解るけど、あいつらは、逆に自分の法で縛りたいんだよ。ただの我儘わがまま小僧みたいなもんだ。大人だったら支配欲の塊だよなあ。

でも、そんなんでもついていく人間が不思議という。こっちには理解できないけど、よくありがちなパターンさ」

日向は惜しげもなく種明かしを続ける。

## 第8部：解けた方程式 - 4（後書き）

日本ブログ村とアルファポリスのランキングに参加しております。

お手数ですがバナーの1クリックをお願いします。



## 第8部：解けた方程式 - 5（前書き）

本作品は、前作『約束された出会い』編の続編となります。先にそちらをお読みになられた方が、スムーズに作品世界観をご理解戴けることと思います。

<http://ncode.syosetu.com/n9537d/>

## 第8部：解けた方程式 - 5

日向は更にぜんざいを頼んで話を続ける。三杯目ともなれば、店員もカズヤも露骨に驚きの表情を見せるが、日向は動じた風もない。

「支配たてまつし奉られる側は、孤独だよ。それが善でも悪でも同じ。その辛さが本能で解る連中は、支配される方が楽であることを知っているものだ。

そこへ『自由になりたい』だの『誰の支配も受けない』なんて格好いい青い台詞せりふ吐く我儘小僧が現れてみ。担かつぎ上げれば自分もお零こぼれに預かれるわけ。正論か過ちかはどうでもいいわけだよ。自分が気持ち良ければいいんだからさあ。

稀まれに本当の一匹狼がいるけど、勝手に担かつぎ上げられて旗印にされたら、そいつは迷惑だろうねえ。

でも我儘小僧のくせに立ち上がるだけの根性のないやつは、いつだって宿主しゅしゅを捜してるもんさ。自分の我儘を正当化してくれる青い台詞を吐いてくれるやつをね」

これが《日向》の総長としての日向の本音なのだろう。彼はそれを解っているから青い台詞を吐き、幻想を見て群がる我儘小僧を従えているのだ。

「大多数の人間の本質は、支配する側とされる側という構図なのさ。それ抜きで生きていける程強くはない。本来人間は群れで生きる動物なんだろうな。」

ま、そんな話じゃなかったな」

日向は一瞬熱しかけた話を取り下げた。

真面目に日向独演会を聞いていたカズヤは、敢えて自分の思っていることをぶつけてみた。

信吾の時は予想外の話に伸展してしまつたが、今回はそうなつても動じない心構えをして。

「日向さ、アキラも信吾もそうだけど、やっぱりお前も、他人をゲームの駒程度にしか思つてないだろう」

「カズヤさあ、四月に初めて会つた時と比べて、随分冷静に他人を見られるようになったなあ。悪く言えば、あまりお人好しじゃなくなつちやつたなあ。寂しいなあ。残念だなあ」

口にスプーンを咥<sup>くわ</sup>えているから、日向の笑い声は『いひひ』だつた。

「お人好しお人好しつて言われるけど、要するに鈍感だつて言つてゐるんだろ。ずつと言われてきたから、言葉に隠しても判るんだよ、こつちは」

カズヤは言い返した。

「そうじゃない、本当のことだつて。何、捻<sup>ひね</sup>くれてつかなく」

日向は真面目な顔で続けた。

「解つたよ、ちゃんとオレのことを話すよ。

たしかにきみの言う通り、オレは他人を信用したことなんか、殆<sup>ほとん</sup>どない。人間なんてあまり好きじゃない。ホント、自己中心的で、自分勝手に、利己的で、うんざりしてくる」

「じゃ、お前のしようとしてゐることは、一体何なのさ、日向」

「オレだつて一応人間だからさ、見てるんだよ、嫌な人間と、そうでない人間を。」

だつてオレだつて人間だし、そんな自分を肯定したいし、人間で良かったって思いたいじゃん。それを邪魔してるのが、ピーチみたいな人間のカス野郎さ」

カズヤは、日向の言いたいことが、何となく解つていた。

人間嫌いなくせして、一番人間らしい人間。よく知っている人間もそうだった。

「日向さあ、政治家とかつて、すごく赦せない性格だろ」

「あ、あんなの、カスだね、人間の」

日向は吐き捨てるように言った。

「昔のオレは、無条件に人間という存在そのものを憎んでいたな。勿論きつかけというものがあつたからだけど、とにかく自分を含めた人間が憎かつた。それがここ二、三年で変わって、人間は大きく二つに分けられると思えるようになった。要するに、善人と、悪人ってね」

喋りすぎで喉が渴いたか、日向は今度は緑茶を啜すすって続ける。

「大抵の人間は、百パーセント善人でも悪人でもなくて、両方の要素を持っているもんだと思うんだ。何か問題が起こったその時に、どちらの割合が多くなるかが重要ってこと。」

例えば梅津。あいつは善人ではあるけれど、弱い人間だから、オレとアキラでカマかけて、追い詰めてみたんだ。思った通りに、本当の自分が表に出てきたな。それでオレはあいつを信じることができようになったわけだ」

日向は本音を続ける日向に、カズヤは質問をぶつけた。

「日向は、自分自身をどういう人間だと思ってるんだ？」

「オレか？オレは人間じゃないと思う」

「え？」

一瞬理解しがたい返事に、カズヤは戸惑った。

「さつきも言ったけど、人間は正の感情と負の感情を同時に持ったもんだろ。オレが赦せないのは、悪意を持って他人を苦しめたり悲しませたりして正の感情を抱く人間や、自分のことしか考えられなくて、悪気なくても他人を踏み台にして正の感情を得ようとする人間なんだ。」

けど、オレは正の感情が湧いてこないんだ。

腹立てて、憎んで、それくらいしか自分の感情が認識できないんだ。正の感情を、自分自身で抑制してるみたいなんだな。

オレはピーチみたいな人間が赦せないから潰したい。けど、潰したからって嬉しくも楽しくもない。

オレも平凡な人格が欲しいよ。善くも悪くも感情に振り回されるような平凡さがね」

乾いた笑い声を立てる日向に、カズヤは惚れた人物を思い出す。言っていることが、同じといってもいいくらいに似ていたのだ。

ずっと一人で話しておいて、日向ははたと気付いたように質問してきた。

「ところで、カズヤはどうして《夏青葉》やってんだ？きみ、偽者だろ」

「日向、本物を知ってんのか？」

はつきり偽者と言われると、かえって反論したくなるのは人情だ。

## 第8部：解けた方程式 - 5（後書き）

日本ブログ村とアルファポリスのランキングに参加しております。

お手数ですがバナーの1クリックをお願いします。

## 第8部：解けた方程式 - 6（前書き）

本作品は、前作『約束された出会い』編の続編となります。先にそちらをお読みになられた方が、スムーズに作品世界観をご理解戴けることと思います。

<http://ncode.syosetu.com/n9537d/>

## 第8部：解けた方程式 - 6

「オレはアキラじゃないから判らないさ」

日向はあっけらかんと言つてのけた。「けど、《春霧霞・夏青葉》はあいつの守人<sup>もりびと</sup>だけど、逃れられない苦しみを持つている人間で、アキラがその苦しみから解放する役目を負つてゐるんだって話だったからさ」

たしかに、自分には『逃れられない苦しみ』なんて大層なものはない。

「ふーん。信吾はそんなことは言つてなかったな。あいつはオレのことを《夏青葉》に育てるつて言つてたんだ。本物かどうかなんてアキラにしか判らないからつて。多分そういうことだから、そのキーワードをオレにも誰にも言わなかったんだろうな」

今更策士信吾に対して怒りも何も湧き上がるわけもなく、ただ苦笑が自然と浮かぶ。

「そつかあ。で、何で引き受けたのさ？」

「別に。お前らが梅津にカマかけたつて言つてただろ。オレは自分で自分を追い込んでみただけさ。

嫌なことから目を逸<sup>そ</sup>らして、事なかれ主義の鈍感な甘えん坊つて言われ続けてさ、それももう終わりにしなくちゃなつて思つただけだよ」

さんざん本音を聞かされた後だ。カズヤだつて本音の一つも出てきてしまう。

「別にいいじゃんか。無理にそんなことしなくてもさ。鈍感じゃなくて、純粹だつて考えたらいいのに」

「日向つてさ、いいやつだつてことは解つたけど、何もそこまでオレを善く思おうとすんなよ」

「そついうわけじゃないんだけどな」

意に染まぬ褒め殺しは苦痛以外の何物でもない。カズヤは話題を



変えることにした。

「ところでさ、お前、ダブってないよな」

「はあ？」

日向は素<sup>す</sup>頓<sup>とん</sup>狂<sup>きやう</sup>な声を出した。

「だって、何で高校生の勉強が解るんだ？」

「あ、ああ。オレは勉強が好きなんだよ。誰にも迷惑かけずに、自分だけの為になれるじゃんか。それにできると気持ちいいし、没頭できるしさ」

「羨ましいよ、そう言えるなんて」

カズヤは、勉強が好きだといった日向が、一番人間らしくなく感じた。

「ところで、日向も信吾から、これからの予定を聞かされてんだろ？」

「ピーチを喉けるって話だろ。たしか六月十七日だってことは聞いたけど、任せてるから詳しくは知らないんだよ。それに、あいつは教えたがらないし」

「あ、そっか。信吾、結構秘密主義だもんな」

「そうそう。そうだ、かすみちゃんに伝えてくれ。全面対決は、六月の十日にしようって」

「了解」

「じゃ、行くか。一緒に帰るわけにはいかないからな、オレは神宮を呼び出すよ。カズヤは一人で帰んな」

「おい、伝票！」

「いいってこと。聞きたくもない話に付き合わせたのはこっちだし、きみはいつも正直だから、嘘つきのオレがお詫びをかねてご馳走してやるよ。それにオレは三杯も食べてる」

日向は伝票をひらひらさせて、さっさとレジまで行ってしまった。  
「おいってば！」

「こつちは領収書で節税対策。気になるなら、全部解決したら、何かご馳走してくれよ。それでいいだろ。ほら、電車もあることだから、さっさと行けって」

有無を言わせないような日向の行動に、カズヤは甘えることにした。たまにはいいかもしれないし、ここで彼と別れられるということとは、瞬間移動で帰ることができるということだ。

「じゃ、今回はサンキュ」

カズヤは駅に向かって歩き出し、途中で瞬間移動で家に帰った。

考えてみたら、この争いは奥がすごく深い。とてもカズヤでは対応しきれない問題を孕<sup>はら</sup>んで、日向と信吾は前へ進もうというのだ。

信吾も一人では処理しきれない痛みを持っている。

日向は一生自分で自分を傷付け続けるだろう。そして誰も、彼自身が付け続けるその傷を癒すことはできないだろう。

癒せない傷を負ったことのないカズヤは、自分の幸せを恥じる気持ちにすらなってしまうていた。

幸せは恥じるものではなく、感謝しなくてはいけないというのに。

翌日の放課後、茂木接骨院に《夏青葉》として行ったカズヤは、入るなり言った。

「かすみちゃん、みんな、《SIN》と話つけてきた」

「えーっ、お手柄じゃない！で、どうだった？」

絵美は手を打ってはしゃいだ。《反日教》のメンバーのまとめ役の彼女ですら、本当のことは何も知らないのだ。

「《日向》は六月十日に全面对決を考えているらしい。《日向》と手を結んだのは、彼らを油断させる為で、《反日教》と趣旨は違うけど、《SIN》の相手は《日向》であることは変わらないから、現実には《日向》と手を組むつもりはまるでないそうだ」

これから体育館にいく為に集まった他のメンバーも、この報せに沸き立った。

「以上。十日まで、加賀見とオレと訓練するからな、みんな」

《夏青葉》はそう言つと、信吾を強引に外に連れ出し、人気ひとけのな  
い所まで来てから瞬間移動で自宅に連れ込んだ。

「オレが何したのか、聞きたいよな、信吾」

「……」

信吾は無言でカズヤの目を見ていた。敵意のある眼差しではなかつたが、勝手なことをするなと言いたそうな眼差しではあつた。そして信吾は表情を見られないように顔を背けた。

「お人好し扱いについての隠しごとか」

「……」

「結局誰にも真実は言わないんだ」

「……」

「シンも日向もビビってた。当然だよな。信吾、お前が一番の悪人だ。あいつは、本当のことを全部話してくれたよ。本音までな」

「……」

信吾が何かを言えるわけがない。六人で《反日教》の頭脳になるなんて言つたことすら嘘なのだから。

## 第8部：解けた方程式 - 6（後書き）

日本ブログ村とアルファポリスのランキングに参加しております。

お手数ですがバナーの1クリックをお願いします。

## 第8部：解けた方程式 - 7（前書き）

本作品は、前作『約束された出会い』編の続編となります。先にそちらをお読みになられた方が、スムーズに作品世界観をご理解戴けることと思います。

<http://ncode.syosetu.com/n9537d/>

## 第8部：解けた方程式 - 7

「責める気はないさ」

詰なまれる覚悟はできていたのに、違う言葉が聞こえてくる。

「ただ、今度こそ三人で話し合うべきじゃないか。メンバーの失敗を誰がフォローするんだ？」

お前たちのやりたいことを手伝うことと、お前の駒になることと意味が違うことくらい解るだろう」

「……カズヤくん、あなた、変わったわね」

腕組みし、厳しい顔をするカズヤの目を見て、信吾はようやく口を開いた。「勿論、良い方によ」

それだけ言うと、彼は窓の外へ身を投げるようにして、茂木接骨院へ戻って行った。

「《反日教》が実戦に備えて頑張ってるの、知ってます？」

テルヒは日向と話していた。

「勿論。テルヒのことだから、相手にならないと思ってるだろ。でも、侮あなるなよ。かすみちゃんと《夏青葉》は、自分一人だけなら強いからなあ」

「当然、あの二人を侮あなってなんかいません」

「違う違う。《反日教》のメンバーが、少なくともその二人に迷惑をかけないくらいになっちまうと、あの二人の強さが増すってことが問題なんだよ」

「解りました、侮あなったりはしません」

口では日向に従いながらも、面めんじゅう腹背のテルヒは、《反日教》の思惑通りに、やはり侮あなっていた。

「でさ、六月十日くらいに稽古つけてやんなよ。こっちの都合とやつらの体育館の予約状況からすると、十日くらいがいいと思うんだ。オレもその時には行くから」

テルヒは、日向がその場に赴く<sup>おもむ</sup>ということに少し驚いたが、それを顔に出したりはしなかった。

「解りました。車を準備しましょう」

そう言つて、テルヒは日向の前を辞した。

「で、こちらの仕入れた情報だと、十日、ここから帰る途中に、『日向』は稽古を付けてくれるそうだ。少なくとも実戦経験のある加賀見やかすみちゃん、オレは、『日向四天王』相手も負けるつもりはない。あとはみんなが自分のことだけでもできれば、『反日教』は負けない。ということで、頑張ろう！」

『夏青葉』は、体育館に集まった三十人弱の『反日教』のメンバーを前に、堂々と声を出した。

ここにいる全員の能力は、全て把握しているつもりだった。これから三人で話し合う為に。

三人。

この戦いの本当の意味を知っている、信吾、日向、カズヤ。

彼らはそれぞれ属するメンバーの目に触れない場所、カズヤの自宅に集まっていた。

「オレ、当日に正体を明かそうと思うんだ。これ以上『反日教』を動揺させて、三年が抜けた時のようにしたくないんだよね」

カズヤは他の二人を前に、自分がしたいことを言った。

「大丈夫かよ。だって、作戦自体がどんでん返しの連発なんだぜ。

余計動揺しちまうかもよ」

「じゃ、辞めるか」

「誰も、辞めろとは言つてないじゃん」

信吾は黙ったままだ。

「『夏青葉』がそうしたいなら、そうすりゃいいんだよ。オレらは事前に知ってれば、いくらでもフォローはできるし」

日向は言った。

「カズヤ、お友達に夜ご飯、食べてってもらいなさい！」

台所から、カズヤの母親が大声を出した。

「困ったなあ、オレ、失礼させてもらうよ。好き嫌い多いからさ」

「あたしも」

二人は立ち上がった。

「かすみちゃんに残ってくれよ。小母さんおはのことだ、もう作ってくれてるだろうからさ」

日向は信吾の肩を押し、座らせ、手を合わせた。「頼む、オレの代わりに残ってくれ」

信吾はため息をついた。

「大悪人だから、今更いづらいのよ、あたしだって」

「おお、そうだ。大悪人だから残れ。それで全部水に流してやろうな、カズヤ」

「そうそう、助かるよ、そうしてくれると」

カズヤはそう言うと、「母さん、一人用があるから帰るって」と、信吾を座らせたまま、日向を玄関まで送った。

「なあ、どうして日向が《夏青葉》じゃないんだろね」

カズヤは何気なく言った。

「さあな。アキラの気分だろ。オレの知ったこっちゃないさ。小母さん、ごめんなさい。これから塾なもんで。お邪魔しました」

肩を疎めてみせたところに、カズヤの母親が見送りに現われた。

「また来てちょうだいね。あ、そうそう、信吾ちゃんは嫌いなもの、あるかしら？」

「ないですわ」

カズヤの母親は、まるで息子たちの苦悩を知るわけがなく、楽しそうに台所に戻っていった。

「いいお母さんだな」



「まあね。楽天的なのが、オレに似てるかな。全部終わったら、母親の手料理をご馳走するよ」

「って、カズヤ、この間の奢りおごをそれで消化するつもりか」

「バレた」

「……バレバレじゃん。ま、いいけど。じゃ、作戦通りってことで、かすみちゃんの機嫌、取ってやってくれよ」

「了解」

「ところでさ、《SIN》って、本当はどういう意味なの？」

「すっげえ（Super）インテリ（Intellectual）な人間（Ningen）の略」

「はあ？」

「まあ、気にすんな。オレの名前だよ」

日向は気楽に帰っていき、カズヤが信吾の機嫌を取ることに苦勞したのは、言うまでもなかった。

## 第8部：解けた方程式 - 7（後書き）

文中、どうしてもルビが上手にふれていない箇所がありましたこと  
をお詫び致します。

次回から第9部：予想外〜を始めます。

日本ブログ村とアルファポリスのランキングに参加しております。

お手数ですがバナーの1クリックをお願いします。

## 第9部：予想外 - 1（前書き）

本作品は、前作『約束された出会い』編の続編となります。先にそちらをお読みになられた方が、スムーズに作品世界観をご理解戴けることと思います。

<http://ncode.syosetu.com/n9537d/>

## 第9部：予想外 - 1

### 9：予想外

六月十日、土曜日。快晴。午前の便最後の新幹線が駅に滑り込む。たくさんの修学旅行生が、大きな荷物を抱えて降りてきた。

「わたし、絶対東京の大学受験するわ！」

その弾んだ声は、とても懐かしい声。

「まず、昼メシだっちゃ。オレ、動けないよワ」

「ああ、もう始まった。ポンの腹減った攻撃。脳みそ胃袋でできてるじゃないのワ。さっきあたしのお菓子、あげたっちゃ。しかも全部食べちゃったし」

「まあまあ。ポンの食い意地は重要なんだぜ。オレらが暴走しそうになった時、ブレーキになってくれるんだっけ」

「ねえ、どうでもいいけど、ボクは日本一怖いジェットコースターに乗りたい」

他でもない、コメチ、ポン、ナミ、サキ、シキの、神森中残留組だ。

「でも、メインはアレよ。忘れないでね」

「勿論！」

コメチの仕切りに、一同は密ひそやかに笑った。

初日の自由行動のラストが、五人のメインなのだ。

「けどやあ、カズヤは連絡先知ってつけいいけど、アキラはとうとう見付からずじまいだったなあ」

「ま、ね」

ポンは天を仰ぐようにぼやき、コメチは鼻で笑った。

「あの娘こらしくっていいじゃない。あれで、嫌あどくさわれて後腐れないように出て行こうなんて、一生懸命努力してたんでしょ。それを立ててやってもいいじゃないの。ちゃんと、こちらには白状してったん

だし」

「コメチ、あれは白状って言わないよ。ボくら、決死の覚悟で暴いたんだよ」

サキも、頷きながら考えていた。

カズヤの転校の時は、親戚とはいえども、血は殆ど繋がっていないと言っている程、遠い親戚関係だったが、無二の親友としての関係は永遠に続くだろうと思っていた。

しかし、アキラの時は違かった。

トラブルメーカーとして存在し、二年間、まるで女王のようにサキを支配しておきながら、彼女は誰にも行方を告げずに去ったのだ。だからカズヤは捜さないでも居場所を知っていたが、アキラは連絡の取りようがない。全員、腹立たしくないでもないが、コメチの言葉通りに思い込んで、処理してきていた。

そしてサキは、腹立たしさ半分、これでカズヤもアキラを連絡が取れなくなったという安心感半分という、相反する感情に揺れていた。

それにしても、あのアキラとは一体何だったのだろう。五人は同じく思っていた。

非日常を生きる不思議な少女は、いなくなると、あの強烈なまでの存在感も、風のように消えて、残り香も残さずに消えてしまったのだ。

きつと、以前言っていた、戦いの世界とやらに、自ら戻りに行ったのだろう。そしてもう二度と会うこともない。

でも、五人は同じことを思っていた。

またアキラに会えるような気がするのだ。

「さ、遊園地サ行つて、時間を見計らつて、カズヤを迎えに行きましょ」

五人は東京の雑踏に向かった。

まさかカズヤは、彼らが東京に来ていることなど知るわけがなかった。ましてや彼らのメインの中に、自分が含まれていることなど、当然知るわけもない。彼らがレトロな遊園地の怖いジェットコースターに乗っている間、体育館で三十人を前に《夏青葉》を演じていた。

「今日は、本当に信じられないことがたくさん起こると思う。本当のことを言うと、みんなに言えない作戦が、伏線として準備されているんだ」

「ちよつと！」

驚いた顔で、信吾が《夏青葉》を咎めた。作戦をばらしたら、全てが台無しになってしまいかねない。

「かすみちゃん、ちよつと聞いてくれ。秘密主義だから、この間のようなことになっちゃうんだよ。せつかく戻ってきてくれた三年にだって申し訳ないだろ」

《夏青葉》は、きつい口調で信吾を抑えた。

この日の為に、絵美がどれだけ苦労して抜けた三年を説き伏せたか知らぬわけでもない。

「どんな作戦だかは言えない。でも、どんなことがあっても、驚かないでついてきてほしい。そうすれば三年が心配している進学のことに、支障をきたすことは決してないはずだから。それは約束する」

その場は騒<sup>さわ</sup>ついた。

「まず、この前の失敗を繰り返さない為に、話せない作戦を信じてもらう為にも、オレの正体を出すよ。それで信じてくれ」

《夏青葉》はサングラスを取り、鬘<sup>かつら</sup>を被った。

「ま、敵を騙<sup>たま</sup>すには先ず味方から、なんてね。鈴木和哉は中立という立場だから、それを貫く為にも化ける必要があつたんだよね。黙つてごめん」

カズヤは頭を下げ、非難されるのを待った。ところが、上がった

声は喜びの声だった。

それもそうだ。鈴木和哉が強いことは、《反日教》の誰もが知っているし、知っている人だからこそ、《夏青葉》なんて胡散臭いやつよりも信じられる。

カズヤはほっとして、顔を上げた。

「オレはまた別人に化ける。初めは鈴木和哉も、《夏青葉》も姿を見せない。でも、安心して、加賀見や信吾の言った通り、練習通りに動けばいい。絶対《日向》は壊滅状態に陥るから」

どよめきが起こり、一同に闘志が漲みなぎっているのが感じられた。

「じゃ、頼むぜ。オレは別の所に行くから」

カズヤはそう言い残し、《SIN》の事務所に向かった。

## 第9部：予想外 - 1（後書き）

日本ブログ村とアルファポリスのランキングに参加しております。

お手数ですがバナーの1クリックをお願いします。



## 第9部：予想外 - 2（前書き）

本作品は、前作『約束された出会い』編の続編となります。先にそちらをお読みになられた方が、スムーズに作品世界観をご理解戴けることと思います。

<http://ncode.syosetu.com/n9537d/>

## 第9部：予想外 - 2

「よつ、《夏青葉》さん」

「神宮司さん、頼みます」

鈴木和哉であることを明かした以上、カズヤは先輩である神宮司を呼び捨てにするわけにはいかず、きちんと丁寧語で話し掛けた。

「氣イ遣うなよ。調子狂うじゃねえか」

神宮司はカズヤの肩に手を置いた。

《SIN》の人間には、日向「シンも、《夏青葉》」カズヤも伝わっていた。シンは正直であることを守ったのだ。

「いい、なるべくリラックスしてちょうだいね。稽古しに行くんだからね、これから」

カズヤから主導権を渡された信吾が、《反日教》を仕切っていた。

「絵美ちゃん、連絡係、よろしくね」

「任せといて」

信吾は幹部にだけは、この作戦の大筋を話していた。

そろそろね。

信吾は加賀見、梅津、聡に目配せをした。そして彼らは、自分の直属の生徒十人ずつに合図を送った。

体育館から帰る途中、わざとらしく遠回りの河川敷を毎回通ってきたのは、今日この日に、ここで日向が待ち伏せてくれるように願ったことだ。理由は簡単だ。ここは人目につきづらく、喧嘩にはもってこいの場所だったからだ。

「いい、あたしたちが待ち伏せを知ってたってこと、連中に悟られちゃ駄目よ」

全員の脳裏に信吾の言葉が蘇り、身体が緊張で硬くなった。

「ひ、《日向》だあつ！」

誰かが如何にも驚いたような声を上げ、その声を合図に、両グル

「プの戦闘が始まった。  
水を得た魚のような《日向》。捨身の攻撃の《反日教》。状況は  
前回と似ていた。」

「ええっ？道に迷った？」

「悪い」

「ちよつと、八時にホテル着かなきゃいけないのよ。カズヤ連れて  
けないじゃないのよ」

「コメチに責められて、サキは鼻の下を掻いてから、髪を掻き<sup>むし</sup>つ  
た。それが彼の困ったときの癖だ。」

「仕方ないっちゃ。こんな似た路地があるんだから」

「シキがサキを庇<sup>かば</sup>っている、いつもの構図だ。」

「この川、何川？」

「あ、これだ。看板がある」

「じゃ、地図でどの辺か探せるよ」

五人は土手に腰を下ろし、付近の地図を拡げた。

「あそこに線路が架かってつけ、多分この辺だと思うんだ。カズヤ  
の住所はこれだつけ……」

「とにかく、ホテルに八時に着く為には、何だかって駅に、七時に  
は行かなくちゃならないのよ」

「コメチ、ごめん、今、六時半だ」

「ちよつと、もうっ！走るしかないじゃないの！」

「スタイル良くする為だと思ってさ、付き合ってくれよ」

「その手には乗らないわよ」

「コメチはそう言いながらも、立ち上がって走る準備を始めた。」

「で、どっちなのワ？」

「あっち」

サキが指差した方向に、あろうことがカズヤはいたのだ。

「あ、喧嘩だ」

のんびりとシキが言った。

「シキ、そう平然と言うなよ。あれ、モノホンだべ。いやあ、やっぱり東京は違うつちな。おつかねえこた」

「ポン、あなたの方が、よっぽど緊迫感ないよワ」

そう言ったナミは、そわそわして落ち着きがなくなっていた。アキラが暴れた時よりも怖ろしい現場には違いはない。

「ね、回り道はないのワ？ 触らぬ神に祟り<sup>たた</sup>なし、とにかく離れましょ」

コメチはわけの判らない本音を吐いて、サキの指差した方向と反対の方に歩き出し、一同はそれに続いた。

「！ち、ちよつと待って！」

一度は歩き出したサキが、急に立ち止まった。

土手の下の側道を、大きなバイクの集団が走り抜けていった。

「カズヤだ、あれ、カズヤだよ！」

「はあ？ 何処<sup>どこ</sup>だよ？」

今、五人の前を通り抜けていった集団の先頭のバイクの後部座席に乗っていた人間に、サキはカズヤの雰囲気を感じ取ったのだ。

或いは、超常の力を持つ者同士の何かを感じたのかもしれない。

「あの、先頭の二ケツしてるバイクの後ろのやつ！」

「何言ってるの。天然パーの事なかれ主義のカズヤに限って、面倒なことに首を突っ込むわけじゃないじゃない。馬鹿じゃないの、サキ」

コメチは酷い言葉でサキを笑った。

「おい、待ててば！」

喧嘩に向かって歩き出そうとしたサキを、辛うじてポンは止めた。  
「ここは東京だぞ。オレらに何ができるのワ？」

サキはその言葉に、はたと足を止めた。

「カズヤに限って、暴走族の仲間になんかなると思うか？ あいつは、そういうことについては真面目じゃないか。お前さんがそれをよく

知ってるっちゃ。チャリンコ暴走族だっていうなら解るけど……」  
「……ポンの言う通りさ。でも、ちょっと気になるんだ。カズヤが  
引越す日、アキラがカズヤに言ったんだ。とある不良グループに  
は気を付けろって」

サキは戻ろうとはしなかったが、先に進もうとしなかった。

## 第9部：予想外 - 2（後書き）

日本ブログ村とアルファポリスのランキングに参加しております。

お手数ですがバナーの1クリックをお願いします。

### 第9部：予想外 - 3（前書き）

本作品は、前作『約束された出会い』編の続編となります。先にそちらをお読みになられた方が、スムーズに作品世界観をご理解戴けることと思います。

<http://ncode.syosetu.com/n9537d/>

## 第9部：予想外 - 3

「新手だあつ！」

《日向》も《反日教》も一瞬騒然としたが、すぐにそれは落ち着いた。《日向》側からすれば、手を結んだ《SIN》の援護だと思ふし、《反日教》は捨身だから、今更誰が来ようと関係ないし、《SIN》は《日向》の味方ではないということをカズヤから聞かされているから、不安に思う必要はないのだ。

神宮司の後ろに乗っている黒尽くめの人間。彼こそが《SIN》の首長のシンその人だ。

シンはバイクから降り、例によって高処<sup>たかみ</sup>の見物をする為に、土手の上から見下ろすように陣を張った。そこまではいつもと変わりなかった。

「《SIN》の援護だあつ！《反日教》など蹴散らしてしまえーっ！」

テルヒは大声を上げた。ただでさえ侮<sup>あな</sup>つてかかっている相手だ。これで完膚なきまでに《反日教》を潰せると、内心ほくそ笑んでいた。

しかし、その思惑は打ち砕かれた。

「《SIN》の者たちよ、作戦通り、《日向》を潰せっ！」

なんと、シン自身が大声を上げてそう言ったのだ。

「な、何故だ？」

驚きで《日向四天王》の顔が歪<sup>ゆが</sup>んだ。

「テルヒ！話が違うじゃねーかつ」

激しやすい川上が、例によって怒鳴った。

「ったく、だから《SIN》なんか信じるなつつつたんだよ、オレは」



岩城は齒軋<sup>はざし</sup>りをして、吐き捨てるように言った。

それでも《日向四天王》を中心とした二十五人くらいの《日向》は、《反日教》に負ける気配はまるでなかった。踏んでいる場数がまず違う。ここまで素人集団を相手にしたことはない。

「人間、脳みそだけで生きてるんじゃない。確かなのは頭じゃねえ、この腕だけだ！」

野口は呪文のように繰り返した。「頭なんか、あてになんねーんだよっ！」

と、その言葉に弾かれたように、テルヒは日向の乗っている車を目指して走り出した。

「総長を守るんだ！来い！」

《日向四天王》の他の三人は、すぐに彼女が何をしようとしているのかを察し、彼女の後に付いて行った。

「総長、《SIN》が裏切りました！」

「うん。見てれば判るよ」

別に動じた様子もなく、日向はスモークを張った窓ガラスを少しすかただけで、淡々とした口調で返事をした。

「《SIN》の裏切りは、然程影響<sup>さほど</sup>ないはずだよ。オレが一番心配なのは、もっと別のことだし」

「この《日向》の不敗神話が、よりによって素人に壊されようとしているというのに、あんたは別のことを心配してんのか！目の前の出来事を、たまには対処してごらんよ」

テルヒは極めて感情を押し殺した声で、それだけ言った。

「何が一番重要か、常に先のことまで考えて行動することこそ、一番重要なこと。不祥事を予測することがね。オレは侮るなど言っておいたじゃないか」

相変わらず、日向ははっきりと言った。それに、とうとうテルヒの我慢の限界が切れた。

「……そう、いつだってそうだ。結局現場に出てるのは我々だけ。もう、《日向》に日向はいらない！」

車のドアを乱暴に開け放ち、テルヒは日向を掴み出した。

「ふふふつ、脳みそしかないような人間は、もう用済みってか」

どこまでも日向は冷静沈着で、それがテルヒには腹が立って仕方がない。

「望まれない総長など、いるだけで統制を乱すもの。抜けてやってもいいよ、喜んで」

日向は笑って言った。

「オレが一番心配してたのは、《日向四天王》の造反なんだな」。

オレの《日向》に欲しいのは、どんな状況に陥っても逆らったり寝返ったりしない人間。そういう当たり前のことができない人間はいらない。

いいか、今日負けるのは《日向》でも《反日教》でも、ましてや《SIN》でもない。お前ら《日向四天王》だけさ。お前らの心の内を探る為に、オレが《SIN》を利用しただけさ。裏切りはお前らの方なんだよ。

とはいえ今日ここにいる連中は、何があってもお前らに従う者だろうねえ。お前らが従わせたんだものな。せいぜい感謝しろよ、あいつらに」

日向は、あくまでもその状況を楽しんでいる様子だった。

「さあ、頭でつかちのオレをどうする？ ぼこぼこにしなきゃ、気が済まないだろ」

あまりのきつぷの良さに、《日向四天王》は戸惑った。頭だけで実戦はさっぱりできないはずの日向がそう言うのと、まるで殴って下さいとでも言っているようだ。どんな馬鹿でも、そのようなことをみすみす言うようなやつを、《日向四天王》は今まで見たことがない。

日向と《日向四天王》が揉<sup>も</sup>めている間にも、《SIN》という味

方を得た《反日教》は、どんどん《日向》を倒していた。一方のシンはヘルメットを被ったまま、相変わらず高処の見物だ。

彼がヘルメットを脱いだ時、本気でヤバい噂がある。それだけ強いという意味なのだろうが、ことの真偽は定かではない。

と、そのシンがヘルメットに手をかけたのだ。

一同は背筋が凍るのを感じた。

「テルヒ、シンが！」

「何？」

《日向四天王》は日向を囲みながらも、その視線はシンに釘づけになっていた。

シンの黒髪が揺れる。

## 第9部：予想外 - 3（後書き）

日本ブログ村とアルファポリスのランキングに参加しております。

お手数ですがバナーの1クリックをお願いします。

#### 第9部：予想外 - 4（前書き）

本作品は、前作『約束された出会い』編の続編となります。先にそちらをお読みになられた方が、スムーズに作品世界観をご理解戴けることと思います。

<http://ncode.syosetu.com/n9537d/>

## 第9部：予想外 - 4

「何でさらさらストレートヘアのあれがカズヤなのよ。天然のくせっ毛よ、あいつは」

その場を遠巻きに見ていたコメチが、サキに抗議した。

「判ってるさ」

サキは見守るように、シンを見ていた。

「ふははははっ！」

ヘルメットからシンの素顔が覗いた。<sup>のぞ</sup>黒髪はヘルメットにくっついたままで、出てきた頭は銀髪でハリネズミのような髪型だった。

「シンじゃねーんだな、オレは。《反日向・反教師同盟》盟主、鈴木和哉なんだよ！」

それは、《日向四天王》にとつては大どんでん返しだった。

鈴木和哉は真面目で、中立の立場を貫いている男だと思っていたのだから。それに何だかんだ言っても、《反日教》の盟主は信吾だと思っていたのだ。

大どんでん返しをくらったのは《日向四天王》だけではなかった。「カズヤ！何てことを……」

サキはそれ以上、何も言えなくなっていた。外見も原因ではあるが、よりによって盟主とは……。

それは他の四人も同じだった。

カズヤを迎えに行く手間は省けたが、この状況では連れて行くどころの話ではない。

五人が五人、あんぐりと口を開けたままの同じ表情をしている。

動じていないのは、事前に何があっても驚くなと言われていた、《反日教》だけだった。

「面白いねえ、《日向》の分裂。オレらにとつちや、どつちがどうなつたつていいぜ」

いつしかカズヤの傍らには、信吾が寄り添っていた。

「さあ、どうしたの？ さつさとおやりなさいな、あんたたちの総長を！ きちんと見届けてあげるから」

信吾は《日向四天王》を煽<sup>あお</sup>った。

「あんたみたいなオカマに命令されたくないわ！」

テルヒはそう怒鳴り返すと、四人の輪の中心にいる日向に向き直った。

「なあ、テルヒ。結局かすみちゃんに命令されて動いてるように見えるぞ」

日向は欠伸<sup>あくび</sup>をしながら言った。

「だ、黙れ！」

困惑を隠しきれず、テルヒは日向に蹴りを見舞った。それを契機に、《日向四天王》は日向に手を挙げ始めた。これはいわゆる集団リンチ状態だ。

「お前らの方が、やっぱり立場悪いと思うな、オレ」

《日向四天王》の攻撃が一段落して、日向は防御の体勢を解くと、蚊に刺されたくらいにしか感じていない様子だった。

思わず《日向四天王》は一步下がった。

「もう、終わり？」

日向は一步詰め寄った。

「……な、何もシンを相手にしてるわけじゃねえんだ。避けるだけしか能がないんじゃない、先は見えてるよな」

川上は戸惑いを隠すかのように言った。

「そうだな、シンだったらどうなってることやら。あいつはヘルメット被ってないと、手加減できないらしいからな、お前らが直接対決したくない相手、ナンバーワンってところだろ」

日向はにこにこしながら《日向四天王》との間を、また縮めた。

「この野郎！」

再び《日向四天王》のリンチが始まったが、今度は素直に攻撃を受けようとはしなかった。

日向は軽々と四人を飛び越えて、岩城の背後を取った。

「残念だったねえ。オレ、お前らが格好いいところ見せられるように思ってた、喧嘩できないふりをしてただけなんだよね」

背後を取っておきながら、日向は岩城に手を出したりはしなかった。

打ち合せ通りの行動だ。

カズヤは信吾と目配せを交わし、日向と背中合わせに立って、カズヤは野口と、信吾は川上と向かい合った。

「四対一は卑怯だと思っただな」

「き、貴様ら……」

それ以上、四人は何も言わなかった。あとは行動あるのみだ。

「おーっと、ちょっと待った」

日向がふざけた声で、待ったをかけた。

「ざけんな！今更怖気づいたの」

「そんなわけねえだろ。シンにも助けっ人頼もうと思っただ」

日向の余裕の一言に、《日向四天王》は辺りを見回してシンを捜した。

日向はそんな四人を笑いながら、おもむろに脱色した茶髪に手をかけた。

現れたのは漆黒のストレートヘア。

「！」

今度こそ、四人の顔から血の気が引いた。

「ヘルメットでも被るか」

日向は少し声色を変え、シンを演じた。「大丈夫、本気出さない



ようにするからさ」

「な……何なの？」

テルヒはようやく、それだけ言った。

「後で説明してやるよ。今はオレとお前のどっちが、『日向』の人間に慕われているかを教えてやる」

『日向』はそういうと、カズヤと信吾を従えて高台に登り、大声を上げた。

「さあ、『日向』の者たちよ、オレ、日向がたとえどんな人間であつても従ってくれるなら、今から『反日教』と『S I N』の方につけ！どんなことがあつても、悪いようにはしない。オレを信じられる者だけでいい！」

これには、心の準備をしてきた『反日教』も、場慣れしている『日向』も、戸惑いを顔<sup>あはれ</sup>にした。

## 第9部：予想外 - 4（後書き）

日本ブログ村とアルファポリスのランキングに参加しております。

お手数ですがバナーの1クリックをお願いします。

## 第9部：予想外 - 5（前書き）

本作品は、前作『約束された出会い』編の続編となります。先にそちらをお読みになられた方が、スムーズに作品世界観をご理解戴けることと思います。

<http://ncode.syosetu.com/n9537d/>

第9部：予想外 - 5

日向の号令に、《日向四天王》につく者、総長日向につく者、《日向》内部は乱れに乱れた。

「しまった、分が悪い」

カズヤは二人に囁いた。

「こんなもんさ。あいつらは《日向四天王》に征服されたんだ。そういう流儀なのさ」

日向も小声で答えた。「ま、そろそろはつきりしてきたことだし、いきますか。中学生はこっち、高校生はテルヒ側に別れたみたいだねえ」

日向は高台から下り、カズヤたちも後に続いた。

「一体全体、どうなっちゃってんのワ？カズヤはどういう心境の變化なわけ？」

コメチは呟いた。

「とにかく警察呼ばなきゃ。さつき公衆電話あったわよね。コメチ、行きましょ」

こういう時だけ、ナミの決断力は速かった。

男子は物陰から、様子を窺うことにした。

「何だか分裂したみたいだよ」

シキは言った。「どうも、カズヤたちの分が悪そう」

それには、サキもポンも同じ意見だった。

「あの、黒髪のやつが問題らしいな」

ポンの意見に、サキもシキも同感だった。

カズヤは野口と激しくやりあっている。信吾は川上と揉み合っている。日向は岩城と、テルヒを守る高校生を相手にしている。神宮司は《SIN》を率いて、怪我をしまっている《反日教》を救

っている。

《日向》の中学生連中が加わったとはいえ、やはり《反日教》側は押され気味だった。

《SIN》の一人が、岩城にバイクを横から蹴られて転倒した。バイクは横からの力に弱い乗り物だということは、乗る人間なら知っていることだ。日向が岩城への攻撃の手を一瞬緩め、テルヒを守る高校生に集中してしまった隙を、逃しはしなかった。

岩城はバイクをすぐに起こし、一旦その場を離れると、何人かを蹴散らしながら舞い戻り、テルヒを攫さらって行った。

日向は、初めからテルヒのことは、攻撃の対象にと思っていなかった。所詮日向から見れば、テルヒはか弱い女の子だ。

日向は、岩城はテルヒを安全な所に連れて行ったら、再び自分の所に戻ってくるだろうと思っていた。

「遅いなや、あいつら……」

ポンは珍しく苛いらつきながら、しきりに後ろを振り返っていた。

かれこれ十分以上も経つというのに、コメチとナミは戻ってきていなかった。

「まあまあ。不良にからまれてるわけでもないだろうし、きっと迷子にでもなったんだよ」

だとしても問題なのだが、シキの言ったことに、誰も気付かずに納得していた。

そしてサキは終始無言のままだった。

念話で呼べば、きっとカズヤは気付くだろう。しかし今の状況を見ている限り、それをしてしまえば彼に隙を作ってしまうことになる。あのカズヤが、立派に自分で自分の身を守っているばかりか、他人の身まで守っているのだ。

オレ、いつの間にか、兄貴をやってたんだなあ。

サキは苦笑した。

さつきから、サキの目は日向に釘づけだった。流麗な身のこなしが、空手をやっている人間としては、思わず引き付けられずにはいられない。

「あ、敵が逃げてく！」

シキが言ったのは、岩城のことだ。

「彼女を救う為、なんてね。あああ、見てらんないよワ、もう！まどろつかしいったらありやしない。あつ、あいつ、冗談抜きに連れて行きやがった」

ポンとシキは、落ち着かないのか絶えず喋り続けていた。

「カズヤの方って、何だか超素人の集まりだっちゃ。ボくらが行ってあげたくなっちゃうよ、ね、ポン」

「ほんとだよ」

「あ、さっきのバイク、戻って来たよワ。ほら」

岩城は、奪ったバイクを乱暴に乗り回し、実際何人もの怪我人を出した。幸い大怪我を負った者はなかったが、バイク相手では敵うわけがない。

「カズヤ！かすみちゃん！頼むっ！」

日向は今まで戦っていた相手を放棄すると、信じられない跳躍力で、向かって来た岩城のバイクに飛び乗った。

「っ！」

サキは声にならない声を上げた。

「どうしたのワ、サキ？」

「いや、何でもない」

シキに訊かれ、サキは首を傾げながら返事した。

「岩城、止める、止まるんだ！転ぶぞ！」

「そうすると、日向がオレを殺したことになる。面白いじゃねえか」  
野口はにやっと笑い、日向を振り落とそうと蛇行することを止めた。

おかしい……

いくら冷静な岩城でも、日向に言われたから蛇行を止めるとは思えない。

岩城の首にしがみつकिながら、日向は不審に思った。岩城はさっきから、同じ直線コースを往復しているだけではないか。

何を考えてんだ……？

日向の頭が回転を始めたのは、少し遅かった。

急に岩城は日向を振り切って、バイクから飛び降りた。

「おいっ！」

慌ててハンドルを取ろうとした日向は、左下腿ひざもとに焼きこてを当てられたような感覚を覚えた。

その衝撃に足元を掬すくわれ、日向の身体が中に舞う。

日向はバイクもろとも転倒した。

あまりに一瞬の出来事で、その場にいた者たちは誰も、何が起きたのか理解できずにいた。

## 第9部：予想外 - 5（後書き）

日本ブログ村とアルファポリスのランキングに参加しております。

お手数ですがバナーの1クリックをお願いします。



## 第9部：予想外 - 6（前書き）

本作品は、前作『約束された出会い』編の続編となります。先にそちらをお読みになられた方が、スムーズに作品世界観をご理解戴けることと思います。

<http://ncode.syosetu.com/n9537d/>

第9部：予想外 - 6

「……ねえ、あれって……」

シキが一番に口を開いた。「鉄砲じゃないよ、ね……？」

「違うって、思いたい……」

ポンは開いた口が塞がらない様子だった。

丁度三人がいる所からは見えて、カズヤたちの所からだと死角になっ  
ている場所に、テルヒは立っていた。その手に彼女は重たそう  
な黒い塊を構え、真っ直ぐ日向に向かって発砲したのだ。

「あいつ、狂ってるぞ！正気じゃない！

っつーか、こいつら何なんだ……？」

サキは呟いた。

「ったく、ナミたちは何やってんだよ。殺されちゃうじゃないか！  
ポ  
ンが殺されると心配しているのは、自分たちではなくカズヤた  
ちのことだった。

「また構えた！あの人、動けないよ。ったく、カズヤは何やってん  
だよ。あの人が殺されちゃうじゃないか！」

もう堪えきれず、シキもポ  
ンも立ち上がり身を乗り出した。

「っ！」

「え？何処だよ、サキ？」

耳に馴染みの深い名前をサキが呼び、その持ち主の居場所をポ  
ンが問い正した時には、もうサキの姿はなかった。

「ありや、使っちゃったよー！」

サキは、無意識のうちに瞬間移動をし、日向の所に飛んでいた。  
いつも細く伏せられている目をカツと見開き、飛んできた弾丸を  
見据えた。

「っ！」

日向は小さく声を上げた。

サキから青白い空気が生まれ、日向をも包んでいる。

彼は右手で日向を支え、左手を飛んできた弾丸に向かって伸ばした。彼はその弾丸を掴んだのだ。

「気を付けろっ！女が狙ってんだよ、陰から！」

サキは叫んだ。

「サキ！どうしてここに？」

「お前は馬鹿か！次の標的はお前だよ、カズヤ！」

しかしサキの心配は、ポンとシキが解消していた。何とかしなければと思っていた二人は、サキが消えるとすぐに、テルヒを抑え込みに走ったのだ。

「どうして……？」

「……」

サキは日向に小さく呟き、日向は黙ったままだった。

「日向！大丈夫っ？」

信吾が走り寄ってきた。

サキはいつもの伏し目に戻し、信吾を見た。

「あ……」

信吾は小さな声を上げた。

サキも同じ声を上げた。

「あなた、どうかでお会いしたこと、ありましたか？」

「……？ないと思うけど……」

信吾の問いを一度は否定したものの、サキは首を傾<sup>かし</sup>げた。が、今はそれどころではない。すぐもう一度日向に向き直った。

「お前は どうしてこんなことをするんだ。させるなってあんな伝言頼んでおいて、どうしてカズヤにこんなことをさせるんだッ！」

「何で初対面の人間に、わけの解らないことを言われなきゃならないかなあ。ま、救けてくれてありがとう」

「おい、しらばっくれるな！」

サキは日向の胸倉むなぐらを掴んだ。

「誰かと人違いしてるよ、あんた。オレ、あんたとは初めて会う顔だもん。それにオレは一度会った顔は忘れない」

日向は困ったように言った。

「サキ！どうしてここさいんのワ？」

カズヤが的外れなことを言いながら、走って近付いて来た所せい為で、目の前の黒髪の男とのやりとりはお預けだ。

「お前はバカか！」

サキは再会を喜ぶ前に、いきなりカズヤの頬ほほを打った。

「何だよ、痛えなヤ」

「話は後だ。お前だけこの状況でノホホンとすんじゃねえよっ！」

「あつ、そつか」

サキは相変わらずのカズヤを前に大きなため息をつき、ポンとシキに目配せをすると、彼の流れるような技を披露し始めた。二人もそれにならruby<rb>倣つて</rb><rp>(</rp>><rt>日向四天王</rt><rp>)</rp></ruby>を攻め、一度乱れた《反日教》の統制が、彼らのお陰で戻ってきた。

もともと、《日向四天王》さえいなければ烏合ぐごうの衆のようなものだ。事態はすぐに片付く。

テルヒはポンに気絶させられ、シキはその手に握られていた拳銃を取り上げた。他の《日向四天王》もサキや、カズヤと信吾に気絶させられ、勝利は《反日教》のものなのは明らかだった。

そのような状態になった時になって、ようやくパトカーのサイレンが聞こえてきたのだ。

「遅いよ、まったくもう」

日向の応急処置をしていたシキが、安心したような声を上げた。

しかし安心したのは部外者だけで、当事者たちは逃げ出そうと慌てた。

当然だ。こんな所で大乱闘などしていたら、補導されて当然だし、しかもわけ判らないうちに発砲騒ぎまで起こしているのだ。

まるで蜂の巣を突いたような騒ぎを鎮めたのは日向だった。

「逃げないでいい！ここにいる人間は逃げないでいいんだ」

日向は逃げようとする彼らに、優しい声を投げた。

パトカーの中から下りてきた一人の私服警官は、先ずテルヒを見付けた。気絶している彼女を部下らしき制服たちに任せると、彼は真直ぐ日向を目指してやって来た。

## 第9部：予想外 - 6（後書き）

日本ブログ村とアルファポリスのランキングに参加しております。

お手数ですがバナーの1クリックをお願いします。

## 第9部：予想外 - 7（前書き）

本作品は、前作『約束された出会い』編の続編となります。先にそちらをお読みになられた方が、スムーズに作品世界観をご理解戴けることと思います。

<http://ncode.syosetu.com/n9537d/>

## 第9部：予想外 - 7

「怪我したのか、日向」

私服警官は、親しげに日向に声をかけてきた。

「見りや判るだろ。痛えよ。死ぬう」

「何も自分を犠牲にしてまで、尻尾を出させることはないだろうに、それにその程度じゃ死ねないし」

「冷たいなあ。こっちは身体張ったつてのにさ。大体だよ、オレ以外の誰を犠牲にするんだ。尻尾を掴んで得すんのはそっちじゃねーか」

悪態を吐きながらも、日向は私服警官に向かって、親指を立ててみせた。

「本当に、お前つてやつあ……」

小学生が何を言ってるんだって思ってたらよ、まったく……」

私服警官は苦笑した。

「約束は守ってもらうぜ」

「ああ、勿論だ」

私服警官は手を振ると、現場検証を始めた。

「お、おい、これ、どういうことだよ？」

カズヤは日向に聞いた。だした。

「遅くなってごめんなさい、かすみちゃん。怪我人出ちゃったの？え、日向が！」

別のパトカーから、絵美が走ってきたではないか。  
「道に迷っちゃったのよ」

更に別のパトカーからは、コメチとナミが現われて、現場はめちやくちゃだった。

「どうなってんだよ、おい！」

状況を把握できずにいるカズヤには直接答えず、日向は怪我した



足を引き摺って、高台に登って声を張り上げた。

「オレは、とにかく騙だますだけ騙してたんだ、みんなのことを！」

偶然知ってしまった《日向四天王》の悪事を暴あはく為に、自ら日向を名乗って、彼らがオレに発砲してくる機会を待ってたんだ。こうでもないかと、連中を縄にかけられないからだ」

その場は水を打ったように静まり返った。

「勿論、オレを詰なめてくれて構わない。ただ、これだけは信じてくれ。オレは決して私利私欲の為に、こんな大掛りなことをしたわけじゃない。そして、この件で最後にオレを信じてくれた者には、迷惑がかからないように警察に約束を取り付けてある。

とにかく今は謝ることしかできないけど、オレが警察から戻る来週半ばには、本当のことを全部話す。だから今日のところはこれ以上、何も訊かないでほしい！」

日向はその場で土下座をし、私服警官に促されるまで、頭を上げようとはしなかった。

その場にいた者は誰も、事態を把握していなかった。

日向、《日向四天王》、《日向》の高校生の中心人物、神宮司、信吾が警察に連れて行かれ、後に残された者たちは、尻切れとんぼのようなこの現場から、一体どう去ったらいいものか困っていた。

「結局、茶番に付き合わされただけだよ」

《反日教》の中にも、この状態に文句を言う者もいたが、それは当然のことだ。カズヤや梅津、加賀見に喰ってかかる者もいた。

「カズヤくん、ちょっといいかしら」

絵美がカズヤを混乱の中から連れ出した。

「さっきあなたが《S I N》に行った後、あたしはかすみちゃんに、状況を見てから警察を呼びに行けって言われてたの。多分誰も、かすみちゃんたちの考えていたことを知らないわ。カズヤくんだってそうでしょ。」

でもね、ここでせつかく盛り上がった勢いを、潰すわけにはいかないわ。ここは一つ、《夏青葉》としてまとめてちょうだい。お願いッ」

「そんなこと言われたって……」

カズヤは、ちらつとサキを見た。きつい視線で睨み付けられ、カズヤは自分がここに残されたわけに気が付いた。

本来なら、カズヤも警察行きのはずだが、サキたちとの再会を喜べるように、信吾が気を効かせたのだ。その代価はこの場の後片付けのようだ。

カズヤは高台に登った。

「えーっと、取り敢えず聞いてくれ！オレは日向がシンと同一人物で、信吾と通じているってことは、つい最近知ったんだけど、《日向四天王》を潰そうとした本当の理由が、まさかこんなことの所為だとは、正直ビビってるくらいで……」

しかも警察ともつるんだとは、少しくらい知らせておいてくれよってのが本音で、オレも早く本当のことが知りたいくらいなんだけど……」

ああ、何て言ったらいいかなあ。

そりゃ腹も少しは立つ。みんなの言う通り、茶番に付き合わされた気もしないでもない。けど、ここでちよつと考えてくれ。日向や信吾のしたことは、たしかにオレら全員を利用したかもしれないけど、決して悪いことに利用してはないだろう。オレらは正義の味方みたいだったろう。もしかしたら、新聞に取り上げられるかもしれない大事件を、オレらは解決する一翼を担ったかもしれないんだ。それを誇りに思って、日向と信吾が戻ってきて、きちんと説明してくれることを信じよう！」

ちよつとだけ貫禄を身に付けたカズヤの言葉に、その場にいた全員は不思議と納得した。

彼の言葉は日向や信吾と違って、等身大の人間の言葉に感じたのだ。

「今日のところは解散だ。ここで集まってたって、何にも解決しないんだし。怪我人は、茂木接骨院に行けば、先生がきちんと診てくれるから！」

あ、そうそう、今日オレらを手伝ってくれたやつを、ここで紹介させてくれ！オレの前の学校の親友で、オレなんかよりも強い五人サキ、シキ、ポン、そして一番強いのが、コメチとナミの女子！」「ちよつと、どういう意味よ、カズヤ！何脱色しちゃって、色気づいてんの！」

コメチは紹介され、久し振りの感動に<sup>ひた</sup>浸る間もなく、いつもの喧嘩腰になった。

「あははははっ、悪い悪い」と笑うカズヤを見て、よくもまあ、ここまで成長したもんだと、サキは見ていた。

## 第9部：予想外 - 7（後書き）

次回から第10部：再会）を始めます。

日本ブログ村とアルファポリスのランキングに参加しております。  
お手数ですがバナーの1クリックをお願いします。

## 第10部：再会 - 1（前書き）

本作品は、前作『約束された出会い』編の続編となります。先にそちらをお読みになられた方が、スムーズに作品世界観をご理解戴けることと思います。

<http://ncode.syosetu.com/n9537d/>

## 第10部：再会 - 1

### 10：再会

解散宣言したところで、その場の收拾が簡単につくわけがない。

暫くカズヤたち《反日教》の幹部にあたる五人はあれこれと指示を出したり、詰め寄る仲間たちに事情を説明したりしなくてはならなかった。当然忙しくて神森の五人と再会を喜ぶどころではない。カズヤが忙しいのは説明されなくても理解している五人は、何も言わずに終わるのを待っていた。

「カズヤ、いいのかよ、待たせて」

ようやく余裕が出てきたか、加賀見がカズヤに訊ねてきた。「あいつら、お前に会いに来たんだろ。こっちはもういいから、行つてこいよ」

「でも……」

「でもって、何、躊躇ためらってんだよ。さっき堂々と紹介してたじゃないか」

「そうじゃなくって、オレ、どうしてあいつらがここにいるのか、それこそさっぱり理解できないんだ」

「お前はバカか！」

加賀見と、彼とのやりとりを聞いていたサキたちは、同時に同じことを言った。

「とにかく行け。鈍感だつて自分のことを言ってたのが、今理解できたよ、オレは」

加賀見はカズヤを突き飛ばすように「どうも長らくお借りしました……えへへ」と、神森の五人の方に押しやった。

ハリネズミのように短くした銀髪を罰の悪そうな顔で掻かきながら、カズヤは五人の前に立った。

何だか気恥ずかしくて、かける言葉が見付からない。

「やつほ、久し振り」

ポンが、一番に声をかけた。

「似合ってっちゃ、そのパンク頭。何とか言えよな、気合い入れてんだっけ」

サキが微笑んだ。

その微笑みに反比例するように、カズヤの顔が僅かに歪んだ。その歪んだ分だけ腕を広げ、サキは優しくカズヤの肩を抱いた。

「随分大人になったこた」

サキがカズヤの兄貴分なのは、誰もが認めていた。

ただカズヤは顔を歪めはしたものの、昔のように泣いたりはしなかった。細くしなやかな若木のようなサキの耳に顔を寄せ、小声で囁いた。

「お前、瞬間移動できるようになったんだ。って言うか、あいつらにバレたんか？」

以前のカズヤだったら、こういう場で言う言葉は「ごめん」と決まっていたはずだ。

「ああ、お前以外のはバレてる。心配すんな」

サキは囁き返し、カズヤから離れた。もう、本当に兄貴分は卒業だと感じていた。

「どうしたの？もう少し兄弟の熱い抱擁を続けるかと思ったのに」

「そうそう。せっかく時計で測ってたのにやあ」

「賭けてたのに」

「お前ら……」

カズヤとサキは、がっくりと肩を落とした。こういう冗談ばかりの連中だと、充分解ってはいるのだが、力が抜けるのはどうしようもない。

「で、どうしたのワ？」

「ああ、こいつね、オレの能力のことを心配してくれてたんだよ。

ほら、一応こいつしか知らなかったわけだし」

「あら、そんなこと。嫌あね、時間は流れるのよ。あなたがいた時間は、もう過去のこと。アキラだって、ちゃんとわたしらには公表してつたくらいよ」

そう言ったコメチに、カズヤは首を傾<sup>かし</sup>げた。そう、アキラの姿がないのだ。

「そうそう、カズヤ、アキラには会った？」

「え？」

「ほら、やっぱりね」

狐につままれたようなカズヤなど無視して、コメチは肩を竦<sup>すく</sup>めてみせた。

「え、何の話？」

「アキラね、多分こつちの方に転校してるのよ、三月一杯で。本当はカズヤに知らせたかったんだけど、あの娘でしょ、関東地方しか教えてくれなくてね、何処<sup>いどこ</sup>にいるのかうちらも知らないから、あなたに言いようがなくなつてね」

「ちょ、ちよつと待て。詳しく聞きたいから、オレン家<sup>ち</sup>で……。じゃねえ、だから、どうしてここにいるんだよ、お前ら！」

「あら、冗談じゃなくて判らなかつたの、本当に？」

「うわっ、ほんとにバカだ、こいつ」

「だからそんな言い方しちゃ駄目だってば、ポン。ほら、ボくら修学旅行で、今日着いたんだよね。で、せつかくだからカズヤを連れて、ホテルに行こうと思って……って、今、何時？」

「げっ、九時じゃなか！」

「先生に怒られるよワ。どうしよう」

「どうしようもないっちゃ、今更」

カズヤは混乱する五人を、手振りで自分の周りに集めた。

「解<sup>せい</sup>つたよ。で、何処のホテルなんだ。連れてくから、着いたらオレの所<sup>せい</sup>為<sup>せい</sup>だって言えがいい。何たって、オレは三大勢力の一つの盟



主、銀髪の不良だぜ」

「カズヤ、何か変わったね」

「頼る人間がいなくなったからだよ」

「ってゆーか、あなた、やっぱり不良だったのね」

「うわっ、中三デビューかよっ！」

「ちがーうつ！とにかく行くぞ」

ナミの何気ない一言まではシリアスないい話だったのに、コメチとボンが関わると話が逸れてしまう。いつものことだ。

でも、今はそれでこころではない。

カズヤは混乱の場から一同を連れて離れると、辺りに誰もいないことを確認すると、いきなり瞬間移動をしたのだ。

## 第10部：再会 - 1（後書き）

日本ブログ村とアルファポリスのランキングに参加しております。

お手数ですがバナーの1クリックをお願いします。

## 第10部：再会 - 2（前書き）

本作品は、前作『約束された出会い』編の続編となります。先にそちらをお読みになられた方が、スムーズに作品世界観をご理解戴けることと思います。

<http://ncode.syosetu.com/n9537d/>

## 第10部：再会 - 2

「お、おいっ！」

「はははっ。オレも大樹の森の守人、表の鈴木 of 長男だぜ。裏のサキができてオレにできないわけないっちゃ。あー、すつきりした」

照れを隠す所為もあるが、驚く五人の反応を見るのが怖かった力ズヤは、ホテルのロビーに走って行き、葵を見付けて声をかけた。

「葵ちゃん、お久しぶりーっ！世紀の大不良が、みんなを連れ回してました。悪いのは全部オレです！」

「きゃあああっ！何よ、その髪の毛はあっ！」

葵は腰を抜かし、他の教師も驚きを隠せない表情だったが、以前と何も変わらないカズヤにすぐに気付き、外見で判断することなく接してきた。それがカズヤの愛した神森中学だ。

両親にはちゃんと連絡し、カズヤはその晩はこっそりサキと同室に泊まり、翌朝早くに自宅に戻った。積もる話もあるというものの、仲間たちに囲まれ、カズヤは一部始終を一晚かけて話して夜明けを迎えた。

時間は滞りなく流れていく。

《日向四天王》や日向や信吾がいなくても、ピーチは何も説明をしないまま、普段通りに学級運営をしていた。当然、学校としても説明はない。新聞に記事が載るようなこともなかったが、後日感謝状だか何かを出すから静かに待っていてくれという内容の文書が茂木接骨院に届いただけで、実際には未だ現実味を帯びていない。

警察に連れて行かれることを予測していたのだろう。信吾は事前に手紙を出して、十七日の計画がカズヤに届くようにしていた。勿論信吾のことだから、届く日にちも計算済みだったろう。

何の打合せもしないまま、ピーチとの対決の当日がやってきてしまった。

「こんばんは。悪いけど頼むわね」

信吾は変装道具一式を持って、何事もなかったかのように、当日の夜にカズヤの自室にやって来た。

「しーっ！親に聞こえないように頼むよ、こっちも」

「あ、そっか。ごめんなさいね」

信吾は、当然窓からの侵入だ。

カズヤの両親は、さすが彼の親だけあって、お人好しを絵に描いたような好人物で、まさか息子が大仕事をしているとは想像すらしていなかった。

父親ときたら、風呂場の排水溝に最近白髪の抜け毛が増えたことを、ちよつと気にしているようではあったが、それが脱色した息子の抜け毛だとは全然考えてもないようだ。

「取り敢えず、お前、化けてろよ。その間に、オレは風呂でも入って寝るって言うてくるっけ」

カズヤはそう言つて、タオルとパジャマを持って外に出た。

眠ると一言言えば、息子は眠っているから起こしてはいけな  
いと思ってくれる、本当にお人好しの両親で、カズヤは変に感謝をした。これで信吾と何処どこに出かけようと、両親は気付きはしないはずだ。勿論、不測の事態に備えて内側からは鍵をかけることは忘れない。

カズヤは軽くノックをして、自分の部屋を開けた。

「おおーっ」

変装した信吾を見て、思わずカズヤは声を上げた。

「しーっ！」

「あつ、悪い悪い。だつて、綺麗だっけ」

「あら、ありがと」

信吾はそう言つて、ポーズを取つてみせた。

豪華な振り袖を艶あでやかに着こなし、結い上げた髪えりあしの襟足がとても

色つばく見える。口元のお喋り黒子ほくろは化粧で消し、本職の芸者さん  
もびつくりするくらいの立ち姿だ。

「いい、日向には内緒にしてくれてるでしょうね」

「勿論。日にちは向こうも知ってたようだけど」

「それくらいはいいわ」

確かにこれは信吾個人の復讐なのだから、日向に知られたくない  
という想いは尊重してやらねばならないと、カズヤは考えている。  
それに警察に連れて行かれて以来、彼の顔は見えていない。

カズヤの遠見能力で、信吾が言った高級料亭に、ピーチとその連  
れが入るのは確認した。瞬間移動するタイミングは、その部屋に芸  
者がお酒を持って行く時だ。

じつと目を閉じて様子を伺っていたカズヤは、顔を上げて信吾の  
顔を見た。

「信吾、そろそろだと思う」

「いつでもいいわよ。よろしくね」

カズヤも例の《夏青葉》の格好に改めてある。ぱつと見では正体  
はばれないだろう。

カズヤは信吾の手を取ると、廊下を歩く芸者の後ろに移動した。

「悪いけど、交替してね。これ、交通費だから」

信吾はにつこり微笑みながら手にしたお酒の盆を奪い、代わりに  
お札を握らせた。

素の顔が判らないのだから、やることはかなり大胆だ。カズヤは  
芸者に姿を見られることなく、信吾が準備を調えたのを見届けると、  
茫然とする芸者を背後から抱きかかえ、突然瞬間移動で街に連れ出  
し、その場に置き去りにした。

移動場所は目立ちすぎる場所もマズいのだが、目立たない場所では  
彼女が危ない。その辺もちゃんと考えて、現在地がすぐ判るよう

な街角に降り立ち、カズヤ自身は姿を見られることなく、すぐに別の場所に移動した。

どうせ見られたところで、誰も何があつたか判るわけもなく、芸者だつて誰に説明もできやしない。

可哀相な芸者は、自分に何があつたか理解することができないままお札を握り締め、暫くその場に和服姿で立ち尽くすしかなかった。

## 第10部：再会 - 2（後書き）

日本ブログ村とアルファポリスのランキングに参加しております。

お手数ですがバナーの1クリックをお願いします。



### 第10部：再会・3（前書き）

本作品は、前作『約束された出会い』編の続編となります。先にそちらをお読みになられた方が、スムーズに作品世界観をご理解戴けることと思います。

<http://ncode.syosetu.com/n9537d/>

### 第10部：再会 - 3

移動したカズヤには、未だやるべきことがあった。

信吾はピーチに吞ませる酒に、彼は何処どこで手に入れたのか、いわゆる自白剤を入れて運んでいる。カズヤはピーチたちに気付かれないうちに、部屋の死角にビデオカメラを設置しなくてはならないのだ。店内に知り合いがいればいいのだが、ここはお偉いさん御用達ごようたしの店だ。当然そういう行為は取り締まられている。忍び込むにも毎日の掃除も行き届いているわけで、事前に設置しておくことも難しい。となると、カズヤの能力を以ってするくらいしか、彼の脳みそでは考えられなかったのだ。

カズヤは、こっそり天井裏に潜ひそむと、ビデオカメラを設置して、ことのやりとりを盗み聞きすることにした。勿論天井裏から音声だけを録音して、ビデオが万一失敗した時の為に備えておくことも忘れない。

既にピーチたちを接遇していた信吾は、酔いも薬も回り始めている彼らにしなだれかかり、煽おたてながら事実を聞き出している。実はその話術は素晴らしいものだ。

ああいった人種は、煽てられれば自分の自慢話を、相手の迷惑かえりも顧みず際限なく続けてくるのだ。そこで可愛らしい合いの手が入れば、尾鰭おひれも背鰭せびれも豪勢に付いてくるわけだ。

学生相手に薬物取引などの手引きをさせ、しまいには彼らに薬物売る話。黒い取引に学生を使つてはれないようにやらせた自分たちがどれだけ成功したかを一頻りひとしきり話し続けるつまらない男たち。学生たちは失敗しても、トカゲの尻尾切りにできるから都合がいいなどと恥ずかしげもなく嘯うそいている。

天井裏で聞いているカズヤは拳を握り締め、腹立ちを堪こたえるので

精一杯だ。隣で恨んでいる相手が自慢げに話す姿を見ている信吾の怒りは如何ばかりだろう。

影で誰が何を思っているかなど考えもしないピーチたちの話は、やがてテルヒの持っていた拳銃のことになった。

「そういえば、テルヒがミスったってな。困った女だ」

「日向ですよ。あいつに出し抜かれたらしくってね。けどね、先生大丈夫ですよ。また尻尾を切ればいいだけの話です」

「やつらはちよつとまずいんじゃないか。他のと違って、我々のことを知りすぎている」

「大丈夫、先生の名前はバレやしませんよ。あの四人には厳しく言うてあるし、第一、兄が巧く揉み消してくれますしね」

「はっはっはっ、いや、確かに新聞沙汰にもならなかったし、実にいいお兄さんで、私も嬉しいよ。そしてあんたは学校教師で、たくさん力毛を連れてきてくれるし」

「いやいや、こちらも先生のお陰で潤っていますからね」

今日何度目かの乾杯を、つまらない男たちは交わした。

「なあに？何のハナシ？」

「姐さんには、ちよつと刺激的なことさ」

「え？知りたいわあ。ほら、あたしなんか世間知らずでしょ、先生たちから世の中のこと教えて戴かないと、一生バカで終わっちゃうのよ」

盛り上がる二人に対し、信吾はしなを作った。二人を下から見上げる仕草は、カズヤが見てもドキドキしてしまう。

そんな信吾に騙されて、二人は解りやすく、余計なことまで説明してくれる。それが信吾の色気の為なのか、酔いの所為か薬の所為か、それはまるで判らなかった。

「あら、お酒が足りませんわね。お持ちしなくては」

信吾は立ち上がるうとした。そろそろ合図が、ピーチの方から出

るはずだ。カズヤは思わず身構えた。

「酒なんかいつでもいいぜ。もう一人連れが来る前によ、姐ちゃん、隣の空き部屋で、な……」

酔ったピーチが、あるうことが信吾を引き寄せた。

「いけませんわ、先生方お二人でなんて」

「そんな恥ずかしがるなつて。ねえ、先生」

信吾は妖しく笑つて、その手を払い除けようとした。ピーチが信吾を誘つたら、それがカズヤの次の行動を促す合図だったのだが、予定の事態が起こつた。

「あ、先生、場ア悪かつたかしら」

「い、イヤ、そんなことはない。待つてたぞ」

予定よりも早く現われたテルヒに驚き、ピーチは信吾を離れた。信吾は慌てて着物の衿えりを正した。

ピーチは酔つ払つているからいいのだが、テルヒは素面ふいでだ。しっかりした頭で見つめられたら、男だとバレない保証はない。

「そちらのお嬢さんにはお茶でいいかしら」

「ええ。烏龍茶でいいわ」

テルヒは慣れた口調で芸者の方を見向きもせずと言った。

「で、あたしらは次に何をしたらいいのかしら？日向はいないことだし、縄張りを広げる必要はあまりないからね、どちらかと言つたら自由に儲けたいわね。大事になつて捕まつたら、今度こそ出られないと思うし」

自分のミスなど意に介した風もなく、テルヒはいけしゃあしゃあと自分の都合を述べる。

「それもそうだな。こつちとしては、決まった量を裁いてくれば問題ないわけだしな」

つまりはそういうことなのだ。目的さえ果たし、自分の存在が公にならなければ別にいいのだ。

「じゃ、商談成立ね。こっちはいつも通りの割合で貰うわよ」  
そうして三人は、下品な雑談を始めた。

そ知らぬ素振りで憎む相手に酌をしながら、信吾は咳払いでカズヤに行動を促した。作戦第二弾の発動の合図だ。

カズヤは、ここでその場を離れて警察に出動を促しに行くのだ。  
以前の私服警官が、五分で現場に行けるだけの準備をして待っている手筈を整えているはずだった。

## 第10部：再会 - 3（後書き）

日本ブログ村とアルファポリスのランキングに参加しております。

お手数ですがバナーの1クリックをお願いします。

## 第10部：再会 - 4（前書き）

本作品は、前作『約束された出会い』編の続編となります。先にそちらをお読みになられた方が、スムーズに作品世界観をご理解戴けることと思います。

<http://ncode.syosetu.com/n9537d/>

## 第10部：再会 - 4

咳払いの合図からおよそ五分後。信吾はお酒を追加すると言いついて、ピーチたちの部屋から抜け出し、店の外に出た。

数台の覆面パトカーと、以前現れた私服警官とカズヤが信吾を待っていた。

「やくざとピーチとテルヒがいるわ。男二人はもうできあがってる。あたしたちはここで待ってるから、しっかり頼むわね。証拠は天井裏にあるわ」

「解った。ちゃんとカタつけるから安心しな。

それにしても、日向といいお前といい、どうして自分を大事にしないかね。お兄さんはそれが心配で堪らないよ」

「あなたたち権力を持った大人がしっかりしないからよ」

私服警官は嘯く信吾の肩を優しく叩き、数名の部下を連れて店内に向かつて行った。

「な、あの刑事さんは知り合いなのワ？」

カズヤは妙に親しげな私服警官に、何だか違和感を感じて訊ねた。  
「月曜まで待つてね」

信吾は冷たく言った。その肩は震えていた。

六月とはいえ、天気によっては夜は涼しい。

しかし信吾が震えているのはその所為ではなく、神経が高ぶっているせいだ。もうすぐ、長かった信吾の戦いに終わりが来る。

「でつちあげだ！」

向こうから喚きながら、ピーチたち三人が、手錠で繋がれて現われた。

「お前ら、このことが上司に知られてみる。困るのはお前らだぞ！」



ピーチは自分の兄の名前を喚き散らしている。

と、それまでカズヤに凭もたれかかっていた震えていた信吾が、突然背筋を伸ばして声のする現場へ向かって行った。

「なあに、往生際の悪いこと言ってるの、センセ。さっき自分の口で、いろんなこと教えて下さったじゃない」

彼らは自分たちを接待した芸者が現われて、全てを理解したらしい。彼らの顔から、血の気が失うせていくのがよく見えた。

「先生、忘れちゃったの？以前にも芸者に盗聴されて、あわや告発されそうになったわよね。今度は逃げ切れなかったみたいねえ。残念」

信吾は手の甲を口元に当てクスッと笑っているが、仕草ばかりで顔は一つも笑っていない。

カズヤはその信吾の横に立ち、彼の用心棒を装った。勿論彼が鈴木和哉だとバレるような格好はしていない。

「思い出してくれたかしら。前科が多いから、もう執行猶予は付かないんじゃないかしら。あたしだけじゃなくて、いろんな女の子にも手を出してたみたいだし、その所為で心を壊した子もいるけど、そんなこと、あんたは気にしちやいないでしょうねえ。」

あらあら、あたしが一体たくさんにらの芸者の中の誰か思い出そうとしてくれてるの。嬉しいわあ」

ぎろりと芸者を睨みつけ、ピーチは必至に記憶を探ったが、悔しいかな、目の前の芸者の言う通り、思い当たる節が多すぎて特定できない。

「あ、そうそう、あんたは老若男女問わないんだっけ。数年前の芸者は、男だったものねえ」

真っ青な顔で黙って睨みつけてくるピーチに、信吾は更に言葉を浴びせた。

「それと、あんた十年くらい前、こんなビデオを作ってたわね。全

部処分して逃げおおせたつもりかもしれないけど、あたしは大事に取っておいたのよ、記念になると思って。欲しいでしょ、あんたの趣味ですものね」

いつ持ってきたのか、信吾は懐ふところから一本のビデオテープを取り出した。

いよいよピーチの顔色が無くなっていく。

「あらあら、どうしてあたしがあんたのことを、ここまで知ってるかって顔しちゃって。」

あんたは自分が傷付けた人間に、心があるなんて思ったことないものね。あんたに傷付けられた人間が、まさかここまで追いかけてくるとは思ってたでしょ。

あんた、さっき言ってたわよねえ。手を焼いてる生徒が、オネエ言葉使ったって」

信吾は化粧こすを擦り、彼の特徴である口元の黒子ほくろを顕あらわにした。

「この十年間、あんただけを憎んで、あんたを苦しめることだけを考えて生きてきたわ。こんな惨めみじな子供時代を送ったあたしを、あたしは自分で哀れに思うくらいよ！薔薇色の未来なんて、想像もできないように育っちゃったもの。もう、ボロボロよ！」

ピーチは目を見開いた。女装していても、もう誰だか判る。

「か……霞！」

搾しぼり出すような掠れた声で、ピーチはようやく自分の生徒の名前を口にした。

「そう、霞 信吾。《反日教》を掲げて四年、ようやく両方を潰したけれど、まだまだ手緩てぬるいわ。あの学校そのものを潰してやる。あんな教師の肥こえだめみたいな学校なんか！」

「信吾、落ち着け！」

カズヤは見兼ねて言った。信吾が自分の感情を抑えきれず、泣き叫んでいるのだ。

「おのれ……！」

「ほら、そうやって悔しがることはできるくせに、あんたは一つつも反省するなんてできないのよ。まるでサル以下！」

何も知らない五才の男の子を、自分の悪趣味と収入の為に犯してビデオを売り捌いて、未だ何かし足りないことでもあるの？

他人を傷付けることを何も思えない人間なんて、人間の皮を被った化物よ。他人を傷付けてでも自分の喜びを手に入れようとするなんて、本当にクズ以下の存在よ！」

「おいっ！」

カズヤは信吾の腕を掴んだ。このままでは、自虐行為の度が過ぎて、ピーチを殺してしまいかねない勢いだ。

彼が暴走してしまつと、カズヤは私服警官に目で訴えた。それを理解したのか、私服警官は抵抗する三人を、無理に車に押し込んで車を発進させた。

## 第10部：再会 - 4（後書き）

日本ブログ村とアルファポリスのランキングに参加しております。

お手数ですがバナーの1クリックをお願いします。

## 第10部：再会 - 5（前書き）

本作品は、前作『約束された出会い』編の続編となります。先にそちらをお読みになられた方が、スムーズに作品世界観をご理解戴けることと思います。

<http://ncode.syosetu.com/n9537d/>

## 第10部：再会 - 5

「ああああっ！」

その場に泣き崩れた信吾を、カズヤは支えた。

「止まらないの、何処どこにも遣り場がないのよ、このムヤムヤした気持ち。どうしたらいいの？あいつを支えに立っているのが精一杯だったのに、あいつらがいなくなったら、あたしはどうやって立っていったらいいの？自分自身の抑制した感情が、いつも怖かったの。あたしはどうしたらいいの？教えてよ、ねえ！」

計り知れない憎しみを抱えた自分に対する恐怖心。未知の暗闇が潜ひそむようで、その恐怖は凄まじいものだろう。信吾はこの暗闇を爆発させたいのに、抑制しなくてはならない。それが苦しいのだ。

カズヤは信吾が落ち着くまで、彼の気の済むようにさせることにした。自分の胸に顔を埋めて泣くのを拒否できるほど、カズヤは無情ではなく、逆に抱き締めてあげられるくらいの余裕と優しさを持ち合わせていた。

翌々日の月曜の朝。信吾も日向も教室には来ていなかったが、今日は《反日教》に何らかの説明をする予定の日だ。

「オレ、今日はサボるわ」

カズヤは梅津にそう言っで、二時間目から教室を抜け出した。とても授業を受ける気分にはなれなかった。

いるかいなか判らないが、カズヤは日向が使っていた空き部屋に向かった。何となく二人はそこにいるような気がしたのだ。

多分落ち込んでいるであろう信吾のことを気遣って、「よおっ！」と、明るく振る舞おうと思ってドアに手をかけたのだが、カズヤは

開けるのを止めた。中で二人が言い争っていたのだ。しかも、自分のことで。

「どうしてカズヤを巻き込んだんだ！」

「……」

「お前の思惑もあるだろうし、この機会を逃したら駄目だと思ったから、こつちも終わるまで黙ってたけど、いいか、オレはあいつをこの世界に関わらせたくなかったんだ。」

一人っ子の甘えん坊だつて言われてようと、オレは純粹で無邪気なあいつのままできてほしかったんだ」

「……でも、あたくしは消えねばならぬ者でしょう。年を経て、彼が成長したら、《春霧霞》の務めを終えて、消えなくてはならないでしょ。あたくしが彼に何も知らせないで消えたとしたら、彼はあなたを理解できない一部分を抱えたままになってしまいますわよ。まあ、そう言われるのが嫌だということは、あたくしも充分承知していますけれど」

「なあ、このドロドロの人間の感情なんか、いつそ知らない方が幸せだとは思わないか」

「そりゃ、あたくしは当事者ですもの、思わないわけがないでしょう」

「大体、カズヤもカズヤだ。あいつからオレの言葉は伝わってるはずなのに」

「それを敢えて破ることが、彼の成長だったんでしょ。そしてあたくしは消えゆく運命……」

「なあ、信吾。前から気になってただけど、誤解してるよな。それにお前、本当にあいつが《夏青葉》だと思ってるのか」

「え？」

「《春霧霞・夏青葉》はな、確かにオレの守人もりびとかもしれないけど、オレを救うのはお前じゃないぞ。オレが悩めるお前らを解放するんだ。」

お前が消える時つてのは、オレがお前の悩みを解放に導いた時なんだよ。お前、悩みは解決してないだろ。まだまだオレの傍で働かなくちゃならないぞ」

妙に詳しすぎるぞ。本物の《夏青葉》じゃないくせに。

ドアの外で聞き耳を立てていたカズヤは、首を思わず傾<sup>かし</sup>げた。日向の口調がいつもと違うのも気になる。

「あらあ、カズヤくん、やっぱり偽者でしたの。

でも、彼には超常の力がありましたわ。ですから、あたくし、てつきり神森から送られてきたのかと……」

「人を送るなんて、オレにそんな甲斐性あるか。それに力があるやつが《夏青葉》とは限らないだろうが」

「では、本物をご存じですのね」

カズヤは耳を澄ませた。

「お前、会ってるぞ、この間。

あのどさくさで誰も気付いてないけどな、オレが足を撃たれた後、テルヒはもう一発ぶっぱなしてんだよ。さすがに避けきれないはずだった。けど、オレを庇<sup>かば</sup>ったカズヤの友達つてのが、いつ現われたか気付いたか？」

「いいえ……。そう言えば……」

「オレもあんな能力があるとは知らなかったよ。わざと伏し目がちにしているとは思ってたけど、あれは能力を無意識に制御してるから伏し目だったんだよ。」

まったく、目を見開いたと思ったら、素手で飛んでくる弾を掴<sup>つか</sup>みやがった。オレ、あいつはオレの理解者くらいにしか思ってたかったんだよ。だから離れっちまえば、これ以上付き合うこともないだるなつて……」

オレの ?



「サキ……、鈴木賢木<sup>サカキ</sup>っていうんだけど……」

カズヤは予告なしにドアを開けた。

「何で、何でお前がサキの名前を　　！」

「かつ、カズヤ！」

瞬間、日向はシンの格好をしていたのかと思った。しかし、彼は日向でもシンでもなかった。彼でもなかった。

「　　！」

思わず違う名前が口から出てくる。

## 第10部：再会 - 5（後書き）

日本ブログ村とアルファポリスのランキングに参加しております。

お手数ですがバナーの1クリックをお願いします。

## 第10部：再会 - 6（前書き）

本作品は、前作『約束された出会い』編の続編となります。先にそちらをお読みになられた方が、スムーズに作品世界観をご理解戴けることと思います。

<http://ncode.syosetu.com/n9537d/>

## 第10部：再会 - 6

カズヤが思わず叫んだのは、舌に馴染んだその名前。自分を支配してきた後光。

無造作に低めのポニーテールにした黒髪。  
大きな漆黒のつりあがった目。

「はあ……。どうしてここんどこ、正体バレてばっかなんだろな。  
ツメが甘くなつてんだな、オレ。」

ほら、開いた口が塞が<sup>ふさ</sup>がないのは解るけど、ボケた顔をする暇あるなら、オレを詰<sup>な</sup>るなり殴るなりしろよ。その方が楽だから」

これもまた懐かしくもある大きなため息をつき、彼女はカズヤに言った。

「腹立ててるだろう。前にも言ったもんな。オレは人を人として思っ  
てないって。人はゲームの駒だって」

学ランこそ着ていたが、その顔はアキラ。

桂小路 晃       ！

どうして今まで気が付かなかったのか、それが不思議でしかたない。日向が自分の長所をすぐに指摘したことや、その他諸々、全てアキラだったからできたのだ。ようやくそれで納得がいく。

カズヤはできる限り、沸き上がる気持ちを抑えようとした。再会を喜びたい気持ちがあるのだが、どうも怒鳴りつきたい気持ちの方が強い。しかし、どうも怒鳴ったところで気持ちが悪い。逢えて嬉しい気持ちは抑えようがない。

何も言わずに大きく肩で息をして、気持ちを落ち着かせてみた。

「取り敢えず、何もかも詳しく話せ。悪いと思ってんだったら、オレを納得させてみる。オレは最後まで聞くからワ」

「お前だけは、オレの一族のことに関わらせたくないんだけどな」

「サキには言えてもか。そりゃ、オレはたしかにサキほどしっかりしていないけどさ、けど……」

カズヤは後を濁した。『一緒に悩んだり、答えは出せなくても、拒否しない人がそこにいれば、甘えて気分が楽になることだってあるじゃないか』と言いたかったのだが、アキラにとっては不愉快に感じることでと解っていたから口にはできない。

特に『甘える』は禁句だ。

それに、アキラがアキラとして本音を語ることができる人間だったら、今更こんなことを言い渡したりはしない。以前、日向という仮面を被ってぶちまけた本音が、本当のことなのだろうと、充分解っている。

「お前って、本当にお人好しだよな。オレが嫌がるの知ってても、怒ってるなら最後まで言えればいいじゃんか。オレが悪いんだしよ」  
学ランの第一ボタンを緩め、アキラは居住まいを正した。そしてカズヤは、アキラの腰かけているソファの肘掛に腰を下ろした。

「去年話したこと、あれが全てさ。人間は滅びるだけの種族。滅ぶべき種族。オレはその人間で、空蟬の長。人間を滅ぼす者さ。」

オレの仕事っていうのは、こうやってやくざや政治家の抗争を煽って、それぞれを自爆させることなのさ。だからお前らには教えなかったんだよ」

アキラの言い訳する姿の、そのふてぶてしいことといったらない「お前、ずっと前に言っただじゃないか。自分の一族の性を否定するって」

「確かに言ったださ。だから無条件に人間を憎むことはやめた。けど地球規模で考えた時、人間はガン細胞みたいなものだ。悪性

のものは消さなくちゃならないだろう。だからオレは悪性の人間を打ちのめす。そしてオレ自身が一番最低の人間だから、ちゃんと最後は自分も一緒に消える覚悟もできている」

アキラは変わった。カズヤはそう感じていた。

善いのか悪いのかは判断つかないが、去年見せていた、あの平凡指向が消え去っている。そして自分は自分で受け入れた上で、権力、そればかりか自分の運命そのものにまで、真つ正面から立ち向かうとする強さがあつた。去年と違って安定感があるのだが、同時に諦観も感じられる。

感じた諦観とは、運命には逆らっても、否定しても無駄なものなんだから、それならば、早く役目を終えて、自分も消滅してしまえばいいだろうとも言つような、究極の諦めのようなものだ。

「そうそう、お前、明日の朝刊読めよ。奈槻兄ちゃんに頼んで、今まで伏せさせてたんだよ、事件のこと。ほら、オレの本名出ちゃうじゃねえか。明日、解禁日なんだよ」

「なつきにいちちゃん？」

話題を変えたアキラの心の内は、もうこれ以上何も訊かれたくない、という拒否の気持ちで充ちていた。

「ああ、もう、二度手間になる、面倒臭いなあ」

「何、エラそうなのよ、まったくもう！」

今まで黙っていた信吾が、アキラの頭をひっぱたいた。

「ああ、はいはい。スミマセンでしたね。どうせオレは文句言える立場じゃありませんよ」

恨めしそうに信吾を見上げて拗ねて見せると、それからちゃんとカズヤの目を見据えて説明を始めた。

「ほら、あの警察の人だよ。あの人、茂木のモグリの後輩で、あいつもピーチの犠牲者なんだよ」

「そうそう。そして、アキラの両親の死後、グレたアキラの兄貴代わりをしながら面倒見てて、そんなオレはオレでアキラの母さんのお陰で更正したって経歴を持つ、刑事の目下奈槻<sup>くさかなつき</sup>。よろしくな」

また突然降って湧いたように別人が現れた。

## 第10部：再会 - 6（後書き）

日本ブログ村とアルファポリスのランキングに参加しております。

お手数ですがバナーの1クリックをお願いします。



## 第10部：再会・7（前書き）

本作品は、前作『約束された出会い』編の続編となります。先にそちらをお読みになられた方が、スムーズに作品世界観をご理解戴けることと思います。

<http://ncode.syosetu.com/n9537d/>

## 第10部：再会 - 7

「奈槻兄ちゃん！いつ来たんだよ」

「今だよ」

ドアに凭<sup>もた</sup>れて腕組みをして立っていたのは、《日向四天王》との直接対決と、ピーチの検拳の時に現われた私服警官だった。にやにやと面白そうに三人のやり取りを見ている。

「何だよ、にやにや笑っちゃって気持ち悪い」

「いやさ、オレ、かすみちゃんに聞かされてたから、お前らがいつ気付くか、すつごく気になってたんだよ。もう、モグリの所の障子<sup>しょうじ</sup>の陰から、何度出てって教えてやろうと思ったか」

「って、障子の陰って何だよ、信吾？」

もう、カズヤの頭はパニックだ。

この人たちは一体何者なのだ。

自分の知らないところで全てが仕組まれていたことだけは解るのだが、もう、何が何だかさっぱりだ。

「カズヤくん、ごめんなさいねえ。モグリの密談部屋の向こうに、このお兄さんが隠れて盗み聞きができる部屋があつてね、こっそりあたしが手引きをしたのよ。まあ、連携プレーってやつ」

「はあ？」

いけしゃあしゃあと笑う奈槻と信吾に、アキラとカズヤは今日何回目かのため息をついた。

アキラときたら、それだけがっかりしておきながら、相変わらず表情は乏<sup>とほ</sup>しい。

「これが、オレが大量の人間を騙<sup>だま</sup>してきたツケだと思えば、何とか耐えられるさ。いや、耐えてみせる」

「そうそう、賢明な心の持ちようだよ、アキラさん。」

で、明日の新聞に君の名前が載るわけだけど、準備はいいのかい

？」

「これからなんだよ。オレはそこで明かすつもりだったのに、先にカズヤにバレちまって、お陰で二度手間になっちまったんだよ」

「おい、オレの所為かい！」

まったくどんな言い草だ。アキラの性格は以前にも増して図々しくなっているような気がしなくもない。

「解ってるって、お前の言いたいことは。ええ、充分反省してますよ、オレは。」

でもさオレの言い回しがこうだって知ってたんだから、少しくらい聞き流してくれてもいいじゃん」

アキラは不貞腐れた。

「アキラちゃん、今日は神妙にしてた方がいいんじゃない、カズヤくんには特にね」

信吾がクスクスと笑った。

「ほら、カズヤくんのことと怒られてる最中にそのカズヤくんが現れて立ち消えになっちゃったけど、昼休み、放送室を乗っ取って、本当のことを話すってところまで、あたしたちは話してたのよ」

「信吾、よくやった」

アキラは話題が元に戻ったことに、全身で安堵感を表現した。

「よく言うわよ。結局話を逸らせてあたしのこと怒り出したの、アキラちゃんじゃないの」

これには信吾も呆れ顔だ。

「しかし、よくもまあ転校の書類まで改竄かいざんして、一人何役もやれるもんだな。そういう意味でも感心するよ、アキラには」

「それがオレの仕事だっけな。それに奈槻兄ちゃんにも世話になったしな」

「っつーか、取り締まれよ、刑事なら……」

カズヤはその言葉を飲み込んだ。

その代わりに違うことを言う。

「でもさ、一番オレが感心したのは、よくあんなに表情豊かな日向を演じたり、結構ボケ役のシンを演じたりできるよな、万年仏頂面ぶつちょうめんのアキラが。」

いっそ日向の愛想の良さをそのまま続けてくれたらいいくらいだよ」

カズヤはそこまで言って、慌あわてて口を抑えた。

「へええ、そこまで言うか、カズヤまで。」

どうせ愛想がなくて、悪うございましたね。家に帰ると、結構自己嫌悪に陥るんだぜ、あれやると」

「よく言うわ」と、信吾が小声で野次を入れる。

「あつ、そうそう、今度家を教えてよ、遊びに行くから」

「オレをナンパするな、ボケ！」

「何処がナンパなんだよ」

「ああ、もうっ、同時に一人何役もやったから、オレ自身がどうだったか解らなくなる時があるじゃねえかつ」

アキラは頭を掻き毟むしった。

そんなアキラを見て、信吾はくすくすと笑う。

「アキラちゃん、全部自分の所為でしょ。第一、その乱暴な言葉遣いだけで、充分アキラちゃんらしいから、安心なさい」

「おいこら、かすみちゃん、嬉しくない」

「お前ら三人、いい加減漫才は止めるよな」

「漫才？失敬な！」

「そうよ、奈槻ちゃん、失礼ね」

「オレは漫才してる覚え、全っ然ないんですけど……」

アキラ、信吾、カズヤの三人は、奈槻に喰くってかかった。

「はいはい。で、ここまでオレをつき合わせたのはアキラじゃないか。お前の茶番に付き合っあってやるのはこっちなんだから、ちゃんと

シナリオを教えてくださいと」

「あ、そっか」

諦観であろうと何であろうと、安定感を感じさせるアキラは、あの頃よりも少しは丸くなったようだった。

奈槻に昼休みの手順を説明するアキラは、どこか憑物つきものが一つくらいは落ちたような顔をしていた。

## 第10部：再会 - 7（後書き）

次回から第11部：霧散）を始めます。

日本ブログ村とアルファポリスのランキングに参加しております。

お手数ですがバナーの1クリックをお願いします。

## 第11部：霧散 - 1（前書き）

本作品は、前作『約束された出会い』編の続編となります。先にそちらをお読みになられた方が、スムーズに作品世界観をご理解戴けることと思います。

<http://ncode.syosetu.com/n9537d/>

## 第11部：霧散 - 1

11：霧散

昼休み、信吾はお昼の放送をしている放送室に乗り込み、「ちょっと貸してね」とにつこり微笑むと、大胆にも放送ジャックをやったのけた。

『あ、えーっと、お昼の放送の間にごめんなさい。三年の霞 信吾です。というよりも、《反日向・反教師同盟》を仕切っていた霞 信吾の方が知名度あるかしら』

「オカマの、だろ」と、ジャックされた放送委員に突っ込まれ、信吾は我に帰った。

『失礼ね！って言うか、今はいつか。取り敢えず聞いてちょうだい。あのね、先週の土曜日なんだけど、あたしたち《反日向・反教師同盟》と《日向》が直接対決した話は、もう噂で聞いていると思うのね。校長先生も説明できない本当の事情も含めて、今日の昼休みに体育館で説明したいので、集まってくれるかしら。特に《反日向・反教師同盟》のメンバーには約束していたことだしね。』

あ、校長なんていつだって今までのこと説明したことないんだから、今更よね。

ってことで、ゲストは日向本人、あたしに頼まれて《夏青葉》を名乗ってくれた鈴木和哉くん、そして刑事の日下奈槻くみか なつきさん、司会はあたしってことで、興味のある人は是非来てね。ご飯の最中に失礼しました。では、皆さん、また後で。

あ、あたしはオカマじゃないわよ』

その最後の言葉に、全部の教室が爆笑したのは言うまでもない。

信吾はすぐに体育館に向かった。今の放送を聞いた教師連中より



も先に体育館に行かないと、せっかくアキラやカズヤが閉鎖している体育館を、信吾が入る時、一緒に入り込まれて、計画を台無しにされてしまいかねない。

ところが信吾は頑張っていたのだが、職員室では教師全員が集められ、奈槻が事情説明という名の元に、教師の動きを封じてくれていた。

「信吾、今の放送、面白かったよ」

「でしょーっ」

「つつーか、かなり楽しんでたろ、お前」

「あら、バレてた」

「当然だ」

「だって、考えてもみてごらんなさいな。日向とシンが同一人物だったばかりか、本当はアキラちゃんだったなんて知らされてごらんなさい。全校生徒が豆鉄砲食らった鳩みたいな顔するのよ。もう、楽しみで楽しみで」

「いや、面白かったのは最後のコメントだから」

「えっ、ええっ？失礼ね」

ネタはどうであれ、カズヤは今の状況がすごく楽しかった。

「信吾、ちょっと来い」

アキラは神妙な面持ちで、楽しそうにしている信吾一人を舞台袖に呼び出した。

「なあに、アキラちゃん」

信吾はアキラが真面目な顔をしているのを、すぐに見て取った。

「カズヤの記憶を封じる。オレとしては力を使いたくないんだけど、あいつはバカ正直だから、日向がアキラだったってことを明かした時に、今初めて知ったって顔してくれて頼んだって無理だろう」

「そっねえ、確かに無理だわね」

「だろ。《夏青葉》が真実を知ってたってこと知られてみる。オレ

らの計画は権威失墜<sup>しつてい</sup>。カズヤも立場が悪くなる。ついさつき知られたなんて事情が、他の連中に通じるわけないんだしさ。だからやるしかないだろ」

「あれをやるのね」

「それしかない。奈槻兄ちゃんにはお前から伝えてくれ。」

「ってことで、すぐにでもやるから、お前は少し席を外してくれ。」

お前まで術にかかったら堪<sup>たま</sup>らん」

「解ったわ。しっかりね」

「当たり前だ。オレがやるんだから」

全てはカズヤに聞こえないように話され、信吾はアキラに言われた通り席を外し、アキラはカズヤの方に歩み寄った。

「また信吾をパシリにしたのワ」

カズヤは何の疑いもない笑顔で、やって来るアキラに声をかけた。アキラは日向の格好をしていたのだが、何も言わずにカズヤの瞳をじっと見ながら詰め寄った。

「何だよ、おつかない目してワ」

一歩下がろうとしたカズヤの肩をがっちり掴<sup>つか</sup>み、アキラは囁<sup>ささや</sup>いた。

「お前の目の前にいるのは日向だ。シンが化けてた日向。いいな、

日向だぞ。それ以外何者でもない」

蛇に睨<sup>かえる</sup>（にら）まれた一蛙のように固まったカズヤは、次の瞬間力なく気を失って膝をついた。アキラはその身体を抱き起こした。

「あ、日向」

「気絶したのはほんの瞬間だけだ。」

「大丈夫かよ、《夏青葉》。いきなり膝がつくりさせるから、驚いたじゃないか」

「悪い悪い。何だろう、別に体調悪くはないんだけど。立ち眩<sup>くら</sup>みかなあ」

「頼むよ、これから一芝居打つんだっけ」

「いいけど、オレはどっちの名前で呼べばいいんだ？日向の格好してる時は日向って呼ぶように、オレは一応してるんだけど」

「そのようにしてくれればいいさ。オレは取り敢えず、日向の格好で出るつもりだから、この後の集会では」

「じゃ、日向って呼ぶぜ」

「頼むよ」

アキラは舞台袖の暗幕に隠れて、日向の髪をしっかりと被り直した。記憶封じは成功したのだ。

時間を見計らって、信吾と奈槻が体育館に忍び込んできた。

「日向、そろそろ始めないこと？」

信吾は外の騒々しさを顎で示した。

「おう、そうだな。かすみちゃん、頼むぜ」

「任せて。じゃ、カズヤくん、ドアを開けてくれるかしら」

「はいはい」

外からドンドンと叩かれるドアを、カズヤは勢いよく開けた。と  
いうか、吹っ飛ばされた。

## 第11部：霧散 - 1（後書き）

日本ブログ村とアルファポリスのランキングに参加しております。

お手数ですがバナーの1クリックをお願いします。

## 第11部：霧散 - 2（前書き）

本作品は、前作『約束された出会い』編の続編となります。先にそちらをお読みになられた方が、スムーズに作品世界観をご理解戴けることと思います。

<http://ncode.syosetu.com/n9537d/>

## 第11部：霧散 - 2

ドアが壊れそうになるほど大量の生徒が、一斉に傾れ込んできた。教師たちも一緒に傾れ込み、生徒たちを止めようと悪戦苦闘していたが結局数で負け、今度は日向と信吾の所にやってくる始末だ。

「では先生方、全校生徒に納得できるように説明ができますの？」

こういう場合に窓口になるのは、決まって信吾だった。彼の口調だと角が立たないから適任だといえる。

「納得って、何を納得させなきゃならないんだ。いいから解散させなさい！」

「そうやって問題を隠そうとする体質が、あたしは赦せないのよね。そういう大人に物事を教わらねばならないってこともね。」

第一ね、ここに集まってきた生徒たちを帰せないじゃ、どうしようもないわ。ここに集まったみんなの意図を理解できないような教師に、知った口をきいてほしくないわ」

「大体、刑事さんまで、こんな連中に乗せられて」

次の矛先は一人大人の奈槻だ。

「だって重要なことでしょ。先生にとっては一時の事件かもしれないけど、ここの卒業生の僕に言わせてもらえば、今回の事件は何代にも渡って繰り返されてきた問題です。そして僕も犠牲者でもある。」

昼休み時間、生徒が何をしようと、暴力行為ではなくむしろ前向きな集まりなのだから、教師は向き合うべきでしょう。少しは頭から抑えるのではなく、理解しようするのも必要なことだと思いますよ」

奈槻は教師の肩を持つようなことを言うつもりは、全く初めからなかった。

「はいはい、始めるわよ！静かに聞いてちょうだい！」

信吾がマイクを手話し始めた。その隣に日向は立っていた。

「今更だけど改めて、『反日向・反教師同盟』の霞 信吾です。先週の土曜日、あたしたちと、隣にいる日向の率いるグループとは、直接暴力行為で対決をしました。その場にはこの地域を拠点とするツーリングクラブの『SIN』も駆け付け、『日向四天王』を名乗る金沢晃陽<sup>テルヒ</sup>たちは、今、警察にいます。」

その場にいた人は知っているけど、日向とシンは同一人物で、あたしたちと手を組んでいました。何故なら、あたしたちの直接の敵は、『日向四天王』たちだったからです」

その場は、当然騒然となった。

「本当のことを話すには、四年前のこと、更にもっと前のことを話さなくちゃならないわ。いろんな文句は全部聞くわ。ただ、今はあたしたちの話を最後まで聞いて」

信吾は大声を張り上げ、騒ぎを一応収めた。

「この地元で育った人は判ると思うけど、四年前まで、この町はいろんな不良がそこら中で喧嘩をしていて、タクシーが乗車拒否するくらい治安の悪い町だったわね。」

『日向四天王』も、以前はただの不良四人組にすぎなかった。あたしと日向、そして今はいないけど、桂小路 晃ちゃんが、偶然見えた現場は、とても信じられない光景だった」

乗車拒否とは、カズヤは初めて聞いた話だ。

「小学生だったあの四人は、相手の年齢関係なく喧嘩を吹っかけてた。でも、それだけなら変な言い方だけど赦<sup>ゆる</sup>せたのよ。」

赦せないのは、彼らの背後にある組織にものを言わせ、薬物を売買したりしたことなの。ダイエットの薬だとか言って、一般の学生にまで手を出して、挙げ句自分たちをバックアップしてくれている組織の男たちに、女の子を斡旋<sup>あっせん</sup>してたことも掴んだわ。自分たち

が打ち負かしたグループの生徒に、無理強いしたりとかね。

けど、あたしたちは見てるだけしかできないじゃない、まだまだ子供だし、充分な証拠も提示できなかった。

そこで考えた方法は、日向が彼らを打ち負かし、自分の配下に彼らを置いて監視する。そしてあたしは日向に反目する存在となる。でも、四人を完全に配下にして大人しくさせると、彼らを摘発することができなくなるから、日向は彼らに命令を出し、自分は少し離れて泳がせてみたの。勿論、それは彼らが勝手な行動を取って捕まってくれるのを願うてのこと。それに日向だって子供だから、どうしたって親の都合には逆らえないしね。

この二年間は《反日向・反教師同盟》は耐えたわ。腑甲斐ない教師たちは、汚いものは見ないようにするばかりで、真面目な生徒に救いの手を差し伸べようとはしなかった。

二年間だけじゃない。あたしたちのずっと上の世代から、その悪い風習は変わっていないもの。内申書を脅しの材料にしたりしてね。教師なんて、《日向四天王》を取り締まれないくせに、逆らわない生徒を抑圧することくらいしかできなかった。また、そうすることで仕事を全うしてる気分<sup>ひた</sup>に浸っていた。何という怠慢<sup>たいまん</sup>！

これまでの一件は、明日の新聞に掲載されるわ。校長先生、幸いこの学校には生徒同士のいじめはないけれど、生徒に対する教師の、謂<sup>いわ</sup>れのない暴力行為は続いてきたわね。それも公になるわ。そのことについて、何かご説明は戴けるのかしら？」

急に話を振られ、校長は動揺を隠せないようであったが、ここで何も言わなければ威厳に関わると思ったのだらう。彼は壇上に上がつてマイクを握った。

「何をさっきから聞いていれば、君ら学生同士の争いに、どうして教師や学校が関わってくるんだ。いい加減にしないか！」



「わざわざ壇上に上がって、言うことってそれだけですの？」

マイクも持たずに、信吾は大きな声を張り上げた。全校生徒は信吾を応援する野次を入れた。

もう、信吾一人の独演会だ。

## 第11部：霧散 - 2（後書き）

日本ブログ村とアルファポリスのランキングに参加しております。

お手数ですがバナーの1クリックをお願いします。

### 第11部：霧散 - 3（前書き）

本作品は、前作『約束された出会い』編の続編となります。先にそちらをお読みになられた方が、スムーズに作品世界観をご理解戴けることと思います。

<http://ncode.syosetu.com/n9537d/>

## 第11部：霧散 - 3

情けない校長の一言に、信吾は怒り心頭だ。

「あたくしがさっきから言っているでしょ。《日向四天王》のことは、問題の一つではないの。

根本的な問題は、気付いていながら対処を怠った学校に責任があるってことなのよ。未だ、ことの重大性に気付いてないようですね、校長先生。

今日、体育教師のピーチが来ていないの、みんな知ってると思うけど、その理由が一番の原因、《日向四天王》を含めたこの事件のおおもと大元なのよ!」

校長の顔色が、さっと変わった。

「あら、その顔つきじゃ、やっぱり先生はご存じですわね。そりゃ、そうでしょう。ここにいる日下さんが説明していますものね。

ここで、ずっと昔の話をしましょうか。超個人的なことだけど、飽きずに最後まで聞いてね、みんな」

信吾は校長からマイクを奪い返した。

「カズヤくんも、こっちに来てね」

心配そうに袖から見ていたカズヤを、信吾は横に呼び寄せた。こうして壇上には、信吾、日向、カズヤ、奈槻という役者が揃った。

「あたしには両親がいないのは、まあ有名な話ね。一度はある夫婦に里親に出されたんだけど、その夫婦というのが碌でなしでね、あたしのことを、こういう言葉遣いで仕草になるように育てたわ。それだけならいいけど、その後、幼稚園に上がる頃、あたしは一人の男に売られ、そしてとても汚い世界に放り込まれてしまったわ。取り敢えず放送禁止なことを強要されたのよ、その男に。

その後あたしは施設に救けられ、里親は逮捕されたけど、あたし

を買った男は摘発を逃れてしまった。証拠を全部捨て、あたしには恐怖を植え付けて口を割らないようにし、巧く逃げてしまったのよ。あたしは施設で過ごしてたけど、大人なんて誰も信じちゃいなかった。当然荒んだ生活ってやつね。

そうして九才の時、アキラちゃんの親戚だということが判って、あたしは引き取られた。

そんな中、家の近所であたしを傷付けた男が歩いていたのよ。もう、復讐するしかないでしょ、こうなったら。いろいろ調べまくったわよ。

五年生になってたあたしは、この外見を利用して、男の出入りしているいかがわしい店に潜り込んで、ようやく証拠を掴みかけたの。でも、未熟だったのね、見つかつちゃって、また放送禁止。

そこで救ってくれたのがアキラちゃんだった。

あたしが掴んだ証拠は、さつき話したわね。その男が学生を使って薬物を売り捌いていたことなの。しかもその男は、自分の兄が警察のエリートなのを利用していた。

悔しがって泣き喚くあたしに、アキラちゃんは協力すると言ってくれた。あたしはその言葉に縋るしかなかった。嬉しかったの」

日向とカズヤ、そして奈槻は、まさか信吾がここで自分の傷を告白するとは思っていなかった。話の最中に止めようとしたが、信吾は三人を制し、ここまで話しきったのだ。

「この学校では、何人もの生徒に訴えられているのにその訴えを取り下げられて不問にされている教師がいるわ。どういう圧力があつたか知りませんがね、校長先生。

調べてみたら、解決したんじゃないかって、言い掛りだつて生徒を叱りつけて取り下げさせてたのよ。

知ってるかしら、校長先生。ここにいる日下さんの妹は、誰にも守ってもらえずに飛び降り自殺したわ。原因は教師なら誰も知って

いるわよね」

生徒の視線が一斉に刑事に集まった。

「日下さんはその無念を胸に刑事になり、自殺してしまった子を姉と慕っていたアキラちゃんは、その為に名前も顔も偽って、幾つもの顔を使い分けて、とても大変な思いをしてきたのよ。」

いい、ここに映っている男は十年前のその姿だけど、誰もが知っている男のはずよ。公表できるのは、あたしが持っているあたしの映像だけしかない。だからこの映像を証拠として提出するわ。見て！」

「やめろ！」

壇上の三人は、暴走を始めた信吾を止めようとしたが、それはできなかった。

体育館のスクリーンに映し出された刺激的な映像は、信吾のトラウマとなった、まさに放送禁止の残酷シーン。

「まさか……」

そこに集まった生徒たちは、その幼い信吾の悲惨な姿に顔を背けた。しかし、泣き喚く信吾をいたぶり嗤<sup>わら</sup>う男の顔は、確かにみんな知っていた。

「……ピーチ！」

「そう、やくざと関係して、自分の生徒たちを食物に、莫大な稼ぎを得ていたのよ！」

こいつのこうした所業全てを知っていて、それを見て見ぬふりをしていたこの学校の教師全員を、あたしは告発するわ！今更知らなかったなんて言わせない！卑しくも思春期の学生を指導する立場にある者ならば、その責任を全うしてごらんなさい。潔く罪を認め、反面教師として我々を教育してごらんなさいよ！」

信吾は完全に暴走していた。

「あたしはあたしの復讐の為に、『反日向・反教師同盟』を利用したわ。それは認める。絶大な影響力のあるアキラちゃんをも利用し、彼女が転校した先で同級生だったカズヤくんを、あたしは盟主『夏青葉』に祭り上げ、尚も自分の為に利用した。カズヤくんはお人好しだから、あたしの作戦に乗ってくれたわ。日向とシンが同一人物だっていうことも、あたしと日向が実は目的を同じにしていたことも、誰も知らない話よ。

でもね、あれだけ影響力のあったアキラちゃんを抜きに、これが解決するわけないじゃない、ね、アキラちゃん！」

信吾は日向の髪を<sup>かつら</sup>を<sup>むし</sup>り取った。

## 第11部：霧散 - 3（後書き）

日本ブログ村とアルファポリスのランキングに参加しております。

お手数ですがバナーの1クリックをお願いします。



## 第11部：霧散 - 4（前書き）

本作品は、前作『約束された出会い』編の続編となります。先にそちらをお読みになられた方が、スムーズに作品世界観をご理解戴けることと思います。

<http://ncode.syosetu.com/n9537d/>

## 第11部：霧散 - 4

明らかに彼は暴走していたし、他の役者三人は彼を止めることすらできなかった。

「えっ？あ、アキラ！」

暴走する信吾に戸惑うアキラに、目眩ましめくらましをかけられていたカズヤは改めて驚いた。

「と、いうわけだったんだが……」

アキラは言葉に詰まった。完全に彼女の予定外の方角に事態は進んでいた。

「アキラちゃんは日向とシンを演じてくれていたの。全てはピーチを告発する為に。カズヤくんは何も知らずに、男装する彼女と敵対し、彼女と和解し、戦ったの。それを知ってて嫉けしかけたのはあたし。悪いのは全部あたし。二人がお互いを大事に想い合う間柄と気づいていながら、あたしは二人を争わせた。

そしてあたしは《春霧霞》。消えなくちゃいけない存在。

アキラちゃん、あたしは誤解をしてたかもしれない。けど、あたしはあなたの言葉に逆らうわ。本物の夏が来る前に、あたしはあなたの前から消えてみせる。

カズヤくん、アキラちゃんをよろしくね。

奈槻なつきちゃん、ピーチの件は任せるわ。あたしのビデオは証拠に使ってね。

それと、校長先生、今の集会はマスコミに公開してるから、逃げられないわよ。あたしの最後の復讐は、この学校を潰つぶすこと。ざまあみろよ！」

信吾は完全にキレていた。話に脈絡すらなくなっている。

アキラやカズヤが止める間もなく、突然信吾は体育館を駆け出し、逃げ出していった。

「追うな！誰も追うんじゃないっ！」

追いかけようとした数人を、アキラは鬼の迫力で止めた。

「あれだけのことを告白したんだ。落ち着かせてやりたいんだ。一人にしてやるんじゃないか」

アキラは静かに話し始めた。

「ま、そうことで、かすみちゃんからバラされたわけだけど、みんな、ゴメン！何人も傷付けてきたわけだし、責めるならオレを責めてほしい。かすみちゃんは、あいつは責めないでやってくれ。あれだけの過去を公表して、それだけで壊れそうなんだ。

今、きつと彼は自分を落ち着けに行っただと思うから、明日は彼を受け入れてやってくれ。この期に及んでみんなに頼みごとなんてできる立場じゃないかもしれないけど、頼む！」

アキラは土下座をした。

この結末にカズヤは驚いた。

神森にくる前のアキラの世界がこれなのだ。

こんな世界に生きていたら、アキラが人間を嫌いなのは理解ができる。

なんと自分の幸せだったこと！

「オレからも頼む！」

カズヤもアキラの隣で同じようにした。

「オレは、詳しい事情は初めて聞いたんだけど、オレは利用されてもいい、あんなに傷付いた人間だったら」

アキラはカズヤのことを見た。

カズヤはカズヤのままなのだ。

その視線に気付いたカズヤは、アキラをじっと見て言った。

「オレ、どうしてお前に気付かなかったんだろうな、あんなに好きだったのに」

「バカ、今そんなこと言うな」

アキラは思いつきりカズヤの頭を引つ叩いた。

「誰もお前らに文句なんて言わないよ！」

いつしか壇上には、《反日教》のメンバーがいた。

「なあ、みんな！これでようやく人並みの生活が送れるんだ」

梅津と加賀見が音頭を取り、全校生徒はそれに拍手で応えた。

「でも、赦せないのがだよ、オレらの憧れだったアキラさんと、このカズヤがデキてたってことだよな」

「あーっ、そんなの、かすみちゃんのデタラメだ！」

アキラは大声をあげて否定した。

「いいじゃんか、アキラ。オレはお前が好きなんだから」

カズヤはアキラの腕を取った。

アキラはその手を振り払う。

「お前、ちよっと図々しいぞ。そんなに厚かましいやつじゃなかったじゃないか」

「いいってことよ。お前、平凡になりたがってたじゃんか。平凡に彼氏ぐらい作っても、誰も文句付けないぜ。信吾も許してくれたことだしさ」

「やめてくれ、オレのイメージが崩れる。第一、オレのキャラじゃねえっ！」

「気にするなっ」

「いよっ、お熱いことで！」

「悪いねえ」

野次にもめげず、カズヤは調子に乗った。調子に乗ってみようと思っ

隣でアキラはむっけている。それで良かった。誰も信吾やアキラを責めることなく、教師は立場をまるでなくし、一応事件は解決したように見えたのだ。

翌日、カズヤは朝刊が来る時間に起き、今届いたばかりの新聞を広げた。昨日信吾が言った通り、そこには事件のことが記事になっていた。

自分の名前は載っていないから、おとりした両親は自分の息子がまさか関わっているとは、気付かないだろう。アキラや信吾の名前は載っていたが、まさか同一人物だと思うまい。

カズヤは二度寝することにした。

「おいっ、起きろ！」

ところが暫くして、信じられないくらい乱暴な方法で、カズヤは叩き起こされた。

「？あ、アキラ！」

アキラは唇の前に指を立て、静かにするように指示した。

「どうした？」

珍しく困惑しきっていたアキラの顔に、カズヤはただならぬ事態が起こったことを察した。

「来い」

アキラはカズヤを、瞬間移動で連れ出した。そこは学校だった。

## 第11部：霧散 - 4（後書き）

日本ブログ村とアルファポリスのランキングに参加しております。

お手数ですがバナーの1クリックをお願いします。

## 第11部：霧散 - 5（前書き）

本作品は、前作『約束された出会い』編の続編となります。先にそちらをお読みになられた方が、スムーズに作品世界観をご理解戴けることと思います。

<http://ncode.syosetu.com/n9537d/>

第11部：霧散 - 5

「何だ、この騒ぎ？」

学校をパトカーが囲んでいて、それはたしかにただならぬ状態だった。

しかし教師が一斉に検挙されたとしても、アキラがここまで動揺するとは考えられない。第一、それをするくらいの心構えで活動をしてきていたはずだ。

アキラは何も言わずに立入禁止のビニールテープを潜り、ある場所へとカズヤを導いた。

「！」

一面血の海が広がるそこに、アキラはしゃがみこんだ。

カズヤは事態がよく飲み込めない。一体何が起こったのだろう。

一体誰の血なのだろう。

まさか、思い余った信吾が校長でも刺し殺したのだろうかと思い、周りを見回してカズヤは呆然とした。

担架に白い布をかけられて横たわっている人物。少しだけ覗いた黒髪が、誰であるかを物語っていた。

「あいつ、遺書なんか残して逝きやがった。学校教師全員を告発する内容の遺書を残して、死んで復讐を果たしやがった。あんなに、自分を大事にしろって言ったのに……」

奈槻がいつしかそこにはいて、涙を拭っていた。

「あいつは、オレが言った《春霧霞・夏青葉》の預言に逆らったんだよ。遺書も茶番にすぎない。あいつは自分の存在理由がなくなることが、一番怖かったんだよ。思いやれなかったオレの責任だ。自殺は生物として罪になる……」



アキラは困惑してはいたが、あまり哀しんではないように見えた。

「あいつが、このくだらない教師連中の為に、自分の肉体の生命を賭けるかって。別の目的の為にやったんだから、いいんだよ」

カズヤは状況を理解できていなかったから、未だ信吾の死が実感できていなかった。当然、哀しむどころではない。アキラの冷たさの方が気になった。

「奈槻兄ちゃん、かすみちゃんの遺志だ、必ずこの事件を解決してくれよ。もう、こいつはオレの手を離れてしまったんだからな」

「言われないでも、そうするに決まってる」

奈槻は涙脆い<sup>もろ</sup>ようだった。反対にアキラは、表情を一切変えずに向かい風に立ち向かっていた。

「帰ろう、カズヤ。かすみちゃんの葬式の準備もある」

アキラは信吾の死体に背を向けた。

「あ、アキラ……」

カズヤは名前を呼ぶことしかできなかった。

「いいんだよ、司法解剖して、それからオレの家に送られてくるんだから、その身体は。」

それに、それはもう、ただの脱け殻でしかない。あいつは汚れた身体を脱ぎただけなんだよ。いいじゃねえか、楽になれて。そう思ってやれよ、それがあいつの遺志なんだから」

カズヤは黙って付いていった。

そう、アキラの解釈はそういうものなのだ。哀しむだけなど、自分本位の感情は持たない人間なのだ。

それでもカズヤは哀しい。

違う考え方をする人間がいるのは、当然のことなのだ。ましてア

キラは死者を詰る<sup>な</sup>ようなことを言っているのではなく、彼の遺志を考えているのだ。それでいいじゃないか、それがアキラなのだから。

「アキラ、何か手伝うか？」

カズヤは、努めて普通の声を出した。

「お前さあ、何もオレに合わせなくていいんだぜ。哀しくて当然なんだから、泣きたいなら泣けよ。別にオレはそれを責めたりするよな、そこまで人でなしじゃねえんだから」

アキラはカズヤに、小さなタオルを投げてよこした。振り向かずに投げるところが、彼女らしい気障<sup>きざう</sup>なところだ。

「式の件は、オレの一族が取り仕切るから心配はないけどな、取り敢えず、お前のご両親に説明がてら挨拶もしなきゃならんだろう……」

「つて、お前、それで鼻かむんじゃねえよ！」

オレは哀しいんだ」

「はいはい。オレの分もしっかり哀しんでくれよ。オレは自分の両親の分で、涙は使いきっちゃったんだよ。

……でも、そのタオルは洗濯して返せ」

しゃがみこんで泣くカズヤの頭を、アキラは優しく叩きながら、カズヤが立てるようになるまでそのままだった。

この事件の所為<sup>せい</sup>で学校は混乱状態に陥り、授業は続けられてはいたものの、登校する生徒は半数にも充たない日々が続いた。

事件の事情聴取を受けているのは、校長を始めとした責任ある地位にある者たちで、一般の教科担任にはそれ程長い時間が、事情聴取に当てられはしなかったのだ。

転校する生徒は後を絶たない。それも当然といえば当然だ。

アキラはあの後すぐにカズヤの家を訪れ、カズヤの両親に挨拶がてら、事情を説明した。

実は既に朝刊を読んでいた両親は、自分の息子がこの事件に関わっていたことに、すぐ気が付いていた。しかし、それでもカズヤを叱ることはしなかった。

「いいのよ、カズヤのことなんかはね。でも、アキラちゃんも大変よねえ。でね、どうして別人で転校できたのか、教えてくれない」

母親はあっけらかんと、的外れなことを言う。

「いや、謝らないでいいんだよ、アキラさん。こののんびり屋が、自分の意志で責任あることをしたのは、本当に初めてのことだ。やりきれたんだから、それでいい。おい、母さん、今日は赤飯かな」  
父親も少し目の付けどころがずれている。

これにはアキラは呆然としていた。

「気にしないでくれ、どうせオレの両親なんだから」  
カズヤは頭を抱えるしかなかった。

## 第11部：霧散 - 5（後書き）

日本ブログ村とアルファポリスのランキングに参加しております。

お手数ですがバナーの1クリックをお願いします。

## 第11部：霧散 - 6（前書き）

本作品は、前作『約束された出会い』編の続編となります。先にそちらをお読みになられた方が、スムーズに作品世界観をご理解戴けることと思います。

<http://ncode.syosetu.com/n9537d/>

## 第11部：霧散 - 6

事件が記事になって一カ月が過ぎた。

学校に行かないのもそろそろまずいと考えて、カズヤは悩んでいた。

アキラと一緒に行ってくれれば行くのだが、実際アキラは『須藤日向』という架空の人物で転入してきた手前、カズヤと同じ学校の生徒ではない。『桂小路 晃』は隣の公立中学の休みがちな転校生なのだ。

塾に行くなり、アキラに教わるなりすれば、学校に行かなくても受験できるだけのものは身に付くのだが、やはり出席日数というものはどうにもならない。

聞けば『反日教』のメンバーも、学校に行き始めようとしていることだったし、そういうことで重い腰を上げたのだった。

学校には行かなくても、アキラの家には毎日遊びに行つて、勉強はしていた。

「ねえ、アキラ。明日の模試受けるのワ？」

「行かない。どうせトップ取れるし、意味がない。どうして連れ立って試験会場だよ」

アキラの返事はつれないものだ。

「できる人はよござんすねえ」

カズヤは皮肉で返すが「やればできるだろう」と三倍返しをくらつてぐうの音も出ない。

「お前、オレと一緒にの学校に行くつもりなんだろ。だったら必死こいてみるよ」

そう餌をちらつかせられて、頑張らないわけにいかない。

「悪いが、仕事でオレは出かけるし」

仕事と言われたら、一人で会場に行くしかない。

公開模試の受験票を受け取りに、カズヤは嫌な学校に登校をしなくてはならなかった。

アキラも受験してくれるなら、その嫌な気分も紛れるまぎと思ったのだが、そう思い通りにはならない。

実はアキラはテルヒに呼び出され、彼女の元に面会に行っていた。「よう、こういう風の吹き回しだ？」

日向がアキラだったということを、実は未だテルヒは知らないのだと奈槻から聞かされていたアキラは、日向の格好で面会に行った。

「別に。ただ、完敗を認めようと思ってね。

すっぴんのテルヒは、不敵な笑みで迎えた。

「悔しいけど、あたしらはピーチとあんたらの両方に、完全に利用されてたってわけね」

「そついうわけだねえ」

慰めなぐさの言葉は無意味だからかけない。

「負け惜しみじゃないけど、あたしは何も目的なく、こんなことをしてたわけじゃないのよ。それをあの女に伝えてもらいたくて、あんなを呼び出したのよ。

何しろかすみちゃんちゃんは可哀相なこととし、そうすると不愉快なあんたあんたしかいないのよ」

「ま、な。あの女って、桂小路 晃だろ」

「ええ、そうよ」

テルヒは、目の前に本人がいるとは知らずに語りだした。

「あんたは解らないかもしれないけど、あの女なら理解するかもしれないわ。あんたは口を挟はさまないで聞いてくれればいいから」

「はいはい。解ったから始めてくれ」

ガラス越しだが、二人は改めて向き合った。

「あたしには兄がいて、その兄は仕事である人物と対立してるの。そしてその相手を捜させる為、兄はあたしを今の両親の許に置き去りにした。あたしはね、その名前も顔も知らない相手を見付けなければならなかったの。」

手がかりと言えば、兄が付けてくれたこの晃陽テルヒという名、そして兄があたしをここに置いたこと。その相手が女で、異常に頭が良いということくらい。

でも、どうして捜したらいいか見当つく？

考えたわ。兄と対立しているということは、兄のいる世界に足を踏み入れれば、相手を見付けられるんじゃないかってね。でもその兄のいる世界がどんなんだか、あたしは知らなかったのよ。

蛇の道は蛇つてね、表沙汰にできない人捜しは裏に頼むしかない。そしてそのまま裏稼業に足を染め、多分と思う女を見付けた。

実際のところ、本当のことは判らないわよ。でも桂小路 晃が、兄と対立する女だと思い込んだのよ。

日向の眉がぴくりと動いたことなど、ふてぶてしく顔を背けているテルヒが気付くわけがない。

「あたしはそのことを知らせてくても、兄の居場所が判らない。それならば、あたしがアキラを倒してしまえば、きつと兄はあたしのことを喜んで迎えにきてくれる。そう思つて、あたしはアキラと対立する道を選んだわ。いえ、選ぶ前に悪い道に染まつてたわね」

表情が動いたのは一瞬だけで、アキラはテルヒの話を顔色一つ変えず、日向として聞いていた。

「名前は？お前の兄貴の名前は？」

「冗談じゃない。それを言えば、兄の身が逆に危なくなるわ」

「そんなもんか」

「あんたは黙つて伝えてくれればいいの」



テルヒは日向を黙らせた。

「あたしだって、物事の善悪は解ってるわよ。」

あたしのしてきたことは、はっきり悪いことだって言えるわ。でも、それ以上にアキラを倒したかった。その為なら、あたしは何をしても気にならなかったわ。

とはいえ、かすみちゃんには気の毒だったと思ってる。ピーチの異常な嗜好しゅうこうは知ってたけど、幼稚園児幼稚園児くらいの年令で犠牲になっただって聞いて、正直ピーチとつるんでいた自分を恥じたもの。

そのかすみちゃんに免じて、アキラに伝言して。あたしは何としても兄を見付けだし、アキラの名前を兄に伝えるわ。いつになるかは判らないけど、せいぜい気を付けなさいってね」

「そう言えば解るのか？」

「あいつが兄の敵ならば、きつと解るはずよ」

テルヒはふつと見たことない穏やかな笑みを浮かべた。

「用は済んだわ。かすみちゃんに、あたしの代わりにお線香を上げてきてね」

「解った。もう、帰るぞ」

日向はテルヒに背を向けた。

## 第11部：霧散 - 6（後書き）

次回、『霧の円舞』編 最終回となります。

また、日本ブログ村とアルファポリスに参加しております。  
お手数ですがバナーの1クリックをお願いします。

## 第11部：霧散 - 7（前書き）

本作品は、前作『約束された出会い』編の続編となります。先にそちらをお読みになられた方が、スムーズに作品世界観をご理解戴けることと思います。

<http://ncode.syosetu.com/n9537d/>

第11部：霧散 - 7

「ちゃんとかすみちゃんの遺志を継ぐのよ、・・・」

出て行こうとした日向の背に、テルヒはそう言ったのだ。

「今、何て呼んだ？」

日向は振り向いた。

「おい、テルヒ、今、何て・・・」

アキラは口が渴<sup>かわ</sup>いていくのを感じた

「アキラよ」

テルヒは笑った。

「いつから……、いつ気付いた？」

アキラは思わず元の場所に戻り、鬘<sup>かつら</sup>を脱いだ。

「今。でも、それで確信したわ。あたしと同じ漢字を名に持つあん

たは、絶対に兄の敵だわ。だから覚悟なさい」

アキラはガラスを拳<sup>こぶし</sup>で打った。

「おい、テルヒ！兄貴の名前、教えるよ！」

「バカねえ。言うわけないじゃない」

テルヒは窓を叩いて大声を上げるアキラを無視し、面会室を後にした。そして部屋を出る時に、アキラに微笑みを向けたのだ。

アキラはこの時に、この微笑みの意味をきちんと考えるべきだったのだ。しかし、アキラはテルヒを追わず、自分の情報網<sup>みな</sup>を使って彼女の兄を捜すことを考えていた。何分、アキラを敵と見做<sup>みな</sup>す人物は多過ぎるのだ。

帰宅後、アキラの許に届いた連絡は、とてもショッキングなものだった。

金沢晃陽<sup>テルヒ</sup>が、拘置所内で焼身自殺を図ったというのだ。

その死体の横にライターがあつたらしいが、それはとても不自然な場所にあつたという。でもそれ以外に火元はなく、それよりもそのライターは何処どこから手に入れたかの方が問題視とくされていた。でも、そんなことアキラにとってはどうでもいいことだ。

アキラは自分の運命が回り始めたのを、何となく感じていた。テルヒは、自分は兄を見付けられないことに気付いていたのだらう。アキラに兄の名を告げないことは、彼女の最後の抵抗だ。それに、アキラなら見付けられると思つていたのだらう。だから、アキラの帰宅後すぐに自殺を図り、アキラを苦しめようとしたのだ。

そう、アキラは充分苦しんだ。自分の所為せいで、二人も自ら生命を断つたのだ。苦しまずにいられるわけがない。

たしかに、世間はアキラの所為で二人が自殺を図つたとは気付かないだらう。しかしアキラだけは知っている。そしてアキラはそれを一人で背負わねばならないのだ。

アキラは自宅で、一通の手紙を広げた。それは信吾が残したアキラ宛の遺書だった。

そしてアキラの、定められた運命との戦いは始まるのだ。

『女王陛下

敢えてそう呼ばせて戴きます。

多分この度わたくしの行動は、陛下のお気に触るかと思ひます。

しかしわたくしは自分の意志を貫きたくて、こういう行動を取らせ  
て戴きました。

確かにわたくしは女長老水鏡妃の預言を、正確に理解していない  
かもしれませんが。しかしそうであったとしても、わたくしはそのよ  
うな預言というものに逆らいたいのです。わたくしは、誰にも生き  
方を命令されずに生きていますから。

カズヤくんが《夏青葉》ではないなら、それはそれでいいでしょ  
う。彼なら、苦界くがいにおいてあなたさまの安らぎとなり得る人ですか  
ら。しかしわたくしは《夏青葉》が来たら去らねばならないという  
預言があります。

去る。この言葉の意味は、一体どういう意味なのでしょう。

去ると決められているなら、それでもいいでしょう。ただ、いつ  
去るかは私が決めます。《夏青葉》が神森にいるのならば、その者  
が苦界において陛下をお助けすればいいのです。その代わり、わた  
くしは自然界であなたさまをお助けします。

以前、陛下はお話し下さいました。わたくしの魂の属性は苦界に  
あるけれど、本来は自然界に生まれたものだ。わたくしは自然界  
に赴くことはできても、自然界で生きること、この肉体がある限  
りできないのだとも。

それならば、この肉体を捨て、自然界に生まれ変わしましょう。  
両界を同時に知る者は、記憶を失わずに生まれ変わることができる  
と、あなたさまは教えて下さいました。わたくしはそれに賭け、自  
然界のみに生きる者になり、死ぬまで陛下にお仕えしたいと思いま  
す。

陛下、苦界でのわたくしの復讐を、醜いと知りつつも援けて下さ  
って、感謝してもしきれません。この復讐は終わったのです。です  
から、わたくしはこの穢けがれた肉体を捨て、新たに生きたいと思っ  
たのです。

お叱りは自然界でお受けします。しかし、わたくしも今までの苦  
しみを引きずって、自然界で生きるような真似は、決して致しませ

んから、どうかわたくしの決断を赦<sup>ゆる</sup>しては戴けないでしょうか。

最後にアキラちゃん、カズヤくんを大事にしてね。彼は、純粹にあなたのことをそのまま受け入れてくれる、唯一無二の人となってくれるはずですから。あなたの善も悪も、それら全てがアキラちゃんだと受け入れて、それで好きでいてくれる人ですから、《夏青葉》とは別に、とても重要な人となるはずです。このようなことは、自然界では口にできなくなるでしょうから、苦界で生きた霞 信吾の最後の言葉にさせて下さい。

では、自然界でお会いしましょう。  
『

## 第11部：霧散 - 7（後書き）

長編作品を最後まで読んで下さってありがとうございました。  
今回で今作品完結とさせて戴きますが、第三話『波の呼び声』へ続きますので、引き続きよろしく願います。

また、日本ブログ村とアルファポリスに参加しております。  
お手数ですがバナーの1クリックをお願いします。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4291e/>

---

story of ALFREIA 1 『空蟬の一族』第二話「霧の円舞」

2010年10月8日14時06分発行